THE CENTRAL REVIEW

大正七年八月一日發行（毎月一回一日發行）

中央公論

八月號

第三十三年第九號

第三百六十號

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

記者より讀者諸君へ

編輯記者

寺内内閣は内閣其物の本質から視て、言論に對して寛大の態度を執るべしとは、其成立の當初から豫期することの出來ぬ内[illegible]民福を助長するを急とせざるものぞ、若し政府當局の爲政を非難することありとすれば、そは當局が不知不識の間に陷り易き傳習的偏見や、又人間の限られたる力より自然に來る政府部内のみの狹隘なる僻論を補うて、もつと廣き、もつと正しき立場よりして、國政や國防の實施に當らんことを希望する愛國心の發動に他ならない。此分り切つた事柄を理解せずして、當局の施設はすべて愛國心の發揚、之を批評非難するものはすべて其反對の現象と見做さんとするが如きは、之れ所謂官僚軍閥の最も大なる誤解と短見である。

現在權勢の地位にあるものが、權勢に離れざるべからざる秋の苦悶はなか〳〵大きいものと見える。随つて一刻でも長く之と離れざらんとするの努力は、傍觀者より視れば往々一種狂的の色彩を帶びて來ることがある。昔は秦皇、焚書坑儒を斷行し、平相國、異服の童子三百を放つて、己れを誹謗する者を察せしめて法に處したるが如きは、あゝ云ふ專制の時代にありても、民心の歸嚮が己れの權勢を危うするに至つた事に感づき、其等の者の口を噤ましむれば今少し其地位を維持し得さうに思つた爲めであらう。而して今や已に專制時代ではない。如何に輿論の勢力に目を掩はんとしても、ヒシ〳〵と押し寄せて來る時勢と人心の趨向とを感知せざる譯には行くまい。我等は寺内内閣の壽命が今後永く續くか、或は今にもヒヨツコリ倒れさうになつて居るかを知らない。然し頻々として傳達せられ、通告せらるゝ禁止令の餘りに甚しきを視ては、形式と程度とこそ異なれ、何だか秦皇や平相國の故事の憶ひ出されぬでもない。我等の同業者は今度の禁止令を評して「血迷へる禁止令」といつて居る。政權の末路に於ける「血迷ひ」とすれば、多少氣の毒の感も起らぬではないが、國民全體の安危休戚に關する大事件に向つて、全く國民の耳目を掩はんとするより來る、國家民人の不利不幸に至つては斷じて之を默認することは出來ない。

を標準とすることにいたし候。然れども只之のみにては讀物の量の減少するを怖れ、いろ〳〵苦心の結果、最新式の活字たるポイントを採用することにいたし候。之が爲め從來の五號活字の普通組方一頁八百六十四字(二十四字十八行組二段)のものが、ポイントにて一頁一千〇八十字(二十七字廿行組二段)となり、一頁にて二百二十字の增加を來し、全體にて却つて從來よりも廿頁の讀物を增加したる次第に相成り候へば、之にて讀者諸君の期待と眷遇とに辜負せざるべきことを信じ申候。(只本號にては事、早急に屬する爲め、新活字の(?)造間に合はず、小說及び公論說苑の最後の一部の外、從來の五號活字を用ふるの已むを得ざりしことをお斷り申候)先づは右謹告まで　頓首

大正七年八月一日

中央公論社
編輯部
營業部

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

獨逸、イエナ大學名譽教授 ヘッケル博士著

文學士 栗原古城譯

宇宙の謎

▼最近の讀書界を風靡せる世界的名著＝第五版出來

◎萬朝報評 『少しく心ある人にしてヘッケルの「宇宙の謎」の名を知らざる人は無かるべし：譯筆快暢にして凝滯なし』

◉東京朝日新聞評 『同教授一代の研究を壓搾したる精髓たるのみならず、實に歐洲の科學界、哲學界を震撼せしめたる名著なり』

四六判總洋布製 極美本 全一册 六百七十頁 正價貳圓 送料 内地十二錢 其他十四錢

新刊

英國 ジョン・ラスキン著

文學士 栗原古城譯

時と潮（うしほ）

『時と潮』は勞働者、貴族、實業家、政治家、教育家、青年學生等、有ゆる階級の人士に對する大哲の最も現實的なる一大說法なり。彼が理想の天地は此處にあり、實際的經綸も此中にあり。當世に處し、智見を磨く上に於て、必ず一讀を吝む可らざる也。

四六判總洋布製 極美本・全一册 正價壹圓五十五錢 郵稅八錢

發行所 東京本鄉西片町 玄黃社 電話小石川一三九番 振替東京七九九五番

信用なき店舖及び卑猥なる賣品の揭載廣告は謝絕す

文壇名家書簡集

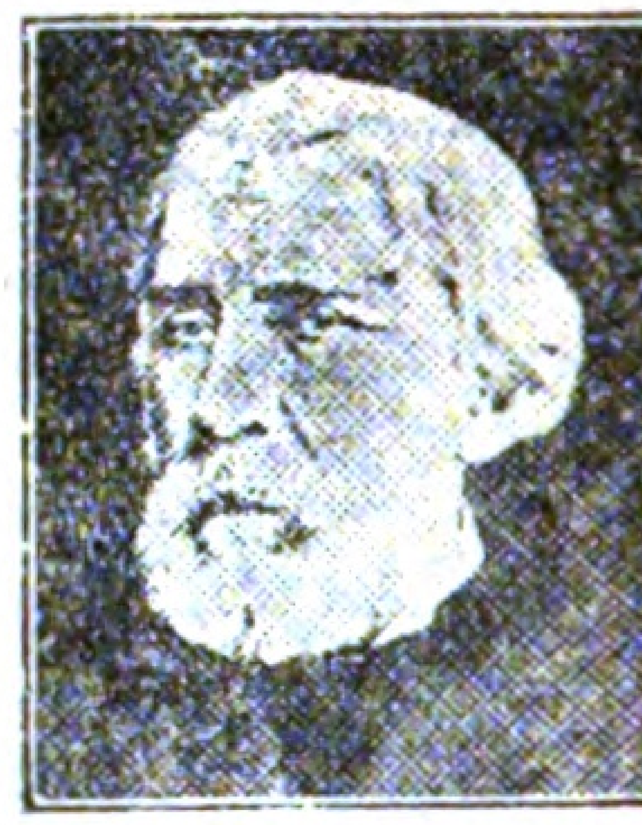
未だ新聞にも雜誌にも公にせられざる百名家の書簡集也

現文壇の諸名家が實際に往復せる書簡百五十通を蒐めて此一卷を編む。**坪内逍遙**氏が中央公論記者に與へて**中條百合子**の奇才を推奬せるの書。**幸田露伴**氏が**松魚俊子**の結婚を祝して規戒を籠めたるの書。**芥川久米**兩氏が師の**漱石**に送りて避暑生活の情景を輕快無比の筆に語れる書、若き**島崎藤村**氏が放浪の途上より都の友に切々の情思を書り送れる書、**長田幹彦**氏が紅閨粉陣の間に筆を執りて醉餘の興を託せる書、その他何れも現下文壇に於ける表裏種々の消息を語るものにあらざるはなし。又故人の部には、謂ゆる一讀三嘆の妙味ある**漱石**の長文の書翰十數通を始め、**二葉亭**、**綠雨**の書等、文藝史料として尊重す可きもの少なからず。而も本書の收むるところ、悉く未だ曾て一度も公にせられたることなきものゝみにして、その多くは、筐中の祕寶として受信者の藏せられたるを特に乞うて掲げたるものにかゝり、此一卷が、編者多大の苦心の結晶たるは固より云ふ迄もなき也。近來稀有の興味豐富なる書として大方に薦む。

目次

中版美本
價七拾五錢
送料八錢

東京市牛込區矢來町中の丸
新潮社
電話 長八〇九番
番京 八九九番



■ツルゲエネフ全集■

文壇諸名家譯
隔月一回發行

ツルゲエネフは多彩豐麗の夢思に、沈靜深邃の哲想を裏附けたる甘き悲哀の詩人也。其自然と人情と世相に對する觀察の廣さ細かさに於て、其表現の技巧の纖美にして多角的なるに於てよく彼に若くものありや。自然主義の冷索なる人生觀を脱して、人々今や頻りに詩味横溢の作を求むるの時、小社こゝに『ツルゲエネフ全集』の出版を企つ。切に大方の愛讀を待つ。

■第一編■

獵人日記

新刊出來

總洋布特製
中版六百九十頁
價壹圓五十錢
郵送料八錢

生田長江譯

ツルゲエネフの處女作にして出世作たる本篇は、二葉亭によつて名高き「あひゞき」以下の名篇をその中に含めたる、露西亞の自然と風物と民情との纖細精妙なるスケッチの一大集粹である。其特技の一なる自然描寫は、正に此篇を代表作とす可く、亦その特技の他の一なる戀愛描寫は、叢中の花の如く點綴せられたる幾多可憐の挿話に見る可く、更に農奴解放令發布の一大動因となつたといはるゝ下層農民の悲慘なる生活の活寫は、裏に潛められたる人道的溫情を以て、現代を刺戟する所亦少なくないであらう。名篇揃ひ粒揃ひと云はるゝ彼が全集中の中でも、これは殊に其若々しさと瑞々しさとに於て、藝術的芳香の一際高きもの。邦文に譯して一千枚の全冊、皆珠玉の如き文字に充ちてゐる。而して一字をも苟くもせざる長江氏苦心の譯筆は、よく其情趣を移して些の遺憾が無い。其名の聞ゆる事徒に高かつた此名篇が始めて完美の全譯を得たのである。

續刊

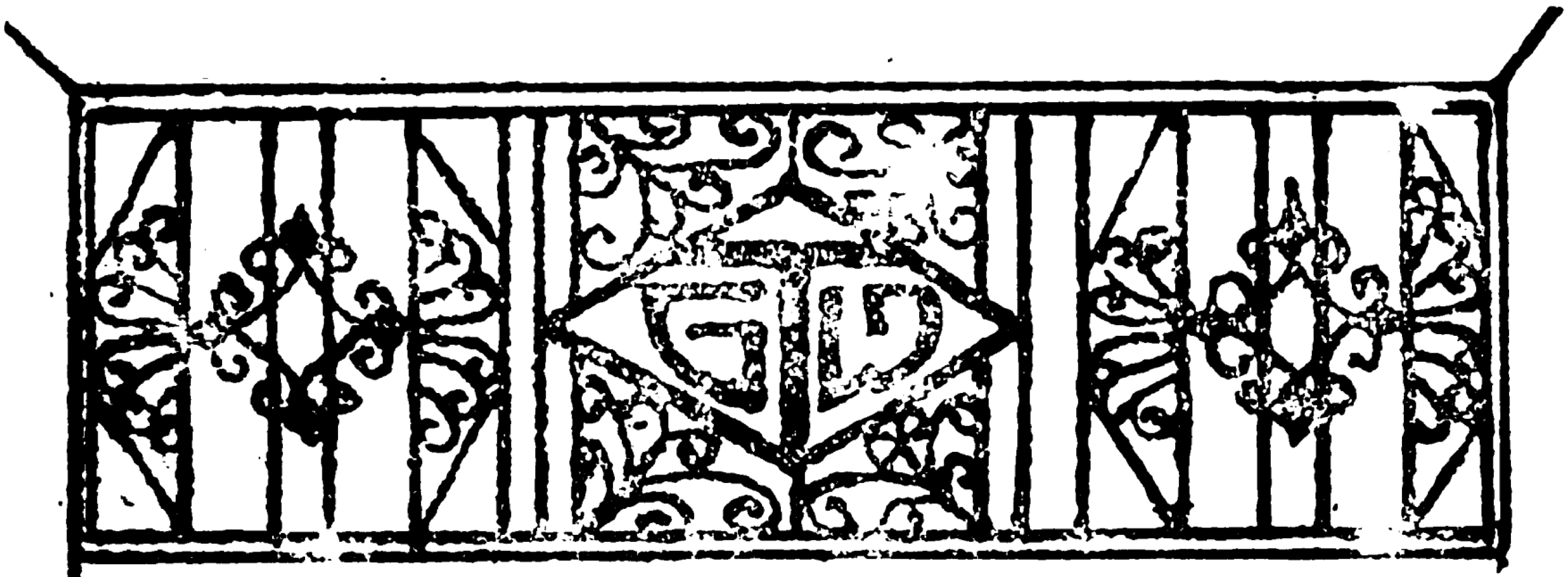
(2) ■ルーヂン　田中純譯

(3) ■初戀 (附)戀物語二篇　生田春月譯

東京牛込矢來中の丸
振替(東京)一七四二

新潮社

電話番町八〇九番
電話番町八九九番



一、従來ノ化粧煉瓦ト異リ釉薬ヲ施サス
一、污染、變色、龜裂、剥脱ノ憂ヒナシ
一、建物ノ内外壁、塀、門柱、浴場、洗面所

近代的建築に
硝子煉瓦

美術的
經濟的

一手販賣

東京市麹町區内幸町一丁目三番地

ABK

安部幸兵衛商店機械電氣部

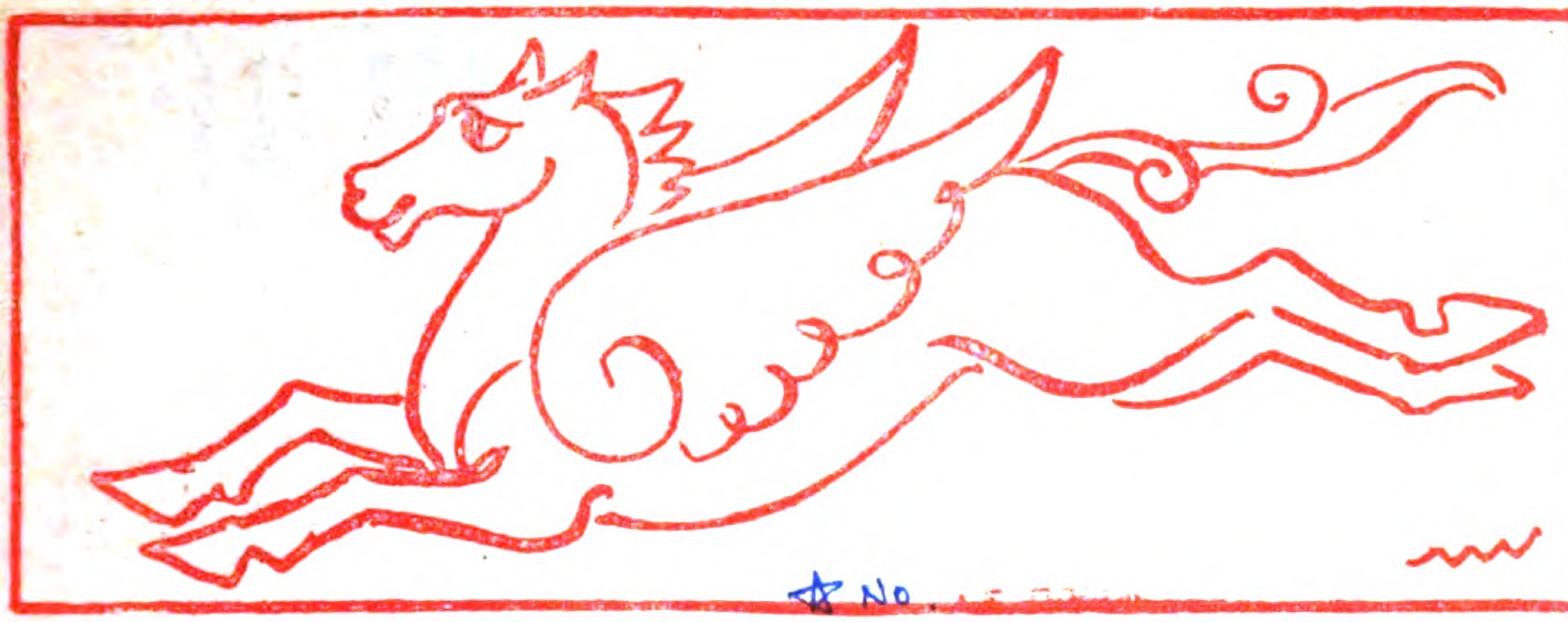
電話新橋局五一八・五八三・二〇九一・二七七二

大阪支店　大阪市南區末吉橋通り

電話南局一〇六〇・一〇三一・一五七五・三二五五

製造元　合資會社　東亞硝子工業所　電話三八六四

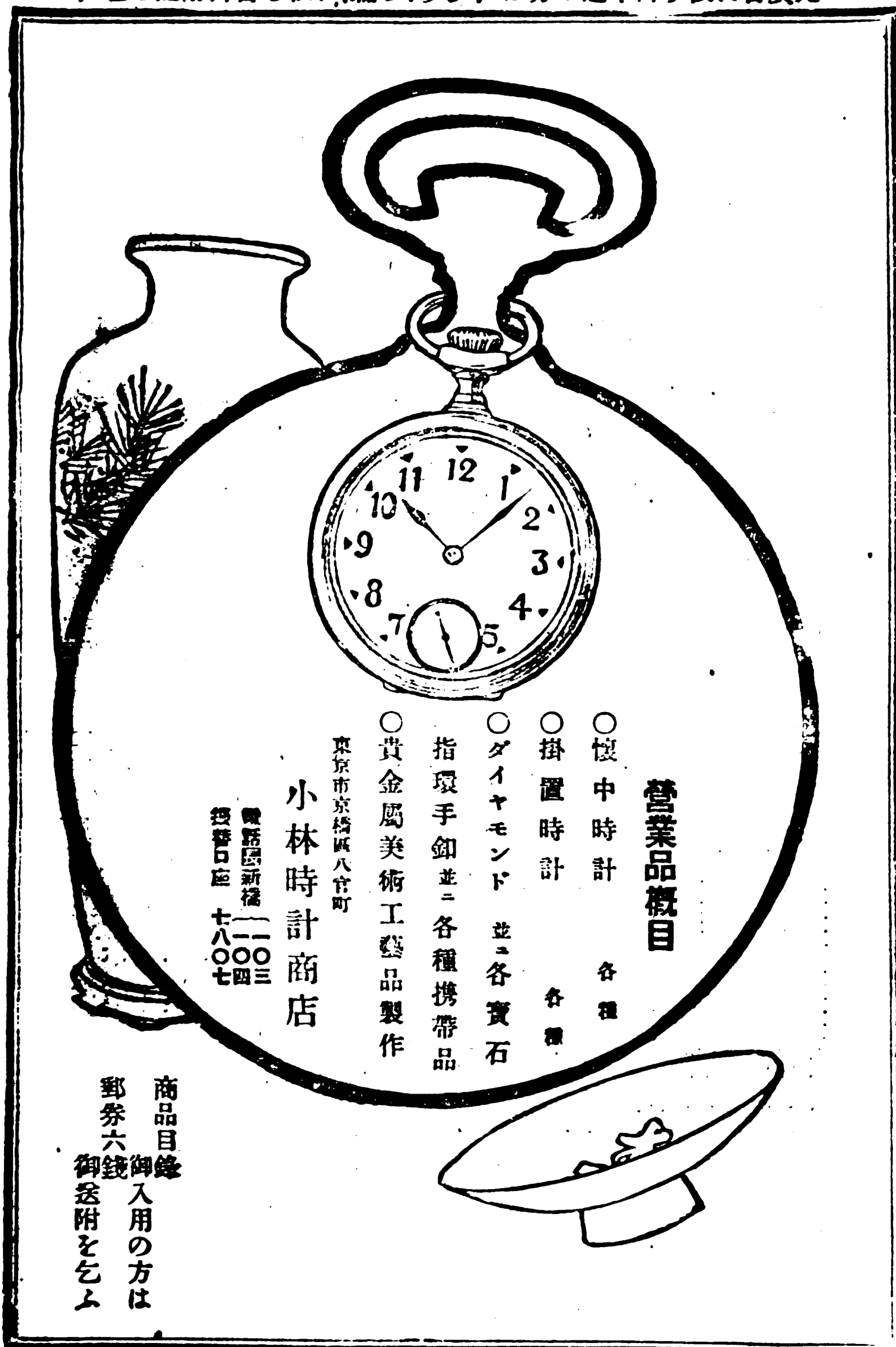
横濱市久保町五十八番地



中央公論第卅三年第八月號目次



此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



"LA CUEILLETTE A MORTEFONTAINE."

BY J. B. C. COROT.

中央公論



第卅三年第九號
八月號
第三百六拾號

鐵政策の確立を要す

工學博士 大河内正敏

產業の上からも國防の上からも、我が國民が鐵の必要を感じた事は、日淸日露の兩役を經て甚だ顯著になつて來た。日本が世界の强國間に伍して行かうと云ふには、年々益多額の鐵を要求するのである。創立以來巨額の失費を忍び、苦しい中から國家が八幡の製鐵所を經營して來たのも、亦實に此意味に外ならぬのである。幸にして戰前數年前からして製鐵所が利益を擧げ得るやうになつたのは誠に結構の事であるが、若し假りに每年損失に次ぐに損失を見て迄も、實は一國の獨立の爲めに吾人は忍んで大製鐵所を持つて居らなければならぬ。丁度何等の生産を見られない海陸軍の軍備を要すると全く同様である位必要で

ある。特に今回の戰亂に由つて更に、工業發展の上からは勿論國防の上から觀て、一刻も鐵の缺く可からざる物なる事を切實に感じたのである。今後鐵に代るべき物質が發明せられない限りは、百艘の弩級艦を有つて居ても、百萬の大軍を擁して居ても、軍の要する多額の鐵の供給を斷たれると戰鬪力は著しく低下し、遂には絕無になると言つても宜しい。結局鐵といふ物が國防上、卽ち一國の生存上缺くべからざる物である事が明かである。隨つて從來不幸にして鐵の製額尠少にして製鐵業の見る可きものゝ無い我が國は、如何にして今後世界の大勢に伴つて鐵に對する政策を樹立す可き歟は刻下の大問題であると言はなければならぬ。現に從來內國需要の殆ど大部分を遠く歐米から輸入して居た日本は、大正四年に英吉利の鐵輸出禁止に遭遇して、如何に狼狽した歟。譬は染料藥品等日常品の輸出禁止程大きくなかつたけれ共、其實質は遙かに鐵の缺乏の方が國家の產業に對し大打擊であつたのである。一方から考へると、平時に於ける日本の鐵に對する政策が確立して居なかつた。八幡の官有製鐵所があつても夫れは國內需要の一部のみに應じ得る程度であつた爲めに、輸出禁止に遭つて初めて狼狽したといふのは、如何に吾々が平素不用意であつたかを示すもので、寧ろ滑稽な觀がある。然し當時は尙米國から輸入する便宜が有つた爲め多少の苦痛を忍ぶ事が出來たが、昨年八月に至つて再び米國の鐵輸出禁止に遭遇し、またまた狼狽を重ねたといふ事は、世界の一等國民と誇稱する我が日本國民の大恥辱である。既に强國として世界に存在する爲めには、鐵の多量が必要である事を前提とするならば、夫れの供給を國外から受けて居て、而して其供給を一片の宣言によつて斷たれると云ふ事は、一面から觀れば一國の獨立が脅かされて居るやうなものではあるまいか。英米の鐵輸出國が日本の獨立を脅かす考で其輸出を禁止したのでは勿論な

い。然し事實に於て日本が艦隊を動かし陸軍を動員する爲めには、數十萬噸の鐵を要する際に方つて、其供給を斷たれたといふ事は、我が國軍を十分に動かすことの出來なくなつた事となり、結局獨立を脅かされて居る形に成ると言つても過言では無い。

然らば今後我が國が如何にして此鐵問題を解決す可きである歟。之れは國民が眞面目に研究しなければならない問題であつて、現今の歐洲戰爭とは比較に成らない程の小規模の戰爭に今後日本が國力を盡くして鬪ふとしても、少くとも一ヶ年に百五十萬噸乃至二百萬噸の鐵材は單に軍需用とのみとしても要求しなければならないと自分は信じて居る。今日佛蘭西が一年に消費して居る彈丸に要する鐵材だけでも、大略百二十萬噸の額に達して居る。今後の戰爭に於て、日本が東洋の一角に孤立して居る以上、砲彈も自分で製造しなければならないし、船舶も自分で建造しなければならぬ、戰爭に要する自働車、鐵道等も自ら造らなければならない事を考へたならば、如何に少く見積るも軍需用に供せらるゝ鐵材のみにても、百五十萬噸乃至二百萬噸である事は決して誇張の言では無いと考へる。若し此他に一般工業用の鐵材を加へると、一ヶ年の所要額が數百萬噸に達するは疑も無い事實であつて、是等の鐵を日本は抑も何處より得んとするのであらう歟。

之れには先づ第一に內地に於ける鐵鑛の調査が急務であるが、不幸にして日本の從來發見せられたる鐵山は鑛量少くして、百萬噸の鑛量を有する鐵山は稍々大きい部とされて居る。例へば鑛量百萬噸の山を全部掘り盡くしても、五十萬噸の鐵しか得られない。其他尙ほ今日十分に利用せられない砂鐵の如きものは、幾許の鑛量があるか十分調査が行屆いて居ないやうである。加之是等の製錬に關する研究は日

本に於て最も盛んに行はれなければならない、何となれば鐵鑛の少い日本にあつて砂鐵のみは比較的容易に多量に得られる事情にあるからである。而も其研究が未だ十分に盡くされて居ないとは如何にも殘念である。若し日本に産するやうな砂鐵が歐米に於て多量に産するものであつたならば、定めて砂鐵を原料とする製鐵業が世界に隆盛を極めて居るに相違ないと思ふ。所が研究といふ事を白眼視して來た日本では、相當の砂鐵を産出するに拘はらず、其製錬に關する組織的の研究が從來行はれて居なかつた事は如何にも遺憾である。此際理化學研究所が其研究の第一步として砂鐵の製錬を極めて科學的に研究し初めるといふ事は、産業上からも國防上からも大に慶賀すべき事である。

然し不幸にして日本の鐵鑛量貧弱にして今後日本の要する鐵材が、日本内地の製産にのみ頼る事が出來ないとするならば、又頼み得るものとしても鑛量が無限でないから、必ず何時かは消費し盡くされて終はねばならぬ。吾人は出來得る限り之を亞細亞大陸の一部から輸入する途を考へなければならない。一朝事有るの時は單に鐵に限らず食糧其他の物までも、日本の孤島だけでは供給が不足であるから、日本の獨立上如何なる場合が有つても、朝鮮海峽は吾人の死守す可き所である。此連絡を絶たれる以上國は滅びるものと覺悟がなければならない。故に製鐵業の如きも内地の産額が不足だと云つて決して悲觀するには當らない。亞細亞大陸の一部に於て其供給地を見出せば差支へない。幸に多量の鑛量が包含されて居る事が追ひ〳〵解つて來たから、一朝有事の日には是等の地方を敵に蹂躙せられない様に我が陸軍が防備するだけの實力を有つ事が必要である。即ち日本は戰時に要求する原料の點から考へても、軍備を海主陸從主義にする譯にも陸主海從主義にする譯にも行かぬ。全く海陸並立主義を執らなければならぬか

ら、之に要する軍備は國民に取つては非常な負擔となる事は免れない。併し是れは國家の存立の爲めに、吾人子孫の生存の爲めに如何なる苦痛ありとも忍ばざるを得ない負擔と云はなければならない。以上の如き鐵鑛の供給があるとしても、製鐵業の如きは平素からして國內に於て十分に發展させて置かなければ、急に產出量を增す事は不可能である。從て日本內地は勿論の事、朝鮮滿洲の如き地方に於て製鐵業を發展奬勵するといふ事は先づ第一の急務である。幸にして製鐵奬勵法案が成立はした。けれども今後戰後に於ける米獨等の製產國から日本に殺到し來る鐵のダンピングに對して、尙ほ確實に日本の製鐵業を保護し得るや否や。夫は尙ほ十分の硏究を要するのである。過般工業關係の各學會から成る鐵に關する聯合調査會に於て、其調査の結果を一部に發表したけれ共、戰後の日本の製鐵業に對し、保護若しくは奬勵の方針には遂に觸れる事が出來なかつた一事は、自分も其調査會の委員ではあつたが、今日に於ても極めて遺憾に考へて居る。

然らば此際戰後の製鐵業は果して關稅保護の形式を取る可き歟、或は生產補助費の形式を取る可き歟、或は其他の方法を設けて保護奬勵す可き歟。或は積極的に製鐵に關する組織的、根本的、科學的の硏究を大に呼び起して科學發明の力によりて生產費の輕減を硏究する歟、何れにしても製鐵用の石炭の產額少く、鐵鑛の運搬採掘に不便多い日本內地・朝鮮・滿洲に於ける製鐵業は、外國の製鐵業と比べて多少の困難が有る事は明かであるからして、世界の競爭場裡に立つて行く爲めには何等かの方法を執らなければならないと思ふ。自分は差當り關稅保護に據る事を以て日本の製鐵業を保護する最も早い策と考へて居るのである。此際此方針を確立しない以上は、幾多起らんとする製鐵業が十分に起らずに居るといふ

狀況になりはしまい歟。勿論現今の鐵の市價を以てすれば、如何なる種類の製鐵業も採算可能處ではない、一擧にして巨利を擧げる事が出來るから、戰時中のみを目當とする所の、極言すれば射倖的の小製鐵業者は雨後の筍の如く簇出するが、眞摯な戰後の狀況迄をも考慮する大製鐵業と云ふものは、現に東洋製鐵以外には殆ど、大計畫のものは無いと言つても可しい。之れは一面から觀れば、日本の鐵に對する政策が確立して居ない爲めである。若し戰後は關稅の保護に據るとか、或は其他の方針に依るといふ事が確立して居るならば、今日の好機に乘じて眞面目の大製鐵業者が出現し、今後一朝有事の際には非常なる貢獻を國家に致すであらうと考へるが、今日のやうな小製鐵業者のみでは、戰後に至れば忽ち霧散しやしないかと懼れて居る。

自分は曾て國防上製鐵業の奬勵策として關稅引上げを唱へたのは今回の大戰開始の數年前であつた。無論其關稅引上の爲めに日本に於ける鐵材の市價は昻騰し、各種の鐵の工業、例へば造船業、機械工業等が原料の騰貴に由つて大なる打擊を蒙るといふ非難は當然起るであらう。併し乍ら幸にして日本は國內產額の大部分を占めて居る大製鐵所を官有して居るから、其製鐵所の製產品を以て適當に市價を抑制する事が出來、隨つて國內に於ける鐵の異常なる騰貴を防止する事は或程度迄可能であると信じた。或は進んで日本の製鐵業を全部官有する事も一策である。然らば造船業、機械工業、化學工業其他凡ての工業は必ず多少の鐵を使用するのであるが、其等の生產品が世界の市場に於て競爭し得ない程原料を高價とする虞れはない、工業發展の上に非常なる障害を來すやうな事は無いと考へて居つたのである。然るに現今の鐵の市價を考へると、銑鐵の如きは昨年八月以來暴騰に繼ぐに暴騰を以てして、戰前の十數倍に

上つて居る。卽ち戰前一噸三十圓内外であつた銑鐵が、四百五十圓以上に達せんとして居る。而も尙ほ銑鐵の供給は不足を免かれない爲めに、益す鐵價が昂騰しやうとして居るのである。故に製鐵業者に對しては異常なる利益であつて、何處の製鐵所と雖も一ヶ年の利益が資本の十割若しくは三四十割にも達せんとする狀況であるから、製鐵業に對する奬勵として此上も無い好機會の如く考へらるるが、嚮きにも述べた如く、戰後を考へると全く混沌として居るからして、忽ちに設立せられて忽ちの内に資本を取返し得るやうな小規模製鐵業は容易に起るが、大製鐵業は容易に起り得ない。而して一面に於て鐵の暴騰の爲めに各種の工業殊に機械工業の如きは非常なる困扼を嘗めて居る。卽ち從來日本に於て最も振はなかつた機械工業、而して國防上からも其發展の必要を吾人は度々極言した機械工業は、今次の戰爭と共に漸く發展し懸けて、産業上及び國防上大に慶賀すべき狀態に成つて來たのであるが、今や原料の暴騰に由つて一頓挫を來たした狀態に在る。以上のやうな狀況に在るに拘はらず、政府は何故米價を調節し、船を管理し、暴利を取締りながら、此重要な鐵を顧みないのである歟。凡ての工業に必然使用せらるゝ鐵が今日の如き狀態にあつては、各種の工業の發展を阻害しつゝあつて、同時に前にも述べた如く大製鐵業の奬勵にもならない。故に鐵價の調節は今日の最も急務ではあるまい歟。自分は國内産額の過半數を占むる官有の製鐵所が、自己の製品を以て多少なり共鐵價の調節に當るべきものと考へて居るに拘はらず、此頃の遣り方を觀ると調節の反對で却つて鐵價を煽り立てゝ居るが如き觀を呈するは甚だ遺憾と思ふ。不幸にして製鐵所に收賄事件が勃發した際であるから已むを得ないとしても、今度の如く其製品を單に入札のみに依つて拂ひ下げ、而かも其入札を三日に分つて第一日の最高價格を第二日の入札

豫定價格と爲るといふやうな非難を聽くに至つては寧ろ驚くの外は無い。工業發展の爲めには國家は此際數千萬圓を投じて迄も鐵價の調節に對して努力しなければならない秋に方つて、已に本年度は豫期の二倍以上利益を得んとしつゝあるに係はらず、尙ほ夫れ以上に利益を貪ぼり各種工業の發展を阻害しやうとするのは何故である歟。右に暴利を取締りつゝ左に暴利を貪るひ下げられて居る。其鋼材を造る原と云ふ非難を聞くは甚だ遺憾である。過日行はれた製鐵所の拂下げを見ると鐵棒一噸を三百圓內外に拂料たる銑鐵は市價四百五十圓である。而して平時に於て銑鐵から鋼材を造り出すには、如何に低く見積つても一噸十五圓から二十圓を要する。卽ち銑鐵一噸の價格よりも鋼材一噸の價格の方が、少くとも二十圓は高價でなければならない。而るを今日は銑鐵の市價が一噸四百五十圓であるに拘はらず、鋼材が一噸三百圓內外であるといふのは、極端に言へば製鐵所は現今日本の工業界に銑鐵が缺乏して居て、時價一噸四百五十圓して居るものを鑄潰して、時價三百圓の鋼材を作つて居るといふ不思議な現象である。例へ製鐵所が支那との協約により大冶から輸入した銑鐵は一噸なりとも民間に供給し得ないとは云へ、此際一噸五十圓の朝鮮鑛石を買ひ入れて迄も多少の銑鐵を市價に供給する策に出でないのであらう歟。元來斯の如く銑鐵の市價が或種の鋼材よりも高價であると云ふ珍現象は、其種類の鋼材に限り米國より尙ほ輸入が可能であつた事も一つの原因ではあるが、一つには銑鐵の市價が材料商人によつて人爲的に引き上げられてゐるといふ現象に由りはしない歟。何れにしても前述の如く今日の鐵價は國家の產業に有害なものであるのは明であるから、鐵價調節は工業發展の上に於て益す要緊な問題であつて、同時に吾人は國家が鐵に對する戰後の方針を今日確立して置く事を望む者である。

津田青楓君の畫と南畫の藝術的價値

理學博士　寺田寅彥

本文に入る前に一言申譯のやうな事を述べて置く必要があると思ふ。一體おとなしく物理學を專攻して居るべき筈の自分のやうなものが、しかも時節柄此の忙しい世の中に柄にもなく繪畫などに關して議論めいた事を、殊に本誌のやうな處で發表するといふ事は自分ながら少しく變な氣がしないではない。兎も角も脫線である。少くも餘りふさはしい事とは思はれない。此れが反對で藝術家が數學の論文か發動機の理論でも書いたといふのならば其方はまだ少し趣が違ふが、科學者の藝術論などは甚だ不穩當だと認める人も多數にあるだらうと思はれる。文學といふものと不道德といふものを同義（シノニム）と心得て居る人もある世の中では少くも所謂正教派（オーソドックス）或は淸教派（ピューリタン）の科學者としての體面信用に關する事かも知れない。又一方で藝術家や專門の藝術評論家の眼からは甚だ生意氣若くは滑稽に見えるかも知れない。少くも山出しの田舍者が三越で最新の流行を品評して居る位には見えるだらう、或は生蕃が銀座街頭で文明を論じて居るやうなものかも知れない。しかし自分は永い前から科學と藝術、或は寧ろ科學者と藝術家との素質や仕事や方法に相互共通な點のある事に注意し又深く興味を感じて居る。それで自分の嗜好趣味といふ事から離れても、科學者が藝術の事を論じるのはそれ程不倫な事とは思つて居ない。のみならず自身に取つてもさういふ事を思索する爲に自分の專門の事柄に對して新しい見界や暗示を得る事も少くないのである。それと同時に、科學者の藝術論が專門の藝術評論家の眼から見て如何に平凡幼稚なものであつても藝術家の藝術論と多少でも異る處があらば、それは或る種類

の藝術家の爲に何等かの參考にならぬとも限らない。若しさうだとすれば自分が玆に脫線の誹を冒して敢て柄にもない者を公にするのも强ち無意味ではないかも知れない。山出しの批評も時には三越意匠部の人の參考になるかも知れない。生蕃人の東京觀も取り樣では深刻な文明批評とも聞へるかも知れない。

此の稿を起したもう一つの理由は友人としての津田君の隱れた藝術を幾分でも世間に紹介したいといふ私の動機（プライヴエートモーチヴ）からである。此れも一應最初に斷つて置いた方がよいかと思ふ。

津田君は先達て催した作畫展覽會の目錄の序で自白して居るように「技巧一點張主義を廢し新なる眼を開いて自然を見直し無技巧無細工の自然描寫に還り」度いといふ考をもつて居る人である。作畫に對する根本の先發點が旣にかういふ處にあるとすれば津田君の畫を論ずるに傳說的の技巧や手法を盾に取つてするのは抑も見當違ひな事である。小笠原流の禮法を標準として露西亞の百姓（ムジーク）の動作を批評するようなものかも知れない。或は寧ろ自分のような者の純然たる素人評の方が却つて適切であり得るかも知れない。一體津田君の主張するように常に新な眼で自然を見直すといふ事は科學者にとつても甚だ重要な事である。科學の進步の行き止りにならないのは全くさういふ態度の賜物である。科學は決して自然をありの儘に記載する者ではない。自然の顏には敎科書の文句は書いてない。自然を如何に見て如何に表現すべきかといふ事は全く自由ではないがしかも必しも絕對に單義的（ユニーク）なものではない。例へば晝夜の交代大陽の運行を觀測した時に地球が動いて居るとするか大陽が動い居るとするかは唯此れだけの現象の說明をするにはいづれでも差しつかへはない。併し大陽が地球の周圍を動いて居るとすると外の遊星の運動を非常に複雜なものと考へなければならず、又重力の方則なども恐ろしく難義なものになるに相違ない、科學の場合には方則の普遍性とか思考の節約とかいふ事が標準となつて科學者の自然に對する見方を指導し其價値を定めて行くのである。此れに比べ

て藝術家が自然に對する見方は非常に多樣であり得る事は勿論である。科學者はなるだけ自分といふものを捨てゝかゝらうとする。一方で藝術家は專ら自己を主張しようとする。而して其區々な表現の價値を定める者も科學の場合とは無論一樣でない。此樣な問題は寧ろ自分の關係しない事であるが、兎も角も藝術家の內で自然其物を直接に見て何物かを見出さうといふ人があれば其根本の態度や採るべき方法には自ら科學者と共通點を見出す事が出來るのである。

新しい目で自然を見るといふ事は存外六かしい事である。吾人は生れ落ちて以來馴れ切つて居る周圍に對して、ちやんと定まつたしかも極めて便宜的な型や公式ばかりを當て箝めて居る。朝起きて顏を洗ふ金盥の置き方から夜寢る時の寢衣の袖の通し方迄無意識な定型を繰返して居る吾人の眼は如何に或る意味で憐れな融通のきかぬものであるかといふ事を知る爲の一つの面白いしかも極めて簡單な實驗は、頭を倒にして股間から見馴れた平凡な景色を覗いて見る事である。たつたそれだけの眼の向け方でも今迄見逃して居た自然の美しさが今更のやうに目に立つのである。寫眞機のピントガラスに映つた自然や望遠鏡の視野に現はれた自然についても意外な發見をして驚くのは何人にも珍しくない經驗である。藝術家としてどうすれば新しい見方をする事が出來るかといふ事は一概に云へない、それは人々の天性や傾向にもよる事であらうが一つには又絕えざる努力と修練を要する事は勿論である。然るに現今幾百を數へる知名の畫家殊に日本畫家中で少くも眞劍にかういふ努力をしてゐる人が何人あるかといふ事は考へて見ると甚だ心細いやうな氣がする。それで津田君の此の點に對する努力の結果が既に何處迄進んで居るかは別問題としても、さういふ態度と之を實行する勇氣とに對して先づ共鳴を感しないでは居られないのである。

尤もどの畫家でも相當な人ならば或る程度迄はさういふ事を考へぬ人は無いかも知れないが、併しさう考へる計りで何時迄も同じ谷間の徑路を往復しながら對

岸の自然を眺めて居るのでは到底駄目であらう。一度も二度も馴れた道を捨てなければならない、時には頭を倒にして見るだけの手數も敢てしなければならない時には又向ふの峯へ上つて見下す事もしなければならない。かういふ事を現に少しでも實行して居るらしい少數の畫家の作畫に對して自分は常に同情と期待を以て注意して居た。その作品がどれ程自分の嗜好からは厭なと思ふ者でも、又餘りに生硬と思ふものでも、それに拘らず一種の愉快な心持をもつて熟視する事が出來た。毎年の文展や院展を見に行つてもかういふ自分の所謂外道的鑑賞眼を喜ばすものは極めて稀であつた。多くの繪は自分の眼には唯一種の空虚な複製品としか思はれなかつた。少くも畫家の頭腦の中にしまつてある取つて置きの粉本を其儘紙布の上に投影して其上を器械的に筆で塗つて行つたものとしか思はれなかつた。ペンキ屋が看板の文字を書くやうにそれは何處から筆を起してどういふ方向に運んで行つても沒交渉なもの丶やうに見えた。適には複製でない本當の原本(オリヂナル)と思はれる繪を見出して愉快を感じる事もあつたが、動もすれば其獨創的な點がもうそろ〳〵一種の安心したやうな、此れでい丶と云つたやうなおさまり方に變化するのを認めて失望した。どうかしてもう少し迷つて居る畫家のおさまらぬ作品に接し度いと希望して居た。さうして偶然に逢着したのが津田君であつた。

洋畫家並に圖案家としての津田君は既に世間に知られて居る。しかし自分が日本畫家或は南畫家としての津田君に接したのは比較的に新しい事である。そして段々其作品に親しんで行く中に、同君の天品が最もよく發揮し得られるのは正しく此の方面であると信ずるやうになつたのである。

津田君は嘗て桃山に閑居して居た事がある。其處で久しく人間から遠かつて朝暮唯鳥聲に親しんで居た頃、音樂といふ者は此の鳥の聲のやうな者から出發すべき物ではないかと考へた事があるさうである。津田君が今日其作品に附する態度は矢張これと同じやうなものであるらしい。出來るだけ傳統的の型を離れるに

は一度あらゆるものを破壞し投棄して原始的の草昧時代に歸り原人の眼をもつて自然を見る事が必要である。此ういふ主張は實は單なる言詞としては決して新しいものではないだらうが、日本畫家で實際に此の點に努力し實行しつゝある人が幾人あるといふ事が問題である。

原始的無技巧といふ點では野蠻人の繪や子供の繪は最も代表的のものであらう。彼等の繪は概念的抽象的或は寧ろ科學的なものである。併しアカデミックな藝術に食傷したものゝ眼には不思議な慰安と憧憬を感ぜしめる。此れは唯牛肉の後に澤庵といふやうな意味のものではなく、もつとずつと深い內面的の理由による事と思ふ。美學者や心理學者は此れに對してどういふ見解を下して居るか知らないが、兎に角東洋畫殊に南畫といふものゝ藝術的の要素の中には此れと同じやうな者がある事は疑ない。

複製（リプロダクション）の技術としての繪畫は疾の昔に科學の壓迫を受けて滅亡してしまつた。筆觸用墨の技巧は未だ一般の鑑賞家には難有がられて居るであらうが、本當の藝術としての生命は既に旦夕に迫つて居る。其樣な事は職人か手品師の飯の種になるべきものではあるまいか。筆の先を紙になすりつけ、それが數尾のごまめを現はし得て生動の妙を示した處で此れは餘りに職工的な或は寧ろアクロバチックの藝當であつて本當の藝術家として寧ろ恥づべき事ではあるまいか、文學にしても枕詞やかけ言葉を喜ぶやうな時代は過ぎて居る。地口や駄洒落は床屋以下に流通して居る時代ではあるまいか。

日本畫の生命は此やうな低級な藝當にあるとは思はれない。近代西洋畫が存在の危機に瀕した時に唯一の救濟策として日本畫の空氣を採り入れたは何故であらう。單に眼先を變へるといふやうな淺薄な理由によるだらうか。自分はさうは思はない。日本畫には到底科學などの爲に動搖させられない、却て或は科學を屈服させるだけの堅固な地盤があると思ふ。何故かと云へは日本畫の成立ち組立て方に於て非常に科學的でそし

て寧ろ科學以上な處があるからである。

師匠の眞似ばかりして居た古來の職工的日本畫家は別問題として、何等かの流派を開いた名畫家の作品を見ると、假令それが品の惡い題材を取扱つた浮世繪のやうなものであつても。一口に云つて差しつかへのないと思ふ特徴は、複雜な自然人生の中から何等か普遍的な要素を捉まへて居て、そして其れを現はすに最も簡單明快な方法を撰んで居る事である。例へば光琳の草木花卉に對するのでも、歌麿や寫樂の人物に對するのでもさうである。かういふ點で自分が特に面白く思ふのは古來の支那畫家の繪である。尤も多くは唯寫眞などで見るばかりで本物に接する事は稀であるが、それだけでも自分は非常な興味を感じさせられる。といふのは畫家各自の撰み出した要素がそれ〲一種の普遍的な事實或は法則のやうなものであつて、しかも相互の間に何等の矛盾もなければ背違もない。恰も多樣な見方の上に組み立てた科學的系統が相併立して居るやうな觀がある。現今の物質科學ではこういふ自由は許されて居ない。人間性（アンスロポモルフイズム）といふものを出來るだけ除外しようといふ傾向からすれば此れは當然な事であるが、藝術では此點は勿論ちがふ。各の畫家はそれぞれの系統を有し、其各々が事實であり眞實でありしかも互に矛盾しない處が面白く又尊い處であらう。

筆觸や用墨を除いた日本畫や南畫の根本的の要素は何かといふ事は六かしい問題であるが、自分は此の要素の材料となるものは前にいつたやうな原始的で同時に科學的な見方と表現法であると思ふ。しかしそれだけでは未だ野蠻人や子供の繪と異る所はないが、それと大に異る處は此れ等の材料から組み立てる一種の「思考の實驗」（ゲダンケンエキスペリメント）である。科學者が既知の法則を材料として演繹的に此のような實驗を行つて一つの新しい原理などを構成すると同樣に南畫家は又一種の實驗を行つて其處に一つの新しい藝術的の世界を構成し現出せしめるのである。畫としての生命は寧ろ此處にあるのであるまいか。科學者の仕事の生命は人の實驗を繰り返す事でないと同樣に畫家の價値も不斷に自分の「實驗」

を考へながら進んで行く處にあるのではあるまいか。

もし世の中に全然新しい者が得られぬとすれば在來の畫の種類の中で此の樣な「思考の實驗」を行ふに最も適したものは南畫だといふ事は敢て多言を要しない事と思ふ、さういふ事はもう自分の技に云ふとはちがつた言葉で云ひ古るされた事かも知れない。然もかういふ意味から見て繪畫と稱すべき繪畫の我邦に存する事が餘りに少いのに驚くのである。

津田君の繪は今非常な速度で變化し發育しつゝあるのだから概括的に論ずるが困難であるのみならず、又具體的に一つ〱の作品に對して批評するのも容易な仕事ではない。しかし兎も角も出發點に於ける覺悟と努力の向け方に於ては自分が本當の南畫の精神要旨と考へるものに正しく適合して居る。狹く南畫などゝは云はず一般に藝術といふものが科學などの壓迫に無關係に永存し得べき肝心の要素に觸接して居るやうに思はれるのである。

津田君と雖も傳習の羈絆を脫却するのは困難である。或は支那人や大雅堂蕪村や或は竹田のやうな幻像が絕へず眼前を橫行して其等から強い誘惑を受けて居るやうに見える。そしてそれ等に對抗して自分の赤裸々の本性を出さうとする際に、從來同君の多く手にかけて來た圖案の筆法がやゝもすれば首を出したくなる。それをも強いて振り落して全く新しい天地を見出さうと勉めて居るのである。其努力の效果は決して仇でない事は最近の作品が證明して居る。

津田君が南畫に精力を集注し始めた初期の作品を見ると一つの面白い現象を發見する。例へば樹の枝に鳥が止つて居る。よく見ると樹の枝は鳥の胴體を貫通して居て鳥は恰も透明な物體であるやうに出來上つて居る。津田君は別に此れに對して何とも不都合を感じて居ないやうである。樹枝を畫く時に此處へ後から鳥を止まらせる用意として豫め書き殘しをして置くやうな細工はしないのである。此れは一見沒常識のやうに見えるかも知れぬが、其處に津田君の出發點の特徵が最も明白に現はれて居るのである。そういふ遣り方が寫

異として不都合であつても繪畫としてはそれ程不都合な事ではないといふ事が初めから明に理解されて居る證據である。叉下書きなどをして其上を綺麗に塗りつぶす月並なやり方の通弊を脫し得る所以であるまいか。本當の意味の書家が例へば十の字を書く時に始め一を左から右へ引き通す際に後から來る｜の事など考へるだろうか、それを考へれば書の魂は拔けはしまいか。假令胴中を枝の貫通した鳥の繪は富豪の床の間の掛物として工合が惡いかも知れぬが、さういふ事を無視して繪を書く人が存在するといふ事實自身が一つの注目すべき啓示（レヴエレーシヨン）ではあるまいか、自分は少し見て居る内に此の種の非科學的な點はもうすつかり馴れてしまつて何等の不都合をも感じなくなつた、恐らく誰れでも同樣であらう、唯在來の月並の不合理や出來合の矛盾にのみ馴れて其れを忘れて居る眼にほんの一時的の反感を起させるに過ぎないであらう。

　津田君の繪についてかういふ新しい見馴れぬ矛盾や不合理を探せばいくらでもある。此ういふ點の多いといふ事が正に君が新しい眼で自然を見つゝある事實を證明するのである。在來の所謂穩健な異端でない畫に對して吾人が不合理を感じないのは、其處に不合理がないといふ證據では毛頭ない。唯其處には何等の新しい不合理を示して居ないといふだけである。そしてそれは間接には畢竟新しい何物をも包んで居ない事を暗示するのである。そうかと思ふと一方で立體派や未來派のやうな舶來の不合理を其儘に鵜呑みにして難有がつて模倣して居るやうな不見識な人の多い中に、此樣な自分の腹から自然に出た些細な不合理は寧ろ一服の清涼劑として珍重すべきもの丶やうな感がある。

　鳥の足が變な處にくつゝいて居る、樹の上で鳥が力學的平衡を保ち得るかは疑問である。樹の幹や枝の彈性は果して其重量を堪え得るや否や覺束ない。或は蓮苞の樣な恰好をした白鳥が濕り氣のない水に浮んで居たり、睡蓮の莖ともあらう者が蓮のやうに無遠慮に長く水上に聳えて居る事もある。時には庇ばかりで屋根のない家に唐人のやうな漱石先生が居る事もある。此

のような不思議な現象は津田君の或る時期の畫中には到處に見出される。在來の型以外のものに對して盲目な公衆の眼にはどうしても輕視され時には滑稽視されるのは誠に止むを得ぬ次第であるが、さういふ人でも先づ試に津田君の此種の繪と技巧一點張の普通の繪と並べて壁間に掲げ、ゆつくり且つ虚心に眺めて見るだけの手數をしたならば多分今迄とちがつた心持で津田君の繪を見直すだけの餘裕が出來ようかと思ふ。技巧を主とした繪は一見其の妙に醉はされ感服させられる。しかし先づ大抵の繪は少し永く見て居ると直にそれ程の魅力はなくなる、そして往々一種の堪え難い浮薄な厭味が鼻につく場合も少くない。技巧といふものが畢竟それ限りのものであつてそれ以上の何物をも有せぬものとすれば此れは當然な事ではあるまいか。津田君の繪は正しく其れに反する。一寸見た時には嘗て夏目先生が云はれたぢゝむさい樣な點や、一見甚しく無器用なように見える描方や、科學的幾何學的の不合理といふようなものが目に付き易い、其れに拘らず何とも名狀の出來ぬ一種の清新な空氣が畫面に泛ふて居る事は極端な頑固な人でない限り恐らく誰でも容易に觀取する事が出來るだらう。そして若し其際自分の本當の感じを押し隱したり僞つたりする事さへしなければ段々眺めて居れば居る程前にぢゝむさいと思つた處や不合理と感じた事は何でもなくなつて、從來の所謂穩健な繪からは受ける事の出來ない新しい活氣のある面白味や美しさが際限もなく出て來るだらう。技巧派の繪からは吾人が自然其のものに就て敎へられ、又啓示される事は甚だ稀であるが、津田君の繪からは自分は常に樣々な暗示を受け、新しい事を敎へられるのである。本當の藝術上の創作といふものはかういふ者であるべきではあるまいか。

仕上げの足りないといふ事やぢゝむさいといふ事は自分の要求するような意味の創作といふ者には或は寧ろ避くべからざる附き物ではないかと思ふ。一度草稿を作つて其通りのものを丹念に二度書き上げたものは最早半分以上魂の抜けた者になるのは實際止み難い事

である。津田君はさういふ魂のない者を我慢して書く事の出來ぬ性の人であるから假令幾枚書き改めた處で遂に「仕上げ」の出來る氣遣はないのであらう。二枚目は草稿よりも兎に角一歩でも進まないでは居られないのである。一體職工的の「仕上げ」といふ事が藝術品の價値にどれだけ必要なものであるか疑はしい。惡くおさまつた仕上げは其作品を何等の暗示も刺戟もないものにしてしまふ。完全和絃ばかりから構成されたものは音樂とはなり得ないやうに繪畫でも幾多の不協和音や雜音に相當する要素がなければ深い面白味は生じ得ないではあるまいか。特に南畫に於てさういふ必要があるのではあるまいか。然るに近代の多數の南畫家の展覽會などに出した作品例へば御定まりの青綠山水の如きものを見ると、山の形、水の流れ、一草一木の細に至る迄實に一點の誤りもない規則づくめに出來て居る。そして全體の感じはどうであるかといふと自分は丁度主和弦ばかりから出來た音樂でも聞くか、或は甘いものづくめの料理を食ふやうな心持がするのである。或は平凡な織物の帶地を見て居るやうなもので、綺麗は綺麗だが其處に何等の感興も起らなければ何等の刺戟も受けない。此れに反して古來の大家と云はれる程の人の南畫は決してそんな者ではない。自分の知つて居る狹い範圍だけでも蕪村、高陽の如き人の傑作に對する時は其處に幾多の不細工或は無恰好が優れた器用と手際との中に巧に、入り亂れ織り込まれて丁度力強い名匠の音樂の演奏を聞くような感しがするのである。殊に例へば金冬心や石濤の如き支那人の畫を見るがよいと思ふ。突飛な題材を無造作な無細工な描方で畫いて居るようではあるが、第一構圖や意匠の獨創的な事は別問題としても今茲に論じて居るような「不協和の融和」といふ事が非常にうまく行はれて居るので、其處に名狀の出來ぬ深みが生じ「內容」が出來て居るのである。津田君の繪が正にそうである。非常に無器用な子供の描いたような處があると思ふと又非常に巧妙な銳利な處がある。無細工な粗放な線が出て居るかと思ふと又驚くべく纖巧な神經的な線が現はれ

て居る。云はゞ一つの線の交響樂（シンフォニー）のやうなものではあるまいか。快活、憂欝、謹嚴、戯謔さま〴〵の心持が簡單な線の配合によつて一幅の繪の中に自由に現はれて居ると思ふのである。

津田君の繪には、どのやうな輕快な種類のものでも一種の重々しい處がある。戯れに描いた漫畫風の者に迄もさういふ氣分が現はれて居る。其重々しさは四條派の繪などには到底見られない處で却つて無名の古い畫家の緣起繪卷物などに瞥見する所である。此れを何と形容したら適當であるか、例へば此處に饒舌な空談者と訥辯な思索者とを並べた時に後者から受ける印象が多少此れに類して居るかも知れない。そして技巧を誇る一流の作品は前者に相應するかも知れない。饒舌の雄辯固より惡くはないかも知れぬが、自分は津田君の繪の訥辯な雄辯の方から遙かに多くの印象を得、又貴重な暗示を受ける者である。

此のやうな種々な美點は勿論津田君の人格と天品とか自然に生れるものであらうが、併し同君は全く無意識に此れを發揮して居るのではないと思はれる、斷えざる研究と努力の結果であることは其作品の行き方が非常な目まぐるしい速度で變化しつゝある事からも想像される。近頃某氏の爲に揮毫した野菜類の畫帖を見ると、其れには從來の繪に見るやうな奔放な處は少しもなくて全部が大人しい謹嚴な描方で一貫して居る、そして線描の落着いた然も敏感な鋭さと沒骨描法の豐潤な情熱的な溫みとが巧に織り成されて、玆にも一種の美しい交響樂（シンフォニー）が出來て居る。此調子で進んで行つたら或は近い內に「仕上げ」のかゝつた、しかも魂の拔けない、作品に接する日が來るかも知れない、自分は寧ろさういふ時のなるべく遲く來る事を望み度いと思ふ者である。

津田君の繪についてもう一つ云落してはならぬ大事な點がある。それは同君の色彩に關する鋭敏な感覺である。自分は永い前から同君の油畫や圖案を見ながらかういふ點に注意を引かれて居た。なんだか人好きの惡るさうな風景畫や靜物畫に對する每に何よりも其作

者の色彩に對する獨創的な感覺と表現法によつて不思儀な快感を促がされて居た。それは或は傳習を固執するアカデミックな畫家や鑑賞家の眼からは甚だ不都合な者であるかも知れないが。兎も角も自分だけは自然の色彩に關する新しい見方と味ひ方を敎へられて來たのである。それから又同君の圖案を集めた帖などを一枚〱見て行く内にもさういふ讃美の念が益々强められる。自分は不幸にして未來派の畫やカンジンスキーのシンクロミーなどゝいふ者に對して理解を持ち兼ねるものであるが、唯三色版などで見る此等の繪に就て自分が多少でも面白味を感ずる色彩の諧調は津田君の圖案帳に遺憾なく現はれて居る。時には甚しく單純な明るい原色が支那人のやるやうな生々しい或は烈しい對照をして錯雜して居ながら其れが愉快に無理なく調和されて生氣に充ちた長音階の音樂を奏してゐる。或時は複雜な沈鬱な混色ばかりが次から次へと排列されて一種の半音階的の旋律を表はして居るのである。

此のやうな色彩に對する敏感が津田君の日本畫に影響を持たない筈はない。尤も或る畫を見ると色彩については線法や構圖に對する程の苦心はして居ないかと思はれるのもないではないが、しかし簡單な花鳥の小品などを見ても一見何等の奇もないやうな配色の中に到底在來の南畫家の考へ及ばないと思はれる創見的な點を發見する事が出來る。例へば一見甚だ陰鬱な綠色とセピアとの配合、强烈に過ぎはしないかと疑はれる群青と黃との對照、或は牡丹の花などに於ける有りとあらゆる複雜な紫色の舞踏、かういふやうなものが君の繪に飽かざる新鮮味を與へ生氣を添へて居る。かういふ點だけでも自分の見る處では津田君と同じやうな人が他に幾人求め得られるか疑はしい。自分が他の種々の點で優れたと思ふ畫家の中でも色彩の獨創的な事に於て同君と比肩すべき人を物色するのは甚だ困難である。

津田君の繪についてもう一つの特徴と思はれる事がある。君の繪は或る點で甚だ無頓着に自由に且つ呑氣さうに見えると同時に又非常に神經過敏に或は少しく

病的と思はれる程氣むづかしい處がある。此れも同君の繪に就て感ずる矛盾の調和の一つであつて繪の深みを増す所以である。此のやうな點は或る支那人や現代二三の日本畫家の作品にも認められるのみならず、又西洋でも後期印象派の作などに於て瞥見する處である。或は却て古代の宗教畫などに見られて近代のアカデミー風の畫には藥にしたくもない處である。ルーベンスやゲーンスボローや乃至はアルマタデマに無くしてセザンヌ、ゴーホ或はセガンチニなどに存する處のものである。

津田君の日本畫とセザンヌやゴッホの作品との間の交渉は種々の點で認められる。單に其技巧の上から見ても津田君の例へば或る樹幹の描方や水流の寫法には何處となくゴーホを想起させるやうな狂熱的な點がある。或は又津田君の畫に屢々出現する無恰好な雀や栗の穗はセザンヌの林檎や壺のやうな一種の象徴的の氣分を喚起するものである。君が往々用ゐる黄と青の配合迄も亦後者を連想せしめる事がある。此の樣な共通點の存在するのは、根本の出發點に於て共通な處のある事から考へれば何の不思儀もない事ではあるまいか。或は又津田君の寡默な温和な人格の内部に燃えて居る强烈な情熱の焔が前記の後期印象派畫家と似通つた處があるとすれば猶更の事であらう。

或る批評家はセザンヌの作品とドストエフスキーの文學との肖似を論じて居る。自分も偶然に津田君の畫と此の露文豪の或る作品との間に共軛點を認めさせられて居る。殊に彼の「イヂオット」の主人公の無技巧な人格の美に對して感じるやうな快感を津田君の畫から味ひ得られる。そして眞率撲訥といふ事から出て來る無限の大勢力の前に虛飾や權謀が意氣地なく敗亡する事を痛快に感じないでは居られない。

以上の比較は無論唯津田君の畫の或る小い部分に就て當て篏まるものであつて、全體に就て云へば津田君の畫は固より津田君の畫である事は申す迄もない。同君のやうな出發點を有する人の畫を論ずるに他人のしかも外國人の畫などを引合に出し度くはない。しかし

外國人の事と云へば、何でも大騷ぎをして此を紹介し祖述する事に敏捷な人々の多い世の中に津田君の天才を紹介しようとする人の少いのは不思議である。遂に自分のような醉狂な脱線者でも差し出口をきかなければならないような事になるのはどういふ譯であらう。

　此處迄書いて來て振り返つて見ると自分ながら隨分臆面もなくよく思つた事をこれだけ書いたものだと思ふ。顧みて冷汗の流れるやうな點がないでもない、併し自分として云ひ度いと思ふ事は未だ中々十分の一も盡されて居ない。一番云い度いと思ふような主要な第一義の事柄は此れを云ひ表はすだけの言葉が中々見付からない。それでやつと述べ得た事すらも多くは平凡でなければ不得要領であつたり獨り合點に終つて居るかも知れない。此れは初めに斷つて置いたやうに、生蕃人の文明批評と同樣とすればどうも止むを得ない次第である。

　青楓論と題しながら遂に一種の頌辭のような者になつてしまつた。しかしあらを捜したり皮肉な穿ちをいふばかりが批評でもあるまい。少しでも不滿を感ずるような點がある位ならば始めから此のような畑違ひのものを書く氣にはなり得なかつたに相違ない。

　津田君の畫は未だ要するにXである。何時如何なる邊に赴くかは津田君自身にも恐らく分らないだらう。しかし其出發原點と大體の加速度の方向とが同君として最も適切な處に箝つて居る事は疑もない事である。そして既に現在の作品が群を拔いた立派な者である事も確である。それで自分は特別な興味と期待と同情とを以て同君の將來に囑目して居る。そして何時までも安心したり野狐禪におさまつたりする事なしに、何時迄も迷つて煩悶して進んで行く事を祈る者である。藝術の世界に限らず科學の世界でも何か新しい事を始めようといふ人に對する世間の輕侮、冷笑乃至迫害は往々にして勇氣を沮喪させたがるものである。併し自分の知つて居る津田君にはそんな事はあるまいと思ふ。嘗て日露戰役に從つてあらゆる痛苦と缺乏に堪えた時の話を同君の口から聞かされてから以來はかういふ心

配は先づあるまいと信ずるやうになつたのである。
終に臨んで此のまづい讀みづらい一篇を最後迄讀んで下さつた宏量な讀者諸君に感謝の意を表すると同時に諸君が自ら親しく津田君の書に接して其中に新しい幻像と象徴の世界を發見され、其處から盡きざる興味の源泉を汲まれん事を祈る。一方には又津田君の自愛と奮勵とを切望する。若し自分の述べた事で或は津田君の爲に贔負の引倒し或は難有迷惑になるやうな事があつた場合には、其れは全く自分の意餘つて筆の到らぬ爲であるから其處は單に同君の寛容を祈らなければならない。最後に此の一篇の爲に貴重な紙面を割いて下さつた瀧田君の好意に對して厚く感謝の意を表して置き度いと思ふのである。(大正七年七月十七日)

浦鹽出兵の斷行と米國提議の眞意

法學博士　吉野作造

(一)

去年の秋以來帝國政界の懸案たりし西伯利出兵問題は七月央に至り一先づ解決を告げた。唯光榮ある解決か否かについては各方面にいろ〳〵の議論がある。

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。〇〇。〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇

○○○○○○○○○○○○○○。○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○、○○。○○。○○。

○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○。○○○。○○。○○○、○○○。○○○

　併し乍ら右の如き意味の出兵には米國の賛同を見る事が出來るであらうか。全然外國の意嚮を顧慮するの必要が無いといふ說も一つの見識であり、又外國が賛同しないらしいからといつて出兵を躊躇し、外國が動き出したからといつて俄かに動くと云の餘りに不見識でないかといふ非難にも一理あるが、兎に角現政府の已に取つて居るやうに、飽くまで米國と交渉して步調を一にするといふ以上は、假令そが通告の形式を取るとか提議の形式を取るとか些末の體裁はどうであつても、我の申分が對手方の腹と合するや否やを全然念頭に置かないといふ事は出來ない。此等の點は尙後に之を說かう。玆には我々は彼の政府筋の出兵意見に對しては、國內に於ては已に有力なる政黨方面から反對が起つたといふ事を注意して置かう。中にも政友會の反

對は最も有力なるものであつた。尤も政府の出兵論に對する反對論の中には各種各樣のものがある。米國が厭やと云へば出兵しない、可いと云へば出兵するといふやうな他動的外交を主とする形式的反對論もあつた。實質的方面からの反對論中には、今は徒らに兵を動かすべき秋ではない、實力を涵養し滿を持して放たざるの態度を以て戰後に望むのが帝國最良の方策であるといふのもあり、又ウッカリ兵を西伯利に入れゝば遂に、とんでもない所まで引張つて行かれる怖れがあるといふ反對論もあつた。從來英米佛等と協調し來つたのに、今之を出し拔いて自主的出兵などゝ云つて單獨の行動を取るのが得策でないといふ穩健なる反對論もあり、又少數の人の間には出兵に由つて過激派を敵とする事の將來の日露國交上頗る憂ふべきもののあるを說くものもあつた。併し多數の意見は政府筋の自主的出兵論の根據とする獨墺勢力の東漸といふ事實を否認するの說が多かつた。政黨方面の反對論も主としては此點からであつた。併し乍ら理窟からいふと獨墺勢力の東漸といふ事實が無いからとて直ちに出兵論が破れる譯ではない。唯政府並びに軍閥の方面では之のみを以て出兵論の根據となし敢て他を顧るに遑なかつた。若し本當にかういふ事實があれば、出兵論に取つては此上も無い好都合であらう。從つて隨分誇大の報道をも發せしめた形跡がある。併し事實に基かざる誇大の報道は結局國民を瞞著する事は出來ない。而して他に何等正々堂々の出兵理由を作る事を知らざりし彼等は、獨墺勢力東漸の事實の否認に逢つて相當の辯明をすら與へ得ざりし醜態を暴露した。斯くして政府筋の所謂大規模の出兵論は或は豫想せられ得べき外部よりの不同意を俟たずして、內部の穩健なる反對論から一大破綻を來たす事に成つた。

政黨方面よりの反對の結果、出兵論の破綻を暴露せる事が、所謂大規模の出兵を巳に閣議に於て決定し、又元老會議に於て是認せられた後であつたといふ事は、見樣に據つては一種の痛快なる皮肉である。此問題が元老會議とか外交調査會とかの秘密裏よりもう少し廣

く公開されて居つたならば、或は内閣の責任問題を起
したであらうと思はるゝ。併し乍ら此等の點を吟味す
る事は予輩の興味を感ずる所ではない。○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○。○○○○○○○○○
○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○。○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○。
○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○。○○○○○○
○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○
○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○。○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○。○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○。○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

○○○○。○○○○○○○○○○○○○○○○○○、
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○
○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○、○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○。○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○。○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○。
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○。
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○。○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○。○○○○○○○○○、○○
○○○○○○○○○○○。○○○○○○○○○○○○

○○○○、○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○。

（二）

政府は近く出兵問題の經過を公表するとの事である。併し我々は之によつて事の眞相に觸れ得るとは豫期して居ない。恐らく極めて空漠たるものであると共に、主としては政府の立場を辯解するものであらう。併し如何に巧に辯解しても　今日までの經緯は決して賞讃に値するものではない。何の方面から觀ても失態の跡は歴然として殘つて居る。而して斯かる失態を來たした所以は當局者の手腕並に見識の足らざるにもよらう。又政府首腦の決斷に乏しい點にもよらう。當局者の一人々々について個人的に責むべき點は其他少からずあらうと思ふが、併し予輩は此等すべての缺點を羅列しても、之によつて完全に今日の政府の失態を說明し盡くす事は出來ないと思ふ。何故なれば予輩の考ふる所に據れば、假令如何なる人傑が朝に立つても此種の問題については今日の政府以上に立派な解決をするといふ事は、事實恐らく餘程困難であらうと思はるゝからである。何故に斯く云ふやといふに、今日の政府は一方に於ては出兵に關し極端なる熱心を有する所の軍閥に制肘せらるる外、他の一方に於ては世界の進運に乘じて來る所の外來の勢力に大いに左右されて居るからである。此場合に於て旨く帝國の政治を料理して國運の發展を謬らざらしむるには、先づ今日の世界の大勢に通じなければならない。少くとも我國の屬して居る國際團體の底流たる時代精神、もつと押し詰めて云ふならば、英米等によつて代表せらるゝ今日の時代精神を理解しなければならない。第二には此時代精神と餘りに懸絶せる今日の軍閥一派の無謀なる政論を抑へ得なければならない。而して此兩面に於て非凡の材能を有する政治家は何處に居るか。今日の政府は聯合國と事を共にするに當つて何等の確信なく、而して國內の矯激なる暴論に左右されて、或は右して躓き、或は左して傷くの醜態を繰り返す所以である。

我國の一部に西伯利出兵の盲目的熱心家の少からざる事、而して其最も著るしき代表者が軍閥である事は公知の事實である。何故に彼等は出兵に熱中するか。彼等の表面上掲ぐる所の理由は獨墺勢力の東漸、並に之に對する帝國の自衛といふ事である。併し乍ら之に對しては事實獨墺の勢力が東洋に蔓つて居るかの疑あるのみならず、帝國の自衛の爲め之を防がうと云ふならば、一體何處まで兵隊を進めればいゝのかの困難なる問題がある。此等の點は軍の技術に關する問題であつて予輩は適切の意見を發表するを得ないが、唯若し眞に自衛の必要があるならば、何ぞ外國の思惑を顧慮するの必要があらう。此點に於て七月初旬某閣僚が、今度こそは外交調査會が反對しようが政黨が反對しようが、斷じて出兵を決行すると放言したのは最も徹底した意見であつた。然るに政友會方面から獨墺東漸の事實を否認し、大規模の出兵に猛然として反對し來るや、彼等は强いて之に爭はざるのみならず、又獨墺勢力東漸の事實問題に對してすら何等有力なる反駁を加へて居ないではないか。之れ彼等に出兵の理由に對する不動の確信無きの證據ではないか。

斯くても尙軍閥者流は出兵論の迷夢から覺めない。何故に彼等は斯くまで出兵を熱望するのであるか。或人は云ふ、我國一部の有志家が從來セミヨノフやホルワット等の反過激派に同情して居る行掛上から來るといふものもある。現にセミヨノフ軍に對しては日本義勇兵四百の應援に赴くものありといふ報道もあつたし又義勇兵募集の結果勞働者の欠乏を來たしたといふ所から、滿鐵其他在滿の大會社は義勇兵の募集に反對して居るといふやうな報道もあつた。セミヨノフ、ホルワット等にしても彼等の勢力を有して居る所以のものは、專ら一は外部からの應援と、もう一つは今にも日本からの大規模の援兵が來るといふ事を云ひ觸らして居る事によると云ふではないか。併しよく立ち入つて考へて見ると、我國の出兵論は恐らく決して此等反過激派の援助といふ事のみを考へて居るものではあるまい。彼等を援けて西伯利の秩序を回復するに成功す

れば、之れ亦露國に對して一德を施す所以になる。けれども彼等を助けて西伯利の秩序を根本的に確立し得るや否やについては、米國と英佛との間にも意見の相違があるし、又西伯利に於ける反過激派の勢力なるものゝ間にもいろ〳〵内紛があつて、更に纏まりがついて居ないではないか。現にチェック軍のお蔭によつて出來た浦鹽の西伯利政府と、哈爾賓に於てホルワットの造つた政府との間には最早和すべからざる敵意が漲つて居るやうである。斯くては出兵によつて反過激派を援けやうとした所が、何れを援けていゝのか分らない。斯くして反過激派の秩序回復の事業を應援するといふやうな名義も、亦事實西伯利に出兵を斷行せしむる適當の口實とはならない。斯くして軍閥者流の出兵論は一つ一つ其根抵の理由を失つた。智慧の無い彼等は更に他の適當なる口實を發見するに困しんだ。そこでいよ〳〵本音を吐く。○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○、○○。○。

講和の際に有力なる發言權を有ち得るといふ事は、無論必要な事であるに相違ない。此目的の爲めに今からいろ〳〵手段方法を講ずる事の必要なるは云ふ迄もない。○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○。斯る行動に出づるのは卽ち今度の戰爭の原因となつた獨逸の遣り方で、畢竟此流儀の遣り方を抑へつけようとして今度の戰爭も起つたのではないか、それに又日本が倣ふと云ふのでは、我々は之によつて諸外國から公然の、又は少くとも暗默の非難を受くることを覺悟しなければならない。けれども軍閥者流は假令非難されても之を厭はないと云ふのである。併しながら非難されても厭はないといふ立策を是認するには、今度の戰爭の最後の勝利は英米にあらず、從つて獨逸流儀の遣り方が戰後の國際關係を支配

する原則なりと豫想するか、又は假令英米が勝つても彼等の正義公論は畢竟僞善である、表面は獨逸流儀を非難して居りながら、彼等の眞實の要求と行動とは決して獨逸と異るものではない、戰前に於て然りしが如く、戰後に於ても亦然るのであらうと豫想するものでなければならない。之は今日竝びに今後の國際關係の實態に關する根本觀念の相違に歸するものであつて、玆に一々詳細の批判を加ふるの遑がないが、我等の深き確信の上に造つて居る所の立場から云へば、右の軍閥者流の國際觀ほど我國に取つて危險なものはない。○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○、餘りに露國を知らず又露國民を知らざるの暴論である。假令如何なる目的と民意と有りとするも、外國の兵隊が單獨に入つて居ると云ふ事は露國民の斷じて喜ばざる所である。ケーレンスキーも佛蘭西に於て明白に外國の單獨出兵を非難して居るではないか。要す

○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○、少くとも今後の世界には通用しない説であらう。此點に關して七月十五日の朝日新聞に見えた高橋是清男の説は頗る傾聽するに足るものがある。曰く、「○○、若し日本が講和會議の時に當り其の發言に權威あらしめんとせば、第一に世界各國より疑惑の眼を以て見られつゝある領土的野心の無き事を明にし、内には十分の實力を涵養して諸外國の輕侮を招かざるに勉むるを當然とす云々」軍閥者流の偏狹なる侵略觀に對する非難を、同じく久しく軍閥の侵略主義を助け來つた政友會領袖の口から、今日之を聽くのは多少意外の感なきにあらざるが、只若し之を今度の戰爭の與ふる精神的敎訓の感化により、日本國民が將に世界的見識に覺醒しつゝあるの端緒が先づ以て政黨界の識者階級に初まりつゝあるものと見る事が出來るなら

ば、之れ亦我國にとつて頗る慶賀すべき現象である。出兵問題に關して多年犬猿も啻ならざりし政友、憲政兩黨の領袖の態度が著しく接近したと云ふ事實も、亦之を偶然と云ふ事が出來ない。斯くして若し我國の二大政黨と官僚軍閥の一派と、戰後帝國の經營と云ふ大問題に關し、各々其觀る所をとつて相對抗すると云ふ形勢を導き來るを得ば、之れ亦どれ丈け我國の幸福になるか分らない。

されぱと云つて時勢の進運は爭はれない、所謂官僚軍閥の士と雖も一から十まで皆其固陋の見を固執するものではない。彼等は意識的に飽まで固陋の見地に立つも、無意識的には矢張り時勢の兒として不平を並べつゝ時勢に率ゐられて行く。恰かも生意氣な小僧が時勢と云ふ怖い叔父さんに睨められては、蔭でこそブツブツ云へ、面と向つては手も足も出ないと云ふ狀態にある。只我々は生意氣な小僧の蔭口が、其局部に於て今日尚人を誤り、國を誤る事頗る多きものあるを思ふが故に、官僚軍閥の一流の意見を政治の圏外に驅逐するを以て今日の急務と認むるものである。

(三)

予輩は前項に於て日本の政界に動もすれば盲目的出兵論の勃興する所以を說いた。而して日本の西伯利出兵は獨り我國の熱望であるのみならず、從來英佛側の熱望でもあつた。而かも此双方の熱望の間には、其目的に於て全然合致せる所なしと見られて居つた。然らば予輩は次に英佛は何の爲めに日本の出兵を要求するやを觀なければならない。

日本出兵論の本元は佛蘭西である。併し佛蘭西の初めて唱へたのは歐洲出兵論であつた。此事は今玆に問題としない。只露西亞革命後英も佛も熱心に西伯利の出兵を日本に乞ふと云ふ態度を著しくして來たと云ふ事を云ふに止めよう。

西伯利出兵は英佛伊等即ち西歐羅巴に於て獨逸と對戰しつゝある諸國の希望する所であり、現に六月中旬には、ヴエルサイユに於ける軍事會議の結果として、或種の申込をなし來つた事は吾人の耳目に新たなる所

である。此時日本は米國の意嚮は如何と反問したとも云はれ、又英佛側の望むが如き意味の出兵には應ずる事が出來ないと云うて要求を拒んだとも云はるゝ。當時我國の新聞では、久しい間の懸案であつた出兵問題は、此拒絶の回答を以て打切りとなつたと唱へたのであつた。併し日本政府は之を以て全然出兵を斷念したのではない。唯英佛の希望するが如き意味の出兵に意がないと云ふ迄である。何故なれば日本の出兵の範圍は精々東部西伯利であつて、即ち貝加拉湖邊を境とし東部に於て先づ獨立の共和國を建てしめ、將來大露聯邦國家の成立の場合に其一分子たらしめんとするにあり。其以外の地域は直接日本と利害の交渉のない方面として、新たに特殊の關係を開くを欲しないと云ふのである。然るに英佛の希望は先づ西伯利を基點として穩健なる中央權力を確立し、行々は露西亞全體に穩和派の勢力を打建てんとするので、其目的を投くる爲めに日本の出兵を要求するのである。從つて出兵の範圍も日本自身の希望するが如く狹いものではない。右の目的を達するまでは何處まで行くか分らない。萬一此爲めに獨墺側が兵を入れて中央權力の確立を妨ぐるが如き方針に出でんか、日本は即ち之と直接して戰を交へる丈けの覺悟がなければならない。之れ丈けの大規模の出兵はよく日本の堪え得る所なりや否やが問題となる。一說に據れば、英佛側が烏拉爾邊迄の出兵を要求したと云ふ事であるけれども、それでも日本に執つては餘りに大きな負擔である。此處に英佛側と日本との出兵の趣意に於て齟齬があつた。故に英佛の要求を日本が拒絶したからと云つて、日本の出兵論が全然打切となつた譯ではない。

(四)

西伯利出兵に對する米國從來の立場は如何。米國は從來全露に於ける過激派の勢力を認め、且つ之に同情して居つたと云はれて居る。少くとも彼は人爲的に之を撲滅せんとする種類の内外各種の運動には贊同せざる見解に立つて居つた事は疑ない。之れ彼が從來總ての西伯利出兵論に贊成せずと云はれて居つた所以であ

らう。○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○。○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○。

今日まで顯れた多くの說明は之を米國態度の豹變と見るのが多いやうだ。而して何が米國をして在來の方針を拋たしめたかの解釋に就いては、或は過激派の前途に見切りをつけたと云ふ者もあり、或は英佛側の切なる希望を容れたと見る者もあり、或は西伯利に於ける利權の扶植に急いだと說く者もあれば、又此種の輿論に動かされた結果だと說く者もある。併しながら予輩の觀る所によれば、此等の說明は從來の米國當局の決心の堅かりしと對照して其堅い決心を翻さしむる丈けの有力の動因と考ふる事は出來ない。此位の事で考が變る位なら、米國は何で今日まで殊更らに英佛諸國と步調を一にする事を拒んで居つたらう。且つ又最近に於ける米國言論界の趨勢に察するも、其對露觀念に格別の變化を來たしたと見るべき何等の證跡がない。是に於て予輩は露西亞に對する米國の考は、昨今に至つて急に變つては居ないと斷定しなければならない。然らば此處に問題が起る。此斷定と米國が突如出兵を提議して來た事と、如何にして調和する事が出來るか。

併しよく考へて見ると、チエック民族を援けると云ふ事夫れ自身は、元來米國の主張と矛盾するものではない。何故なれば米國は參戰の當初から、民族自由の原則に立つて居る。然らばチエック人が同族の獨立の爲めにするあらゆる運動には、切なる同情を寄せて居るべき筈である。況んやチエック族は敵國に於て多年壓迫せられて居つた民族なるに於ておや。米國が主義としてチエック援助に傾くのは、何等怪むを須ゐない。且つ又米國内政上の必要から云つても、チエック援助を宣言するのは極めて策の得たるものである。米國内にはチエック人其他各方面のスラヴ人の來住して居る者、又更に進んで歸化して居る者も少くない。當局者が國論を統一して擧國一致歐洲の大戰に民心を緊張せ

しめんとせば、又此等スラヴ諸族の歡心をも繋がなければならない。之れ最近同國々務卿ランシングが頻りにスラヴ各種族の獨立自由を高調する所以である。故に此際極東に於けるチェック人の運動を英佛諸國が之に深切なる同情を寄せて居るに拘らず、米國獨り傍觀の態度を取らねばならぬと云ふ事は、他に斯くせざるべからざる特別の必要があつたとは云へ、米國當局としては、如何にも殘念な事であつたらう。故に此所謂特別なる事情に多少の斟酌を加ふるの餘地があるならば、米國も亦來つてチェック援助に協力すべきは當然の順序である。我々は先づチェック族と米國との此本來の關係を念頭に置かなければならない。

然らば米國が此本來の關係に背き、進んでチェックを助くる能はざりしは如何なる理由によるか。曰く、之れ米國の豫ての方針たる對露政策と相背き、換言すればチェックを助くる事の結果露國過激派の勢力と衝突するの怖があつたからである。蓋しチェックは初め英佛側若くは露國の反過激派の勢力から利用された。

少くとも之と結托した。斯して彼は西伯利に於て過激派とは兩立すべからざる關係に立つた。之れが實に米國をして對チェック問題に大いに苦心せしめた所以である。併しながらチェック人の眞の目的は、過激派の討伐にあるのではない。過激派を討伐して反對諸勢力の下に西伯利の秩序を回復すると云ふ事は、固より彼等の同情する聯合與國の共同利益にはなるだらうけれども、彼等の直接に興味を感ずる問題ではない。彼等の目的は同族を糾合し早く西部戰場に走つて、對獨戰爭に參加せんことである。唯此目的を達するが爲めに英佛側の援助を必要とした。此必要が彼等が過激派と衝突せねばならなかつたと云ふ事實の結果でもあり、又原因でもあつた所以は併次に說かう。要するに彼等は英佛側に利用せられた。けれども斯くして何時までも其利用する所となつて居るのは、彼等の本來希望する所ではない。彼等は屢々宣言した、我々は一日も早く歐洲戰場に走りたい、何時までも東部西伯利の警察隊を以て甘んずることは出來ないと。而して彼等は其初

め浦鹽に於ける豐富なる物資の供給を受け、同族を集めて西行せん事を欲したのであるが、其事の事實不可能なるを見るや、一轉して同族を浦鹽に集め、海路米國を經て歐洲に趣かんと計畫するに至つた。先般日本を通過したマサリツク博士は恐らく此計畫を抱いて米國に活動して居る者であらう。米國が對チエツク方針に一新生面を開いたのも、或は彼の運動の結果かも知れない。要するに今やチエツク人の目的は同族を浦鹽より歐洲に送らんとするにある。之れ即ち彼等の民族の自由の爲に戰ひ、又聯合與國共同の目的の爲めに戰ふの決心を明かにするものである斯くの如くなる以上は、米國の態度も自ら變らざるを得ないではないか。何故なれば、チエツク人は何時までも東部西伯利を彷徨うて過激派と對抗して居ればこそ、米國は双方の間に板挾みになつて困るのである。けれども早晩西伯利を去ると云ふ事であれば、何等曖昧なる態度を執るの必要がないからである。

斯くてもまだ問題は一つ殘る。米國が過激派を苦しむる結果の生ずるを避けつゝ、チエツク人を援助するといふ事は事實可能なりや否やと云ふ事である。何となればチエツク人は現に過激派と衝突して居る。而してチエツク人應援の目的を以て浦鹽に出兵するといふのも畢りチエツク人が過激派と戰爭をしに行くのに其後顧の憂なからしむるを目的とするものである。然らば矢張りチエツク軍を助けるといふ事は、過激派を虐めるといふ事に事實ならざるを得ないではないか。成程此說には一理ある、併し我々の能く注意しなければならぬ事は、過激派とチエツク人とはもと何の爲めに衝突したかといふ點である。チエツク人は決して我國の一部の政客が說くが如く、過激派の思想其物を敵として立つた主義の爭ではない。過激派であらうが反過激派であらうが、チエツク人の民族獨立の希望からは何の關係も無い。唯彼等が同族を糾合して纏つた一個の勢力として、歐洲戰場に出懸けて行かうといふ計畫を、過激派が極力妨害するが故に遂に巳むなく之に反抗せねばならなかつたのである。然らば過激派は何故

にチエック人の計畫を極力妨害したかといふに、之れ赤主義の爭でもなければ、又一部の半可通が尤もらしく說くが如く、獨墺俘虜の指嗾に出づるものでもない。チエック人が獨墺と不倶戴天の敵對關係にあるが故に彼等の計畫の阻止は獨墺俘虜の指嗾に出づるものであらうと云ふのは淺薄なる俗解である。過激派の中にも丸で人物が無いではない。一から十まで外人の說に聽くと見るのは誤りである。然らば過激派が何故にチエック人の計畫を妨げるかと云ふに、之れ畢竟彼等の計畫の成就は、取りも直さず露國內に於いて獨墺に對抗する一大勢力の確立であり、從て又過激派の絕對平和論に慊らざる露國穩健黨の擡頭を誘致する機會となるからである。斯くの如き心配はチエック人の勢力が西の方に確立した場合でも、又東の方に確立した場合でも同樣である。故に過激派がさらでも動もすれば起らんとする反對勢力の勃起を制し、自派の勢力を少しでも安全ならしめんが爲めには、チエック人の團結を妨げなければならない。否、諸方面に散在せしめて而かも之を無力なるものにせなければならない。之れ過激派が歐露竝びに中部西伯利に於て、チエック族に武裝解除を逼り、又は浦鹽に於けるチッエク族のイルクック迄の鐵道管理權の要求を一言の下に拒絕した所以である。して見れば、チエック人と過激派との衝突は、畢竟は各々自己の利害の爭である。唯之に外國の勢力や反過激派の勢力が參加したが爲めに、稍々政治的色彩を交へたに過ぎない。故に若しチエエク族が初めから他の勢力の利用する所とならず、一旦浦鹽に來合すればどん／＼海を渡つて西歐に赴くといふ事が明白であれば過激派は恐らくチエック人の計畫を妨害しないだらう。又過激派もチエック人の速かに海路浦鹽を撤退せん事を希望して居る事は、七月央の職工組合の決議にも現はれて居る。唯從來の行掛上彼等は餘りに深く過激派反對の諸勢力と結托して居つたが爲めに、過激派はチエック人の此上西伯利東海岸に集合する事を快しとせなかつた。況んや英佛は動もすればチエックを利用せんとする態度を示し、殊に立憲民主黨其他の反過

激派は暫くチエック族の足を停めて、過激派對伐の目的に利用し得んことを聯合諸國に運動して居つたに於てをや。故にチエックの背後に英佛が居ると云ふのでは、過激派に於て安心が出來ない。けれども今や初めから過激派に同情と好感とを有つて居つた米國が、チエック族の背後に立つといふ事になつたら、或は過激派をして幾分安心せしむることが出來ないとも限らない。尤も浦鹽に於けるチエック族の西進は、從來の行掛上過激派との多少の衝突を免かれないかも知れない。併し乍ら此衝突を甚だしからしむると、或は著るしく緩和するとの鍵は、今や米國の手に握られて居ると云つて可い。故に過激派とチエック族との双方に好意を表するといふ米國の政策は可能なりや否やと云ふのが問題で無くして、米國が此關係を如何樣に捌いて行くかといふ事が、我々の着眼すべき問題なのである。

米國がチエック援助と過激派同情との二つの目的を同時に達せんことを否少くとも一方の目的の爲めに他方の目的を傷けざらんとすることに如何に熱心であるかは、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○。○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○「○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○」○○○○○○○○○○○○。○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○。換言すれば、西伯利の秩序恢復の問題は全然之を露國民の內事となし、外部より干渉すべからずとの主義をば依然として之を嚴守せんとするものたることと明白である。況んや秩序恢復の名の許に過激派を敵に廻すと云ふか如きは彼等の全然腦中におかざる所である。

予は米國出兵提議の眞意を以上の如く解するものである。共同宣言の提議に對して我は如何なる態度を執るべきやを決するに當りては先づ右の點に徹底的了解をなすことが必要である。○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○。併し何處までも米國と協議の上歩調を一にすることを力むると云ふからには少くとも精神的に米國の意向に制せらるゝことは或は免れないかも知れぬ。此點に關し我が當事者は果して如何なる用意があるだらうか。

（五）

日本の行動が米國の意思に制せらるゝと云ふと事毎に憤慨する人がある。併し少くとも今度の問題について米國の得手勝手を憤るのは間違つて居る。米國が先には出兵に反對し、今は改めて出兵を提議し來る此の事實を彼の得手勝手と見るのは、我の思想幼稚にして彼の眞意を忖度し得ざるの結果である。予輩より觀れば米國の態度には前後一貫して何等變改せるものを認めない。彼を識らざる者より觀れば＝又は我の狹き了見を以て他人の腹を探り得たりと自負する者より見れば＝他の一貫せる主義より割り出せる臨機應變の處置も全然其意表に出づるものゝ如く見ゆる場合が多い。而かも影でこそ米國が暴慢だの得手勝手だのと大言壯語すれ、自ら自分の言動に確信がないから、結局彼の主張に引き摺られて行くではな○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○。惟ふに彼等は始め米國の提議に接するや、直に我を以て彼を推し、米も亦我と同じく西伯利に活動することに方針を改めたりと有頂天になつたものであらう。而して其後彼の意必しも我の如くならざるを見て意外の感をなし、今尚其眞意を捕捉し得ざるに困んで居るやうである。眞意が分らないから如何して宜いのやら判らない。斯くて我が外交は事毎に後手に廻る一方である。我國の單獨の

責任に歸すべき東亞の問題につきてすら、我國は嘗て先手を打つていみじき成功を收めた例があるか。

假令米國に先んぜられても、我にして若し米國の眞意を了解し、又米國の主持するが如き方針を取ることの眞の得失を識認して居つたなら、事後の活躍に於て我から先手を打つことは決して困難ではなかつたと思ふ。蓋し予輩の觀る所を以てすれば、此際東亞の問題に關し米國の主持するが如き方策を執ることは最も賢明なるやり方であると考ふるからである。斯く論定する所以の根據は次の二點に在る。浦鹽派兵は今日絶對に必要である。假令チエック族援助と云ふ問題が起らなくとも同地に貯藏せらるゝ莫大なる軍需品を過激派の手より保護することは聯合軍全體にとりて極めて必要である。之は必しも過激派を敵視しての上の話にはない。過激派の手に渡つては之等の物資が敵國の用に供せられずと云ふことが保證されぬからである。七月中旬に至り英が急遽香港の駐兵を割き佛亦印度支那より若干兵員を割きて共に浦鹽に送らんとすと云ふも畢竟この爲めであらう。此點から云へば今日を機として更に浦港の安全の爲めに多少の出兵をなすと云ふことは決して無用のことではない。(第二)に吾人は今日の場合浦港派兵以上に深入りすることは極めて愼むべきことに屬する。尤も今度日本の決行せんとする鐵道沿線の派兵位は大したこともあるまいが、夫以上西伯利の内部に大兵を送ると云ふことになれば、其結果露國民其者と衝突するに至るの不祥事を發生せずとも限らない之を避けんとする以上吾人は西伯利の於ける露國民の中心勢力と常に連絡を取ることを怠つてはならない。然るに今日何處に確乎たる基礎を有する中心勢力があるか。〇〇。〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。例のセミヨーノフは未だ孤立して居る。浦鹽の西伯利政府と哈爾賓の極東政府との反目の如きは支那の革命史に觀るが如き醜狀の暴露ではないか。故に吾人は我國の出兵論が今

日以上に歩を進むることは決して策の得たるものでないと確信する。西伯利に於ける形勢の今後の推移が日本の此上の出兵を要求するに至らざる以上、一部の盲目的侵略論者と共に百尺竿頭更に一歩を進むることを政府に迫るのは、識らずして日本將來の國際的地位を非常の危地に墜すものなることを知らなければならぬ。不幸にして我國の政界には案外に此種の盲目論の多いのは悲むべきことである。敵を知り已を知るは今日に於ても對外交渉の秘訣である。敵を知り已を知りて尚且大勢の歸趨を察するの明あらば、よし第一歩に於て米國に先んぜられても第二歩以下の行動に於て日本は優に東亞問題の指導者たるを得べき筈であつた。予輩は今度の出兵問題の始末についても、また歷代當局に共通なる帝國外交の一失態を發見せるを悲むものである。（七月二十日）

理想政治及び現實政治の二大勢力の衝突

大山郁夫

政治學者は屢々國家政治をその目的と手段との距離の立場より眺めて、之を理想政治（イデアールポリチック）と現實政治（レアールポリチック）との二大綱に分ち、或は尙ほ此外に空想政治（ファンタスターポリチック）の一項目を設けて之を三大綱に分つものがある。彼等の說く所に從へば、理想政治とは、或る特定の國家の現在置かれたる位置及びその內部の事情、並にその環境の形勢等に頓着なく、當該國家が終局に於て必ず到着しなければならないと考へて居る目標に向つて政策を定むるものである。夫の正義人道の實現とか、文化生活の向上とか、政治的、產業的、及び社會的機會均等主義の完成とかを政策の骨子とするものは、皆是に屬するのである。之に反して現實政治とは、當該國家の存立に關す

る當面の必要を充たすことに向つて政策を定むるものであつて、之がためには、當該國家の現在の位置、及びその內部の一切の事情、並にその周圍の諸國家の形勢等を計量し、それ等の總てを打算の基礎として國家的行動の方針を定めねばならぬものである。現代に於ける各國家の政府及び議會の時間と勞力との大部分を占領して居る軍備、財政、外交等に關する諸問題は、大抵皆此意味に於ける現實政治に屬するものである。併し理想政治及び現實政治を右の如く解釋する時は、兩者の差異は性質上の差異ではなくして、唯程度上の差異に止まるものであらねばならぬ。今日我等が現實と看做すものも、昨日の我等に取つては、高嶺の花にも等しき理想であつたものかも知れないし、又今日我等が前途遼遠と考へて居る理想も、軈て明日は生々しき現實となつてその姿を我等の前に現はすかも知れない。理想といふものは、要するに我等が終局に於てその實現を豫期して居る所のものであつて、我等の實行と何等の關係のないものは、それは空想であらねばならぬ。茲まで說いて來れば、空想政治の意義が自然に明瞭になつて來る筈である。即ち當該國家の現在の實狀及び實行とは何等の關係もなく、只譯もなく將來は斯くあらねばならぬとの主張の下に、黃金時代の架空的設計と言つた樣なものを提案するのが、詰まりそれである。

　けれども此點に於ても注意しなければならないことは、普通世人に依つて空想政治と呼ばれて居る所のものも、之を仔細に吟味すれば、全く時代の現實相と無關係などころでなく、實は時弊を矯正せんがために立案せられたものが少くないことゝ、今一つは、或る時代に於て空想政治らしく見える所のものが、他の時代には漸次に理想政治乃至現實政治に見えて來ることの少くないことである。茲に一例を擧げて見れば、夫の有名なるサー・トマス・モアーの著はした「ユトーピア」の如きものは、全然作者がその偉大なる空想の翼に駕御して、心を無邊際の虛空に馳せて得來つたものゝ樣に見えるが、その實それは彼が彼の時代――即ちヘン

リー八世の御宇の下に於ける腐爛せる社會狀態を救濟せんがために立てた經國策であつて、此立場より作者の時代を背景として「ユートーピア」一卷を通讀すれば、その一言一句、孰れも皆決して當時の現實生活と沒交渉に點下せられたものでないことを發見することが出來るのである。それにしても、如何にモアーが彼の眼前に展開せられたる時弊を矯正する目的で描き出だしたものにもせよ、その描き出だした理想の社會は、當時の人々の立場より見れば、その書名の指示するが如く、儘に烏有郷（ユートーピア）の如く感じられたものであらうとは、容易に推斷することが出來るのである。けれども現代に棲息する我等が、モアーの理想の社會に在る樣なことを通俗語に書き改めて、之を世人に示したとすれば、その中の多くの事柄は極めて當然の事として受容れられるに相違ないであらう。蓋しモアーの時代に於て空想の樣に思はれた事の多くが、今日では最早空想とは思はれなくなつて、現代の各開明國に於ける社會政策、刑事政策、都市政策、乃至、國家政策上の理想若しくは現實となつて居るものも、決して少くはないのである。

斯樣に考へて來ると、空想政治と理想政治との限界も亦、甚だ怪しいものになつて來る。要するに政治を理想政治、現實政治、（乃至、空想政治）の二大綱（若しくは三大綱）に分類することが許され得るものとすれば、それは極めて嚴格に或る一定の時期を限つて、その時期に於て當該國家が用ひて居る手段と、その實現せんと企畫して居る目的との間に橫はつて居る距離を標準として之を別つべきものである。而かも此場合に於ても、右の二者（若しくは三者）の分界線は、程度上の差異に屬する他の總てのものと同じく、明確に截然と區劃し得られるものではなく、その間にはどちら附かずの地帶の漸現漸滅するものがあることは、注意して記憶せねばならぬことである。

右の解釋に據れば、理想政治といひ現實政治といふは、異れる二つのものを指すのではなく、同じものゝ異れる方面を見て言ふものである。政治は樣々の異れ

る見方に依つて、樣々の異れる定義を之に與ふることが出來るが、之をその運用の上より見て、政治とは、當該國家が現在用ひ得る手段に依つて、その現在抱懷して居る目的を到達せんことを企畫する國家的行動の過程を謂ふものである、との定義を下すことも出來るのである。而して或る特定の國家の現在の政治を、當該國家の目的の方面より見れば、それが軈て理想政治であり、その手段の方面より見れば、それが軈て現實政治であらねばならぬ。全然無目的の政治といふものは、決してあり得ない筈である。そこで目的に相應しない手段に依賴する政治は、之を拙劣政治とでも名づくべく、また手段に相應しない目的を追求する政治は、之を無謀政治とでも稱すべきである。斯の如き無謀政治をこそ、最も適當なる意味に於ける空想政治と呼ばなければならない筈であるに拘はらず、事實上此種の政治が却て常に現實政治の名を以て呼ばるゝ傾向を示して居るのは、不思議といへば不思議である。これは政治上に於て殊に頻繁に行はるゝ名稱錯誤(ミスノーマー)の一例であるが、その場合が餘りに普通なので、大抵の人々は格別の矛盾を感じないで之を看過して居る。けれどもよく考へて見ると、それこそ實に矛盾の甚だしきものである。

現實政治——Realpolitik——といふ語を最も盛に愛用して居るものは、世界各國民の間に在つて、恐らく獨逸に於ける軍閥系統の政治家及び政論家を推して隨一とするのが適當であらう。前に述べた如く現實政治を以て、國家的存立上の現前の必要を充たす國家的行動と解釋するならば、斯の如き術語を特別に設ける必要の有無は別問題として、その解釋に對しては、我等に於て別に異論のないことである。けれども獨逸に於ける軍閥系統の政治家及び政論家の多くは此術語の解釋を自由且つ無雜作に變形して、之を彼等の侵略的軍國主義の別名として用ひて居るのである。彼等に取つては、國際的正義とか、國際的協力とか、民族自決主義とか、外交公開主義とか言つた樣なものは、齊し

く皆空想政治(ファンタヂー・ポリティック)、乃至、感傷的政治(センチメンタル・ポリティック)の範疇に屬するものである。彼等の所謂「自國の存立上の必要」なるものは、遙にその本來の語義を逸脱して、領土擴張の手段としての侵略及び征服までを包含して居るものであつて、それは丁度、夫の「最良の防禦は攻撃に在り」といふ慣用句と、同一の論法より出發して居るものである。英國が今日地球の表面に於て太陽の沒することを知らざる版圖を誇つて居る所以のものは、歐洲大陸の諸國が尙ほ兵馬倥偬の間に奔命に疲れて居る虛隙に乘じて、世界の果てまで切取强盜に出掛けた御蔭である。その英國が昨日歩んだと同じ道を、何故他國が追隨してはならぬといふ道理があらうか、とは彼等の思想を支配する所の力强い信條である。英國の大をなした原因を一に切取强盜的行爲に歸して仕舞ふことは、英國人を以て無理想の店頭番人式の國民と見做して仕舞ふことゝ一般、獨逸人一流の甚だしき偏見我執に基づく解釋たるを失はないけれども、假りにそれが眞實であるにした所で、それを尤めて自らその轍に倣ふてとは最高の文化(クルツール)を誇る國民にも似合はしからぬことであるが、獨逸の軍閥を代表する論客が得意氣に高唱し、俗衆が盛に共調して居る現實政治なるものは、事實上斯の如き低劣なる見地に立つて居るのである。曾て宗教改革の第一聲を擧げた國、ロマンチシズムの搖籃たりし國、盛名ある哲學者の淵叢たりし國としての獨逸を憧憬して居る者に取つては、これは誠に悲しむべき事であるに相違ない。彼等の意味に於ける現實政治は、通俗的意義に於けるマキアヴエリズムと何の擇ぶ所がなく武力是れ權利といふ考へが、その根柢をなして居るのである。「條約は一片の紙屑なり」といふ前宰相の放言の如きは、それより來る當然の推論であつて、他民族の國家的存立を犧牲にしても、太陽の輝く所(der Platz im Sonne)に新領土を打建てんとするのも、バルカン半島を席卷して東方に殺到(Drang nach Osten)せんとするのも、皆右の意味に於ける現實政治が產んだ政策である。今日獨逸國民の所謂世界(ヴエルト)政策(ポリチツク)が、幾分でも斯の如き現實政治を基調として居る

ものであるとすれば、他の諸國民が之を以て世界の禍亂の發動機として畏怖し厭忌するのも、また已むを得ないことであると謂はねばならぬ。

近着のカール・イエンチュ著「世界戰爭と獨逸國民の將來」（Carl Jentsch. Der Weltkrieg und die Zukunft des deutschen Volkes. Berlin 1915）を讀めば、到る處に右の意味に於ける現實政治の說明を見ることが出來る。今姑らくその中の二三を引用することを許して貰ひたい。同書の開卷第一頁は、「我等獨逸人は、決して飽滿せる國民ではない。我國に於ける各個の人は、身邊の轉た狹ばめられたるを感じ、食物と活動との範圍の擴張を求めんと絕叫して居る」といふ句を以て始まつて居るが、それだけのことなれば、之は現前の活事實を赤裸々に述べて居るものとして、我等は寧ろその眞率を愛する氣にもなれる。けれども著者が更に進んで、その第七章に於て、「各個の生の力に充ちた國家は曰ふ。將來過度に强大とならんず勢を示せる隣國、若しくは我國が生存のために必要とする何物をか所有する隣國は、我等の自然の敵である」と言ひ、尙ほその第九章に於て、「一國民の政治的勢力は、頭數（人口）と國民力と領土とより出でたる產物である。今日の世界に於ける第一流の列强の一たるに相應はしき頭數と體力、精神力、道德力、及び文化力とは、我等獨逸人は之を所有して居る。唯一つ我等に缺けて居る所のものは、廣袤と位置と境界との點に於て申分のない領土である。斯の如き領土の獲得は、一個の必然的生活過程であり、一個の生物的必要である」（圈點は本文の筆者が施したもの）と說くに至つては、眞率とか正直とかの程度を通り越して、慥に現代の國際的社會生活上に於ける異端思想と謂ふべきである。獨逸をして今日その隷屬國たる墺匈國、勃牙利及び土耳古を率ゐて世界を敵とする運命に陷らしめたる今次の大戰亂は、斯の如き意味に於ける現實政治の哲學に胚胎したものであることは、敢てリヒノフスキー公の追懷錄を俟つまでもなく、世界に知れ渡つて居たことであるが、公の

追懐錄は之に對して一個の權威ある確證を與へたものである。斯の如き現實政治に對立して居るものは、聯合側の自由、正義、人道、及び民衆主義を標榜して居る所謂理想政治である。

聯合側諸國の行動を理想政治と呼ぶにも、餘程その意味に制限を加へる必要がある。聯合側諸國が國際間の自由、正義、人道、及び民衆主義に立脚して、民族自決主義、國際協力主義、非併合非賠償の平和、軍國主義の絶滅等の如きものを、その戰爭目的として明認若しくは默認して居る所に、理想味の勝つたものがあるけれども、併しその理想味は決して全然現實の事象と沒交渉なるものではないのである。聯合軍は單に理想を武器として戰つて居るものでないことは、改めて言ふまでもない。理想政治を標榜する聯合軍も、現實政治を高唱する獨墺軍と同じく、事實上、人力、財力、機械力を盡くして戰つて居る。此點に於ては兩者の間に何等の差異がないのである。加之、聯合軍に依つて理想として仰がれて居るものにしても、それが直に士氣を鼓舞し、人心を激勵し、國民的犧牲を徴發する效果があれば、その効果のある範圍內に於て、現實の力を構成して居るものである。聯合側の標榜する正義、自由、人道、及び民衆主義の如きものは、一種の表看板であり、木遣音頭であるに過ぎぬといふものがあるが、これは斯の如き理想が歐米に於ける我友邦諸國民間に於ける活きたる力である事實を知らざる者の妄言に外ならぬものである。けれども假りに此種の論者の言の如く、縱しそれが一片の表看板として、將又、一場の木遣音頭としてのみ有効なのに過ぎないものとしても、而かも尙ほそれが此意味で有効なる範圍內に於ては、一種の現實の力と認むべきを妨げないではないか。我等は自國の精神力を高調する連中の間に、他國の精神力に對して全然盲目なる徒輩が却て多く存在する事實を見て、甚だしき矛盾を感じずには居られない。己を知ると同時に彼を知る必要があるのは、單に兵家の秘訣のみではあるまいではないか。

更にまた、聯合側諸國が標榜する各種の理想は、或る他の一點に於ても現實と密接なる交渉がある。即ちそれは國際關係の進化の途上に於て、必然的產物として發生したものであつて、決して偶然的事變のために一夜の内に虛空のどこかより舞ひ下つた様な代物ではない。殊に民族自決主義の如きは、此道理を最も有力に例證して居るものである。言ふまでもなく民族の觀念は、近世國家の形成に伴つて發生したものであつて、今尙ほその發達の過程に在るものであるが、第十九世紀の年數の重なり行くがまにまに、國族意識が加速度の勢を以て强盛に趣いたことは、民族關係の最も複雜なる墺匈國、バルカン諸國、及びその附近一帶の諸地方の最近世史を讀んだもの丶熟知する所である。聯合側諸國の政治家が、米大統領の最も有力に强調した民族自決主義を少くも主義に於て默認して居る形があるのは、それが國際政局の進化の一面を代表する民族意識の發達に依つて激成せられたる必然的要求に合致して居ることを肯定して居るためである。この現前の大勢を認識して、尙ほも之を促進せんとするのが、聯合側の主張である。この大勢を無視し、强烈なる民族的要求を蹂躪してまでも、自國の領土慾を飽滿せしめんとするのが、中央帝國側のブレスト・リトヴスク條約以來、バルチック沿岸諸州、ウクライナ、コーカサス等の諸地方に於て實行して來つた政策である。この二つの主義の孰れが勝つかは未來の歷史が解決する問題であるが、唯一つ今に於て確言し得られることは、聯合側の理想政治が中央帝國際の現實政治よりは、より多く現實を無視して居るものと謂ふことが出來ないといふ一事である。

最後に一言したいことは、共同扶助の精神の上に立つ社會生活の觀念が、漸次國際間の交際の上にも波及するに至り、現今に於ては一種の國際的社會生活ともいふべきものが、不完全ながらも形成せられる様になつた事である。無論個人を單位とする普通の社會生活の上に於ても別に自然的若しくは不自然的故障の存在

しない場合に於ては、優秀なる個人が優勝の地位を占め、劣弱なる個人が低劣の地位を占める傾向を呈することを免かれないが(此傾向は自然的なものであり、而してそれが故障なく現はれることは望ましきことである)、同時に一般人の暗默の合意に依つて、所謂强者の義務なる觀念を生ずる傾向があつて、之に依つて社會生活上の均衡が維持せられ、萬一暴力に依つて此均衡を破壞せんと企つるものがある時は、見えざる社會力に依つて支持せらるゝ權力なるものが早晩發動して、その上に或る制裁を加へることになつ居る。國際的社會生活の機構は、現今に在つては無論それ程完全に發達して居ないことは事實であるけれども、それにしても國際的協力は、聯合側及び中央帝國側の各部に於て、可なりの程度に於て行はれて居ることは、今更細說するまでもないことである。聯合軍側の各國の行動の或る部分が、共同行動とか、共同策應とかの名義の下に於て、多少の程度に於て不純分子を包含しての事であるが、聯合側全體の共同目的の支配を受けて居ることは事實である。現に我國の艦隊の地中海派遣や、陸戰隊烏港上陸や、今回のチエック族援助軍の烏港方面への出動の如きも、皆此意味に於て解釋すべきもの、若しくは解釋せられて居るものである。此關係は歐洲に於ける實戰場に近づくに從つて益す多さ、廣さ、深さを加へ、西部戰線に於ける英米佛軍隊が、佛國の最高司令部に依つて統轄せられて居る事實に於て、其最高潮に達して居るのである。斯の如き情態の下に於て、國際同盟(League of Nations)の提案が益す世人の注意を喚起するに至つたのは、考へて見れば無理もないことである。素よりグレー子爵の發議に係るそれの如き、獨逸を加入しての國際同盟の成立は、今の所どう見ても一片の空想に過ぎない樣であるけれども、同時に聯合側諸國民間に於ける一種の國際同盟は、普通に想像せられて居る程度以上に進んで居ることも亦、記憶しなければならぬ事實である。

　個人を單位とする普通の社會生活に於ては、前にも說いた如く、別に自然的若しくは不自然的障害がなけ

れば、優者が劣者を支配する地位に立つ傾向が免れ難いものであるのみならず、此傾向を妨ぐる一切の障害を撤廢することが、實に社會的機會均等主義――卽ち社會的デモクラシーの要求であつて、而して此要求は全般の社會生活の進歩のために之を是認しなければならぬものである。之と同じく、若しくは之よりも更に高き程度に於て、國際的社會生活に於ても亦、强國が常に弱國の上を越して優勝的地位を占むることは免れ難いことであるのみならず、之があるがために、强國はその地位を維持せんとし、弱國はその地位を向上せしめんとし、その間に善き意味にも惡しき意味にも競爭を惹起し、前者の場合には各國家の物質力及び文化力の向上を促進し、後者の場合には國際間の嫉視反目を激成し、その最惡の場合には戰爭を挑發して、物質力及び文化力の破壞の結果に終るのである。眞面目なる種類の國際同盟の提案は、決して此事實を無視して一切の國際的競爭を阻止し、延いて以て人類文明の一般的沈滯を醸成する結果に導くを意としないといふのではなく、唯惡しき意味に於ける競爭を絶滅若しくは減縮することを目的とし、その手段として國際仲裁々判の名に依つて示される紛爭調停機關とか、國際警察の名に依つて示さるゝ强制執行機關とかを薦め、且つ國際間の共通利害關係を一層緊密にする事に依つて、國際的社會生活上の輿論ともいふべきものゝ力を强めやうと謂ふのである。優勝劣敗の法則が隱微の間に有効に働いて居る個人單位の社會生活に於ては、强者の愛が個人の本能となり、强者の義務が輿論に依つて督勵せられ、最終には法律に依つて强行せられるがために、全般社會生活の均衡が維持せられつゝ進歩が實現せらるゝが如く、國際的社會生活に於ても亦、强國の愛が國家的本能となる途を開く樣に國際的環境を改造し、强國の義務が國際的輿論に依つて督勵せられ、最終には國際的規約に依つて强行せらる樣に準備をしやうといふのが、最も傾聽すべき種類の國際同盟の提案である。斯の如き國際同盟が實現せらるゝに至る迄には、玆では到底論述し盡くされぬ程の多くの障害があるこ

とは事實であるが、國際的政治生活の大勢が漸次その方向に移動しつゝあることは、國際的協力主義が共同行動とか、共同策應とかの名の下に、此大戰中に於て豫想外の程度にまで進んで居る事實に依つて、之を卜すべきものではあるまいか。素より各交戰國の「生か死かの問題を解決せんとして居る非常時の現象を基礎として、以てその平常時の事相を盡く類推し得べしとするは、全然當を得ざる見解であるとするも、而かも尚ほ若し此大戰が此方面に於ける何物をも指示するものでないとすれば、人類文明の前途は全然絶望すべきものであつて、各國家の頽廢は寧ろ此絶望感より醞釀せらるゝ危險があるものではあるまいか。

孰れにせよ、右の如き目的を實現せんがために、現實の惡戰苦鬪に堪へて居るものが、我等が屬して居る聯合側の理想政治であつて、自國の膨脹慾のために此目的の實現を妨害せんとして居るものが、我等の敵國たる中歐帝國側の現實政治である。我等の理想政治は、生物的必要以外に、更にもつと人間的なる國家生活の法則を認めんとし、敵國の現實政治は、生物的必要そのものを以て、直に國家生活の法則と認めて居るのである。この二大勢力の衝突に於て、果して孰れの側が終局に於て勝利の榮冠を贏ち得るかに依つて、直に現下の國際的政治生活の進化の程度が計量し得られる譯である。我等は敢て豫言者を學ぶ必要を有して居ないから、大戰の終局如何を今より占斷するには及ばない。唯我等は聯合側の一員として、希望を以て聯合側の理想政治の勝利を祈願し、且つ我等の力の及ぶ限り最良の方法を以てその氣勢を壯にすることを助くべきである。(七―七―一九)

混沌たる露國の歸着點

嘔吐最中の大男

大庭柯公

亞細亞と歐羅巴との滋味だの毒素だのを、飽滿に吸收した露西亞と云ふ大男が、今その食當りのために、死ぬか活きるかの苦み最中で、腸胃の大掃除をやつてをる。吐き出した芬蘭や波蘭を、ヨク檢分して見るとまるで消化してはゐない。たゞ大男だけに其の強い胃袋の中に、幾年かその儘に在つたばかりだ。北海道では熊が時々牧馬をさらつて行つて、餘りの美味さに碌に嚙みもせずに喰ひ了る、時を經ずにアィヌが敵討ちに熊を仕止めて、胃の腑などを剖いて見ると、つくね芋のやうになつて、馬の陽物が其まゝ出てくるといふ實話があるが、露西亞の手を離れた波蘭や芬蘭を見ると、恰度その感がある。ワルシャワの如きは一八一五年以來、百年間も露西亞の胃の腑に在りながら、少しも消化されてゐない。一八六三年の波蘭の大叛亂の如きは、消化しない此の食物が、胃の中でピク〱搖いてゐる様子が、外からでも見えた程であつたが、流石は大男の胃の腑だ、消化しないまでも、兎も角も百年持ちこたへた。

同じスラヴである波蘭人でさへ、消化し得なかつたとすれば、全然別種族の高加索人や、亞細亞系の芬蘭人や、純亞細亞種族たる土耳機斯坦人（露領中亞）などを消化し得る筈がない。是等は自體そのものが、波蘭ほど固いものでないために、別段害もなしに大男の胃中に、その儘收まつてゐたに過ぎぬ。隨て吐瀉最中の大男は、波蘭芬蘭の二固形物は吐き出したが、まだ其他のものも吐き出さずには濟むまい。萬一その儘に納むれば他日病患の因を作すであらう。

現下混沌たる露西亞の歸趨如何と言はゞ、私は一言にして一家分散と答へる。露國從來の成立の狀は、宛から寄合世帶であつた。革命が動機となつて、曾て強力で寄せ集められたものが分離するのだ、還元するのだ。猶太人とか韃靼人とかは、ジプシーなどゝ同じやうに、露西亞の寄生蟲に過ぎぬから、暫らく

問題外として、波蘭人芬蘭人は現に既に分離し、高加索人キルギス族等も、結局は必ず分離するに相違ない。

そこで殘る問題は小露西亞即ちウクライナと西伯利とが、如何に成行くであらうかと言ふ事になる。特に小露西亞今後の嚮背は、一寸豫測を難しとする。成程ウクライナは文化の系統こそ大露西亞と違ふが、併しスラヴ民族として、宗教、傳統、風習共に存立上の利害等、大露西亞と共通の點が澤山ある。ウクライナにして若し大露から分離すれば、勢ひ西隣の波蘭と聯絡を保たなければならぬ。而かも運命の頗る不定である波蘭と聯絡するよりも、寧ろ北方の大露西亞と結合してをる方が、ウクライナの爲めに利益であらう。たゞ其處には獨逸の手と意思とが、少なからずウクライナの意圖と利害とを左右する。此點からして結局は、大露西亞に背き、大露西亞から離れ、遂に黑海に面した一地方を分劃するに至るであらう。但し其の成行には多少の歲月を要する。西伯利は依然露西亞の植民地たる名義は保持し得るであらうが、事實は國際的開發地の色彩を益々强くするであらう。

以上は則ち種族的見地から地理的に見た露國今後の歸趨であるが、露西亞人の人文的價値といふことに就ては、將來は猶ほ過去の如く、其處に何等の増減もあるまいと思はれる。卽ち哲學的氣分に充ち、藝術的天分を有し、而して極めてコスモポリタン的である露西亞人は、地理的には單に大露西亞のみが其手に殘るにしても、露西亞人そのもの丶偉大なる點は、少しも損なはれずに過ぎ行くであらう。政治的には戰後に在ては、歐露が全然獨化し去ることは、如何なる力も之を排除し得ぬが、思想上からは獨墺は却て、露西亞人から其の或物を受取らねばなるまい。征服好きのロマノフ家時代が、無闇にその胃の腑に藏めた諸々の雜物を、今はロマノフ家の崩壞と共に、それ〴〵其の元へ還すのであるが、その還し了つた時に在ても、露西亞人其もの丶眞價には、決して些の増減もない。

内外より見た露國の歸着點

今井政吉

露國は約三年間戰爭繼續の揚句革命騷動となつて、革命もモウ一年有半引續いて居る。人心の不安と物資の缺乏との爲、困憊疲弊も漸く其極に達せんとしてきた。窮すれば通ずの理によつて、ソロ〳〵一道の活路が開けてもよい時である。内部より自力で道を開くか、外部より他力で鳬をつけて貰ふか、要するに方法は二つほかない。

國内の形勢は舊政府轉覆して、一時政權が議會の反政府有力團體の手に歸した。併し夫れも束の間で天下は穩和社會主義者のものとなり、動て三轉して過激社會主義者の時代となつた。つまり革命は進む所まで進んだのであつて、これから生ずる局面展開は、寧ろ形勢の逆轉と云つてもよい。所謂過激派政府も當初宣言した程の實績が擧らぬ所から、次第に人心を維ぎ得ざることゝなつて、昨今何んとなく影が薄い。元來人心墮解の機微を巧に利用して、此處まで漕ぎつけたものであるから、果して永久に持續し得るの實勢と實力とを有するや、大なる疑問と言はざるを得ぬ。けれども過激派を轉覆せんと企つる者の側には、過激派が天下を取つた時ほど、民心を煽動するに都合よき標榜が存在しない。農民に土地を分配すると言つてみても、兵士に戰爭を廢して故郷へ歸すと言つてみても、或は勞働者に共權利を增進すると誓つてみても、彼等は最早かゝる好餌に釣られぬであらう。さればと云つて、民よ祖國の爲に蹶起せよと叫んでも、愛國心の鈍い露西亞人に何の反響があらうか。ロシア魂は矢張り神秘な宗教的憧憬に過ぎぬ。所詮この魂を賴んで居ては、現實の社會整理を期待し得ない。隨つて反過激派には悲かな今の所一大勢力を振興する辭柄が捉へられぬ。こゝに至ると國民の中堅階級を有しない國は悲慘である。上も下も事實困り拔いて居るのであるが、只困つたと云ふのみで、少しも内部から局面を打破すべき勢力が現れてこない。偶々現はれて來ても互に嫉視するばかりで結局勢力は殺滅せられる。歐露の例を見ても、コルニーロフ將軍が一方に起つと、カレヂン將軍が他方に起る。又近くは西比利の例を見ても、セミヨーノフ軍の外にオルロフ軍が出來たり、西比利政府の外にホルワツト將軍を中心とする政府が生じたり、同じく反過激派でありながら、其勢力は支離滅裂と云ふ狀態でないか。

斯く見來ると過激派政府の影は薄いと云ふものゝ、又反過激派の勢力も決して充實したものでない。内部よりの自力に放任して置いたら、露國は混沌又混沌、暗憺又暗憺で、何れの日に至つて收拾せらるゝか殆ど豫想も出來ぬ。

然らば露國にとつて外部よりの他力とは何を意味するか。一は獨逸であつて二は聯合國である。自力に由る收拾の望少いとするならば、歸する所混亂せる露國の歸着點に重大な關係を持つものは、斯る外部の勢力であらねばならぬ。獨逸も聯合國も露國の嚮背如何は忽ち現戰爭の上に重大な影響を齎すものであることを知つて居る。獨逸は露國が交戰國より脫退したので漸く一息つくことが出來た。聯合國は再び露國を起たして獨逸を背部より攻めしめ、一日も早く戰爭の終結を告げたいと焦つて

居る。この意味に於て獨逸も聯合國も、露國の成行に少からぬ關係の存することが解る。

今日迄の經過に徴すると、獨逸は露國を御する上に於て、聯合國よりも遙に巧であつて、同時に又大に有利であつた。兵力のない露國內へ自國の兵を押し入れて予詰の談判であるから、言ふ所成らざるなく、欲する所達せざるはなしである。過激派を繼續せしむるも、或は又反過激派を復活せしむるも、實は獨逸の好むがまゝと云つてよい。そこに獨逸自身の都合を察すると、過激派の主張を餘り歡迎しないことは見え透いて居る。差支へない程度まで過激派の勢力を持續せしめ、其間に思ふ存分過激派を利用しやうと云ふのが、獨逸の根膽であることは疑を容れない。今現に之を實行しつゝある所で、過激派の殺活檎縱は、一に獨逸の手に握られて居る。若し聯合國が傍觀に委するならば、反過激派も聯合國の能く成すなきを知つて、當初敵視した獨逸と結び、以て過激派の殲滅に取かゝるは明である。反過激派が如何にして斯る豹變を敢てしやうぞと言ふものあらば、幵は餘り正直過ぎる觀察だ。そこになると俗に所謂背に腹はかへられぬで、此位のことは何の造作もなく現れる。獨逸も亦斯る傾向の熟するを待つて、愈々假面を脫し過激派轉覆を斷行するであらう。獨逸が之を斷行しやうと思へば、眞に韓飯前の仕事に過ぎぬ。最近のウクライナ事件を注意すると、何となく這般の消息を直覺してくる。斯くて生ずる結果は一目瞭然で戰前以上に獨逸の勢力が露國を支配するに相違ない。併しイクラ獨逸でも、舊帝政そのまゝを復活することは、まさか出來ないであらうと思ふ。又今日の如く時代思潮の變つた曉に、前の宮廷派と稱するものを表面で活躍せしむる譯にもゆくまいから、自國にとつて左程危險な思想でなく、又世界一般から認めて穩健となす所の立憲民主黨一派と相結び、前皇室中の人望ある者を迎へて、所謂立憲君主制を建てさせることゝなるのではなからうか。

從來聯合國の對露策なるものは、評しやうのない程愚劣なものであつた。積極とも消極とも方針が定らず、焦心しつゝ獨逸勢力の露國に增加するのを傍觀して居たに過ぎぬ。露國の國民が新に自由を求めんとする運動には、衷心同情を禁じ得ないと云ふやうな賞讚が、露國の現狀を解決する上に何のオーソリチーを値するか。斯る座敷藝式の對露策が、兵力を以て咽喉を扼して居る獨逸の實力主義に、いつも一步讓るのは已むを得ない。聯合國も昨今漸く目が醒めたと見えて、西比利出兵、チエツク軍援助などを始め出した。之はチエツク軍を西部戰線へ伴れて行く爲だと云ふ說もあるが、又一說には之を援助して過激

派を覆し、露國をして再び聯合國側として參戰せしむる爲だとも云ふ。兎に角之に由つて、聯合國を見限り獨逸と結托せん氣合を示した反過激派が、大に氣勢を上ぐる緣となるは明である。果して然らば露國より獨逸の勢力を驅逐し、露國をして聯合國に接近せしめ得るは疑なからう。

さて聯合國の力で露國が活路を開く場合、露國の形勢は如何と云ふに、それは必ず國民會同を召集するの順序となるに違ひない。革命政府は國民會同を催し、政體も憲法も總て國民代表者の意志で決定する主義であつたが、過激派は之を喜ばないで曖昧裡に葬つてしまつた。併し公平なる輿論は矢張り此會同で萬事決裁するのを適當と信じて居る。聯合國も亦必ず之で露國自ら萬事を決定せしむる方針となすに違ひない。斯くて輿論に訴へた結果は、芬蘭、波蘭、小露西亞等夫れ〲自治を許されて、大露西亞は獨逸に於ける普魯西の如きものとなり、漸く露西亞と云ふ形を殘すのではあるまいか。その際にも矢張り立憲君主制が現れさうに思ふ。昨年三月革命が起つて、愈々革命政府を組織せんとするに當り、立憲民主黨の首領ミリユコフ氏が、露國は暫く立憲君主制の成績を見ざるべからずと云つた其言は、平靜に歸した後の露國が歸着する點であらうと考へられる。但し此處へ落着くまでの間に、尙ほ幾多の波瀾あるべきは想像するに難しとせない。今でこそ反過激派の名に一括せらるゝ分子も、愈々過激派の勢力衰へると同時に、又幾つかに分裂して互にもみ合ふは定つて居る。而して其結果は何とならうと、新しき露西亞は古き露西亞と全く面目を異にしたものであることは確である。澎湃として生じ來つた自覺の潮流はモウ二度と古き露西亞に復歸することを許さぬであらう。

予の露國觀

八杉貞利

混沌たる露西亞の歸着點に就て卑見を述べよとのことであるが、蓋し目下これより困難なる問題は無いであらう。露西亞に於ける「ボリシエキズム」の成功も、今日から考へてこそ極めて自然な成行きであるなれ、其當時に於ては驚天動地の出來事と思はれ、平素から露西亞の研究を怠らざりし聯合國も過激派政府に對する外交の第一步を踏み損つたかの觀がある。今日にして露國の前途を豫言するの難事たるや言うまでも無いことであらう。

思うに第一第二の革命から引き續いての慘憺たる露西亞の現狀は、三世紀の間專制官僚政體の下に露西亞社會の根柢に蟠

つた多くの矛盾を解決せんがために起つた現象である。相摩すれば猛火を發すべき幾様かの元素の今迄は專制政體の鑵の中に密閉されて居たものが、一たびその鑵の撤去せられたるがために一時に爆發した狀態である。さるが故に、その中の燃え盡すべきものは燃え盡し、消散すべきものは消散して、而して殘つた分子によつて新露西亞は建設せらるべきであるが、しかもその燃燒は露西亞國內の元素の作用にのみ委せらるゝので無くして、外國からも或は火を加へ或は水を差すのであるから、從てこれ等外部からの影響をも考の內に入れねばならぬこと勿論である。新露西亞の運命は聯合國と獨逸との勝敗、語を更へて言へば目下大戰の歸着と密接の關係を有すべきもので、從て世界大戰の歸着點を豫想し得ざる限り露西亞現狀の歸着點を豫想することも不可能となるわけである。

しかしながら今暫くこれ等外部の影響を別にして、露西亞國內だけの事情に就て考うる時は、從來官僚軍閥の政治によつて辛うじて其爆發を防遏し來つた社會上の矛盾は大約之を二つに分つことが出來る。卽人種上の矛盾、社會階級上の矛盾之である。就中人種上の矛盾に就ては、舊政府の所謂汎スラヴ主義實は大露西亞主義によつて强制的に統一せられた大露西亞帝國內の諸民族、其內にも文化の進步と人口の數とを以て獨立し得る希望を有するものが、舊政府の顚覆に乘じて競ふて自治獨立の目的を達せんとし、所謂民族自決が革命後露國社會黨の第一の標語となつたのである。而して獨逸が大露西亞國崩壞の目的を以て之に助力するに及び、彼等の目的は特に容易く到達せられた。芬蘭波蘭、「ウクライナ」「リトワ」諸國皆之である。「クリミヤ」の韃靼人や高加索の諸民族や西比里亞の異人種等には中には獨立を宣言したものもあるけれど、其數に於ても文化の程度に於ても永く獨立を維持し得るものでは無いであらう。

「ウクライナ」卽小露西亞民族は元來大露西亞民族と同種族であるから、畢竟合一すべき運命を有するものゝ如く考へる人もあるけれども、之は必ずしも左樣とは言へぬのである。それは「ケーレンスキイ」を頂く穩和派が露西亞政府を組織して居つた間には、「ウクライナ」の議會卽「ラーダ」は大露西亞との融合を唱へたこともあるが、過激派の手が小露西亞にまで延びた後は之も夢となつた。若し大小露西亞人が同人種であつて言語上の差異も僅小であるから兩民族が一致して行けるというならば、何故に英米兩國民が一國を形づくらぬかという問題も起るわけであり、なほ進んでは「アリアン」民族が同人種間に今次の如き大戰を惹起せるのも不可解のことゝなるのであらう。露國帝政時代に於て社會民主黨と社會革命黨との間には社會民主

黨と立憲民主黨との間に於けるよりも遙に大なる軋轢があつたものである。しかも社會民主黨と社會革命黨との主義上の差は極めて些細であつて、却て立憲民主黨は彼等より遙に遠く離れたものであつた。之と同樣に言語々根上の一致や人種の同一は歷史的經濟的關係のため二民族間に發達した不和を融和するためには極めて弱力のものである。從て特別の機會によらざれば大小露西亞の自然的融合は容易で無いと考へる。大露西亞とはなほ緣の遠い、しかも歷史的軋轢はより以上なる波蘭や芬蘭に就ては勿論のことである。

之を要するに新露西亞に再び大なる武力が生じて從來其版圖內にありし異民族を統合し行くことの出來ぬ限り、大露西亞の分裂は免れ難き運命であらうと考へる。かくの如き意味に於て在來の露西亞中に存在した人種上の矛盾は解決さるべきものであらう。しかも尨大なる版圖を有することのみが必ずしも民族の幸福では無いから、若し大露西亞民族が統一して水入らずの鞏固なる國家を組成することが出來れば、なほ舊大露西亞の分裂は彼等のためには左まで悼むべきことでは無いのであるが、それが果して容易に行くかどうかゞ露西亞の前途に橫はる難問題であると考へる。

その理由はかやうである。芬蘭を去り、波蘭を去り、「ウクライナ」を去り、さては高加索を去り、中央亞細亞を切り離して殘つた大露西亞民族の新露西亞が純粹の大露西亞となり、大露西亞民族によつて經營さるゝためには、この中に堅固なる先覺智識階級があつて全國民を指導して行くことを必要とすべきである。然るにこの先覺階級は、前代露西亞の社會上に存して均しく其解決を革命に求めんとした社會階級戰の結果、所謂有產階級「ブルジア」として一般國民から仇敵視さるゝの運命に陷り、而して此機會を最巧に利用して露國の解體と自己勢力の普及に成功したものは、言ふまでも無く在來の大露西亞民族政府から迫害を蒙りつゝあつた猶太人である。過激派政府の首腦「トロツキイ」は更にもいはず、露國の各地例へば極東に於る過激派政府に於ても其內にいかに多數の猶太人があつて主要なる地位を占めつゝあるかを見れば思盜し半に過ぐべきである。猶太人は大露西亞民族多數の蒙昧を利用して之を自家藥籠中の物とし、而して從來自己の仇敵たりし有產智識階級の排斥に成功したものと觀察し誤り無いのである。されば今は露國に於る猶太人につき多くを述ぶべき自由を有せぬけれど、兎に角新露西亞建設の上に最大なる障害を爲すものが國家的觀念の缺乏せる彼等であること疑無いと思ふ。

さて次に在來露西亞の社會に存在した矛盾の第二たる社會

階級上の葛藤に就ては茲に多くを述ぶる迄も無いであらう。農奴制時代及其後に於ける地主階級と農民階級との間に存した踏み越へ難き深淵、又た工業發達の時代となつて新に發生し來れる有産階級と勞働階級との間に生じた裂傷は、相伴て二十世紀露西亞社會上の矛盾を形づくり、之を調和するために前政府が執つた多くの姑息手段は元より其効無く、浪曼的な氣分に滿ちた露國の智識階級は、またも國家的觀念無き猶太人のために翻弄せられて、勞兵會より延て勞農政府なる二十世紀社會史上の奇觀を現出するに到つた徑路は今更こゝに反覆するまでも無い。たゞ露國目下の問題は、一方には「ボリシエキズム」が未だ露西亞の實在に於ては實現に困難であつて、勞農政府自身の内部に於ても破綻を生じ到底永續し難き運命にあるに非るかということである。例へば、言論の絕對自由を標榜したる「ボリシエキク」が、帝政時代に倍せる異論の壓迫を行ひ、銀行を國有とし外國貿易を國有せんとして財政經濟の行きつまりを惹起し、中産階級の代表者より成るという理由のために在來の司法機關を全廢したる結果は刑事犯人の横行となり、工場を勞働者の經營の下に置かんとした結果は産業の破滅を惹起する等到處に理想と實在との矛盾を暴露して、勞農自身の側よりもかゝる政府の存在を謳歌せざらんとしつゝあるは實際と思はれる。これが一方である。又た他方よりは、未だ中産階級を建國の根據とする世界列國が零落に赴きつゝある露國の有産智識階級を助けて其復活を期しつゝあることである。この運動は勞農政府が――その故意なるか已むを得ざるに出でたるかは暫く別として――獨逸の頤使するところとなりつゝあるに因聯して、既に聯合國の對露政策上に明かに顯はれ來つて居ると思ふ。平和克復の後に於て、「ボリシエキク」政府の存在は到底列國の許容し得たるものでは無いかと思はれる。

以上述べ來りしところを概括すれば、一方露國の民族的分裂は大露西亞民族に再び絕大なる陸軍力の回復せざる限り免れ難いことであるべく、他方に有産勞農階級の爭鬪に就ては、「ボリシエキズム」の跳梁は從來の有産階級の跳梁に對する反動に外ならぬ、これが或程度の融和的歸着點を發見するの日あるべきも想像に難からぬところであらう。若しそれ他國の領土的野心のために生ずる影響に到ては茲に忖度すべき限でも無い。以上が露國の將來に對する自分の憶測である。

露西亞の歸趨

瀬沼恪三郎

露西亞の歸趨に對する私の考は、日本の一般の人とは大分異つた所があるかも知れない。然し私は彼地の過激派でない、有産階級、有識階級に屬する本當の露西亞人に接する事が多いから、其等の人々の意見や要求を參酌して、公平な見地から判斷を下し得ると思ふ。

日本では一般に過激派の思想や勢力に對して過大に視てゐる傾がある。彼等には相當の根據があつて、永く其の地位を繼續するやうに考へる者が多いが、之れは大變考へ異ひであると思ふ。將來本當の健全なる露西亞を形成するものは過激派でなく最も穩健なカデートと稱する立憲君主主義者乃至十月黨或は穩健なる社會革命黨といふやうな分子が、實際の勢力を形成して之れに代るべきものであると思ふ、本當の露西亞を代表する有産有識の階級、今日までの行政の大部分を形成してゐた官吏階級、教育ある將校の側が、過激派に對して皆激烈なる反對思想を有つてゐる事は云ふまでもない。今まで彼等過激派に過まられてゐた下民の間にも、漸く非難の聲が高めら出した兆候が現はれて來た。元來過激派は極端なる社會革命思想を以てゐて、教育のない下民の暗愚を利用し土地を分けてやるといふやうな欺瞞手段で彼等を弄絡してゐたが、何時まで經つても其約束を履行しないから、いくら馬鹿な下民でもおひ〳〵目が醒めて來て彼等に對する信頼を失つて來た。斯くの如く過激派政府は今日では已に露國上下の信望を墜してゐる。斯かる政府が將來長く其地位を保ち得る者とは考へられない。

然るに日本では過激派政府を過大視して、徒らに兵を動かして、其反感を招く事は全露西亞人の反感を招く事であると誤解して、××××に反對するものが多いのは、露國の實狀を知らないもので、國家の爲めに實に慨はしい次第である。過激派が獨墺と結托してゐる事は公知の事實である。過激派を仆して本當の露西亞人をして本當の露國を確立せしめる事は、即ち獨墺の勢力を殺ぐ所以ではあるまいか。若し日本がチエツク軍やホルワツト單に大々的援助を與へて、健全なる露西亞を再建し、獨墺の勢力を東方にて牽制する事が出來れば、露西亞其物に對しても、聯合軍の爲めにも非常に有利な結果を生ずるのは明かである。

西伯利に於ては米國が大變有利な地位を占め、其地の有産有識階級の露西亞人は皆之れに好感を有つてゐる、それに反して

彼等の間に排日思想が盛んであるやうに傳へられてゐるが、之れは明かに誤傳である。實際は彼等有識階級の人々は寧ろ之と反對の考を有つてゐる。彼等は過激派に好感を持ち過ぎる米國人に慊焉たるものがある。殊に先日浦鹽に日英の陸戰隊が上陸した時、米國も勿論他の聯合軍と一致の態度に出づるものと思つてゐたのに上陸しなかつた。そこで疑惑を起して米國の司令長官に訊ねた所、本國から未だ上陸すべき通達を受けないから何等そのやうな行動に出づる事が出來ないといふ返事があつたので、益す米國人に對する反感を高め來た。從て事を共にするに方つても、日本の力を籍らんとするのが東洋方面に在住する露國人一般の熱心に期待して居る所である。だから此際日本がもう一息具體的に援助を與へる事は、露國の爲めにも聯合軍の爲めにも非常に有利であつて、更にまた將來日露の親交を深めるといふ點からも效果のある事である。

今日の露國人の様子を見ると、反過激派的感情は非常なもので、一刻も早く過激派を仆してしまはなければならぬといふ氣勢を示して居る。彼等は過激派を仆す爲には如何なる手段如何なる方法をも選ばない。だから若し聯合軍が援助を與ふるに吝かであれば、敵方の獨墺と結び付いてまで其目的を達しやうとしてゐる。現にコルニロフ派が獨墺の力を籍りて過激派打伐の運動を起したと傳へられるのも、此間の消息を明かにして餘りあるものである。若し日本が時機を過り聯合軍が其儘にして居れば、機を見るに敏なる獨逸は反過激派と結び付いて、陽に彼等の運動を助け、陰に再び其勢力を露國内に扶植する絶好の機會を逸するものではない。さうなるともう時機は失はれて、其時にはいくら騷いでも追付かなくなる。日本が反過激派の目的を達せしめる事は、獨逸に對する一政策であり、又本當に露國をして其の行く着き處へ行き着かせる事になるのである。

△先づ大勢の趨く所を察せよ

露國より歸朝せる一實業家

未來を豫言する程困難な事はない。現に歐洲戰亂が勃發する前までは、日本人の多くはかゝる大戰爭が起るとは豫期して居なかつた。假令へ豫期して居ても、かう長延からうとは考へて居なかつた。戰爭の當初英國のキチナー元帥が、此戰爭は三年繼かるであらうと云つた時、日本人の多くは何を基礎にこんな推測を逞しうするのであるかと怪しんだ。これは一つは海外に行つて多少なりとも戰前の歐洲の狀態を見聞して來た所謂識者が、皆其の享樂的生活に眩惑して、何處にも恐ろしい大戰の突

發するやうな萠芽を見出す事が出來なかつたからだ。又戰爭は起るとしてもから長延く事を豫期し得なかつたのは、日本人の性質から推して考へた事である。元來日本人は好戰的な國民であるけれども、長い年月に亘つて倦まず戰ふといふ持久力が無い。直ぐに戰爭に飽きて無關心な態度を取りたがる。物資の供給といふ點から考へても、さう長期の戰爭に堪へる丈けの能力が無い。こんな所から日本人は戰爭に對して適確な判斷を下し得なかつた。

更に昨年春露國に革命が起つた際にも、事前に之を豫測する事が出來なかつた。之れは獨り日本人のみではなく、英、佛等の聯合國側の政治家が皆さうであつた。遉がに獨逸は機を見るに敏であつた。夙く此事のあるのを知つて、煽動したりプロパガンダに努めたりした。

こんな次第であるから、國狀を異にし、國民性を異にする我々が、十分なる事實の研究を積まないで、輕々に今から露西亞の歸着點を云々する事は出來ない。況して私の如きは極めて僅かの間しか露西亞に滯在して居なかつたので、到底何か云ふ資格は無い者である。唯私の知つてゐる二三の日本の新聞記者で彼地に派遣され、革命の起つた前後の動靜を詳さに見聞した人達は、皆過激派の思想や其有つてゐる勢力には、十分深い根據がある事、彼等は我國一部の人々が考へるより以上に、深い確乎たる地盤を露西亞民衆の間に据えてゐる事を認めて、過激派によつて崩壞された、露西亞民衆の心と接觸を失つてゐる有產有識の階級が、再び擡頭して之に代はる事の可能を信じないやうである。元來日本では過激派といふものが十分に理解されて居ない。過激派と云へば到底實現する事の出來ないやうな、矯激な空想を抱く、亂暴極まる無賴漢の寄合ひのやうに考へてゐる。然し之れは大變な誤解で彼等の中には識見もあり才幹もある人物が少くない。それに確かに一般民衆の要求に副ふやうな何物かを有つて居るに相違ない。それでなければ今日まで其地位を保ち得るものではないと思ふ。であるから此際我國に取つての急務は、徒らに過激派を突飛奇矯な空想を實現せんとする亂暴者と斷定し去る前に、十分眞面目に冷靜に國民的偏見から離れて其眞意義を理解しなければならないと思ふ。チエツク軍ホルワツト軍などの蜂起や其他多少の反過激派的運動を見て、直ちに民心の輿望を失つたものとするのは早計ではあるまいか。將來に於て其等の運動が多少有力なる勢力を形成するにしても、大勢の推移の前には何うする事も出來ないと思ふ。

故長谷川四迷著――第一巻愈出づ

縮刷 二葉亭全集

第一巻 うき雲、其面影、平凡、

名取春仙裝幀頗美本
口繪肖像入總假名附
定價金一圓八十錢
郵稅 市內八錢 地方十二錢

避暑銷夏の好讀物

創作と云はず**飜譯**と云はず一篇を成す毎に文壇を指導し警醒して新文學の勃興に多大の貢獻をなしたる二葉亭の作品は實に**文界の國寶**と稱するも溢美にあらず其光輝は年と共に愈々奕々として其生命は長へに新たなり曩に**全集**の出づるや忽ちにして飛ぶが如く坊間今や隻影を見ず市價漸く貴きを告げ江湖再刊を促すや切なり依て是を縮刷して瀟洒たる**新裝**を凝らし第一巻**創作の巻**より順次刊行して再び世に見わんとす**「文壇の警鐘」**と謳はれたる二葉亭の文學は斯くして眠れる文壇を驚起せしめ又々**新生命**を發揮するの機會を得たり幸に愛讀を賜へ

取次全國書店

發行所 京橋瀧山町 東京朝日新聞社
發賣元 東京本町 博文館

海でも山でも汽車でも舟でも
馬でも駕籠でも離せないものは？

オノト或はオリオン！

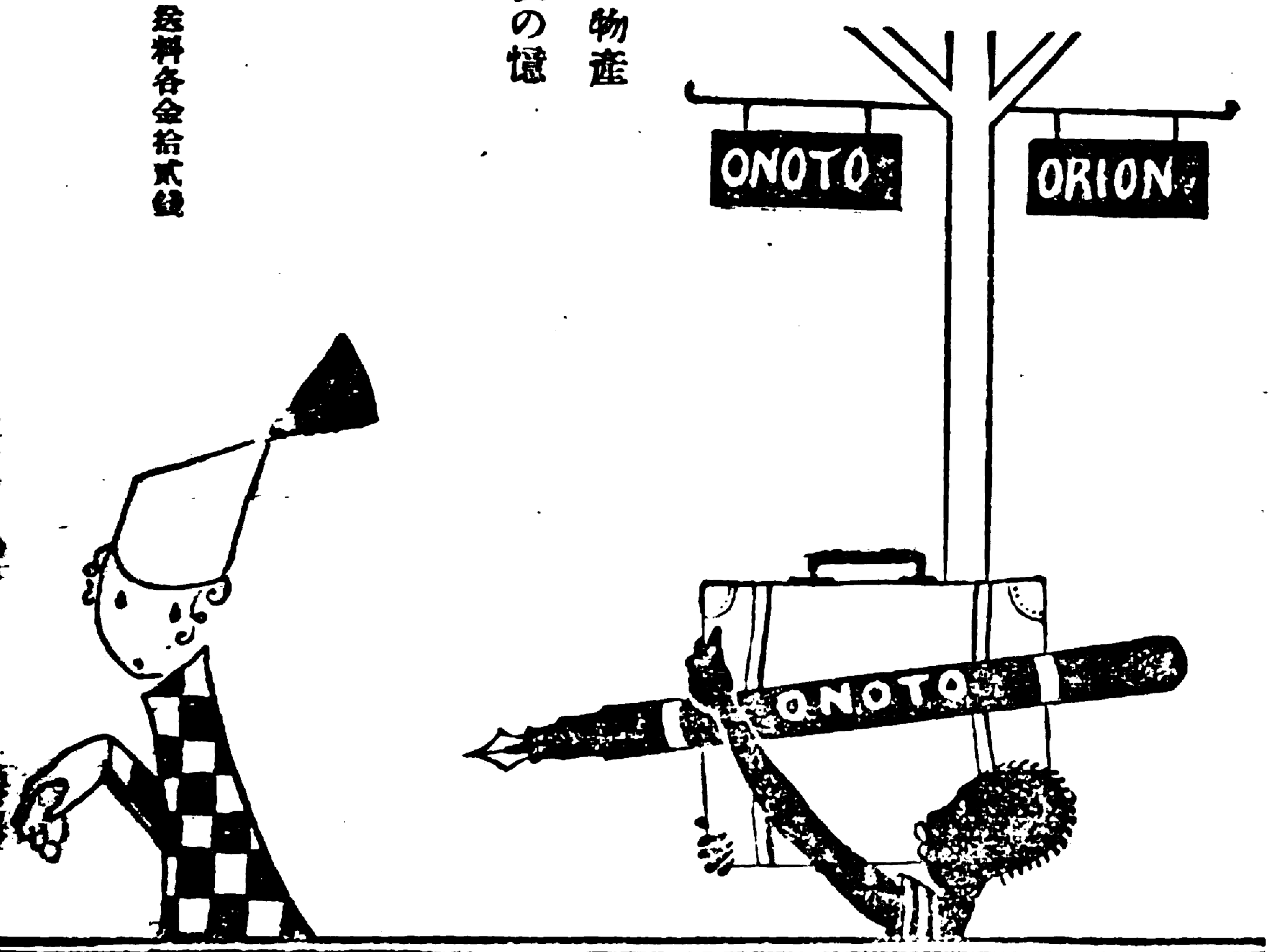
之さへあれば人里離れた山の奥でも、十里二十里を乗り出した沖でも直ぐ素ばしこく便利に通信も出來れば珍らしい物産や美くしい景色のスケッチも取れるし、後の憶出の日記を即座に附ける事も出來る。

オノト萬年筆 無飾金七圓以上 飾付金八圓

オリオン萬年筆 無飾金貳圓八拾錢

萬年筆用 **アテナ・インキ** 金参拾錢

送料各金拾貳錢



東京日本橋通
丸善株式會社

大阪心齋橋筋
京都三條通

福岡上西町
仙臺國分町

第貳拾四回決算報告（自大正六年六月一日 至大正七年五月三十一日）

一資本金　五百萬圓
一諸積立金　四百九萬圓

貸借對照表

資産	
未拂込株金	三、五七〇、〇〇〇・〇〇
銀行預金及現金	一、七一五、九〇六・九八
郵便振替貯金	二一、七九六・五四
貸付金	五一九、六〇〇・〇〇
有價證券	二、一〇八、二四二・四四
不動産及什器	三七三、七〇三・二〇
建物内拂金	一二、〇〇〇・〇〇
未收保險料	四九六、九〇八・〇〇
未收再保險金	二九九、〇四六・九四
未收海上補償金	四二、二九七・六二
代理店貸	三七〇、八六二・八七
供託金	一三九、七三三・二九
假拂金	二六四、六八一・四〇
合計	一〇、一二四、七七九・二八

負債	
株金	五、〇〇〇、〇〇〇・〇〇
法定準備金	五三〇、〇〇〇・〇〇
有價證券減價準備金	七七、五一七・八四
責任準備金	三、〇〇〇、〇〇〇・〇〇
支拂備金	一八〇、〇〇〇・〇〇
未拂再保險料	六四七、〇二〇・三六
使用人恩給基金	二七、一二二・三四
未拂配當金	五、四〇三・三一
身元保證金	一、六〇〇・〇〇
他店借	一一、〇一八・七二
假受金	五九、八三六・八八
利益金	五七五、二四九・八一
合計	一〇、一二四、七七九・二八

利益金五拾七萬五千貳百四拾九圓八拾壹錢也
此分配左ノ如シ

一金五萬圓也　法定準備金
一金拾貳萬五千圓也　株主配當金（年壹割）
一金拾貳萬五千圓也　株主特別配當金（年壹割）
一金四萬貳千圓也　役員賞與金
一金四萬圓也　使用人恩給基金
一金拾九萬參千貳百四拾九圓八拾壹錢也　次年度ヘ繰越金

右之通候也

大正七年六月

横濱市本町五丁目七拾番地
横濱火災海上運送信用保險株式會社

取締役社長　小野光景
專務取締役　井坂孝
取締役　大濱忠三郎
取締役　若尾幾造
取締役　原富太郎
取締役　澁澤義一
取締役　茂木惣兵衛
監査役　錦戸右門
監査役　石川德右衛門
監査役　渡邊文七

役員任期滿了ノ處何レモ再選就任セリ

東京市日本橋區通四丁目六番地
横濱火災海上運送信用保險株式會社東京支店


涼しい
マツダランプ
涼しい
神奈川縣川崎町
東京電氣株式會社
東京出張所 銀座尾張町一ノ一 電話新バシ（長）一〇五九 一九三 三三二五 一三七二
大阪出張所 西區阿波堀通一ノ五 電話新町（長）六三〇 八九九 八八八
門司出張所 西本町三ノ二九 電話（長）四六 六八二



禪より見たる心頭の凉味

加藤咄堂

火も亦凉し

禪を以て心頭の凉味を語るもの丶劈頭に拈提し來るものは快川紹喜禪師の火焔裏にあつて「安禪は必らずしも山水を須ゐず、心頭を滅却すれば火も亦凉し」と下語して、猛火、衣に着くも動かず、寂然として定化せるの話頭なり。凡俗此話頭に接して禪師の心膽を壯とし、禪の機要を得たりとす。しかも、火の熱し、水の冷かなるは自然なり、寒を寒とし、暑を暑とす、何の憚る所かあらむ。强て冷を熱とし、熱を冷として火も亦凉しと豪語するは情を矯め奇を衒ふ似而非風流のみ。禪、若し此の如きものとせば其の平常底と相離ること遠くして人生と相渉らず。禪師の下語をして曳かれ者の小唄に似たる負惜みの豪語たらしめば痛快は卽ち痛快なりといへども、修道に於て半文の價値をも有せず。此話頭の眞價は安禪の必らずしも山水を須ゐざる所にあり。其の能く火焔裏にあつて心頭を滅却し得たる所にあり。安禪を以て必らず山水を須ゐざるべからずとするものは、境によつて心を轉ぜらるゝものなり。火焔裏にあつて煩悶し懊惱するものは胸中別に一

陣の清風あるを知らざるものなり。禪師能く心を以て境を轉じ、一陣の清風を呼び來つて此猛火を滅す。大機大用、實に此裡に存して吾等に敎ふるに心頭一掬の涼味を以てす。

人と境

吾等が暑に苦む所以は、境の爲めに心を轉ぜられて火を飛ばすの旱雲に、身は釜中に煮らるゝの思ひして、一意、これを脱却せんとし、或は山に、或は水に、清涼の境を求めて炎熱不到の地に任せむとす。しかも之れ一時のみ、市井の雜閙を脱して山間水角に入る。涼氣の身を襲ふものあるが如きも、慣れては此處にも暑熱は訪れ來つて更に淸涼の地を得むとする感なきにあらず。況んや虛榮の競爭場たる溫泉、海水浴、地に涼風ありといへども人に俗塵は伴ひ來つて、心火燃えて身却て苦む。彼の安禪を山水に求めんとするものの「こゝも亦浮世なりけり、よそながら思ひしまゝの山里もがな」と、求め求めて安慰の境なきが如く、山に翠嵐あり、水に淸流ありとも、心、熱塵に累せられては涼を追うて涼を得ず、山中又山中の暑あるに熱殺せられむ。古人詩あり。

人々避暑走如狂　獨有禪師不出房
不是禪房無熱到　但能心靜卽身涼

境をして心を轉ぜしめずして、心をして境を轉ぜしめよ。熱閙場裡、又別に熱閙場裡の涼味あらん。人を奪つて境を奪はずんば、人は境に累せらる。境を奪つて人を奪はざれば「ゴロリと寢たる丸裸、夕涼よくぞ男に生れたる」と、波と續く甍の上の物干臺にも、滿天の涼氣を全領するの快は存す。されど尙ほ人我の存する以上、炎熱の我れを襲ひ來るものあり。暫く其の人境を倶奪し見よ。人なく境なく、盲然として我吾を忘れ、渾然として天地と同化す。此間、何の炎暑かあらむ。

午睡

如何か身を人境倶奪の地に置くべき、こゝに便法あり、身を睡魔の導くに任せて、心を黑甜鄕裡に遊ばし

むること之れなり、心既に黒甜郷裡に入る。人我忘じ去つて是非なく、善惡なく、智愚なく、貴賤なく、又貧富なく、一切の差別を超越して、午風面を拂へども醒めず、蟬風耳に喧きも起きず、昏々として眠り濃かなる處、何の炎熱の我を累するあらむ。正にこれ寒山詩の「三界横眠閒無事、明月清風是我家」なるもの、夾山善念禪師いふ、

明々無二悟法一　悟法却迷レ人　長舒二兩脚一睡
無レ眞亦無レ僞

と、午睡も亦一種の避暑法なり。されど眠れるものは覺めざるべからず。覺めて其れ如何か避くべき。彼の陳憲章の

道人本自畏二炎々一　一榻清風卷二畫簾一
無レ奈華胥留不レ得　起憑二香几一讀二楞嚴一

といへる如く華胥は留まらずして身は復び炎々の境に置かれ、僅に聖經を繙き來つて心頭一味の凉を得るの外なし。醒睡兩非又兩是。寧ろ心頭を滅却して別に無寒暑の地を開拓するの須なきに如かんや。

無寒暑の處

僧あり、洞山に問ふ、「寒暑到來、如何か廻避せん」山いふ「何ぞ無寒暑の處に向つて去らざる」僧いふ「如何か是れ無寒暑の處」、山いふ「寒の時は闍梨を寒殺し、熱の時は闍梨を熱殺す」と。これ此の公案如何か參得すべき。凡そ禪の公案なるものは吾等が分別智を傾到し盡くして究極の處に至り、其の智解到らず分別及ばざる所に自己本來の面目を徹見して一切の疑團を解決し、我と公案と渾融して一なる所に至るにあり、寒時寒殺、熱時熱殺の話頭を拈し來りて一切の分別智を超越し了らば、これ直に無寒暑の處、而して此無寒暑の處、寒暑去來に任せ、寒時寒殺、熱時熱殺の妙用を現前す。これ其の第一義なり、文字を絕し、言詮を離る。云はんとして云ふ能はず。說かんとして說く能はず、唯だ人々個々の參得によつて冷暖自知するの外なし。然れど、暫く落草し來らば寒熱の境にあつて寒熱に累せられず、是非、善惡等一切分別に關する智解を脫了

して部分的知識を超越して全體智を體得し、

よしあしの葉を折敷て夕涼

こゝに無寒暑の境地を體得するにあらざるか。昔、慧春尼の火定に入るや、兄了庵來て問ふ「尼熱きか」と、春、聲を放つていふ「冷熱は生道心の知る所にあらず」と。吾等は冷と熱とをも自ら知る能はざるか。

靜坐

禪を語るは今の目的にあらず。しかも心靜かなれば身涼し。心を靜めんとす。先づ身を靜めざるを得ず。禪は靜慮を義とし、靜慮には坐を通則とす。蓋し靜坐は先哲思索の形式にして身心を安定ならしむるの手段たり。靜と動と孰れか身涼しきかを思へば靜坐の心頭の涼味を掬取するに於て最初の方便たるや疑を要せず。況んや「坐禪儀」の所謂「閑靜の處に於て、厚く坐物を敷き、寛く衣帶を繋け、威儀をして齊整ならしめ、右の足を以て左の䏶の上に安んじ、左の足を以て右の䏶の上に安んじ、(或は單に左の足を以て右の䏶の上に置く半跏趺坐も可)、次ぎに右の手を以て左の足の上に安んじ、左の掌を以て右の掌の上に安んじ、兩手の大拇指の面を以て相拄へ、徐々として身を擧げ、前後左右、反覆搖扼して身を正うして端坐し、……耳と肩と對し、鼻と臍と對し、舌、上顎を拄へ、唇口齒相着け、目は須らく微かに開き、昏睡を致すことを免れ」、氣息を調へて肺と心臓との調節を計り、兀々として坐せば、清風自ら我が面を拂ひ、心頭油然として涼味の湧き出るものあらむ。されど坐たゞこれ心熱を拂ふの所以にあらず。昔、僧あり、坐關三年、終日閉目靜坐して一語を發せず、一物を見ず、王陽明、往て之れを訪ひ、喝して曰く、和尚、終日口吧々として甚麼をか說き、終日眼睜々として甚麼をか看ると。形骸を靜かにするとも、心念四方に散じて何の靜かあり、何の涼かあるべき。

情火と智水

靜坐の涼味を掬取せんには先づ心燃を捨離せざるべ

かちず。心燃、何によつてか起る。情火、我が胸を燒くに外ならじ、情火炎々として燃え出でゝは身は山中靜寂の境にありとも、心は紅塵萬丈の地を驅け廻りて、一刻の安なし、此時何の凉味ぞ。靜坐勞頭の工夫は、智水を以て情火を滅するにあり。何の爲めの念ぞ、何の爲めの想ぞと討尋して理を以て之れを正し、智を以て之れを齊へ、我が心胸を整理し、思想を統一し、末より本に進み、本より更に其の本に進み、究尋して止まずんば心は一境に繫がりて又、身外萬境の我を累するを知らず、思索の快感は此處にあり、冥想の愉悦も亦實に此處に存す。しかも之れ尙ほ分別智の境涯なり、部分的智識の按排なり、情火は其の間隙を襲ひ、心燃は尙ほ餘燼を遺し、智水却て熱湯となつて、時に我れを焚殺するあるを免れず。

萬里の層氷裏

智盡き理究るの時、更に邁往一番し見よ、所謂嶮崖に手を撒して絶後に再び蘇し、其處に分別智を超越せ

る絶對智は顯現し、天地に漲り、宇宙に亘る大意力となつて縱橫の活機を體得せん、これ此時を以て禪家純熟の妙境とし、說て曰く「只四面空蕩々地、虛豁々地にして、生にあらず、死にあらず、萬里の層氷裡にあるが如く、瑠璃瓶裏に坐するに似て、分外に淸凉に、分外に皎潔たり、凝々呆々、坐して起つことを忘れ、起つて坐することを忘る、胸中一點の情念なくして、只一箇の無の字のみあり、恰も長空に立つが如し、此時恐怖を生ぜず、了智を添へず、一氣に進んで退かざる時んば忽然として氷盤を擲摧するが如く、玉樓を推倒するに似て、四十年來、未だ曾て見ず、未だ曾て聞かざる底の大歡喜あらん」(遠羅天釜)と、禪は吾等を導いて此境地に入らしめんとするもの、究めて此處に到れば何ぞ心頭一味の凉と云はむ。渾身、層氷裡にあり、瑠璃瓶裏に坐す、凉氣浸徹、却て三伏の暑を樂み得べきにあらざるか。

清 凉 劑

予は禪に於ては門外漢にして知る所、少しと雖も、且つ漸く窺ひ得たる所を以て大過なしとせば、禪は之れ境によつて動かさるゝ心を轉じて、心を以て境を動かし、更に此の心といひ、境といふ智解分別を超越して宇宙の大生命と合致し、其の合致し來れる所のものを以て萬境に應用して無礙なるにあり。故に禪の經路に就ては虛無あり、空洞あるに似たるも所詮の目的は還り來つて別事なき所にあり、既にこれ別事なし。人境倶に奪はず、寒を寒とし、暑を暑とする何ぞ妨げむ。唯だ其の凡俗と異る所は寒暑によつて累せられ、人境によつて縛せられて、大自在底の地を得ざるにあり、竹影、階を拂うて塵を止めず、月、潭底に入つて水に痕なし、我が心此の如くにして何の煩累かあらむ。人に動かされ、境に縛せられて、理に泥み、智に妨げられて眞生命を體得とせずんば、事毎に凝滯して自在の境なく、終に寒時闍梨を寒殺し、熱時闍梨を熱殺するの大意力を顯現する能はざるべし。我れを累する人境をして、我が用を爲さしめ、我れを煩すの理智情執をして却て我が從屬たらしめてこそ、人境倶に奪はざるの妙趣あれ。洪自誠いふ「見聞覺知は外賊たり、情欲意識は內賊たり、唯だ此主人公、惺々不昧ならば賊化して家人となる」と、賊をして家人たらしむ、これ其の大機大用にあらずや。「春は百花あり秋は月あり、夏は涼風あり冬は雪あり、若し閑事の心頭に掛るなくんば便ち是れ人間の好時節」暑を苦む夏の中より一陣の涼風を得來て我が用とし、寒に惱む冬の中より皚々の雪を取り來て我が眼を樂しましむ、人境我が家人となつて我が命これ奉ず、昔、麻谷寶徹禪師扇を搖かして風を呼ぶ、僧あり、問うて曰く「風性常住、處として周からざるなし、和尚、甚麼としてか扇を搖かす」と、師曰く「汝、唯だ風性常住なるを知つて處として周からざることなきを知らず」と、僧いふ「作麼生か處として周からざるなきの道理」と、時に師平々として扇を搖かす。これ此の話頭、其の何をか傳ふる。風は汝の、招くに任せ、扇は汝の搖かすに任す」一掬の涼味、何れの處にか呼んで應ぜざるものあらむ」無

邊の風月、眼中の眼、不盡の乾坤、燈外の燈、柳は暗く花明なり十萬戸、門を敲けば處々に人の應ふるあり」、求めよ、さらば與へられん、豈にたゞ一掬の凉味ならんや。汝の全身を淨化する淸凉劑も亦此中にあり。

佛師高橋鳳雲（近世名工名人叢話第三）

附 本所羅漢寺の由來

高村光雲

（一）

今日御話したいのは、文政年間に生れまして安政年間に終りました佛師彫刻で、高橋鳳雲といふ人の事であります。この高橋鳳雲が五百羅漢を作りました、その顚末を申上ぐるのであります。それでこの五百羅漢のことに就ては、本所五ッ目に五百羅漢寺といふのがありまして、この寺が唯今お話いたしまする高橋鳳雲の事と聊か緣を引いて居りますので、羅漢寺の由來を先きに致しまして、鳳雲の事を後でお話しする考へでございますから、そのお積りでお聽きを願ひたいと存じます。

本所五ッ目の五百羅漢寺といふのは、御年輩の方は御存じの筈ですが、この寺を創立した人は松雲元慶禪師といふ僧であります。この僧は素と京都の佛師でございまして、元からの坊さんでは無い、俗名を九兵衛と云つて、後に剃髮して僧となつた人であります。それでこの佛師九兵衛は寛文九年に二十二歳にして攝津の瑞龍精舍へ參つて、鐵眼(てつげん)禪師の御弟子となりましたが、その後、師の鐵眼禪師に請ひ得て西海を巡錫しました。その折豐前の國、今の大分縣上津郡跡田の羅漢

寺へ參詣致しました。この羅漢寺といふのは、かの頼山陽によつて有名になつた耶馬溪の羅漢寺のことでございます。

耶馬溪の羅漢寺は、延文五年照覺禪師の開基で、この寺にある羅漢は、唐土天台山の逆流并に賢須といふ二僧が、一夜にして作つたといふ傳說で、五百體の石像でございます。耶馬溪へ遊ばれて、羅漢寺へ參詣になつた方は御承知で、隨分羅漢が澤山列んで居りますけれども、餘り結構な製作ではない、それに一夜で作つたといふ傳說も、無論信ずるに足りないのであります。

それで、此處へ參詣した松雲禪師が、自分も今日は僧侶の身分であるが、素とは彫刻師であるから、どうか生涯の中に自ら五百羅漢を刻んで、一寺を建立して終りたいといふことが、圖らずも心頭に浮んで來ました。それで、歸ると直ぐ、この事を鐵眼禪師に相談致しました。所が、師の禪師も「お前の志願は至極結構なことである、が、それは到底此方ではいかぬ、さういふ事を企てるのは矢張り德川家の御膝元である、江戸へ下つて勸進しなければ、迚も成就は覺束ない」と言つて、牛島の興福寺の鐵牛和尚の許へ手紙をつけて、江戸へ下るやうに命じた。そこで松雲禪師は、その紹介狀を持つて興福寺の鐵牛和尚を手賴つて參り、それから淺草寺の境内に壽松院といふ寺がありまする、其處を假の宿にしまして、日々江戸の市中を勸進する積りで、色々と寄進の事を考へました。所が矢張り、これはどうしても人の群集する所で勸化をしなければ、唯だ無暗に歩行き廻つた所がいかぬと極めました。

それから、勸化を始める、第一日に先づ淺草御門から兩國の邊を勸化を致しまする積りで出掛けた。すると未だこういふ事には全で慣れないものだから、何んとなく人に縋つて勸化を申込むのは心元なく、この人ならばと思ふと、その人は何か急ぎの用があると見えて、ずん／＼行き過ぎる。この人はと思ふと、恐しい可怖い顔をして居つて、寄進して異れさうにもない。さういふ次第でまご／＼して居る中に、その日も稍々七ツ下りになしました。そこへ人品の好い年輩の人が、

珠數を手にして兩國の邊から淺草の方へ參りました。これを見掛けた松雲は、こういふ方に御願ひするより仕方がない、先づ今日は初ての日であるから、多少なりとも勸化の端緒を開きたいといふ考へで、一生懸命になつて、その人の側へ近寄つて縋り付いた。すると豈圖らんや、この人品の好い年輩の仁も、何か急ぎの用があると見へて、此方の勸化の趣意をも祿々聞かないで、ズン／＼行き過ぎて了ひました。

松雲は大に失望し、ハテ困つた、併しながら自分も折角一心籠めて、この人こそはと思つて賴み掛けたのみならず、今日は初ての日である、どうかして多少なりとも寄進を得てその志を果さねと、この先きの氣が折れる、こんな弱い事ではいけない、兎に角跡をつけろといふので、段々その仁の跡を追ふて來ますると、淺草御門を出て、今でいふ須賀橋、その自分の天王橋を渡つて、兩國の方から左側、御藏前片町伊勢屋嘉右衞門といふ札差、この札差の主人と見へてその家へ這入つて了つた。

（二）

これを見屆けた松雲は、勇を鼓して突然その店へ掛つて、此方の御主人に御目に懸りたいと申し込みました。店の者は松雲の姿を只見こう見ましたが、餘り奇麗でも無い薄汚い坊さんですから、何か主人に强請那でもいふのだらうといふのがマア通例の考、何とか、かとか言つてナカ／＼主人に取次ぐ樣子がありません、が、頻りと賴むものですから、それではといふので、ヤッと主人の許へ行つて、唯今斯く／＼斯く／＼で、斯ういふ坊主が來まして、前刻兩國で貴方に御目に懸つて何か御願の筋があつたが、お急ぎのやうであつたから申上げ兼ねたので、實は御宅まで附いて來ましたと、その次第をいふて主人に取次ぎますと、根が佛心のある人であつたから「さうか、それは氣の毒な事をした、どういふ用か知らぬけれども、一應は逢つて能く趣意を聞かう」といふので、中ノ間へ通して段々話を聞いて見ると、豐前の羅漢寺で羅漢を見て、自分も彫刻が出來る所から、自ら彫刻して羅漢を拵へて見

たい、師匠は攝津の鐵眼禪師、江戶へ手頼つて來たのは興福寺の鐵牛和尙であるといふ事を段々話しました。

主人は委細の話を聞き終つて、「よく了解りました、今日は少々急ぎの用事があつて誠に氣の毒な事をした、それでは私は多分の事も出來ぬが、……一體どの位掛かるものか分らぬけれども、兎に角、多少の金を寄附致しませう」といふことで、その寄附された金高は何程であつたか知れませぬが、その寄附の金で羅漢を三體作る丈けの費用が出來た。尤も坊さんのことで、口は奢らず、寺を借りて假小屋をその地內に拵へて、其處で自分で彫るのでありますから、材料さへあれば兎に角出來る。それで三體の羅漢を刻みましたのが、丁度元祿の初年の事でございます。

三體彫り上げて、それから後々の勸化といふのでございますが、如何なる譯か、どうも都合が惡くて、寄進が思はしく參りませぬので、一向事業が運ばぬ、それで彼是と空しく月日を送りました。興福寺の鐵牛和尙はこれを見て大に心配し、自分の私財を割いて一體か二體を寄附しました。

かゝる中にも、頻りと勸化は怠らずにやつて居りましたが、元祿五年になりまして、かの伊勢屋嘉右衛門の盡力で、御藏前の札差が十六人結合して、その事業を援助することになり、これが爲め、翌六年の春に至り、丁度五十體の羅漢が出來ることになりました。

松雲禪師は伊勢屋嘉右衛門が、かく非常に力になつて與れるのに勵まされ、一心不亂になつて彫刻に從事して居ります中に、元祿七年の三月、國母桂昌院一位の尼公……四代將軍家綱の生母……この御方が羅漢寺建立の事を御聞きになつて、羅漢十體分の御寄進があつた。それは恐しいもので、普通の御方と違つて、德川桂昌院樣の御聽きに達し、羅漢の建立があつたといふので、恰も響の音に應ずるが如く、諸大名、旗本は申すに及ばず、下々の者まで我も／＼と寄進に附くといふ盛況に向ひました。或は自分の先祖供養の爲め、或は親の菩提の爲め、または何々の追福の爲めといふので、殆んど競爭的に寄附する人が出て參りました。

右の如き有様で、その比には、モウ勧化といふやうな苦勞は餘程少くなつた代り、今度は佛像を早く造るといふことが大變に心配になつて來た。そこで、松雲は自分の彫刻の師匠やら、師匠の弟子などを京都より呼び迎へて、倶に力を盡して貰つて、さうして彫り上げましたのが、五百羅漢を始め、その他の諸佛體を合せて、總てゞ五百五六十體程ありました。それで羅漢の外の佛體では、壹丈六尺の釋迦牟尼拈華の坐像、八尺の文珠普賢の坐像……是は脇師……、次に九尺の立像阿難迦葉、それから禪宗には是非無ければならぬ佛體、卽ち關羽、布袋、緊那羅王、毗沙門天、僧長天、韋陀天、白衣觀音、その他の佛像ども一切網羅して出來ました。が、それはナカ〳〵大抵な事では無いので、羅漢といふても丁度等身で、人の坐つた丈けございます。それが五百體、悉く意匠が替つて居て、ナカ〳〵面白い圖がございました。

　唯今申上げた丈六の釋迦佛の御光などは、修繕の時に下へ降して見ますると、丁度茶船位ありまして、それは立派な造作でありました。私共は修業中、參考のため彫刻物を見たくても、江戸は至て彫刻品の少ない所で困りましたが、幸ひこの羅漢寺のあつた爲め、休日若くは餘暇のある日には、朝から辨當持ちで本所五ツ目(今は大島町といふ)まで出掛け、その彫刻物の澤山ある中へ這入つて、どれこれと言つて拜觀し、自分に分らぬ所は、歸つて師匠に質問し、また自分で善いと思ふものは圖取りをしたり、木材の寄方を研究したり、ナカ〳〵善い修行を致しました。

　それで元祿八年五月、佛體が全部出來上りまして、この事が公儀に達しますと、本境千五百畝を下し置かれ、同時に天恩山羅漢寺といふ號をも賜はりました。依つて假りに堂宇を建て、釋迦の三尊、阿難迦葉、その他の佛像をこれに遷し、同年の八月に黃檗の高泉和尚を江戸へ迎へて開眼の導師とし、また先師の鐵眼禪師を開祖と致しました。そして、同寺は黃檗山の末寺となりました。

（三）

さて松雲禪師の立てられた五百羅漢建立の大志願は、佛體も出來、兎に角假堂も建ちまして、略ぼ遂げられました次第でありますが、これからは本建築として、本堂、羅漢堂を始め、庫裏方丈など寺院の形を造りまするには、附屬の建物もありまして、未だ／＼非常に苦心を致さなければならぬのに、松雲禪師は不幸に致しまして、最後の事業たる本建築までに屆きませぬ中に疾に罹られ、寶永七年の七月十一日、六十三歳にて遷化致しましたのは誠に殘念な事であります。

これが爲め、堂塔建立の勸進が一寸中絶しましたが、その間に假りに拵へた所の堂宇が破損し、屋根が漏るやうになりました。僅の間に破損するのも可笑しいやうでございますが、一體この羅漢寺を建てた場所が實に惡い、併しその惡い處へ建てたに就ては相當の考へがあつたので、どうかこんな邊鄙の土地へ宏壯な堂塔て建てゝ、その界隈の者を霑したいといふのが矢張り佛法の一つの功德であるといふ所から、態々砂村邊の僻地を擇んで持つていつたのですが、地質が惡いのと海邊に近いため暴風雨とか海嘯などの激しいので、宏壯な建物を永遠に保存するのには適當しない處でありました。それが爲めその假堂も意外に早く破損致しまして、折角丹心を凝らして作つた佛體が雨露に曝されるやうな有樣になりました。

攝津に在る鐵眼禪師が、この事を聞かれて深く憂ひられ、正德三年に、黃檗の象先和尚に、「江戶の羅漢寺に松雲禪師の殘した佛像が、假堂破損のため憐れな姿になつて居るに依り、どうか松雲の遺志を繼いで堂宇の建立をして貰ひたい」と命じましたので、象先和尚はその命を奉じ、早速江戶へ下りまして、それから十ヶ年間、心肝を碎き、寒暑風雪の厭ひなく、種々樣々の辛苦艱難を堪へ忍び、親ら江戶市中を托鉢を致しまして、さうして、享保十年に至り、たう／＼一大伽藍を竣工させました。

この堂塔も殘念な事には僅か二百年も立たない中に全部破損して、只今は跡形も留めないやうになりましたが、これは流石象先和尚が非常なる苦心で建立を致

されました丈けあつて、餘程立派なものでありました。今でもその面影は、長谷川雪旦の畫きました江戸名所圖會に殘つて居て、五百羅漢の堂塔から境内の總ての實景が詳細に出て居ります。それを見ましても一目瞭然、實にそれは東京市中で一寸(ちよつと)見られぬ程宏壯なる寺院で、その各建物の配置は品の如く、丁度今日の學校などの建築の様式に似て、眞中に本堂があり、左右にズーッと長く東羅漢堂、西羅漢堂が相對し、その前が天王殿で、その後(うしろ)が方丈になり、また鐘樓堂、禪堂、客殿、施招所、庫裏等も備はり、それから漢門(カラモン)と稱へる總門があり、その脇に三匝堂俗に螺堂といふ堂がある、螺堂といふは參詣道が螺旋になつて、廻りながら登つて行くので、この堂内には京都と江戸の佛師が競技的に造つた名作の百觀音が、參詣道の兩側に飾つてある。その參詣道を廻りながら登り切ると、普通の二階でいへば踊場(をどりば)、此處で下り口を變へると、別の道を矢張り百觀音を拜しながら、逆に戻つて下に降りて來るといふ構造になつて居ります。これが今日保存されて居たならば、建築の參考になるべき立派な建物であつて、年代は若くても、無論保護建造物に編入せらるゝことゝ思ひます。

そこで總ての堂塔が竣成したので、享保十四年の二月を以て、開堂總供養の大法會が盛大に行はれました。この時にまた盂蘭盆會の大施餓鬼をも修行致しましたが、それが例になつて、毎年本所五百羅漢の大施餓鬼といふものは大層參詣人の出たものでございます。

また當寺の開山はさういふ譯で、象先和尚が當然の譯でありますが、この象先和尚といふ人が、至つて潔白な性質で、毫も虚榮の考などのあるやうな僧侶で無いから、鐵眼禪師の命を受けて、それ丈けの大業を成就したにも拘はらず、先師の鐵眼禪師を以て開山とし、自分の師匠寶列和尚を二代と致しました。それから松雲禪師は創立に大功のある人でありますから、これを一代の開基とし、自分は降つて三代の位置に座りました。それで、この象先和尚は、寛延三年の六月九日に、七十三歳にして涅槃大定(ねはんたいぢやう)に入られました。

（四）

これで羅漢寺の話を打切り、次に本文に取り掛ります順序ですが、象先和尚の逸事に就て、今一つお話し致して置きませう。羅漢寺が愈々竣成して開眼開堂總供養の大法會が執行され、江戸市中非常な評判になりましたので、遂に將軍家の聽召す所となり、一日御鷹御成の序を以て、同寺に御立寄があつた。その時の將軍は德川代々の中でも名將軍と言はれた八代將軍吉宗公、この吉宗公は御承知の通り、紀州光貞公の四男で、幼少の頃からナカ／＼艱難をなすつた御方丈けあつて、何もかも能く御承知、最も才氣に長けて居られました。德川家代々の中心となられて、後世十五代まで續きましたのも、或ひは吉宗公の御力が多く與つて居るかも知れぬといふ位の名將軍。

この名將軍たる吉宗公が、丁度工事が出來上つて間もない、非常な壯麗な處へ御成りになつて、頻りと感歎なされて、「如何にも松雲が市中を托鉢し、他力財施を集めて、これ丈けの佛像を建立し、また貴僧がその跡を繼いで、この大伽藍を成就したといふ事は、實に容易の事でなかつたらう、如何にも立派である、併しながら、一つ貴僧に尋ねるが、佛法は異國の傳來で、佛體は異國の神である、貴僧は我邦を知つて居るか」、こういふ御尋である。ナカ／＼非常な事を仰つしやる。太抵の坊さん達は、それで以て二の句が繼げなかつたかも知れない。所が象先和尚は一向に驚かない。「恐れ入りますが、どうぞ我君には、是へ成らせられて御覽下さるやう」と言うて、釋迦堂の丁度後ろへ御案內すると、御釋迦樣の腹の內部の處に當り、護法善神といふ神樣を祭つてある、これが所謂天照大神、白木造で七五三を張り、後ろは全く神道造りである。

この有樣を見られて、遉の吉宗公も、如何にも用意周到、行屆いたものであると感服されて、元の御席へ直られ、「何か望みが有るならば、聞屆けて遣はすから、何なりとも申すがよろしい」といふ御沙汰、象先は「僧分として何も要りませぬ、何も頂戴致す望みもありませぬ、坊主は他力本願で、堂宇が損じれば勸化をし

ます、信者の志しで喰べても行かれます、寺は却つて裕かであると、それが爲めに末世の僧は墮落しますから、何も要りませぬ、只だ私は年取つて始終江戸へ勸化に出るのに骨が折れますから、船一隻と、江戸市中を公けに勸化することを許して戴きい」と申してお許しを受けた。それから市中へ勸化に出る折には、本所五ッ目から、公儀より貰つた船に乘つて、竪川を兩國まで下つて、市中を勸化し、また船に乘つて歸ることになりました。その頃市中を勸化して歩いた寺は江戸に二軒、兩國の廻向院、この寺か無縁で矢張り貰つて食ふ、それと羅漢寺でした。勸化をする時は、坊さんが十人位繋がつて、先きに錫杖を持つて笠を冠つた導師が一人附いて、廻向院の方は、「兩國廻向院佛性」と言つて市中をゾロ〳〵歩き、羅漢寺の方は「本所五百羅漢建立」といふて、始終市中を托鉢を致しました、それでこの二軒のお寺に限り特に托鉢を許されて居つたのであります。これで羅漢寺の事は大略申し述べましたから、引續き本話の主人公たる高橋鳳雲の生立からお話し致しませう。

（五）

高橋鳳雲といふ人物は、佛師を作業致しまして佛像彫刻家でございます。今日では彫刻と申しまする殆んど區域が無いやうでございますが、この時代には、佛師彫刻と宮彫（俗に彫物大工といふ）と稱へ、堂宮の裝飾を專門とする者の外に、根附を彫刻する根附彫や、人形師、雛師、面打（是は能面を彫刻する者）などいふ者がありまして、皆分業でやつて居りました、それで文化文政の時代には單に彫刻家といふ者は無かつた。

それでこの佛師彫刻の高橋鳳雲は、文化の七年に、江戸の神田で生れました、今から丁度百十餘年程になります。本名は高橋淸次郎と申しまして、文政二年に十歳にして佛師の弟子となりました。その師匠といふのが、神田鍛冶町に住んで居た法橋幸慶といふ佛師であります。この家は德川家御出入の佛師で、一代は善慶、一代は幸慶と、一代替りで八代まで續きました

が、當時は七代目の幸慶でありました。この人が卽ち鳳雲の師匠であります。

元來鳳雲といふ人は、天才肌であつたと見え、習はずして彫刻が出來ました。親の手許に居りまして、惡戲盛りの七八歳位の時に、大黑樣とか、八幡樣とかいふやうな物を彫りました。それは私が現在見て知つて居ります。私の師匠東雲の家に、その鳳雲の八歳の作になれる束帶の八幡樣がありましたが、ナカナカ立派に出來て居りました。成程まだ八歳位の子供の作であるから、寸法その他のことは行屆いては居りませぬ、至つて緻盆子な、背の低い八幡樣でありますけれども、チヤンとした物でした。

鳳雲が十歳になつた時、兩親もこんなに彫刻を好むなら、幸ひ兄の熊吉が行つて居る幸慶さんの所へ賴んで佛師に仕やうといふので、それから佛師の弟子になりました。この兄の高橋熊吉といふのも、餘程變り者で、後には弟の鳳雲と共に名人と並び稱せらるゝ迄になりました。それで、その師匠の幸慶の技倆は、どうかと申すとそれ程の手腕はありませんでした。併し下手ではない、先づ佛師一通りの人でありました。その弟子は八人ありまして、弟子同士の競爭は非常に激しかつた。が、その弟子の中で、鳳雲と熊吉の同胞二人が、水平線を抽んでて居つた。

さて修業中は、別段の御話もありませんですが、十八歳位の時に、師匠が或處から雲に鳳凰の彫物を賴まれました。かういふ時には、何時も弟子同士の競爭が始まる。「今度師匠の受合つた物は、少し目覺しい物だが、誰にさせるだらう」「己だらう」「いや貴樣では無いだらう」といふやうな話しで、互に爭つて居る所、それをば一番後進の鳳雲に師匠が吩付けたから、多くの側の弟子が頻りに腹を立てて、「己達が居るのに、選りに選つてアノ淸次郎にやらすとは、師匠も分らん人だ」と內々憤慨したが、致方がない。さういふ次第だから、鳳雲も一生懸命になつて、その雲に鳳凰の圖をズツカリ彫り上げた。所が餘程立派に出來たので、兄弟弟子もこれを見て我を折り、「矢張り彼奴は巧い」とい

といふやうな辭で静まつた。のみならず、師匠もこの彫刻には大層感服したと見へ、「お前は未だ年期中であるが、併し行く／＼は職名を附けなければならぬ、この雲に鳳凰の彫物は、是までやつた中で一番好く出來た、今後とても此位に巧く出來た物はタントは無からうと思ふ、だから、マア紀念のために、この彫物の名を以て、お前の職名にしたら宜いだらう、今日名前をやる」といふので、雲に鳳凰といふ處から鳳雲といふ名前を貰ひました。これは技術家として實に立派な話しであります。

かういふ事があつてから、鳳雲は末席の弟子でも、技藝の事は格別で、大層側の者から羨まれもし、また崇められましたが、それから前後十一年間、熱心に勉强して年期を勤め、先づ今日でいふと卒業、その時分でいふと矢張り年期明けであります。年が明けまして何うするかといふと、マア普通ならば年が明ければ直ぐに手間取だ、それで獨立してお金を儲け、自由な遊びでもして見たいといふのが當然でございます。が、鳳雲の考では、成程師匠の御蔭で小刀丈けは立派に使へるやうになつた、併しながら、鑿を以て世の中に立つて居る宮彫には叶はぬ。宮彫の方では小刀といふものは殆んど用ゐぬ、一から十まで鑿で仕事をするが、佛師の方は大きな處を鑿で落す丈けで、後は小刀で仕事をして居るから、どうか宮彫師のやうに自由に鑿を使つて見たいといふので、その當時宮彫の名人と稱せらるゝ長坂伊之助（この人の作つた物は今でも諸方に殘つて居る）方へ、食客同様の弟子に住み込みました。それで手間賃を貰はずに、向ふの仕事を助けてやりつゝ、三年間ミッシリ修業をした。その結果、鑿を持つても、小刀を持つても、自由自在に腕を揮ひ、その技、所謂神に入るとでも申したい程でありました。

（六）

鳳雲が丁度獨立した比に、江戸に三名人と云はれた佛師がありました。その中の一人は神田の辨慶橋に住んで居た松本良山といふ佛師、俗に不動金兵衛と申してナカ／＼の名工であつた。この人は成田の不動の

尊を彫ることが最も巧者であつた。それもその筈で、丁度十年間成田山に寄留致して、一信といふ畫家の下繪で、成田の不動堂の五百羅漢を彫つた、これは唯今でも現存して居ます。この影物を仕上げる間に、間がな隙がな本尊の不動様を拜して正寫を研究したのであります。普通の參詣者には、あの壇上に處狹くまで、色々の供物や飾物があつて能く見へませぬけれども、須彌壇の上に四尺七寸の本尊（座像）并に兩童子が載つて居ります。それが非常な名作であつて、あの位の逸品は、關東地方は申す迄もなく、奈良や京都へ行つても、これと匹敵すべきものはナカ〳〵御座いません。良山はそれを朝夕拜んで模刻したので、成田の不動様の正寫は同人が始めてゞあります。それがため不動金兵衛といふ渾名を取つた位の人であります。尤もこの人は不動の尊像のみ巧いのではありません、何をやらしても達者でありました。それから、今一人は鳳雲の兄さんの高橋實山（旅吉）でありまして、神田鍛冶町に住んで居りました。この人も技巧の點に於ては名人の域に達した人であるが、質樸一方の、言はば職人氣質の人で、ちつとも見得も張りも無い、唯御飯を喰べて仕事をして居れば宜いといふ人だ。それで家も身上も構はない、生涯貧乏して居りまして、一生佛師の下職をして終つた人であります。實に氣の毒な人であります。併し技術の優れて居るため、矢張り佛師仲間では重んぜられて居りました。

それで鳳雲の方は、また兄さんと少し變つて居て、技巧も出來たが餘程見識のあつた、氣位の高い人で、住居は諸所方々へ轉じたが、結局は神田の阿玉ヶ池で終りました。神田の阿玉ヶ池と申しますと、これも只今はチロッと形は分りませぬが、昔はあの邊は武家地でございまして、それは徳川家の御用人とか、御坊主とか醫者とか、さういふやうな、俗に長袖といふ人々の住居が多かつたので、チロッと門構で玄關に高張があるといふやうな家構でありました。今日では門構だの玄關附は珍らしくありませんが、その時分はさうでなかつた。鳳雲は其處に住つて居りまして法橋官を

許され、晩年法眼にまで昇りましたが、同人の盛んに彫刻を致しましたのは、天保、弘化、嘉永で安政には最う晩年でありました。

それで、この人の米櫃仕事といふと甚だ俗な言葉でありますが、マア相變らず拵へれば金になるといふ事を、昔の彫刻家では俗に米櫃仕事と稱へた。その仕事を依頼されたのが、本所の五百羅漢に最も深い關係を持つて居る藏前の伊勢屋嘉右衛門の末葉であつて、矢張りその名を嘉右衛門と稱した、札差でありました。

當代の嘉右衛門も、先祖が松雲禪師を援けて本所の五百羅漢を建立した佛心家であつたので、その遺傳とでも申しませうか、矢張り非常の佛心家であつたので、先祖がアゝいふ事をした、どうか私は自分一個の力で生涯の中に五百羅漢を拵へて見たい、それに就ては誰れに製作を依頼したら宜からうと、種々穿鑿の結果、神田阿玉ヶ池に居る佛師高橋鳳雲こそ適當であるといふ事で、これを鳳雲に頼むことになつた。それで嘉右衛門の考へでは、木彫で置くと後には破損じて滅ぶかも知れぬ、それでは自分の心願が屆かぬから、鳳雲が彫刻したら、それを型にして鑄物にして貰はう、その鑄物師は誰れが宜いかと詮索の末、當時鑄物師の數は澤山あつたけれど名人の間へある整珉に依頼することに取極めた。

そこで嘉右衛門は、或る時、鳳雲と整珉と二人を招んで相談した所が、兩人とも「どうぞ此方から御願を致します、ナカ〳〵五百羅漢といふものは、幾ら御身上が好くても、隨分費用の係るものでありますから、それは私共の細工の合間々々に、出來得る限り實費でやりませう」といふことで、先づその時の定か、木彫の手間が五百體の中で高いのが二千疋、今でいふ五圓、一番低いのが二分、是は二百疋、五兩から二分といふ間で製作させ、整珉の方ではそれを鑄物にしてスカリ仕上げる次第で、この方の工賃は今忘れましたが、さういふ約束で仕事に取掛つた。

その順序としては、何か平素の仕事の都合で、一寸手が明いたといふ場合には、直ぐに羅漢の彫刻をやつ

たものであります。が、附屬が多くて、それがトウ〱七百體に上つたので、俗にこれを七百羅漢といひました。それで、鳳雲が之を製作するに就ては、善かれ惡かれ、兎に角本所の五百羅漢が參考の一つになつたのは勿論だが、鳳雲といふ人は、圖案などは一切自分でやつて、人の仕たものは氣に入らぬといふ性質であつたから、その意匠には隨分苦心慘憺したやうです。私も聊か彫刻を致すので、圖案の研究に就ては、自分で覺へがありますから、當時鳳雲の苦心は實に察せられます。口でこそ五百羅漢と云ひますが、實際に當ればナカ〱大變なもので、十體か十五體は、どうかこうか圖が纏りませうが、五百體の羅漢が、皆坊主頭で、被て居るものは袈裟と法衣、これが五百體が五百體ながら、同じ圖様が出來ぬやうに、色々と變化のあるやうに拵へるといふことは、誠に容易な苦心ではありませむ。

それでも、種々の困難を凌いで、漸く七百體の佛像を彫り上げましたが、その途中で整珉が亡くなりました。それから、整珉の弟子の東雲と貞乘との二人が、その後を引受けて仕揚げました。それで、この出來上りました全部を鎌倉の建長寺の山門へ納めましたが、これは幸ひに現存して居ります。かの山門に登りますと、ズラリと列んで居つて、形ちは小さいが如何にも精巧なる出來であります。一時は外國人に何萬圓とかで賣るとか、賣らぬとかいふ事で、大變な騷ぎがありましたが、とう〱中止になりました。

それから、鳳雲が精神を凝らして製作した木型は何うなつたかと申しますと、それは伊勢屋嘉右衞門の豫言の通り、殘念にも今日は殘存して居りません。その譯は、伊勢屋では、その木型の方を、自分の家に二間に三間の倉を拵へて、丁度羅漢堂のやうに壇を造つて飾つて置きました。所が德川幕府が瓦解した時、札差も同時に仆れて地面も家宅も皆賣拂ふ事になりました。併しこんな場合でも流石に大家は違つたもので、それを道具屋へ賣拂ふといふ様な考はない。全部甲州の身延山へ奉納する事に極め、その破損した所を私の師匠に修繕させまして……私も手傳ひに行きました……全然

元の通り出來上ると、せめて寫しても取つて置きたいといふので、狩野東章、池田古郁の二人に七百體の佛像幷に附屬品を一切模寫せしめ、これを二冊の書帖として自宅に殘し、木型は直ちに身延山の山門へ納めたが、その後不幸にして身延山の麓から出た火事に、山門も類燒の災に罹り、同時に鳳雲の傑作と稱せらるゝ七百體の佛體も、一朝にして烏有に歸しました。實に殘念とも何とも申しやうがありません。然し、仕合せなのは、鑄金にしたゝめ、建長寺にその面影を認めらるゝ事であります。

所が、近來は誰れも、この建長寺の羅漢像を整珉の作と思つて居るやうですが、是は整珉が鑄造したには違ひないから、關係はして居りますけれど、それは鳳雲の腦髓から出た原型を、整珉はたゞそれを鑄た丈けの事でありますのに、原型の燒失したゝめ、整珉の作となつて居るのは遺憾千萬である。私はどうか原型は鳳雲、鑄造は整珉と兩人の合作として、世に傳へたいと存じます。

それで鳳雲は一代の名匠でございましたが、惜しい事には短命でありまして、四十九歳の時に逝去されました。寺は淺草の松葉町で、彼處に本願寺の添地があります、その地內に正行寺といふ寺がありまして、その墓地に葬つてあります。石碑の表には　釋鳳雲法師、安政九年年九月十三日」とあります。法師と云ふのは、後に入道致しましたからでございます。また石碑の裏には「高橋清次郎鳳雲入道德英、壽四十九歳」と刻付けてあります。これで鳳雲のお話は終りと致します。

浪花三長者

澪餘書房主人

綱島の　藤田傳三郎氏
長堀の　住友吉左衛門氏
今橋の　鴻池善右衛門氏

その一

長堀長者のお得意に引かへて
綱島長者は頗る落膽の事

六月五日、五攝家の隨一の名門、近衛公爵家の寳器重品が東京美術倶樂部で入札競賣に附せられて、入札品中第一の呼物であつた狩野元信筆「商山四皓」、第二の呼物と目せられた東山義政公献進の「時代御伽羅箱」、それから「金珠瑯」の三點が都合によつて賣却見合せとなつたにも關らず、その總賣上高實に百二十六萬餘圓と註せられ書畫骨董の入札界において隨分低からぬ記錄を示してゐる。

この入札競賣の管理者、即ち肝煎は誰あらう、大阪超億級の長者たる住友家の總支配人で、此間品川の益田鈍翁氏（孝）幽月庵のお茶事の會合に正客を勤め、お次の岩原謙三氏が粗忽から時價三萬圓といふ本阿彌空中作水注の葢を破つたときに、主人鈍翁氏の前に出て相客の過失を陳謝し、事なく席を納めて跋をつけたといふので、所謂茶人仲間に名聲を藉甚させてゐる鈴木馬左也氏と、他の一人はこれも關西に於て今遠州を以て納まつて居り「なに千家かえ、まアあの位ゐ茶の趣味をハキ違へて居れば天下も泰平なものさ」と凄がせてゐる高谷恒太郎氏の兩君であつたゞけに、この競賣において關西派の富豪成金の輩、數を盡して美術倶樂部に馳せ參じ、落札品の半分以上は引つ攫つてしまつたが、その中で大阪の二大富豪が一は非常

に落膽し、一は非常に得意になつてゐるものがある。

二大富豪とは誰々ぞ、即ち一は住友吉左衞門男と他は藤田傳三郎男である、而して落膽したのは藤田男で得意なのは住友男だ、藤田男は最初今回の入札競賣品中で最も目を附けてゐたのは「能衣裳四十六枚」である。是が非でもこれは落すやうに豫てお出入の札元にも吹こんでおいたのだが、開札の結果が十萬千八百圓といふ今回の入札中の最高札で、船成金の山本唯三郎氏の手に落ちた、而して藤田男の入札は十萬千二百圓、僅かに六百圓の相違であつたといふから男の遺憾もさこそと想はれる。これに引替へて住友男は三萬何千圓かで「秀才爐」といふものを落してゐる。これは煎茶用の風爐であつて茶人連いづれも目をつけてゐたものである。而も住友男が五萬何千圓を抛つてこれを獲得したに就ては一寸面白い挿話がある。

その二

先代吉左衞門氏の風流を懐ふ
今代吉右衞門氏と秀才爐

先代の住友吉左衞門氏は時々南地宗右衞門町の富田屋へ遊びにいつた。そして富田屋の門を入るとそのまゝズイと例の茶室へ通る。この茶室にはいつでも釜が掛つて湯が沸つてゐた。これは吉左衞門氏が自分の釜を掛けさせてあつた者で、そして何時來ても湯が沸つてゐるやうに吩附けてあつたものである。富田屋では「とうない鷹揚なお方はんで、そして如何にもお長者はんのやうなお人柄のお方はんやつた」と云つてゐる。

この吉左衞門氏はそして富田屋にこの釜を掛けてあると同時に一箇の煎茶爐を備へてあつた。然るに吉左衞門氏此世を去ると同時に、件の釜はたしか住友家へ納まつた筈であるが、煎茶爐の方は吉左衞門氏の生前にお出入の某へ與れてしまつた。ところがこの煎茶爐は頗る逸品で、一見なか〱風流雅興を極めたものであつたので、之を知つてゐるほどの者はいづれも涎を流して羨んでゐたものである。すると或時當代の吉左衞門氏のところへ某といふ茶人が來ていふには、「私は此間或るお方と御同道で近衞公爵家に罷り出でゝ御

寶物を拜見いたしましたが、その中に「秀才爐」といふ煎茶の爐がありました。それが如何にも此方の御先代が富田屋で折々お用ゐになつた煎茶の爐と餘ほどよく酷たものでありました。尤も同一物ではありませんが、その大きさから格好といひ色合といひ時代までも殆んど同じものかと思はれるものでした。折あらば御一覧あつて然るべく思ひます」との事であつたので、住友男俄かに心動いてそれが見たくて堪らない。そこで或時此事を令兄の西園寺侯に話して傳手を求めてそれと拜見したが、成程話に聞いてゐる先代愛好の煎茶爐もこんな風のものであつたらうと想像された。

しかし先方は名門の近衛家の事でもあり、やたらに讓り受けたいなど〻端たない事も云はれぬのでその後はそのま〻になつてゐたが、男としては以來夢寐にだもその近衛家の「秀才爐」の事を忘れたことはない。折もあらばと考へて今日に及んだのであるが、思ひもかけぬ今回の入札、而もその品目中には年來思ひをかけた「秀才爐」の名があるので、男は飛び立つ思ひで五萬何千圓といふのを放げ出したのだが、それがマンマと落ちて來て年來の素思を遂する事を得たので非常な悅である。

その三

「熊野」の一曲を繰り返して淸廉二千圓を贏ち得たる事

藤田男が今回の能衣裳四十六枚を是非手に入れようと熱望してゐたには色々理由がある。それは近衛公爵家所藏と云へば出所も立派なものであるし、且つその衣裳は實際に於いて頗る稀代の逸品であるが、中にも男がその中で五六枚特に欲しいものがあつたからだ。

藤田男爵家が天下無双の珍器珍什の所藏家である事は今更いふまでもなく世間周知の事である。其數多い所藏品の中に能樂に關係ある衣裳道具の中には、千萬金に値ひするものが澤山にあるのは勿論の事だが、就中衣裳の中で優れたものが何枚かある。それに丁度今回の近衛家から出た衣裳の中で五六枚のを之に加へると、略ぼ完全なものになるとかで、藤田男は早くもこ

ゝに目をつけて、これを手に入れようとしたのであつた。然るに開札の結果は僅かばかりの相違で山本唯三郎氏の手に歸したので男は頗る落膽の模様である。而も相手がさして能樂の愛好者とも思はれない船成金であるによつて更に遺憾一層に深い者があるであらう。

藤田男一家一門の能樂凝りであることはこれも今更の事ではない。男當人はいふまでもなく男の令弟たる京都の徳次郎氏、須磨の彦三郎氏、いづれも素人離れのした技倆を持つてゐて、斯道に熱心なことは負けず劣らずである。いつの事であつたか、觀世清廉を網島の本邸に迎へて一家一門寄り集つて同人の「熊野」を見た事がある。清廉が首尾克くこれを勤めて樂屋に引こむとすぐその跡から跟いて來たのは藤田男であつた。そして今や清廉が淺い萠黄のかひどりに濃い藍地に銀で露草を摺つた『熊野』の裝束を脱らうとするのを押へて、「あはれ心なき村雨かな――春雨のふるは涙か」のあたりの手振りを今一度こゝで繰り返して見せてくれと頼んだ。すると清廉は、「それはいとお易い御用ですが、しかし左様な事は三文役者か大道藝人なら知らぬ事、私として未だ曾て樂屋で舞つて見たといふやうな試しをやつた事はございませんから」と體よく斷つたが、斯道熱心の男は「平に、平に」と熱心に頼むので清廉は假面を附けたまゝで「宜しうございます、外ならぬ男爵の御執心ですから、こゝでモウ一度「あはれ心なき村雨かな――」のあたりを繰り返しませう。しかし此所がこの曲の極致の存ずる處ですから、譯はと私に取つても今日の舞臺を二度勤めるだけの骨折りです、何うか男爵にも其つもりで御覽下すつて、今日の費用全部に匹適する金額を更に私の舞臺修繕に御寄附が願へませうか」と云つた。すると男爵も熱心な人だから「よろしい、寄附しませう」といふ。清廉はその時傍にゐた三井徳右衛門氏(?)を顧みて「三井さん、何うか貴方今の男爵の御言葉に保證人に立つて下さい」と頼んでおいて、更にそこで「村雨は――」を繰り返した。すると實際後日になつて男爵は金二千圓を清廉に贈つたといふことである。

この事あつて後、前記の三井氏が淸廉に逢つて、「お前さんも隨分ひどい事を云つたものだ、あんな事がよく口からツケ〳〵と出たものだね」といふと、淸廉はニツコリして「いえ、實はあれも男爵と面と面と合せてゐてはあんな厚顏しい事は云へた義理ぢやないのです。けれどあの時は幸ひとまだ熊野の假面を取つてゐなかつたので、あゝいふ思切つた事が云へたのでした。それにしてもあの一言で二千圓のお金にならうとは思ひませんでしたが、男爵の實に几帳面な方なのには驚きました」と云つてゐたさうだ。

その四

浪花長者の象徵となつた鴻池
男爵の鞄の中から美人出現の事

住友、藤田の二男爵が骨董とか能樂とかいふものに道樂を持つてゐるに比べて、鴻池男爵は殆んどそんな道樂を持つてゐないと云ふの外はない。

地體、今の大阪で鴻池男爵家などを第一流の大富豪家中に算へるのは實は大間違ひかも知れぬ。若し今の鴻池家の財產を以て之を他の富豪連のそれに比較してならば、これ以上の富豪は兩手の指を幾度か替へて屈するも尙ほ及ざるを憾みとする位ゐに澤山出來てゐる。隨つて之を住友や藤田といふやうな大富豪と同列に見るのは聊か等を失するやうであるが、而も大阪の鴻池と云へば因緣最も淺からず、人心に深い根底をおろしてゐる點において、或ひは住友、藤田以上かも知れぬ。即ち「大阪の鴻池」なる名は或意味において富豪の代名詞たるべき權威を持つてゐるのであるから、此點において鴻池はヤハリ當代に於る嶄然たる長者である事は爭ふ可らざるところである。

鴻池の古い番頭の一人某氏の家の押入に横棧のはいつた古い四枚戶が篏つてある。この戶板の蔭に鴻池の二代目の主人(?)の筆だといふ墨蹟が遺いてゐる。何うして斯んな處に斯ういふ板を使つてあるのか分らないが兎に角それが二代目の筆だといふ。かなり巧みな筆跡で「守にあやまちなし云々」と書いてある。鴻池代々の方針は全くこの戶板の蔭の文句通りに行はれて

來たもので、進んで取るよりも守る方を大事にやつて來た事は爭はれない。今の鴻池だといつても他の富豪のするやうなテキパキした事業などには決し。手を出さぬ。最も地道に計畫して地道に儲けてゐる。寧ろ平凡を主義として奇拔な商略などは夢にも用ゐない。しかし鴻池だからといつて決して時世に逆行した事をやつてゐるといふ譯ではない。年々歳々多少によらず身代は延びていつてゐるのであるが、他の富豪と延び方が異ふので長者番附面の位置が次第に背進してゐるといふ結果を見るだけなのである。

されば善右衛門氏は別段これといふ道樂めいた事はない。少くとも富豪として金のかゝる道樂などは餘り持つてゐない。食道樂、女道樂、乃至文藝道樂、芝居道樂、釣道樂、寫眞道樂、衣裳道樂、そんなものは一切持つてゐない。偶には住友男や、藤田男と顏を合せるやうな事があつても、何等語るべき事を持つてゐない。唯だ悠然として南山を見る。此點が却つてお長者らしい風があるのだ。

今の住友男が南地富田屋の先代小一とは久しい仲であつた事は無論誰知らぬものはない。その小一が二三年あと、いよ〱男と切れて廢業をした時の事、或る人(小山健三氏だつたか中橋徳五郎氏だつたか忘れた)が東京から大阪に歸る汽車中で、鴻池男に出逢つて何かの話から南地の藝妓の事に移り、「住友さんもとう〱小一との手を切つたさうですね」といふと鴻池男が、「さうですか、あの方も女を失ひましたか」といふ。「何うです、貴方はあの方には少しも御發展にならんやうですが、チト御出馬になつては如何です」と揶揄すると男はニツコリして、「いや、實はお恥かしい事だが私も今度東京で一人美しい女を手に入れましたよ」といふ。鴻池男にしては珍らしい事だと某氏は驚いて、「へゑ、何ういふ方で」「實はこの汽車で一しよに伴れて來て居ります」といふ事に某氏いよ〱面ン喰ひ、「へえ、何處に」「いや、こゝに」といつて鴻池男が大きな鞄の口を開けて見せてくれたので、何んだらうと中を窺いて見ると薄紙に包んだ二尺ばかりの裸人形だつた。あとで

くとそれは東京の某氏から送られたもので、夫人にお土産の一品だつたといふので、某氏も今更らに呆れるやら感服するやらだつたといふ事だ。

その五

同じ長者の飼ひ鳥でも 榮枯盛衰別なる事

土佐堀の船町橋を東に渡つたところに住友銀行の本店がある。建築は灰色のゴシック四階で非常に立派なものでもないが兎に角堂々たるものだ。しかしこの住友銀行本店の建築物は假建築なので直ぐその地續きの大川町の方へ宏大な本建築をする事になつてゐる。住友の建築は一たい斯ういふ工合に相當に派手なのに引かへて、鴻池銀行の方は本店でも支店でも頗る地味なものである。いづれを見てもまづ和風八分に洋風二分、外壁が黑漆喰ぬりで二階建に過ぎない、從つて營業振りも手堅い一方、決して派手を切らぬところに鴻池の主義方針が窺はれる。

銀行そのものゝ建築ばかりではない。本邸の模樣を見ても住友と鴻池とでは大へんな相違だ。住友の今の本邸といふのは大阪で有名な茶臼山にある。そして殆んどその茶臼山の全部を占領して翠樹疊々の間、洋風和樣樣々の建築樣式を見せた大厦を構へて、眼下に天王寺公園全體を瞰下し、而して南大阪を一望の下に集めてゐる。新世界ルナパークの通天閣などはつひ鼻の先に突つ立つてゐる次第である。大阪合戰夏の陣に家康が馬印を樹てたといふ地點が思ひきや大正の今日、住友男の自動車置場にならうなどゝは、流石の狸爺も豫期せぬところであつたらうと思はれる。

ところが鴻池男爵家の本邸といふのはチヤンと御先祖が垂跡まし〱た大阪は船場の東北、今橋の角屋敷、船場風の入口に船場風の櫺子、塗壁一見頗る地味なもので、洋服の一とつも着た者などは格好が惡くて一寸門口を這入りにくい。試みに街路に立つて門口から覗いて見ると門内に一寸した庭があつて、そこに動物園式の金網があり、その中には二三羽の鶴が飼はれてゐる。この亦た鶴は頗る有名なもので、鴻池の鶴といへ

ば恐らく大阪人は云はずもがな、關西都鄙の人で大阪を知つてゐる者は必ずこの鶴を知つてゐる筈である。

住友男の本邸が今の茶臼山にあつた前は長堀の東鰻谷にあつた。今でも邸宅はそのまゝ長い〳〵土塀に圍まれて儼存はしてゐるが既にこゝは本宅でない。男がこゝにゐた時分である、一時、玄關に南洋產？の何んとかいふ美しい立派な鳥を金網の籠に入れて飼つておいた。來客が玄關に這入るとすぐそれが目に付く。南洋產の彼は妙な目つきをして來訪者を見て、「お前は何しに來た」と云つたやうなズルさうな顏をするので、來訪者は心の中で「はゝア鴻池の鶴の向ふを張つた玄關番だな」と考へてゐたが、その美しい衣物を着た玄關番はその後間もなく落命して、剝製となつて奥の一と室に飾られる僥倖な身分になつた。そして何時の間にやらそれが住友男の押繪細工のモデルになつたのである。鴻池の鶴は千年も生きて見せるやうな風をして、例の船場の金網の中で戞々嘴を鳴しながらお當がひの土鰌を賞美して暮してゐるのに、住友の美しい玄關番は綿で滿腹して眼にガラス玉を箝められる運命となつた。同じ長者の飼物でも榮枯盛衰はこれほど違ふ。而もこの剝製の彼をモデルにして押繪細工をしたといふ住友男の隱し藝を紹介する前に、邸宅の話から引いて藤田男の網島の本邸の事を少し書かねばならぬ。

その六

藤田男爵邸内に保存された
小森治兵衛の大長寺の事

先代の藤田傳三郞氏に或時或人が斯ういつた、「お邸は前に淀川といふ大流があるし、場所は浪花名勝の網島ですから申分はありませんが、向ふ河岸は造幣局の大つかい煙突が何本も突つ立つてゐて、それから眞黑なやつが年百年中濛々と立昇つてゐるのはチト物騒ですな」とケチをつけた。スルト傳三郞氏は言下に斯う答へた。「いや、それは心の持やう一とつだよ。他などはアノ煙を見る度びに斯う思つてゐる、造幣局から出る金はアノ何本かの煙突から出る煙のやうに幾筋にもなつて四方八方へ岐れてゆくが、その中の餘程太い分

が俺の身代の方へ流れこんで來るのだ、と斯う考へて見てゐると決して惡い心地のしないものだ」。先代傳三郎氏は實際さう考へてゐたのかも知れない。前造幣局長の長谷川翁は或人が「造幣局前の淀川橋を何故洋風のものに架け替へないのです、大阪には八百八橋もあるさうですが、欄干に擬寶珠の着いた古風な橋といふのはアノ淀川橋だけじやありませんか」といふのに答へて、「それはお前さんのいふ通りに違ひないが、アノ橋は藤田傳三郎さんの骨董趣味に敬意を表してアノまゝにしてあるのだ。網島には網島長者の氣分を漲らしておくのが穩當だらう」といつたさうである。それで淀川橋だけは今に至つて尚ほ舊態のまゝ依然として欄干に擬寶珠がくつ着いてゐる譯である。

今の藤田邸の中には現男爵のと、德次郎、彦三郎氏のと邸が三分されてあつた。それで邸内を擴張する必要上、この網島で有名な大長寺といふ寺院の敷地までも併呑してしまつて今では大長寺はずつと北の方へ押出されてしまつてゐる。大長寺は紙屋の治兵衞さんと馴染の小春さんがお十夜のお說敎を聽いて心中をしたといふので名高いお寺である。そのお寺の舊敷地は今日即ち藤田男爵の邸内に取こまれてあるのだ。

その七

住友男の押繪の巧さと
鴻池男の餠搗き一曲の事

藤田男爵の能樂道樂に對して住友男爵の押繪道樂?——これは道樂といふものか何うかは知らぬが、兎も角住友男は押繪が非常な巧い事はその出來上つた代物に就て一見すると誰でも感服する。實際男は時々自分の書齋の机の上へ縮緬の裂だの糊だの鋏だの型紙だのを並べて夢我夢中で細工に餘念のない事が時々ある。それで今日までの男の一番の大作で一番の傑作といふのは高砂の尉と姥で、この押繪の大きさは縱四尺餘、巾五尺餘といふから大分大きなものだ、圖樣は即ちお誂向き通りで中央に一株の老松、枝葉鬱然として左右に張り下に白髮の老翁と老媼あり。一は掻寄を肩にし一は箒を手にしてゐる。背に旭日半ば海上に面を現は

し九皐高く白鶴舞ひ、汐汀靜かに老鴎の遊ぶある事萬づ型の如くで、あるが手際はなか〳〵素人離れがしてゐてお殿樣藝ではない。そして男はこの押繪細工を「美術」と稱してゐるのに見ても如何に自信が深いかを察し得べきである。いつの事であつたか或る洋畫家が男の須磨の別邸にある歐洲古大家の筆に成つた名畫を拜見に出掛けると、男は匆卒として出て來て「私も只今製作中だから見て下さい」といふ。そこでその洋畫家は男が洋畫を描いてゐるのだらうと思つて男に導かれて一室に通つて見ると、男の所謂製作といふのは洋畫でなくて押繪細工の金太郎が片手に熊の子を差上げてゐる所だつたには二の句も出なかつたといふ事である。されば男が何處かへ遊びの旅行にでも出かける時に、侍者が携へてお供をする白い柳の手提行李の中には、極つたやうな縮緬の裂と糊と鋏がある事は餘り誰でも知つてゐる事實ではなからう。

鴻池男にはこれといつて斯んな風な道樂はない。或ひは人の知らぬ隱し藝があるかも知らぬが、筆者はそれを知らない、去年の秋の末の事だつたか。大阪の近在にある鴻池新田でお祝ひがあつた。その時新田の小作人、鴻池家代々の恩顧に與つてゐる新田の小作人たちが餅を搗いたりなぞして大へんな賑ひだつた。此日に男爵は勿論大隈侯などもそこに臨席したが、餅搗きの初杵は無論男爵がやつた。「さアお旦那さまア、しつかりやつてお呉れなはれ」と臼どりの男は男爵にいつた。フロックコートの男爵は「よしきた」と杵を振り上げた格好は實に笑はせたが、トン〳〵と搗くその調子が頗る巧妙を極めたのには誰も彼も感服してしまつた。中にも大隈侯は大きに悦に入つて「アノ位ゐ巧く出來ればイザとなつたら賃搗屋をしても食へるんであるのである」といつて笑つたさうだ。鴻池男爵の隱し藝は先づ餅搗きの一曲に盡きてゐるといふ外はないであらう。

* * * * * * * *

浪花三長者の性格やら家風はざつと比較して見てもこの位ゐ違ふのである。蕪雜を免かれないこの記事で、

三男爵の風貌が聊かでも紙上に躍如たる事を得るならば則ちこの記事の目的はそれで達せられたのである。

我が歸去來辭

田中貢太郎

一

陶淵明は彭澤の令となつた時、郡守の督郵を遣はすに會うて、吾れ豈に五斗米の爲に腰を折つて、郷里の小兒に向はんやと云つて、即日印綬を解いて職を去り、歸去來の辭を賦して、心を以て形の役としてゐた事の非を痛憤し、故郷の田園に起臥して、自然の懷に抱かれ、自由にして無爲な一生を送りたいと希求してゐるが、この心を以て形の役とするの痛憤は、淵明でなくとも、又國の如何、時の如何を問はず、貧にして書を讀んだ人の常に抱く痛憤である。

私にはまだ五斗米の爲に腰を折る官吏としての經驗はないが、醜陋な都會生活の必要から、本然の性を矯めて、小兒輩と伍してゐる事は久しいものだ。隨つてこの醜惡な現實から逃れて、閑雲野鶴、悠々たる故郷の涅槃郷に身を置きたいと云ふの願は、夢寐にも忘れた事はないが、考へて見れば、淵明などの云つたやうに、そんな詩的なものでない。雲は無心にして岫を出で、鳥は飛ぶに倦んで還るを知ると云ふやうな自然の光景は在るかも知れない。東皐に登つて舒に嘯き、清流に臨んで詩を賦すと云ふやうな樂しみは在るかも知れない。併し封建的差別的の陋習の固い田舍では、門閥も何もない人の子には、親戚の情話を悦び、琴書を樂んで以て憂を消すと云ふやうな無爲閑寂の境を與へるものでない。私は常に、無智と輕薄と固陋との雰圍氣に包まれた現實の故郷を呪咀するものであるが、無垢の頭に感觸して、魂の奥深く沈んで

ゐる詩の故郷は、ともすると意識にのぼつて來る。わけて生活の不安と倦怠とに面した時には、故郷の自然と人事とが蜃氣樓のやうに眼の前に展開する。

二

其所は南の國にある港入江の左岸になつた村で、背後には靜かな入江の水があり、前には森漫たる海があつた。そして海の藍色は空の碧と一所に融け合つて間斷なしに遠くの沖合から寄せて來る波は、白い砂濱に崩れてゐた。その海では地曳網も曳いた。中斷してゐる所はあるが、海岸には黑松の林が續いてゐた。松林の左右は耕地になつて、秋は甘薯の葉が黃ばみ、春から夏にかけて、麥畑の麥を袖垣にして胡瓜茄子南瓜などの瓜類が一面に植ゑられた。二月の末になると、もう黃金色をした胡瓜の花が暖さうに咲いた。胡瓜は半農半漁の土地のでやる副業の中の尤も大きな副業であつた。戰爭前にはそれを浦鹽方面に輸出して行く汽船が來て入江に横はる事があつた。氷もめつたに張らなかつた。雪は風花のやうなものが降るには降つたが、五六寸も積ると云ふやうな事は、三年に一度か四年に一度位しかなかつた。

入江に沿うた狹い細長い村は、東端が山地になつてゐた。それは入江の東方を廻つた丘陵の一部分で、其所には水田があり、池があり、小川があつた。西端は入江の咽喉元になつてゐて、入江に向つた方には、浮山の造船所があつた。その附近は大工や鍛冶の職人や船員などが主に住んでゐた。入江の口になつた外海に面した松林は、近頃公園地になつてゐた。村の中央部は千二三百戶ある戶數の八百以上を占めた上に、村役場があり小學校があつて、實質的にも中央となつてゐた。私の家はその中央部落にあつた。

僻遠な田舍ではあるが、海と山とを控へてゐる爲に、朝夕の散歩は何時も眼新しく思はれた。夕方入江の岸を歩きながら、風のない水の上に白い大きな帆をつけてゐる帆前船を見てゐると、落ちかゝてゐた夕陽が不意に前岸に遮つた丘陵の背後にかくれて、その後の空が金茶色に夕榮して見える。其所には黑い鳥の影

を二つ三つ印してゐる。月の夜は殊に宜かつた。水蒸氣のすくないこの土地では、海の果から登る月は、何時も赤く水々してゐた。月は何處でも宜かつたが、公園地から見る月は猶更宜かつた。前岸は入江の西方を抱いてゐた丘陵が海中になだれて岬角をなしてゐた。月がその岬角の空にかゝる時の姿が面白かつた。岬角の巖礁には、白い波が絡まつて見えた。

公園地のある西端の部落は、造船地として、和船の碇泊所となつてゐたので、何處にもある船著場の空氣があつた。其所には三味線を引く女のゐる家があつて俗惡な娛樂を買ふ事が出來た。その土地は一帶に桃の木の生育が好いので、桃畑を作る者が多かつた。桃は又人家の庭にも垣根にも生へてゐた。それが爲に春になると、××市から潮干をかねて屋根船が來た。夏は公園地の海岸に海水浴の客が溢れた。入江に沿うた各村へは××市を中心にして小蒸汽が通ふてゐた。

西端の部落を除くと、他は蕭散な村落であつた。全體としての村民の休息日は、盆と正月と、端午の節句と、夏と秋の氏神の祭禮であるが、正月は警察で干渉して舊正月をさせないやうになつたので、陽曆の正月に不承無承に一日休むだけとなつた。その他、舊曆の三月十五日に、海岸へ出て酒を飲む風習もある。この日は岬角のある村の龍王神社の祭で、可成の人出がある。正月から春の農隙を見て、村の若衆が素人芝居をしたり、男の子の生れた家に、正月早々大凧を持ち込んで、數日御馳走を受けながらそれを揚げたりする習慣もあつたが、これは風俗改良會と云ふやうな會が組織せられると共に、禁じてしまつた。

私は二十二三歲まで村を放れなかつたので、村の風俗習慣に關しては多少知つてゐる。その中で私自身の關係した事のある風俗の一つを話さう。それは私が十五になつた年の秋の事であつた。今はどうなつたかも分らないが、この村では男の子が十五になると、町內の若衆組に仲間入りをする事になつてゐた。それには一升の酒を持つて行つて、樽納れと云ふものをやつて仲間入りの印としたものだが、一度その仲間入りをし

た者は、女房の出來るまでその中にゐる事になつてゐた。若衆組のする事と云つては、氏神の祭の日に、町内の幟を建てたり、繪馬提燈を點けたりするのが唯一の仕事で、他は三味線の稽古をしたり、酒を喫むなど種々の口實をこしらへて、通りの駄菓子屋や散髮屋で野良くらしてゐた。そして晩になると娘のある家へ遊びに行つた。それで娘が他町内の若衆か、他部落の若衆かに好い顏でもすると、娘の家へ惡戯をした。娘の家の寢靜まるのを待つて、手に手に海岸の墓地から石碑を擔いで來て、緣側に据ゑたり、附近の井戸から釣瓶を集めて來て、庭前へ釣瓶の山をこしらへたり、甚しいのは娘の家の作物を拔いたりした。その若衆組に這入つた年の秋、私は女房かたぎと云ふものをやつた。

ある日、西端の部落にある叔父の家へ行つて、夕方歸つてみると、若衆の寄合があると云ふので、何時も若衆の集まる駄菓子屋へ行つてみた。障子を閉め切つた薄暗い室の中に十五六人ある連中が集つて、小聲で何か相談してゐた。私が障子を開けて這入ると、一寸默つて皆が私の方に顏を向けた。

「おゝ××か、」と云つて、頭だつた芳吾と云ふ男が云つた。私の心は何かしら緊張して來た。

「今晩、春さんが嫁さんをかたぐきに、行かねばならんぞ」と、芳吾が又云つた。私は面白くもあれば、恐ろしくもあつた。

このあたりには掠奪結婚の遺風とも云ふべき習慣があつて、正當に結婚の出來ない者は、女を掠奪して來て結婚した。女と關係のある者は解決するにも方法があつたが、少しも知らない女では始末が惡かつた。第一女は恐れて泣き叫んだ。それを無理に引擔いで來て、女に因果を含めると共に、一方女の家へ仲人をやつたが、それは何時も事件が紛糾した。それが爲に警察沙汰になつて、一町内の若衆が珠數つなぎになる事があつた。併し私の目擊したのは、女との關係があつて、女と打ち合せが出來てゐた。男の名は乘次と云ふて、貧しい農家の次男で、もう二十七八にもなつてゐ

たが、兄の家に厄介になつて、地曳網などで獲れる小魚の行商をやつてゐた。痩せぽつちで干枯びたやうな男であつたが、木遣節が上手であつた。海岸の松の下で、地曳網のあがるのを待つてゐる魚商人の中へ交つて、何處にそんな聲があるだらうと思はれるやうな好い聲で、よく大津絵節などを歌つたゐた。夏の夜などは、入江の上へ小舟を乘り出して、木遣の好きな若衆に木遣の手ほどきをしてやつた。舟の小縁へ腰をかけて、右の指先で輕く耳を押へて、反り身になつて歌つた。月の好い晩などは、あたりの者が海岸に出て來て、その聲に耳を傾けてゐた。

　女の家は入江に臨んだ村でも中農の部に屬する家であつた。三人の子供があつて、女は總領娘であつた。下の二人は男で、裾の弟は、私と學校友達であつた。女は器量が好くなかつたので、結婚が後れてゐる中に、春次と關係の出來たものであつたが、その秋になつて急に結婚の口があつて、その冬には隣村へかたづかねばならない事情が起つてゐた。

　女の家の寢靜まる頃を計つて、十一時過ぎから皆で出かけて行つた。竹藪に圍はれた藁葺の農家で、その隣につんぼ八幡と云ふ聾者の參詣する八幡宮の小社があつて、傍に一株の大きな黒松が聳えてゐた。私等はその根本にかくれて、女の家に忍んで行つた春次をはじめ三四人の頭だつた者の首尾を待つてゐた。曇つた暗い晩で、入江の西の空で、細長い稻妻が走つた。岸に近く淀泊してゐた、一艘の和船の帆檣にこの光が一條青くかゝつた。

　眞黒い頭の二抱もありさうな者が眼の前に立つた。このあたりで夜網を打つてゐると、何處からともなく大入道が出て來て、默つて腰の魚籠を覗いて行くと云ふ事を聞いてゐた私は、眼をつぶつて松の幹へ抱き付いて傑た。

『宜かつた、宜かつた。皆歸ふ。』と、その大入道が[illegible]を出した。それは女の家へ行つてゐた連中の一人で、女の着物を包んだ風呂敷包を首にかけてゐた。春次と女とで手筈をしてあつたやうに、一人が一握の砂を撮

んで奥の雨戸へかけると、女は著代の風呂敷包みを以て抜け出て來たのであつた。

女はもう網中と云ふ地曳網の網本の納屋の二階に行つてゐた。連中はその下の室に集まつて、賴んである仲人の所へ走る者もあれば、酒の仕度をする者もあつた。私は土間へおりて凉爐へ火を起してゐた。木炭の上で一撮の枯松葉を燃しながら凉爐の口をバタバタ煽いだ。庭の入口では楠江と云ふのが畑から拔いて來たばかりの葱をこしらへてゐた。其所へ二階から銀次と云ふ若者の一人がおりて來た。

「春さんはどうしよりや、」と、楠江が顏をあげて聞いた。

「話をしよる、」と、銀次は笑顏をした。

「どんな顏をしちよりや、」と、階子の下にゐた一人が云つて笑つた。

銀次は用事がありさうに下駄を履いて出て行つた。それと入り違つて二人の小若衆が這入つて來た。それは女を連れ出すと共に、女の家へ通知に行つた者であつた。二人が恐る恐る女の家の庭前へ行つて、「お前さん所の娘さんは、春次がかたぎましたきに、つけとどけに來ました。」と云ふと、内から雨戸がさつと開いて、刀を持つた女の父親が姿をみせた。一人の小若衆は下駄の拔けたのも知らずに逃げて來た所であつた。

女の家では仲人の言葉を受け付けなかつた。私等は毎日網中の納屋へ詰めてゐたが、まだ子供心の失せない時分であるから眞面目な顏をして、じつとしてゐるのが苦しい。欠伸をしたり、背のびをしたり、眼をくるくるさして頭だつた若衆の顏をみたりした。この時、芳吾の口中が痛んでゐた。芳吾は赤蜻蛉の黑燒がその藥になるのを思ひ出した。

「赤蜻蛉を三つ捕つて來たら遊ばしちやる、」私等二三人の小若衆は裏の田甫へ出て、稲を刈つた跡の寂しい田の畷を往つたり來たりて、もうすくなくなつてゐる赤蜻蛉を追つかけた。

仲人は女の家へ半月ばかりも行つたが、女の父親が頑として聞き入れなかつた。併しそれでも女が歸らぬ

と云はないので、父親はとうとう女を勘當して了つた。春次はそれを幸にして女と夫婦になつたが、その內に女の母親が亡くなり、續いて二人の男の子が亡くなつたので、女の家では甥を養子にしてあつたが、その甥も間もなく亡くなつたので、父親は仕方なく春次夫婦を入れて相續人とした。私が四五年前秋口に歸つて、月の好い晩に散歩してゐると、何時か私等がかくれた事のある八幡の松の木の下で、春次が納涼臺に腰をかけて、二三人の若衆に木遣を敎へてゐた。

三

侮蔑の眼を向けられても、己れを知つてくれる人がないでもなかつた。私は呪咀しながらも詩の故郷にあこがれずにはゐられなかつた。そして時折り歸つて行つて、一番に訪ねて行く所は、平田と云ふ長い間村長をしてゐた老人の許であつた。其所は通りに沿うた人家はづれの所にあつた。脊のづぬけて高い、黄濁色の澤々した皮膚をしてゐた。頭髮も早くから眞白であつた。私は「平田の小父さん」と呼んでゐた。軍人の出身で、種々の事業をやつた人であつた。汽船の會社をこしらへたり、帆船で南洋へ貿易に出かけて行つた事もあつた。日清戰役には人夫長となつて支那にも行つてゐた。村長になつたのは、その後一二年してゞあつた。この老人にはじめて逢つたのは、私が自分の家のやうにして遊びに行つてゐた友人の所であつた。友人のお母さんは、この老人の妹であつた。それは支那から歸つた際であつたらしい。黒い繻子のやうな地の上を細かく刺した防寒用の外套を次の室へ披いで、友人のお母さんを相手にして酒を飲んでゐた。磊落豪放と云つたやうな質の人で、激しい感情の持ち主であつた。村長としての手腕も鮮かであつた。數年間行き惱んでゐた小學校の改築問題も直ぐ解決した。避病院を設けた際には、附近の者が反對して、今にも自宅を襲撃して來さうになると、家の者は親類にやつて置いて、軍人志望の甥を呼んで來て、刀を枕許に用意しながら、「おれが叩き斬るぞ、好く見ておけ、」などゝ云つた。そんな事で敵も多かつたが、村全體からは器局を

認められてゐた。この數年は老衰して見えるが、酒も非常に强かつた。私はこの老人に可愛がられた。貧乏人の子が書物弄りをして、村の者から嘲られてゐるのを見て、小學校の教員試驗を受けるやうにしてくれたのも、この老人であつた。私はそれが爲に自活の道を得て、好きな讀書をする事が出來るやうになつた。老人は世間を多くみてゐたので、新聞記者の生活なども知つてゐた。私はこの老人の行李の底にあつた三冊になつた活字本の八犬傳の破損したのを借りて、修繕しいしい讀んだ事もあつた。

平田の小父さんに關聯して思ひ出すのは、私が漢籍を習つた山田と云ふ先生である。顔の赤黑い、海老のやうに脊を曲げた老人であつた。東端の部落になつた丘陵の間に生れた者であるが、私が漢籍を習つた時分には、私の部落に來て親類の隣にゐた。奥さんもあつたが、何時も陸軍將校で九州の方にゐた婿の所へ行つて、孫の世話をしてゐたので、先生は何時も一人であつた。小さな二疊二間しかないやうな家で、一間で寢て一間で食事をしてゐた。朝早く私が文章軌範などを抱へて行つてみると、先生はまだ寢床の中にゐて、枕許の瓦火鉢の縁を煙管でコツコツ云はせながら煙草を喫んでゐた。

「おゝ、來たか、來たか」と先生は起き上つて、庭の草履を穿いて外便所に行つた。

私はその後で室へ上つて、重い木綿の蒲團を疊んで押入に入れたが、氣をつけて見ると、犬か猫かの上つて來たやうに、枕許にも何處にも小砂がザラ〱してゐる。これは夜便所に行く先生が、履物を穿くが面倒なので裸足で行く爲であつた。

その中に先生は庭先の大きな柿の木の下にある流槽の上で顔を洗つて、土瓶に水を入れて軒下の竈にかけて枯枝を燒きつける。飯のない時には、小さな丼鉢のやうな釜へ二三合の米を入れて竈にしかけた。そんな時には、私も手桶を持つて行つて隣の車井から水を汲んで來たりした。隣と先生の家の間には、猫の額ぐらゐな空地があつて、朝顔や雞頭を作つてあつた。

すると茄子の紫の花が見えてゐたりした。

飯の構へが出來ると、先生は机の引抽を探して、錢をチリ／＼云はしながら、「すこし待つた、お菜を買うて來る、」と云つて出かけて行つたが、歸つて來た所を見ると、鰯を一つ二つ持つてゐる時もあれば、何も持たずに歸る時もある。酒好きの先生は、飯前に一杯やりたくなると、お茶と云つて出かけて行つて、茶碗に注いで貰つた冷酒を店先で一二杯喫んで歸つて來た。決して溫めた酒は喫まなかつた。宴席へ招かれても、冷酒と云ふ事になつてゐるので、「これは山田の先生のお酒、」と云つて、別に冷酒の銚子を乘せて來た。

月々の私等のお禮も酒であつた。酒を持つて行つた日には、私にも喫めと云つて茶碗へ注いでくれた。「酒を殺して喫んで何が旨い。」と云つて、酒を溫めて喫む人を罵倒した。

先生には男の子があつて、他縣で土木の技手をしてゐた。その息子と九州にゐる婿の許から、生活費を送つて來てゐたから、酒と讀書に日を暮らしてゐた。一體に氣位の高い、武士氣質の失せない先生は、人を眼下に見てゐた。書物の講義の時には、村の富豪や村長や小學校の校長やを例にあげて、それを片つ端から罵倒した。私がある時、平田老人の家に大掃除の手傳をしてやつて、塀の下の草をむしつてゐると、山田先生が通りかゝつて、「馬鹿、貴樣は權門に媚びるか、我黨ぢやないぞ、」と云つて憤つた事もあつたが、この平田の老人と、山田先生とは非常に仲が好いので、山田先生は何時も平田へやつて來て、一所に酒を喫んだ。興が湧いてくると二人で義太夫をやつて、尻續ぎとか濁り拔きとか云ふやうな事をやつた。濁り拔きでは、「いまころははんしちさん、とこてとうしてこさるやら、」と濁音をさけねばならなかつた。又音を拔いて、は拔きとか、と拔きとか云ふやうな事もあつた。「いまころあ あんしちさん、」と云ふやうに語つた。約束に反したものは罰盃を喫まされた。平田老人のは幾等か義太夫の曲節をなしてゐるが、山田先生のは棒讀みであつた。

「眞稔(なとし)、」と、山田先生が平田老人の名を呼ぶと、平田

老人は、『收』と云つて、山田先生を呼んだ。山田先生は收造と云ふ名であつた。ある時、隣家の青年で水兵になつてゐる者が父親の所へ手紙を送つて來た。それはこれまで乘つてゐた艦から、『鎭中』と云ふ艦に代つたと書いたものであつた。鎭中は日清戰爭の際支那から獲た小戰艦であつた。無學な父親はそれを山田先生の許へ持つて來て、山田先生に讀んで貰つた。文字はあつても世間にうとい先生は、『鎭中』の事を知らないので、これは同じ艦の中の鎭臺のやうな所に代つたものだと云つた。それを知つた平田老人は、山田先生の顏を見ると、『收、鎭中はどうぞ、』と云つて、哈々と大聲を立てゝ笑つた。これには山田先生も閉口してゐた。

山田先生の得意なのは、詩であつた。先生の詩は村上佛山や、土佐の名僧と云はれた月曉に負ふ所が多かつた。月曉の有梅花處詩集は、何時も机の上にあつた。山田先生は、詩の中でも詠史が旨かつた。後三條天皇を詠じたものであらう、一劍斬壺汝何用、手排ニ

黃霧一觀一靑天一と云ふやうな句が今に私の記憶に殘つてゐる。俳句もをりをり作つた。『珠數なりに南天さがる寺の庭』と云ふやうな飄逸なものがあつた。私はこの先生に敍事の文章を學び、漢詩の平灰を習つたが、惜しい事には、先生は明治四十四年十月になつて亡くなつた。私は昨年歸省した時、海岸の松原の下にあるその墓を訪ふた。早く石碑にするは不吉だと云ふ地方の迷信の爲であらうか、まだ木標の上に屋根を爲したまゝであつた。あたりには黃ろな月見草の花が著い朝日に照されてゐた。

四

不斷の時の流れは故鄕の古老を攫ひ去つて、年々にすくなつて行つた。私の家から近い所では、高坂と云ふ老人であつた。悴の大きな眼鏡をかけて何時も新聞を讀んでゐた。村長にもなつてゐた事があつた。××市から移つて來た武士の家で、何處となく物越しに氣品があつた。老人はもと自由黨の有志で、明治二十五年の選擧干涉の際には、壯士を率ゐて西郡の同志を擁

助しに行つたが、武士氣質のお母さんは、立派に死んで來いと云つて我が子を激ました。其所には私と友達の子供があつたので、私は好く遊びに行つて、木版の繪本太閤記などを見て、坊子打ちと云ふものをやつた。奥さんは痩せた淋しさうな女で、何時も賃仕事の裁縫をしてゐた。私が今年歸省して、隣の雜貨店へ行つた時高坂老人は其所に購讀してゐる地方新聞を借りに來てゐた。

高坂老人の次に中城と云ふ老人がある。これは西端の部落の人で、ある造船會社の社長をしてゐた。明治元年の二月に、堺の警衛をしてゐた土佐藩の兵が佛兵を銃撃して隊士二十人の割腹を命ぜられた事があつた。中城老人もこの隊士の一人であつたが、僅に十六歳の少年といふ所からその選にもれたものであつた。赤く塗つた鐵格子の這入つた會社の事務所の火鉢の前で、煙管を持つた方の肱に、片方の掌を輕くかけてよく煙草を喫んでゐた。言質を重んずる立派な紳士であつたが、私等の仲間には惡く云はれたものだ。

まだ古老と云ふ程でもないが、村第一の富豪で德望のある人に、川島といふ人があつた。縣會議員になつて議會の副議長までやつた事があつた。村はこの人の意見によつて政黨の色彩が變つた。私はこの人の弟になる人と友達であつたので、よく遊びに行つては一所になつて俳句の運座などをやつた。この人は養生家で何時も附近の田圃を散歩してゐた。獵期が來ると、この瘦ぎすな高い脊には銃があつた。

かうした先輩と逢つて話すも面白いが遠慮があつて氣づまりがするので滅多に訪うた事はない。歸省して度々足を向けるのは、農業をやつてゐる幼な馴染の家か、それでなければ、村役場や小學校などであつた。役場と學校には何時の時代にも、私と心安い先輩や友達の一人二人はゐた。そしてその先輩や友人と話をしてゐると、その終りは屹と酒になつた。酒を喫む所は通りに向いた肴屋の二階であつた。亭主は顔の小さな人の好い男で、私の家とは親類のやうに親しくしてゐた。村にゐた時の私は、毎日その店先で野良くらして

ゐた。私に限らずその店へは、附近の野良くら者が集つて來て、將棋をさしたり、娘の噂などをしたものだ。其所には水兵になつてゐた私の友達があつた。

つむりの位置の正しくない貧乏人の子には、親類と云ふ者は、陶淵明の云ふやうな懷しい者でないが、母の從兄の今年の春まで村役場にゐた早川と云ふ者とは、心が合ふてゐた。この人は、長く東京で學生生活をしたゐたので、よく種々の話をして聞かした。口數の寡い、むつちりした人であるが、酒の席では面白かつた。私はこの連中と肴屋の二階で喫んだり、西端の部落へ行つて怪しい女のゐる家で喫んだりした。

五

故郷から受ける不快がないとしたなれば、私は魚を釣つて老を養ひたい。海に沿うたこの村では、魚釣にはまたとない便誼があつた。入江の磯で徒歩釣に行つて、鯊、かいづ、こつといなどを釣るも好い。小舟を漕いで入江の上に行つて、にろぎ、ちぬなどを釣るも好い。又港の口に出て、小鯛、鱚子、べらなどを釣るも好い。田圃の間にある池や小川をあさつて、鮒や鰻を釣るも好い。私の小學校の先生で、福島と云ふ老先生は、高級の船員となつてゐる息子に呼ばれて、神戸の方へ行つてゐるが、夏になると屹と村へ歸つて來て、港の口で鱚子や小鯛を釣つてゐた。この老先生の小學校に勤めてゐる時には、生徒は池へ這入つて藻の中でつかまへた海老を持つて來た。授業が終ると、老先生はその海老を持つて急いで家に歸つて、海に出かけて行つた。昨年私が歸省してゐる時に、此老先生が釣の餌にする寄生貝を拾ひに行つて歸つて來るのに、ばつたり行きあつた。老先生は私の顏を見て、「ふとつた喃、」と云つた。

北廓夜話三題

村松梢風

災難

誰袖といふ花魁があつた。積み夜具の二度もして、その楼では可成り古顔の方であつた。中丈のすらりとした、細面で眼に險のある、別段飛び離れた標緻といふではないが、何處となく仇めいた容子が男ずきのする顔だちであつた。負けず嫌ひの氣性で、稼ぐことに掛けても滅多に朋輩の後へは落ちなかつた。

然し、誰袖には唯一つ瑕があつた。それは彼女がすこし跛であることであつた。跛といつても、襠の裾に蔽されて氣付かぬ人さへある位のことに過ぎなかつたが、注意して觀ると彼女は少し左の足を曳いて歩いてゐた。彼女自身がこの足を氣にしてゐることは非常なものであつた。彼女が自分の足に對して無關心で居たのは恐らく寢て仕舞つてから位のものであつたらう。せつせと通つて來た客が少し遠のきでもすると、この足を見て厭氣が差したのではあるまいかと、彼女は直ぐに邪推を廻すのであつた。

どうして誰袖はこんな跛になつたのか……。その話をする時位彼女は厭な氣持になることはなかつた。

それは誰袖が、遙々と故郷から連れられて來て、初めて廓へ身を沈めてから半歳ばかり經つた時分であつた。變つた此の土地の習慣も、今は大略呑み込んで來た。勤めの淺間しさ厭はしさも、思ひの外早く忘れて仕舞つた。が、さて忘じ難いは故郷の事であつた。懐かしい人々の顔、懐かしい山や河——。彼女は故郷から來た手紙を讀んでは泣かされたり、連子から夕陽の落ちて行く方を眺めては悲しい思ひを馳せたりした。

或夜初會の客が上つた、二十五六の痩せぎすな男で、べらべらした飛白の着物に白い兵兒帶を巾廣に卷

付け、てら〳〵油の光る頭髮を綺麗に分けて素通しの眼鏡を掛けた容子は、書生にしては厭味だがお醫者の代診と見るには少し野暮過ぎる風采であつた。通りいつぺんに遇つて寢に就いたが、客も初會の手持無沙汰、紋切形の故鄕は何處などと話し掛けるを、是でも東京ですとはぐらかす程のまだ度胸もなく、つい正直に答へると、それでは僕と同國だと客は意外だといふ顏をして云ふのであつた。誰袖も駭きながら尙段々と話し合つて見ると、少し離れた土地ではあるが、男の方では彼女の生れた町の邊をも可成り詳しく識つてゐた。千里離れて故舊に遇つたやうな、誰袖はなんとも云へない氣持になつた。其の夜彼女は心を籠めた待遇をして男を歸して遣つた。

男は間もなくうらを返したが、其の後はちよい〳〵通つて來始めた。最初のうちは、誰袖は男に對して唯何ともつかぬ懷かしさを感じたに過ぎなかつたが、それが何時とはなく戀に變つてゐた。男は醫學を勉强してゐると云つた。其の樓は可成り金の掛る方でもあつたが、書生の身ではさう繁々來られる筈もなかつた。此方から呼び度いにも、誰袖にはまだそれ丈の働きはなかつた。仕方がないから、彼女は每日男に宛て丶手紙を出した。男の下宿は上野の近くであつた。然し誰袖は、半歲前に故鄕から出て來た時、新橋の停車場から吉原迄俥へ乘つて通つて來た以外にまだ一度も東京を見たことがなかつたから、上野といふ處がどんな處か想像もつかなかつたが、其處に男が居ると思へば無闇に上野が戀しかつた。彼處が上野だと敎へられた街の彼方にこんもり茂つて見える森を、彼女は明暮れ廊下に佇立んでは眺めるのであつた。

男は絕てもう一と月近く顏を見せなかつた。手紙の返事には、近頃體の具合が惡くて困るといふやうなことが書いてあつた。下宿屋の一と間に淋しく煩つてゐる男の有樣を誰袖は心に描いた。彼女は心配で〳〵堪まらなかつた。同時にひとしほ戀しさが募つて來て、矢も楯も堪まらなく男に會ひ度かつた。

其の夜は近頃にない閑な晩で、十二時過ぎるとばつ

たり客が絶えて仕舞た。階下の名代部屋を出た誰袖は、寒さうに胴拔きの袖を胸の處で掻き合せながら、ばたんくと草履を鳴らして裏階段を上つて行つた。其處は廊下の曲り角の稍廣くなつた板敷で、向うの壁に窓が一つ明いてゐた。其の窓は、誰袖が毎日何遍となく佇立んで、戀しい上野を眺める場所であつた。

明けつ放しの窓から冷たい夜風が流れ込んでゐた。誰袖は窓へ身を寄せて外を眺めた。眞暗な夜であつた。海のやうに深い暗闇の中に、心細い燈火が點々として滲染んでゐた。

窓の下は一寸した空地で、其處から裏の方へ廻つた處の木戸口から、臺のうちはよく人が出這入りをしてゐた。いつそ此樓を遁げて仕舞はふか、と誰袖は突然思ひついた。此の窓から飛び下りて、あの木戸さへ明けて仕舞へば外へ出られるのだ、上野迄位は何としても行かれぬことはあるまい、不意に訪ねて行つたら男がどんなに吃驚するであらう?

廊下を歩く足音も、表通りで客を呼ぶ聲も聞えない。死んだやうに靜まり返つた廊の內に、是ばかりは絶えることのない新內の三味線が何處からともなく響いて來る。誰袖は最早押へ切れない氣持になつて仕舞つた。自身の座敷へ行つて見ると、幸ひ客も新造もぐつすり睡り込んでゐる。彼女は上へ羽織を引つ掛けたばかりで、用簞笥の引出しから小遣ひの入つた巾着を出して懷へ入れると、そつと拔け出して以前の處へ戻つて來た。そしてぶるぶる慄へる足を踏みしめて、窓から廂の端迄這ひ出した。彼女は眼をつぶつて其處から身を躍らせた。

氣が付いた時には、彼女は冷たい土の上に倒れてゐた。軈て暗がりを手で探りながら身を起さうとしたが、どうしたものか足が潰れて仕舞ひさうに痺れて起つことが出來なかつた。それでも勇を鼓して、這ふやうにして木戸の側迄辿り着いた。浮つかり閉め忘れてあつたものと見え、手を掛けると戸がするくと明いた。塀の向う側は僅かばかり埋め殘されてゐる田圃で、其の脇に細い路が通つてゐた。彼女は無我夢中で

其の路を辿つて行つたが、漸うのことで町並になつてゐる稍廣い通へ出た時には、最早我慢にも一足も動けなくなつて仕舞つた。

土手の方からガラ／＼と歸り車が一挺遣つて來た。祝儀だけ、縄暖簾へ運上に納めたのであらう。梶棒を左右に振りながら、好い心持さうな鼻唄で遣つて來たやつ。不意に眞暗い軒下から呼び掛けられると、提燈を振り落さんばかりに吃驚して足を停めた。

上野迄遣つて下さいといふ聲の主を、車夫は無遠慮に提燈を突き出してじろじろ眺めた。眞紅な胴拔きの上へ黒縮緬の羽織を着て、而も裸足で慄へてゐる女。一目で廓の駈落者と知れない筈もないが、空車を引いて歸る矢先へ思はぬ儲け仕事と思つたか、直ぐに梶棒を卸して誰袖を車の上へ抱き上げた。

何處をどう引き廻されたのか誰袖には判らなかつたが、彼是一時間も經つたらうと思はれる頃、と或裏町へ曲り込むと、車夫は一軒／＼提燈を振り翳して歩いたが、最後に二間々口ばかりの門口に、「商人宿」と記した懸行燈が灯の消えたまゝ掛つてゐる家の前で車を停めた。

とん／＼と割れる程戸を叩くと、軈て寢恍け聲で應へをしながら内から戸を明けたのは此家の主婦であらう。蓬亂れ髪をぼやぼや顔へ垂らした三十五六の大年增、美しくもない胸を露はに寢卷の上へ紐一本しだらなくしめたばかりで、三分心の洋燈を片手に車上の客を透し見し怪訝さうな顔をした。

誰袖が男の名を告げて一寸呼んで貰ひ度いと云ふと、直に主婦は取つ付きの梯子段から二階へ上つて行つたが、格別待つ間もなく男を呼び起して戻つて來た。男は誰袖の顔を見ると譬へやうもなく吃驚したが、見る／＼其の顔に當惑の色を浮かべた。木綿のどてらに洗ひ晒しの浴衣を重ねて着た男の容子は、廓へ來る時とは別人のやうに見窶らしかつた。然し誰袖はそんなことを考へてゐる餘裕は無かつた。漸との思ひで男の處へ來た嬉しさと安心とで彼女は胸が一杯になつてしまつた。

この場合、男はさう何時迄もぼんやり立つてゐる譯にはいかなかつた。男は、怪我をしてゐるらしい女の體を抱くやうにして二階へ連れて上つた。暗く煤ぼつた二階は障子などが破れて、階下よりも一層汚ならしかつた。男の部屋は廊下の行き止りの三疊であつた。女を廊下へ立たせて置いて、男は惶てて汚れた唐草の布團を丸めて隅の方へ押し遣つたり、脱ぎつ放しの着物を押入れの中へ抛り込んだりしたが、彼は肝心な物を隱し損ねて仕舞つた。誰袖は、壁に掛つてゐる朱漆で「千金丹」と書いた鞄だの白張りの洋傘などに眼をつけて、思はず其の場に立ち竦んで仕舞つた。醫學を勉强してゐると云つたが、机だの書籍のやうな物は一物も見當らなくて、隅の方に賣藥の箱が積み重ねてあるばかりであつた。

流石に男も極り惡く、さりとて今更實は斯う斯うとも謂はれず、男女は暫く異樣な顏を見合はせてゐるばかりであつたが、軈て男の方から、一體どうした理かと口を切り出した。それでも誰袖は默つてゐた。彼女は何ともいへない氣持になつてゐた。男に瞞されてゐたのだと思ふと腹が立つたが、其の男が千金丹賣りであつたことを考へると、急に我が身が恥かしくなつた。道々あゝかうと考へて來た事が殘らず引つ込んで仕舞つた。貴郎に會ひ度いばかりに廓を拔て來ましたといふ言葉が、咽喉の眞中へ閊えてまご〳〵してゐた。

夫れよりも何よりも、誰袖は足の疼痛に堪へられなくなつて來た。疼痛の箇所は左の膝節の邊であるが、それがミリミリ頭の方迄痺れて來た。彼女は横つ臥しになつて、齒を喰ひしばりながらほろ〳〵涙を零して苦しがつた。それを男は親切に介抱して呉れた。女の膝に手をあてゝ見て、骨が挫折てゐるらしいと云つて男は心配した。然し誰袖にはかうした男の態度や顏つき迄が何となく厭らしく感じられて、矢鱈無性に癪に觸つて堪まらなかつた。死んで終つても構はない、誰も居ない處へ行つて仕舞ひ度い――と誰袖は心の内でじれてゐた。

車夫の注進によつて店から追手が驅け着けて來た時は、もう夜が白々明け始めてゐた。店の者はいきなり此の部屋へ飛び込んで來たが、髮も毀してうん〳〵呻いてゐる誰袖と、側で途方に暮れたやうな顔をして座つてゐる男と、それから例の千金丹とを見廻して、何れも云ひ合せたやうに、花魁冗談ぢやありませんぜといふ顔をした。

誰袖は厭應なしに引つ抱えられて、表に待つてゐた俥へ乘せられた。男も門口まで出て來て、呆氣に取られたやうな顔をして見送つてゐた。

俥は合ひ箱であつた。忠どんといふ頭の禿げた人が横から碇かりと誰袖を抱いてゐた。忠どんの太い腕に體を委せてゐると、誰袖は何んとも云へない安易な氣持を覺えて來た。

先づ宜かつた——と思ひながら、それでも誰袖は、もう一度俥の上から振り返つて見た。

謀

通稱を秋さんと呼ぶ若旦那があつた。天下に若旦那も尠くないが、この秋さんぐらひ結構な身分の若旦那も先づ滅多になかつた。

秋さんは日本國中に鳴り響いてゐる東北のさる大地主の一人息子で、中學だけ郷里の方で卒業ると、其の後はずつと東京に住まつてゐるのであつた。勿論遊學といふ名稱の下に來てゐるのであつたが、然し秋さんは學校は何處へも行つてゐなかつた。尤も最初のうちは、半歳一年と少しづつ學校も二三覗いて見たのであつたが、何れも學期試驗を受ける迄の辛抱は續かなくて廢めてしまつた。そして現在は小石川に立派な家を借りて女中婆やを使ひ、一週に三度謠曲の先生が出張して來る時の外は何の用事もなく遊び暮してさへゐれば宜かつた。學校を廢めたことに就て、日本の大學は何れも是れも使用人を養成する爲の學問しか敎へないのだから自分には不必要である、などと秋さんは高慢らしい冗談口を利いて見たりすることもあつたが、勿論そんな理由のあらう筈もなく、只何となく面倒臭か

つたことと、今一つは月々有り餘る小遣ひを殘ぬやうに費消つていかなければならないといふ責任が、迂路々々學校などへ通つてゐる時間の餘裕を與へないといふ點もあつた。

然し、單に是れ丈のことならば、何も秋さんを日本一の若旦那でもあるかのやうにいふ迄のことはないが、猶此の外に彼は天與の寶とも云ふべき物を持つてゐた。それは秋さんの容貌であつた。秋さんは稀代の美男子であつた。

男が好くて金持なら大概馬鹿でも女は惚れるのに、秋さんは申し分のない當世の才子で、三拍子揃つてゐるのであるから、女がわい／＼騷いで寄つて來るのも無理はなかつた。然し是では秋さんとても身が持てさうもない道理だが、其處が世の中は方便なもの、いい加減女に騷がれても秋さんは大して有難いとも嬉しいとも感じないで、蟻の甘きにつくと一般至極當然な事のやうに觀察してゐるのであつたから、大した脫線もなくて濟み、是を女の方から觀ると、謂はば惚れ加減を通り越したとでもいふべき代物であつた。

或日のこと、秋さんはふと氣が向いて久し振りで吉原へ出掛けた。綱つ引俥が威勢よく馴染の茶屋へつく、秋さんの顏を見ると、帳場に座つてゐた女將は勿論奧で夕飯を食つてゐた女中迄、宛然雛の餌に走るが如く一齊に秋さんの足許へ突貫した。そして殆んど擔がないばかりの騷ぎをして二階へ上げる。挨拶に出る者、銚子の支度をする者、見番へ驅け出す者。間もなく藝者幇間の顏が揃ふ、お座付が始まるといふ大陽氣。

いい加減騷ぎ疲れた頃女將が遣つて來て、時に今晚は何處に致しましようといふ咄のついでから、或樓へ近頃大層美しい花魁が出たから試に買つて御覽になつては如何といふ。宜からうと秋さんが首を縱に振ると、直ぐ樣座敷を仕舞ひに遣る。軈て秋さんは大勢の者に送られて、素見の出盛つてゐる通を練りながら其の樓へ上つた。

其の夜秋さんの相方に出た花魁は玉章といつた。鮨

は廿一二であらう。細面の方ではあるが夫れで肉づきの豊な、全體に華やかな顔立ちで、桃色鹿の子の結ひ綿も程よく似合ひ、全く眼の醒めるやうな美しさと何ともいへない程氣高さとを備へてゐた。

流石の秋さんも感嘆してしまつた。玉章の姿に眼をとめて見た時、思はず恍惚したやうな氣持になつて花魁買ひも惡くないと考へた。

其の後秋さんはちよい〳〵玉章の處へ通ひ始めた。すると例によつて、女の方から先づ血道を上げて仕舞つた。女に惚れられるといふことは秋さんに取つては珍らしくも何ともないことではあるが、彼もなんとなく玉章には心を引かれた。玉章の前身は神戸の歴とした貿易商の娘であつたが、家業の手違ひから追ひ〳〵零落して、到頭彼女が身賣りをする段になつたといふやうな噺である丈に、當節の花魁には珍らしい氣品の高い處が何より秋さんの氣に適つたと同時に、上方美人に特有な濃厚な情愛が彼の心を囚へずにはゐなかつた。

かうして秋さんの廓通ひは漸次〳〵劇しくなつて來た。秋さんと玉章の噂が盛んに人の口に上つた。然し誰でも、女の方が餘程熱度が高いらしいと云つた。花魁とはいひながら、まだ娘氣のぬけ切らぬ玉章の、劇しい生一本な戀心を、見る人ごとに嫉んだり可笑しがつたりして語り合ふのであつた。

仲之町の櫻が一夜の間に跡方もなく取り拂はれて仕舞ふと、一としきり夢の醒め際に似た詫しさが人々の胸を襲つて來た。

或日、玉章は病院へ出掛けたまゝ其處へ留められて仕舞つた。近頃は毎夜のやうに廓へ入り浸る習慣のついてゐた秋さんは、女が留守の間も矢張りぢつとしてはゐられなかつた。華やかな、惱ましい程濃厚な其の土地の空氣が、醉ひしれたやうな彼の魂を何時も生き生きと甦らせるのであつた。秋さんは相變らず毎晩廓へ出掛けたが、然し何となく面白くなかつた。大勢の取卷を相手に空騒ぎをしてゐる間も、絶えず物足りなさと寂しさが身の周りにつき纏つてゐた。逢はれぬと

あれば、今更に女に對する戀心が身に沁みて來た。

明け方になつて醉ひ潰れて仕舞つた秋さんは、眼を醒して見ると知らぬ間に褥の中へ連れられて來てゐた、西向の四疊半の小座敷には態と雨戸を鎖したまゝあつたが、隙間から强い午過ぎの陽の光が差し込んでゐた。何處も彼處も唯寂りと靜まつて、時々裏の藝者や幇間などの住つてゐる露地の溝板をコトコト鳴らす音が聞えて來るばかりである。秋さんは、何とも云へない哀しいやうな遣瀨ないやうに氣分に襲はれた。階下へ降りて顏を洗つて來ると、明け放した淸々しい表座敷にちやんと席が出來てゐる。女中が新茶を入れて持つて來る。女將が挨拶に來て、とに角一と口つけさせませうかといふ。酒はもう厭だ、とさもつまらなさそうにいふ秋さんの顏を、何と思つたか女將はニヤニヤ笑ひながら見てゐたが、ねえ若旦那、今日は花魁に逢はせませうか、と突然に云ふのであつた。秋さんが怪訝さうな面持で、然し女將病院は面會を許さないといふ噂だぜ、と初心らしいことを云ひ出したので女將は思はず吹き出して、夫れ程の事を知らない姿でもありませんが、別な寸法があるんですからまあ〳〵妾に委せて入らつしやい、と獨りで呑み込んでゐるのである。

あつさり飯を濟すと、秋さんは好奇心半分、女將に連れられて外へ出た。ぽか〳〵と、まだ半ば春の交つた好い日和である。門並みの引手茶屋では、二階の手摺へ夜具など干した家もあれば、女中が紅い腰卷も露はにくるりと裾を端折つて、入口のたゝきへ水を流してゴシ〳〵洗つてゐる家もある。下地ッ子が壁へ鼻を突き付けんばかりに座つて一生懸命お渫をしてゐるかと思ふと、店先へ鏡臺を並べて藝者が髮を結はせてゐる。

仲之町を突き拔けて外來患者などのある處迄行くと、女將は溝に沿つた狹い道を右へ曲つたが、軈て二人は病院の横手の可成り廣い原つぱへ出た。此處へは餘り子供も遊びに來ないとみえ、靑々した草が一面に生へてゐる。處々の窪みには雨水が溜つて、日光がキ

ラ〳〵反射してゐる。二人は暫らく草の上へしやがみ込んで煙草など吸つてゐたが、軈て女將は秋さんに對つて、今から此處で摘み草をしながら大きな聲で唄を歌ふんですといふ咄、漸う女將の腹が讀めた秋さんは、摘み草だけは交際ふが唄を歌ふのは御免だと云ふと、そんな意氣地なしでは駄目です、どうせ洒落だから構はずに歌ひなさいと女將は眼角を立てる。洒落か知らないが見つともないから厭だ、と秋さんが飽く迄も頑張つたので女將は最後に憤つたやうな顏をして、ヘン、自分の花魁に會ひに來たくせに見つともないがよく云へました、それでは妾一人で歌ふからもう頼まない、と向ふの方へ行つて嫁菜を摘みながら好い聲で何やら歌ひ始めた。

　藝なら標緻ならといふ仲之町切つての流行つ子であつたのが、不圖した事から茶屋の息子と深間なり、二三年苦勞をした末に首尾よく思ひが叶つて嫁入りしたといふのが、ざつと十五年前の女將の身の上である。結城紬の袷に黒襦子の帶、すつきりした襟足を見せてしやがんでゐる女將の後姿を眺めながら、秋さんは樣々な思ひを馳せてゐた。

　女將は唄を歌ひながら、ちよい〳〵病院の窓の方へ眼を遣つた。時々窓から顏を出す女はあるが、何時迄經つても目ざす玉章の姿は見えなかつた。最後には女將も根氣が盡きたやうな顏をして秋さんの側へ遣つて來て、手拭を草の上へ敷いて尻を据ゑ込んで煙草を飲み始めた。それから稍暫らく經つた頃、ぼんやり水溜りの方を眺めてゐた秋さんの袂を女將がぐいと引張つた。秋さんが吃驚して振り向きながら女將と同じ方角へ眼を遣ると、西陽を受けた高い三階の窓から一人の女が半身を現はして此方を見てゐた。束髮にしてゐる加減がすこし面窶れはして見えるが、正しく玉章であつた。

　女將は默つて秋さんの手を執つて窓の下へ連れて行つた。三人は其のまゝ瞬きもせずに顏を見合はせてゐた。女が泣いたのであらう、小さな水の雫が一つ二つ下に立つてゐる二人の顏へ溢れた。と、玉章は溜まり

氣たやうに兩手を顏にあてると、いきなり身を飜へして中へ姿を隱して仕舞つた。

稍暫らく經つてから秋さんは女將と連れ立つて歸途に就いたが、凝と彼を見詰めてゐる悲しい玉章の顏が眼さきにちらついて、何とも云へない味氣ない氣持になつてしまつた。女將は女將で、飛んだ罪なことをして仕舞つたといふやうな顏をしてゐた。

其の晩も秋さんは家へ歸らなかつた。もう軈て十時といふ刻限であつた。突然に裏の露地から、茶屋の水口の戸を明けて驅け込んで來た者があつた。居合はせた女中が顏色を變へて女將の側へとんで來て、玉章さんの花魁がおいでになりましたと云つた。女將が吃驚して行つて見ると、玉章が晝間見た通りの姿で慄へながら立つてゐた。おかみさん、後生ですから秋さんに會はして下さい、と玉章は女將の顏を見るが否や逆上せたやうな眼つきをして云ふのであつた。女將は取り敢へず玉章を奥の一間へ引き入れ、さてどうしたといふのですと訊くと、實は戀しくて〳〵ならない矢先、晝間秋さんの顏を見たのでもう我慢が出來なくなり、病院の人々が寢て仕舞ふのを待つて三階の窓から紐を吊るして遁げて來たといふのである。女將は呆れて聞いてゐたが、そんな命掛けの恐い思ひ迄して來たんだから會はして上げ度いのは山々ですが、遁げ出して來た花魁を密り茶屋の二階で首尾をさしたといつては商賣の規則に外れるから夫れ丈はなりません、然しこの後のさばきは妾一人では出來ないから、暫時此處に待つて入らつしやいときつぱり云ひ置いて、女中を一人張り番に附け、自身は直ぐ樣玉章の抱へ主の許へ出掛けて行つて事の仔細を告げた。樓主も驚いた。樓主は時を遷さず病院へ車を走らせて係りの者に面會して是々と成行きを話した上、是が表沙汰になると人氣に觸るのみではなく內の看板にも係ることであるから、特に內濟にして頂き度いといつて然るべく賴むと、先方も心得たもの、其の邊の事は引き受けたが、就いては今直ぐに戻して寄越すのは却つて人目にも掛り易いから、十二時を合圖に通用口迄連れて來て呉れといふ言

葉である。樓主は立ち歸つて待つてゐた茶屋の女將に、斯々の譯だからお氣の毒でもお前さんの家で十二時迄花魁を預かつて貰ひ度いといふ咄、女將は委細畏まつて我家へ戻つて來た。

何にも知らない秋さんは茶屋の二階で馬鹿騷ぎをしてゐた。其處へ女將が上つて來て、若旦那には今から妾が用事があるんだから、皆さん直ぐに歸つて下さいといきなり云つた。女將さん一體全體どういふ譯でげすと、上る段梯子がコレワイナノサといふ恰好をしたまゝ怪訝な顏をするやつを、何もお前さん達の知つたことぢやないんだからさあ〳〵早くお歸り〳〵、と浮つかりまご〳〵してゐると耳でも持つて引つ張り出しさうな權幕。一同煙に卷かれて引き退つた跡は大風の吹き去つたやう。秋さんが呆氣に取られて座つてゐる處へ、女將は玉章の手を取つて這入つて來た。秋さんと云ひざま、玉章は男の膝へしがみつくといふ始末。女將はそれを心地よげに見遣りながら、花魁まださつと一時間ありますから緩りお話しなさいましよと云ひ捨てて、障子をぴつしやり閉めて階下へ退つて來たものである。

玉章は半月ばかりの入院で樓へ歸つて來たが、秋さんの女に對する心持は以前とはすつかり變つてゐた。彼は其の年の夏玉章を身請けした。そして自分の家から餘り遠くない湯島新花町に一戸を借りて、其處へ玉章を圍まつた。

かうして玉章は目出度く本名のお玉に房つたが、矢張り野に置けといふ諺は、動くともお玉に丈は當てはめることが出來なかつた。お玉には、勤め上りの女に有り勝ちな賤しい面影などは微塵もなく、何處迄も溫良優雅な婦人であつた。曾ては玉章の艷姿を美しいと思つたが、丸髷になつた品の善い奧さん振りに何んで夫れが及ばうか。何とか一工夫廻らして、いつそ此の女を本妻に直さうかと迄秋さんが思つたのも滿更無理なことではなかつた。

或日のこと、例のやうに秋さんがお玉の處へ出掛けて行くと、滅多に客などあつたことのない妾宅へ、見

も識らぬ男が來て懇意らしくお玉と話しをしてゐた。三十格みの、絲織かなぞの堅い拵だが、眼光の鋭い何となく一癖ありげな男である。こちらは何處のお方かと秋さんがお玉に對つて訊ねると、男はお玉の言葉も待たずに、是は旦那で御座いましたか、お初にお目に掛りますといふ挨拶から、實は私はお玉の良人で御座いますが、手前が足らはぬ爲とは申しながら、是が一方ならぬ御恩を蒙りましたさうで何ともお禮の申し様も御座いません、と藪から棒の口上である。

　秋さんは息が止らんばかりに駭いた。お玉、よくも今迄俺を瞞したな、と慄へ聲で云つて睨み付けると、お玉はとんでもないことですといふ顔をして、いゝえ是にはいろ〳〵譯のあること、なんで貴郎を瞞しませう、妾はいつ迄も貴郎の側に置いて頂きたいんですものと鼻聲になる。やい〳〵この阿魔あ、良人の前で間男の側にゐたいた何たる云ひ草だ、と男は一つ大きな聲を出して置いて、時に旦那、肝心のお玉がこの通りお前さんに首つ丈なんだから、場合に由つちやあお讓り申しても宜敷いが、是でも令孃お玉といつて上方ではすこし賣り込んだ奴、さう馬鹿安くも離せませんとじろり睨めながら大時代な科白、芝居ではよく見る場だが實地は初めてなので、氣の弱い秋さんはブル〳〵慄へ出してしまつた。

　お玉は素知らぬ顔をして、膝の上の三毛猫の頭を撫でゝゐた。

念佛

　島さんといふ客は上州前橋の生絲商であつた。當年五十幾つの儲け盛りで、薄くなつた髪をぴつたり後へ掻き上げ、福相な顔にはいつでも柔和な笑みが含まれてゐた。

　前橋と横濱の間を絶えず往復してゐる島さんは、可成り繁々廓へも顔を見せる方であつたが、大抵はお客を連れて來るので、獨りで遊んで行くことなどは殆んど無いと云つても宜かつた。茶屋は仲之町でも先づ一二と云はれる家、取り巻きのうち兩三名は島さんと三十

年來の仲善しといふ古物が何をさて置いても馳せ加はり、陽氣に一遊びした後は京橋の定宿へ歸つて寢るのが例であつた。

夏のことであつた。其の日は商談(はなし)がうまく纒まらなかつたものと見え、明朝(あした)は向島邊りで飲み直さうなどゝ云つて島さんは頻りに相手を引き留め、珍らしく自分も一緒に宿り込むことになつた。

島さんはひどく醉つてゐた。齡を取つちやあ人間も意氣地がなくなるものだ、一と晩や二た晩飲み續けたつて交際ひ酒に醉つぱらふ俺(わし)でもなかつたがなぞと云ひながら、島さんは褥が出來るが否やごろりと横になつたと思ふと、直ぐに正體もなく睡り込んでしまふのであつた。

島さんの相方は其の晩殊に閑であつた。お香々でお茶漬を喰べたり、悠々と煙草を吸つたりしてから蚊帳の中へ這入つたが、暫らく經つと自身も其のまゝ睡りに落ちてしまつた。

何時頃か識らなかつた。妓(をんな)は厭な夢を見て眼を醒した。有明に丁字が溜まつたと見えて、蚊帳の中は別段暗くなつてゐた。妓は仰向きになつたまゝ何氣なく手を差し伸べてみると、褥の上には自分ばかり寢てゐるのであつた。用便(てうず)にでも行つたのであらうと思つてゐたが、客はなか／＼戻つて來ない。

其の時、極めて微かに、妙な聲が妓の耳に這入つた。おやッ、と思つて妓が首をあげて座敷の内を見廻すと、裾の方にあたつて、蚊帳の外に誰か蹲踞まつてゐた。妓はぎよつとしたが、じつと息を殺してそちらを凝視めてゐた。すると、南無阿彌陀佛／＼と呟くやうな聲がきこえた。妓は忽ち冷水を浴びたやうになつてしまつた。

軈て徐かに起つて廊下へ出て行く姿を見ると、それが島さんであつた。島さんは間もなく用場から戻つて來たが、枕元の水を一杯ぐいと飲干して、再び睡りに就いたやうであつた。

朝起きて見ると、島さんの樣子には尠しも異つた點はなかつた。昨夜(ゆふべ)は實にいゝ氣持に睡つてしまつた、

旅籠屋へ寝るから見ると、歳を取つても格別なものさなどと云つて元氣よく笑つてゐた。妓は何食はぬ顔であしらつて送り出したが、其の夜の事については誰にも話さなかつた。

秋になつてからであつた。何かの都合で島さんは又廓へ泊つたことがあつた。妓は夏の夜の出來事を思ひ出して、態と睡つた振りをして様子を窺つてゐた。

大引けが廻つて、二階中寂(しん)と靜まり返つた頃、それ迄よく睡つてゐた島さんは急にウンウン魘されるやうな聲を出し始めたが、軈て瓦破と布團の上に起き上つた。そして妓の睡りを醒さぬやうに注意をするらしく、徐かに裾の方へ廻して行つてしやがみ込むと、壁の方へ對つて合掌しながら口の中で念佛を唱へはじめた。

例に依つて島さんが用場から戻つて來ると、待ち兼ねてゐた妓は氣色食むで念佛の理由(わけ)を詰つた。平常落ちついてゐる島さんも妓の不意討ちに餘程面食らつたやうであつたが、軈て頭を掻きながら、花魁に目つけられた上は仕方がない、決して洒落や冗談にした譯ではなく、是れには入り組んだ事情のあること、まあ一と通り聞いて下さいと云つて、次ぎのやうな話をした。

前橋近在のなにがし村といふ處にある素封家があつた。其處の一人息子を政夫と云つて、年齢(とし)は去年徴兵檢査が濟んだばかりであつたが、極めて柔和な、どちらといふと内氣過ぎるくらゐな性質であつた。

この政夫に縁談が持ち上つて來た。相手は隣村の物持ちで、娘の父親は縣會議員などもしてゐるほどであつたが、政夫は此の縁談を喜ばなかつた。それは政夫には、豫て想思の女があつたのである。女の名はお霜と云つた。年齢が十八で、村内の製絲工場の工女をしてゐた。お霜は全く鄙には稀れな縹緻よしで、其の上至つて氣質も善い女であつたが、何を云ふにも村一番の家柄の息子と製糸の工女では、世間が二人の戀を容れる道理がなかつた。さうかうするうち政夫の縁談は

すつかり纒まつて、愈々婚禮の前日が來た。

其の夜、政夫は女に會つた。最後の別離を告げるつもりであつたのだが、政夫はお霜の顏を見ると量見が變つてしまつた。女を憐れな境涯に陷し入れて、自分だけ結婚するなどといふことは到底忍び難くなつて來た。政夫は到頭女に向つて情死の相談を持ち掛けた。

それに對して、女に否やのあらう筈はない。二人は明日の夜の九時を期して村山の一本松の側で出會ふことに手筈を極め、淚を流し合つて其の夜は別れた。

翌日、お霜は髮を結つたり化粧をしたりして、晝のうちからソイイソしてゐた。あれ程立派な若旦那が、立派な嫁樣を嫌つて自分と一緒に死んで下さるのだと思へば、死といふことがお霜にとつては單に歡びばかりであつた。夜になると、お霜は約束の時間に遲れぬやうに家を出て山路を登つて行つた。淋しい山を、明るい月が晝のやうに照してゐた。

里から半里ばかり入つた處の路端に、一幹の老松が生えてゐた。其の太い枝が、地面から手の屆くほどに下を這つて擴がつてゐた。土地の人は此の松を一本松と呼んでゐた。

お霜は松の根方に腰を掛けてゐた。其處へ男がやつて來た。男女は松の樹の枝へ紐を掛けて首を縊つた。

それから暫らく經つた時分に、下の方から急いで遣つて來た男があつた。それが政夫であつた。政夫は一本松の側迄來て、既に死んでゐる女の姿を見た時、驚駭の餘り後へ倒れさうになつた。電光のやうに疑惑が頭を掠めた。其の時、不思議な物が政夫の眼に這入つた。それは、女と並んで、一匹の獸が松の樹の枝からぶら下つてゐるのであつた。

譬へやうのない戰慄が政夫の脊筋を傳つて走つた。と、颯々と山風が吹いて來て、死骸がゆらゆら搖れて廻つた。靑い月の光に、物悽いお霜の死顏が照し出された。政夫は吾れにもあらず聲を立てて其の場を驅け出した。

政夫は我家へは戾らなかつた。何處をどう步いて來たのか泥まみれになつて、彼は夜半頃に前橋の叔父の

家へ驅け込んだ。政夫の叔父といふのが島さんのとんである。

政夫の家では上へ下へと混雜を極めてゐた。嫁入りの行列は中途から引き返してしまつた。それから翌朝になつて、お霜が一本松で首を縊つてゐるのが發見されると、村中が湧くやうな騷動に陷ち入つてしまつた。何より不思議なことは、お霜と並んで狸が首を縊つてゐたことであつた。此の稀有の出來事が、どれ位人々の好奇心をそゝつたり、熱心に研究されたりしたことか知れなかつた。

此の事件があつてから、政夫は日增しに健康が衰へて行つた。夜になると、彼の寐てゐる處へお霜が來た、そして、さめざめとしほれて泣いてゐたり、首を縊つた時のやうな物凄い顏をして政夫を睨み付けたりした。

少し茶屋酒でも飮み習はせたら或ひは氣が紛れて宜いかも知れない――と云ひ出したのが島さんであつた。島さんは政夫の兩親と相談の上、甥を引つ張つて到る處遊び步いた。それでも矢つ張りお霜は何處へでも隨いて來た。島さんはお霜の執念深いのに駭いたが、同時に甥の堅造にも呆れてしまつた。

すると或時、島さんは政夫を連れて柳橋で遊んだが、其の時聘んだ藝者の中で、蔦丸といふお酌上りの面ざしがお霜に似てゐると政夫が云ふのであつた。島さんは手をうつて喜んだ。そして有無を云はせず蔦丸を政夫に押し着けてしまつた。今迄はどんな女でも見向きもしなかつた政夫であるが、蔦丸だけには妙に懷かしい情が起つて來た。ぢきに政夫は、蔦丸でなければ夜も日も明けないやうになつてしまつた。

政夫の魂が蔦丸に奪はれしまふと、お霜はもう政夫の許へは來なくなつた。其の代りお霜は夜な夜な島さんの處へ現はれて、悲しかつた運命を泣いて訴へるのであつた。

俺は恐ろしいともこわいとも思ふ譯ぢやないが、お霜のことを考へると可哀相で堪まらない、せめてあの世で浮かばれるやうに、念佛の一つ宛も唱へて遣るのさと云つて、島さんは長ばなしに疲れたやうな眼つきをした。

島さんは、其の後も相變らず廓へは遣つて來たが、どな場合でも決して泊つて行くやうなことはなかつた。

私の好きな夏の料理

拜啓炎暑之候益々御清榮奉賀候偖て八月一日發行の「中央公論」誌上に

「私の好きな夏の料理」

と題し、貴下等の如き食物に對する趣味饒かに、味覺の敏感なる諸彥よりの御回答を蒐集して之を掲載し、以て食慾の不振なる期節の食膳の上に、[illegible]なる色彩を添へ、香はしき香味を漂はして、趣味の食物を普及せしむる一助とも致したく候へば、御多忙中御迷惑ながら右に對する御感想を折返し御一報被下度伏して懇願仕候　敬具

右の如き問に對して御回答を贈はりたる左の五十餘氏に深厚なる謝意を表す（編者しるす）

○　永井荷風

暑中にはあつさりしたものに限る。まづ西洋風ならば、コンソメエに素麺なぞを入れたもの。魚は鮎。Sandwiches à la Laitue（サンドイッチ青菜を狹み入れしもの）それにアスペルヂか赤茄子（生のまゝ）白葡萄酒Hante SauterneかRoyal Marceaux少し甘味ありてよし。次に珈琲、Confiture（煮た果物）この位にて結構なり。日本風ならば、今戸濱金鮒雀燒、冷奴豆腐、茄子シギ燒、水貝別にほしきものなし。白ぶだう酒日本食にも入用なり

○　小杉未醒

夏は新らしき野菜の生食尤も宜しく候、瓜や茄子の香の物も、漬け加減鹽加減の丁度眞中と申す處は三十分を爭ふ可し、日本酒は味變じ易く、ひやし麥酒は胃弱の惧れあり、琉球國の古酒を思ふ事切に候。右夏の飲食當座の考。

○　青柳有美

夏期に入れば、他の季節に於けるよりも發汗作用が激しくなり、多量の汗を分泌するに至るので、體成分中の水と鹽とも亦多量に身體より脫離し、身體は常に水分と鹽分との缺乏を感じて居るものだ。是に於てか、夏は一體に食慾の減退する季節なるにも拘らず、水と鹽とに對する欲求のみは、他の季節に於けるよりも一層激しいのである。隨つて、誰によつても好かるゝ夏の料理は、水分と鹽分とを他の季節に於ける料理よりも多量に鹽梅したものであるべき筈で、又斯る料理が夏期の不振なる食慾を振發する所以にもなるだらうと思ふ。

それかあらぬか、夏になつてからの私の最も好物は、干昆布を二分×三分ぐらゐの小さな長方形の短冊形に細かく切つて、自然に持つてる白い鹽粉も何も落さず、之を其儘上等の生醬油で幾回と無く繰返して煮詰め　醬油が結晶して眞つ黑に凝結つて周圍へ附着するまでになつてるものである。この生醬油で煮詰めて黑くなつた昆布を、御飯の上へ四五片載せて、茶漬にして掻つ込めば、如何に食慾の減退して居る夏の日でも、二三杯は瞬くうちに食つてしまへるのである。蓋し、水分と鹽分とは夏に於て身體の絕へず要求してやまぬ處のものであるからだ。然し、昆布の醬油煮なんかは、料理であるとは謂へまい。依つて之を「私の好きな夏の食品」として置く方が、寧ろ至當だらう。

若し夫れ「汝の好きな夏の料理は何か」と問はるれば、私は直に「水貝」と對へる――勿論、鮑の水貝である。每年夏が來て、そろ／＼暑く成りかけると、いつでも先づ第一に食つてみたいとの氣を起するのは、水貝だ。水貝は水分も鹽分も多量に鹽梅せられてある上に冷たく、その引締まつた鮑の肉は、味ひが淡泊で夏の食物として申分無きのみならず、咀嚼の間に唾液の分泌を促進し、自ら食慾を增進することになる。それから、見た眼にも美しくつて快いのである。玻璃の如く光つた氷塊、厚く切つた白い鮑の肉、紅の如き天津桃の片れ、靑くつて紅味を帶びたショウガの若芽――何といふ涼しくつて美しい配合だらう。夏の來る每に食ひたくなるのも當然では無いか。水貝も私は就中、日本橋花村の水貝を最も好くのである。ドウセ立派な料理屋なんかへ足を踏み入れられる身分のもので無いから……。

水貝に次いで私の好く夏の料理は、鮎の煮ビタシである。如何にも輕くつて、食ふのに骨が折れず、甘い夏の食物としては、之に優るものが他にありさうでも無い。然し、鮎の煮ビタシは、日本橋花村のものは餘に甘過ぎて駄目だ。これは、三越呉服店食堂の鮎の煮ビタシが第一等であるかの如く、私には思はれる。

○　河竹繁俊

まだ私などにはほんたうに料理を味はふ資格はないが、少し心をつけた食膳に上りうる物を思ひ浮べて書きつけて見ると、

一、何と言つても「甘酢」が一番好もしい。白瓜よりも胡瓜をセンにうつたのへむしりゑび（か赤貝）それに紫蘇などを取合せたのが殊によい。母のおあんばいが上手ですからよくこしらへて貰ひます。

一、野菜の物では新里芋のうま煮におろし柚子。茄子の鴫燒、雛の子燒あげだし。姫百合の白く煮たの、

一、煮魚はサワ煮にしてもあまり好みません。洗ひの中ではコチをとります。鮎やスヾキの鹽燒があつて、茶碗がつけば大威張です。

一、生薑に味噌をはませて燒いたのだの、からい田舎味噌に等分の砂糖と胡麻を入れた胡麻味噌などは、料理の部ではないがサツパリとしてゐるから好きです。

○　松崎天民

裸體で二十餘貫の健體とて、夏季も食慾衰へず、相變らず味覺の敏感を誇り居申候。好物は瓜もみ、茄子のぬか漬、西瓜、ところてん、鮎の鹽燒（但しはらわたを抜かずに）鮎の味噌汁、あわびの水貝、乾蝦、青唐がらしの燒いたのなど、毎日にても宜しい。殊に茄子の漬物は三度〳〵の食膳に欠くべからず、水貝は淺酌に宜しく、青唐がらしは醤油のみで煮つめたのも妙なれど、それよりも燒いて醤油をつけたのが、美味無上に候。夏季の食物は、調理も淡泊に單純なるが宜しく、原料その儘の自然の風味を懐しみ候。貴答のみ、敬具

○　島崎藤村

冷豆腐

○　巖谷小波

一、小鯵鹽燒
一、新芋の煮つけ

一、牛、鷄肉なら何れも夏は網燒がよろし

○ 高島米峰

拜復小生元來食物に好き嫌ひ無く又酒を飲まねば肴の選り好みに憂き身をやつす經驗も無之候殊に時節によりて特に食物を選擇致し候程の自由を有せず何でも出たとこ勝負で舌鼓を打鳴らし居り候若しそれ

胡瓜膾に茄子のしぎ燒
鯉の洗ひに鮎の鹽燒
汁一椀に漬物澤山

と來れば誠に理想的に有之大に滿足を感じ可申候　頓首

○ 與謝野晶子

鮎の料理を好み、また鮮魚のあらひの如き淡泊なるものを好み申し候。平生料理の上に多大の努力を用ふことを惜み候私は貴問の御趣旨に協ふやうなるお答を致しかね候。おゆるし下されたく候。

○ 小栗風葉

一鮎、鹽燒(蓼酢)　一トマト(マイナイソース)
一鮑、鹽蒸　一かみなりほし　一印籠漬
一小鯵、鎌倉膾　一枝豆、鹽茹　一鯖、柱膾
一茸(白胡麻酢味噌)　一ハム　一くさや

少量づゝでも酒をやる者は却つて味覺が鈍のやうに思ひます小生の如きは殊に不敏感の方で一向趣味ある食べ物にも不案内です

○ 柳澤保惠

和風にては
一、鮮魚のあらい(殊に、こち、すゝき)
一、鮑魚の鹽むし
一、むかごの煮付
を可とし
歐風にては
一、純印度式カレイ、ライス
(小皿盛十數點を必要とす)
を可とす

○ 八百勘主人　吉田勘兵衛

私の好きな夏の料理

一茶わん　茗荷のせんに鱸の小口
一絹漉豆腐に紅葉おろし　一寸一口
一しじめ汁　で御はん
あせは出るが衛生にもよし安くて腹にたまらず一人前一食金二十錢なら大丈夫

○　小杉天外

近年健康の増進と共に味覺鈍化し貴問に應ずる材料なきを恥づ

麥酒の肴には鱸の洗ひ熱い飯に鰹の刺身など平凡ながら何時も好物なり。トマトの三杯酢、燒茄子の生薑醬油、細胡瓜の漬物は恐らく百姓料理ならんが毎日連用しても飽きたる事なし

○　正宗白鳥

小生は胃腸が弱いため暑中は殆んど食慾がありません。三度の食事がおつとめのやうです。牛乳とパンとが夏の食物として最も小生の胃には適してゐるやうに思ひます。趣味乏しく味覺の鈍感なる小生には、四季を通じて料理について申上げる資格はありません。

○　八新亭主人　佐々木新六

拜啓夏の好きな料理として吾人京都趣味は鴨涯の涼臺に凭り東山一帶の翠微を眺め滔々たる清流を俯瞰しながら獅子とうからしの付炙奴とうふ活たるあゆの鹽燒あはびの粕漬はもの子と子いもの煮たるなど暢神のものかと存候まゝ及御回答候不具

○　上山草人

拜復。手元の「歳時記」の中より、夏の食物の好める一題を探りて、一句をものし、御申付の責を塞ぎ候。不悪

水飯の水をみどりの夜の蜘蛛

○　久保田萬太郎

折角の御下問ながら、小生、たべものゝことに關しては根つから口幅つたいことのいへない人間に御座候、肴がいけず、野菜ものがいけず、（食べずぎらひのわがまゝも少しはまじりをり候へど）さればとりわけ夏はどうにもなり申さず候。爲方がないゆゑ矢張、風月へ行くとか大金へ行くとかの算段をいたし候。御憫笑下されたく候。

○ 上司小劍

川魚と野菜との好きな私は、夏になると殊にそれを欲しいと思ひます。しかし東京では川魚も野菜も良いのを求めにくい。美味な五畿内の野菜を、わざ／＼取り寄せても、下關へ來る間には味が變ります。慈姑を摺りつぶして、胡麻の油で揚げたのを、夏はよく喰べます。料理する人の手を省くためにも、夏は簡單なものがよいと思ひます。

○ 長田幹彦

夏は何をいつても鰻が一番うまいと思ひます。野菜のものでは胡瓜もみのやうなもの、それに豆腐類の料理なら何んでも食べられます。此間麻布の興津庵で食べた中食は近頃でのうまい料理でした。滋味といふ點から云つたら恐らく東京一といつても過言ではありますまい。

○ 廣津和郎

拜復折角の御問合に候へども小生別段これと云つて特に夏食べたきものは御座無候うまきものはいつにても宜しきやう存ぜられ候甚だ不風流に候へども仕方なく候　草々

○ 平塚明

「私の好きな夏の料理」に就いて御答いたします。「あらひ」に、絹ごし豆腐の「ひやゝつこ」それに「ビール」のつめたいのでもあればそれでもう滿足で厶います。

○ 燕樂軒主人 妹尾勇吉

拜復　小生はきらひのもの無之何でも御座れの頗健啖家でありますから夏も冬も好なものに特別變りはありませぬが強いて申さば朝食には上等のコーヒーにハムエッグス位で夕食は鮎の洋酒煮の冷しに西洋式黄身酢又は鱸の洗に西洋式黄身酢野菜ではトマトサラダなどが一番に箸の出る方です　早々

○ 泉鏡花

夏のお料理は體裁よりきどりより何より蠅をたからせないのが第一に候理屈はよしてもアノ汚さツたらありませんからね

○ 長田秀雄

煮たてのもの、あつい番茶結構

夏の料理は冷たくして輕きもの、又は酢き物がよいと思ひます。さう云ふ條件をつけて考へると夏はやはり日本料理が一番のやうです。肉(なか)でも洗ひや水貝やすべて新鮮な魚肉や貝類野菜などの生身(なまみ)が一番うまいやうです。獸肉はあまり濃く重いのでどうも、喰べる氣になりません。夏の料理は冬とちがつてまづ見た眼が大變影響します。丁度涼しさうな浴衣地のやうに。

○ 鈴木三重吉

1、鹽味の少ない、胡瓜の漬物(私の家では、ヌカミソへビールや酒を入れる)を、まるごと氷で冷し、それから切つて醤油をかけて食ふと甘いです。これは毎晩々酌のときやります。試して御覽なさい。

2、鯛の切身と一しよに、氷で冷した冷奴。豆腐はさつと湯煮をすると安全且つ崩れません。烏賊のさしみわさびを死ぬほど澤山入れる。

3、午飯には反對に、アナゴ、鷄、なぞを、から〳〵煮たので、熱い飯を食ふのが好き。廣島で取りたての車海老の皮をむいてツブ切りにして、食つた、さしみの味を忘れ得ず。

○ 安成貞雄

トマトーの生及びトマトー料理。胡瓜もみ。冷やつこ。鯉の洗。鷄の胃付スープ煮。茄子しぎ燒。鮎。水貝。

○ 林田龜太郎

食物に就いて何等特別の嗜好を有たない私は、夏でも矢張り牛肉もやれば、雞肉も食べる、天麩羅も結構アイスクリイムも妙といつた風に極く無頓着です。唯小芋の煮附けと鰯の味噌汁とは、何時何所で出されても舌皷を打つて賞玩いたします。

○ 中村吉藏

食物に就いては大した好惡を持つてゐませんが、夏向は至極平凡ながら、あらひ、きさみ紫蘇、絹ごし豆腐の冷、トマトー、など結構です、酒類はウヰスキーの小杯をチビ〳〵甞める位な處が暑氣拂ひになりませう。

○ 小川未明

私は何より新生姜のみづ〳〵しい葉の紅色のを生で食べることが好きで御座います。

○ 林愛作

「私の好きな夏の料理」に對する卑見左の如くに候

永らく海外に於而生活した僕にはコレといふ夏だから冬だからと特に選ぶべき好きな料理はないので言はゞ何でもよいのである。唯だ其變化ある事を要望するのである、ソーして精一杯考へ、働き、遊んで喰ふのである。これが好きなりといふよりは寧ろ旨く食事をするといふことを常に念として居る。これが僕の食物に對する言はゞ秘法である。

○　文學博士　佐佐木信綱

源氏物語常夏の巻に「いと暑き日ひんがしの釣殿に出給うて涼み給ふ。西川より奉れる鮎お前にて調じて參らす」云々とある。昔も今も、夏の料理に最もふさはしいのは鮎であらう。自分の最も好むのは、鮎の調理である。殊に鮎狩の樂しさは忘られがたい。嘗て美濃町から長柄川を下つた船の上で、或は犬山の古城に日の暮るゝをまち木曾川を溯つた舟の上で、或は多摩川や荒川の上流での鮎狩の折に味はつた鮎の味はひは、忘られがたい。

○　柳澤健

如何にも眼に鮮やかなトマトのサラダと、酢のうすい海蝦の

胡瓜もみ。それに、一尾か二尾でいゝが甘味に煮た上々の鮎。側に冷たいキリンがあつて、川風でもその上を吹いてゐれば、申分なく結構です。

○　若宮卯之助

胃腸頑健の田舎者、幸にして食卓の趣味を解せず。攝取は一に菜食を主として營養を量り、夏は故ら水を飲まず、酒を飲まず、生菓を食せず。神氣爽快力、鬼の如し。

○　有馬生馬

夏でも冬でも、甘い料理は甘い。夏味はつても甘い位の料理なれば既に夏向にかなつてゐるものとみねばなりますまい。料理を大別すれば二つになります。即ち材料の原形を保存したものと全然形を變へて終つたものとです。一概には云へませんが成るべく夏向には原形をそのまゝ保存して料理した前者をとります。

○　池田大伍

昔は少しは食好みもいたし候へ共、老ると年にいさゝか冥利をも辨へる様に相成り、お米が高くば南京米でも喰はうと存じ居

候、大丈夫豈に口食のとに煩はされんやと木彫の鯛で、そつぽう飯を喰つた人もありやに承はり候、兎角漢文脉が出ては時世遅れに候、乍去御答へまでに少々自分のむかしの好きを申候へば、鯉のこくしよう。あほり烏賊の刺身、海老のから揚を生姜の汁、こんなことでも候哉。

○ 江口渙

夏の料理にどんな甘いものがあるかと云ふ事に就いて研究のため料理屋を喰ひ歩いた事などは私にはまだ一度もない。然し私が今まで喰べた夏のたべものゝ中で甘いと思つたものは可なりある。中で一番忘れられないのは志摩半島の一漁村でたべた鰹の「手こね」と云ふものと、郷里（栃木縣烏山町）で夏たべる鮎の鹽燒とである。「鰹の手こね」と云ふのは刺身よりはもう少し小さく、もう少し分厚に切つた鰹の切身に淡い酢醤油をふりかけながら炊きたての熱い御飯の中へ交ぜる。そして交ぜながら手を釜の底へまで入れてこねてこねてこね返すのである。やがて二十分位たつてから喰べると肉もむれ肉の味も酢や醤油と一緒に好い工合に飯の中へしみ込む。見た目には好くないがなか〳〵甘い。次に鮎は郷里の烏山を流れてゐる那珂川の名物である。父が常に鮎好きのため夏になつて鮎がとれ出すと毎朝鮎屋が必ず早くから持つて來る。前夜に梁へ掛つた奴なのだら殆どまだ生きてゐると云つても好い。それを鹽燒にすると實に甘い。殊に香りの高いのが何よりである、鮎が來ると早起きの父は必ず買つて必らず家中のものを起す。寝坊の私でさへ鮎だと聞くと直ぐ飛び起きて食卓へつく。つまり早くたべないと味が變るからである。この早朝の鮎の鹽燒は夏郷里へ歸る私にとつて何よりの樂しみである。

○ 武林無想庵

私のすきな夏の料理は物ほし臺へ昇つて炎天にスツ裸となり牛鍋をつゝきながら大いに飲むのです。皮肉でも何でもありません。實際いゝ心持です。

○ 生方敏郎

野菜——トマト。茄子しぎやき。枝豆。漬物いろ〳〵。
其他一體に野菜を好む。
魚——鮎、鹽やき、魚田、何れもよし。鱸の洗ひ。
鳥料理もよし
飲物は——氷のブツカキにグレープ、ジユイス(Grape Juice)をかけたるもの。

○ 長谷川時雨

食卓には夏の自然が恵む、畑ものゝ爽やかないろどりを生じ、て涼しげなをいしいものをこしらへたいと思ひます。ちりは冬のものでせうけれど、青紫蘇、ねぎ、めうがのこ、生姜、もみぢおろしをそろへて、いきのよい（こち）と奴豆腐をさまして大きな鉢に氷のブッカキを入れ、蕗の葉をしいて盛りあげたのは見た目も、香もよいやうに思へます。和洋食共小魚の時期、香魚、車鰕、カニ、鱚のやうなもの――トマト、茄子、瓜――枝豆と新漬とはなくてならないものです。無ざうさなおさうさいにして俳味のあるのは生姜味噌かすみそで食べる冷たくしておいた茄子のおさしみでせう。

○ 伯爵 小笠原長幹

拝啓「私の好きな夏の料理」は魚の洗に御座候　敬具

○ 法學博士 堀江歸一

夏の食物としては
一、洗、黒鯛、鯒、鯉、
一、鮎塩焼、酢の物、
一、汁物にてはしゞめ味噌汁、鯉こく
以上

○ 芥川龍之介

鯛のうしほ　枝豆の塩うで　鮑の塩むし　海老の黄味あへ、鯛の魚田　鴨ロオスーまだいくらでもありさうです。食後には大きな赤茄子を五六つ食ふ事

○ 坪内士行

拝復　味覺鈍感にして上酒一二本、枝豆一摑みあれば滿足の夏の夕を過しえ候、命をつなぎの物としては多くの日本食、日本料理は夏に適したりと思しくいづれも好ましく候　日本はどうしても冬よりは夏の國に候　匆々

○ 正宗得三郎

私は食物に就いて餘り趣味を有してゐませぬ、一日二食の中一度は洋食一度は日本食を欲します、その中で殊に好きなものと云へば、アスパラガス、トマトー、ハム、又時々鰻さへ食へれば結構です。

○菊池寛

矢張り西洋料理で、夫も冷肉にトマトをあしらつたやうなものが好きです、夫に新鮮なうまいデザートを澤山食ひたいと思ひます、

○醫學博士　永井潜

鮎の鹽燒タデ酢御通河の鮎こそ鮎の中の鮎と覺候

○中村星湖

かういふお尋に預かると、何だか擽つたいやうな氣がします

好き嫌ひは料理に限らずあまりない方です、私は。といふよりは好き嫌ひを言つてゐられる程年寄になつてもゐないし、金も無いのです。「何處そこの燒鳥が」とか「何處そこの水貝が」とか言ふのは大抵老人の事です。さもなければ若くても年寄じみてゐる都會人の事です。勞働者と變らないやうな生活をしてゐる私なぞは、夏の料理としてはまづ新鮮の野菜か豆腐の冷やつこ位ゐのものですね。

○黒田鵬心

「私の好きな夏の料理」は洗ひ、冷やつこ、水貝、トマトなど、殊にトマトの滴る如き色はまづ視覺を刺戟し限りなき美を感ぜしむ

○佐藤春夫

折角の御質問ながら私には御門違ひです。田舍者で味覺などはロクに備へて居ない上に、無趣味な生活をして居ますから。私は友人などと外へでゝも、食べたいものゝ注文を自分ですることはありません。私には食物そのものよりも、涼しい部屋と、友達が二三人居るといゝと思ひます。これから、どうぞ御見つくろひで、何かいゝ菓物はないか知ら。後で。

○紀星峰

私の好きな夏の料理は洋食ならば鷄肉と野菜とを淡泊に調理したサラダの如き種類のもの、アイスクリーム、日本食ならば鮎の鹽燒、氷に冷えた新鮮なさし身の類に候。濃厚なれど鰻の蒲燒も好きに候。然し高き物價に日々の生活が脅され居候へば好きな料理もめつたには味ひ難く候

○田中貢太郎

私は川魚料理が好きだ。香魚、鮠、杜父魚、山女。近江の湖水に産すると云ふひがひは未だ喫つた事はないが、香魚や鮠は腸をぬかずに其まゝ鹽燒にしても、又煮びたしにしても好い。香魚の腸だけを集めて、それに燒いた石を入れて燒いたのは尤も好い。併し東京では材料が手に入らない會々料理屋などで好い香魚があると云ふので燒かしてみるとそれがうぐひであつたりする。平生の食膳は、鯵とか鰭子とか、そんなものがあれば鹽燒にするが、それもないと肉類、それも鳥にして食慾をそゝらしてゐる。

○　岡本綺堂

あまり贅澤に育たぬ小生に御座候間、料理の方面は一向不案内に候へども、暑寒を通じて鰻の蒲燒が第一の好物に御座候。夏にかぎるものは鮎の鹽燒、茄子のしぎ燒。奴豆腐。白瓜の漬物。先づこんなところに御座候。洋食もコールドと名のつくものすべて夏によろしく御座候。早々。

○　後藤末雄

小生は少しも酒がいけませんから、至つて平凡なものが好きです。夏だといつて特に喰べたいものはありません。夏冬通じて脂濃いものが好きです。

○　土岐哀果

Huransuhûno Ryôri wo tekitôna Bunrô dake tabeta toki, Natu no Yûgata no boku no Hara wa mottomo kwagagutekina Kokoroyosa wo kanziru. Sore wa tyôdo Tisitugakusya ga Gakumon no ue kara kanziru yôna, zyunzyoyaku haitta Syokumotu no Tisô no Dannendu ga boku no Karada no nakani dekita Kokoroyosa de, Zen no ueni itidokini naraberareru Nippon-ryori no ranzatuna Syokuyoku dewa nai. Biiru wa amari Awa no tatanai atarasii no wo Koppu ni nihai bakari.

Atarasii Tomato, tumetai Asuparagasu, aoku udeta Edamame nadomo iwayuru Mudagui tositewa suki desu.

Hitoburo abita ato no Tyaduke no Adi to iu mono mo, Nippohzin tositewa makotoni syôtyôtekina omosiroi mono desu ga, tikagoro no yôni Kome ga takakutawa, kore sae nakanaka zeitaku desu.　Toki-Yosimaro.

人物評論（九十六）

露國大使を辭任せる

内田康哉子



▽内田康哉子

文學博士　三宅雪嶺

爵を得、爵を高めるのが立身であるとすれば、軍事及び外交に越した事はない。事實の示す所であつて、又理の當然である。列國競爭の際、軍事及び外交に重を置かねばならない。所で、戰役は何時開けるかが分らぬ。或は續いて開けるかも知れず、或は永く開かれぬかも

知れぬ。開けたとて、一二箇師團に止まるものでは、功名心ある者に取つて思はしくない。他の師團は指を啣へて見て居る外ない。外交は之と違ひ、絶えず何事かある。相應に大きなのが次から次ぎと出て來る。

帝國大學の出身で好い爵を得た者、小村侯を初め、内田子、石井子、加藤子、皆外交よりして居る。同窓で一層才幹智慮ある者でも、外交に與からねば、之に及ぶ事が出來ぬ。唯成功の希望ある所に失敗の危險が伴ふ。一々本省と打合せ、全く獨斷で敢てする事が極めて稀れでも、幾分の危險を免かれぬ。十に一つよりも危險が少いにせよ、廻り合せが惡くて、偶ま足を危險に踏入れるやうな事がある。同一の人が同一の力を盡くしつゝ、成功になつたり、失敗になつたりする。内田子は小村侯に次いでの成功者であるかに見られ、己れ自ら之を期待して居つたらしい。年齢に比して、子爵を贏ち得たのは異數に屬する。僥倖と云へば、他人の爵をも僥倖でないとは云へぬ。先づ人並みの勳功で爵を得たと云へる。外務大臣を罷めて閑地に就いて居つたのが、新に駐露大使となり、眼中に光明が輝いたであらう。彼れ自ら有數の外交官を以て居り、大戰亂に大國の大使となり、國家の重きに任ずると共に、功名手に唾して獲られるやうに思つたであらう。運の好い人に何處まで運が向くか分らぬと思はれた。

が、運は時として人を弄ぶ。人は分つたやうで案外に分らぬ事がある。人間の智慧も要するに限りがある。限りも知れたものである。露に革命が起るとは、獨墺側で幾許か豫期して居り、之を煽つた所がある。けれども聯合軍側で、誰が之を豫期したか。當時の外相本野子は就任前に露國大使を勤め、露國の事情に精通してゐる筈なのに、革命の電報が來た時全く之を信ぜず、斷じて其事の無いのを明言した。明言するかせぬかに、其眞實を傳へる電報が來たり、一種の滑稽劇を演じた。併し之は本野の眼が利かぬのでなく、聯合國側は大抵之と同樣の觀察をして居つた。餘りに意外の始末で、如何に之を處置すべきかが判らぬ。前からの關係上、帝室に同情を表し、革命の鎭壓を望んだが、事が思ふやうに搬ばぬ。與國に協議して事を取計らつたものの、與國も手の着けやうに困つて居る。逍が與國では交通の便利多く、早や曉りする所があり、西伯利を隔てた日本はさうは行かぬ。外務省では革命前の露國を知つても、其以後の事を知らぬ。陸海軍から露國に駐在官を出して居つたが、之れも革命を理解するに困んだ。いろ／＼揣摩憶測するけれども、靴を隔て痒ゆい處を掻くどころでない。實は革命が一時の騷ぎでなく、由つて來つた所が遠く、駐在武官も後になつて思ひ當つた所がある。成程ロマノフ家は不人望であつた、あれでは革命も免かれまいと。然し革命の動機は如何にも解らぬ。隨分亂暴千萬である。ケレンスキイは飽くまで獨逸と戰ふといふので分るが、レニン及びトロツキイとなつてはさうでない、獨逸と手を携へまじき勢である、亂暴も餘りに甚だしいと考へる。しかし露國人側から觀ると一分の理がある。露は金こそ與國か

ら借りて居れ、戰場で人を失ふた事最も多い。露が一手で獨墺へ侵入した時、與國は西部戰場で何をして居つたか。唯防禦一方ではないか。獨墺が西部の兵を東に廻し、露軍を挾み討ちにしたのに、與國が見殺しにした形がある。露國は與國に申分があれど、與國が露に何の申分あるかといふ權幕である。實際露國の疲弊は甚だしい。以前から戰役ある毎に兵器を仰ぐ例があり、他國から供給が無ければ、戰ふに戰はれぬ始末になる。平素の心懸けの足らぬ爲めとは云へ、現に斯かる狀態になつて居るのをどうするか。事を爲るには與國から金を借らねばならぬ。借りるのは貰ふのと違ふ。借りるのは多く負擔する事を意味する。今の儘で借り續けたならば、將來の露國は如何になるべきであるかと云ふ。露國人は必ずしも此邊の思想に於て一致するのでなけれど、此思想が可也に普及して居る。英、佛、米等は初め革命に驚いたが、當らず障らず事を取り運ぶことにした。ケレンスキイの援助に失敗してから、一層當らず障らずにして居る。

日本では此邊の事が、歐米程に分り難い。帝室擁護の意が有ると疑はれても仕方が無い。ケレンスキイの間は好かつたが、レニンとなつては距離が遠くなる。日本の態度はどうであるかと問はれる場合、何分にも意思の疏通を缺かうとする。内田子は革命後稍々事情が分つて來た。露國人に對して、日本が反感を以て居るを示したくない。革命の已むを得ぬのを認めやうとする。若し革命を非難したならば、如何なる騷きが起つたか知れたものでない。併し本國政府は、革命に同情を表して居るとは云へぬ。隨分手强い電報も行く。内田は其邊何とか圓く切拔けやうとしたが、實際はなか／＼思ふやうなものではない。露人に疑はれ、政府から督促される。其儘板挾みとなるべきであるか、本國に歸つて委細の事情を具陳し、態度を改めて貰ふか、遲れては取返しが付かなくならうとて、歸朝する事になつた。歸朝をして當路者に問ひ訊す。それが何程まで聞かれたか、聞かれぬ事が多かつたか、外交調査會で事の決定する日に辭職した。辭職した原因は、露國に對する態度にあるか、又は當路者の好まぬ運動をした處にあるか、今は訊ねる場合でない。革命前露國は聯合國中頗る重をなした。英、佛も其陸軍を賴みにして居つたので、其露國に大使たるは、好い餌を宛てがはれたものと云はねばならぬ。所が其餌は最初豫期したと違ひ、食ふ譯に行かなんだ。伯爵の取り逃しである。世間は都合の好い事ばかりでなく、偶まには都合の惡い事もある。英、佛、米等の大使が無事に勤めて居るのに、獨り内田が露に大使として、何の得る所が無かつたのは、眞に廻り合せが惡かつたのである。若し内田に特殊の氣力が有れば露國から歸らずに踏み止まつたらう。災難に逢へば、不幸は不幸でも何等か新現象を作り得たであらう。歸朝したので何程か當路者の考を變じた所があるかも知れぬけれども、自分で歸らねば、意見を述べられぬか、人を歸して濟むではなかつたらうか。此邊は人々の考次第である。

内田は普通の官吏と違ひ、官吏を罷めても何處かに發展し得さうに思はれる。鳥渡豪傑肌に見える。政黨に加はり、政治家として立つて行かれさうに思はれる。所が熊本生れの爲めか、磊落らしくて、さうでなく擬はれる。赤心を人の腹中に置くといふやうな事が出來ぬ。人受けが好い筈であつて、さうは行かぬのは、其邊の事が與かる。同級生で同じ熊本人の林田龜太郎氏がある。之れ亦才物であり、人物も面白い。矢張磊落の風がある。磊落であつて何處か薄暗い。内田子と性格を異にして、其邊に共通の點がある。表面薄暗くて、内心誠が籠つて居れば、出世は遲いにしても、進みが堅實である。然し薄暗いのは人の性分よりも、郷土の空氣の然らしむる所かも知れぬ。安達謙藏氏など、表面薄暗くして、却つて都合の好い事がある。然し林田氏に比ぺれば、内田子は順境であり、幸である。駐露大使として成功しなかつたが、失敗と云ふでもない。尚ほ將來もある。一つ思ひ切つて政界に活動するか、又はそれも餘計な事として樂隱居しやうとするか。時が來れば判明する。

▽護謨人形の男振

鐵拳禪

一

藁パンの露都を引揚げ、歸朝の途中に在る駐露大使内田康哉の身邊は、非常に憂慮されたり。或は過激派軍の爲に抑留されたりと云ひ、或は行方不明になりたりと云ひ、揣摩臆測を逞しうして尾鰭を付けたる新聞記事は、大使一行の前途が暗澹として、刻一刻に危險の迫りつゝあるが如くに思はしめたり。されば、外務省が國交斷絶に非ざる旨を辯明せるに拘らず、世人は宣戰布告の遠からざるべきを豫想して、一種の緊張を感じたり。是れ、大使の旗を捲いて引揚げ來ると云ふ以上は、的切それなりと早合點せるに由るべしと雖も、某提督の西伯利に急行せる事と云ひ、軍艦の浦潮に急派されたる事と云ひ、その前後の氣分、風雲のたゞずまひよりして、兩く切迫せる形勢を胸裡に描出し得ざるにも非ざりしなり。

而も大使一行は無事に歸朝せり。豫定されたる日數よりは多少手間取り、不安の闇黒を疾走し、突破し來れる樣子なりしと雖も、過激派軍より輸送護衛の任に當れるものありしとかにて、豫想程の困苦を痛喫せざりしに似たり。藁パンの思出を語ることに由りて、露都生活の困難は察せらるれども、減食する程の事も無かりしと見えて、別して痩せ衰へもせず、一同皆喜色滿面、何處を風が吹くかと云はねばかりの有樣なりしは、其歸朝を迎へたる者の印象に新なる所なり。殊に大使内田の如きは、肥滿せる體軀に、溢るゝばかりの微笑を湛へ、活氣舊に倍せるの觀あり。流石に護謨人形と云はれし程の面貌も血色好く、豐かなる頰、二重に括れたる頤、尚莊んなる殿御の如く、

何處を押せばとて、病氣の悲しき呻き聲を發しさうにも無かりしなり。

固より病氣にも樣々あり。肥滿せりとて、必ずしも健康なりとは稱すべからず。彼れの太れるは、不健康の爲に太れるや知るべからずと雖も、何としても病軀職に堪へずなど云ふ風にはあらず。活動せずんば、倦怠却て病氣を招く者の如くに見えたり。それ程に、彼れは盛んなる元氣と、大なる意氣組とを以て歸朝せり。彼れの引揚は、一時の引揚にして、政府と打合の上、再び任地に赴きて活動せん底意なりしに相違なしと雖も、恐らく霞ケ關の空氣に接し、政府の意向を探るに至りて、彼れの意志と大なる溝渠を劃するものありしを發見せるならん。彼れが歸朝の際の多辯なりしに似ず、歸朝後は深き沈默を守り、滿面の微笑の次第に豊かなる双頬より消え去るを見る時、彼れの得意を裏切る何物かの伏在するものあるに想到せざるを得ず。

當時の外相本野は、西伯利出兵論者なりき。(以下略)然るに、內田は獨逸勢力の東漸を一笑に附し、西伯利出兵の早計を說き、過激派政府の勢力の侮るべからざるを云ひ、暗に之を誤解し、疎外するの、外交上得策ならざるを諷せり。惟ふに、彼れは或度まで過激派政府を認め、之と國際談判を開始するを可なりとせるならん。彼れが歸朝の途上、新聞記者等に對して言明せる所を徹底せしむれば、即ち玆に歸著せざるを得ず。英佛は在來の行掛り上過激派政府を認めざりしも、米國は依然大使を駐剳して、樽俎折衝の任に當らしめ、著々利權を占めつゝあり、彼れは本國政府の電命に依りて引揚げたるも、その意米國大使と行動を共にするを可なりとし、若くはそれを可なりとせざる迄も過激派政府を威嚇するの不可なるを觀取し、何等か適宜の處置を取らんとせるなるべく、過激派の反感を買ふべき出兵には全然反對なりしやうなり。この論鋒を以て進めば、勢ひ政府も衝突せざるを得ず。何となれば、政府は既に出兵の肚を固め、唯その機を窺へるに過ぎざればなり。

既に現內閣が過激派政府を認めざるに於ては、或度まで過激派政府を認めて仕事を成さんとする內田の意見と、甚しく相背馳するものと見ざるべからず。更に出兵問題に就ても、相反せる意見を有する以上、彼れの主張を捨てゝ屈從するに非ざるよりは、焉んぞ能く現內閣の下に駐露大使たることを得んや。彼の斷然辭職して、青山白水の裡に靜養せんと云ふもの、蓋し表面の理由に外ならず。その裏面に、如何に不平の抑ふべからざるものあり、豎子敎ふべからずとの冷笑の籠り居るかを知るべきなり。

二

內田は熊本人なり。熊本人の特質は、吾人の說明すべく餘りに知れ渡れり。彼れ其の面貌の相似を以て、護謨人形と稱せらるれども、熊本人たる以上は、矢張熊本人の特質を有す。怜悧にして險辣なると共に、多少豪放がる所もあるやうなり。それだけ彼れは才人の才を以て世を渡らんとする、一種の熊本人とは其の氣風を異にし、輕薄味の肉が浮くやうに感ぜしめず。さ

れぱとて、彼れには東洋豪傑式の蠻味なく、何となく外交官の溫柔味仄なるものあり。彼れが豪放がりて酒を呷り、時に怪氣焔を揚げて、他を煙に捲くことなきに非ざるも、對者の觸感を粟せざるは、之あるが爲なり。その一派の如才なさは、彼れを豪傑たらしめず。縱毅たらしめずと雖も、かの片々たる外交官に比し、何程か稜々たる氣骨あるを見る。彼れが郷黨より多少の信頼を掛けらるゝは、高位高官たるにも出るべしと雖も、亦斯かる氣骨を有するに由らずとせんや。

彼れは明治二十年帝大政治科を卒へ、外交官として身を起せり。二十三年農相陸奥の秘書官となり、一時別途に走りたるが如き觀ありしも、彼れが將來の陞進に影響せしこと幾許なるを知らず。陸奥の外相たるや外務書記官に擢んでられ、爾來霞ケ關の外交事務に沒頭し、三十三年政務局長を經て總務長官に進めり。翌年駐支公使として北京に乘込み、日露戰役後駐墺大使となり、次で駐米大使となりて、外交舞臺に活躍せり。日米條約改正の功に依りて子爵に叙せられたるも、姑息的解決を以て甘んじ、禍根を貽せる如き事情もあり。未だ上乘の出來なりとは稱する能はず。然るに、最屓眼に見る者は、内田なればこそあれ程の事もやりたれと嘆美し、他の者には到底遂行し得まじとの意を寓せり。それ程に人物拂底の外交界に在りては、彼れが如きも尙雞群の一鶴たるべき理由あり。

本野入りて現内閣の外相たるや、出でて駐露大使たるべき人物なく、其の選任に頗る苦しめるものあり。一體ならば、泣かうが泣くまいが護謨人形の如きは、そつとして置けば宜しきものなりしに拘らず、三顧の禮を盡して、漸くのことに内田を出廬せしむる事を得たり。彼れ自身より云へば、久しく閑栖に倦み、宦海再游の意なきに非ざりしも、自ら進んで遣外使臣たらんこと、前官の手前面白からず。暫く風雲を觀望せるなり。よもやと思へる現内閣より出廬を促され、次で强要さるゝ迄もなく、渡りに船と乘り出すべき筈なるも、其處が外交上の掛引にて容易に起たず。何等か自己に有利なる言質を取りて、駐露大使たるを承諾せしに似たり。されば、彼れの意を決して露都に赴く、尋常外交官のそれとは異なり、十分活動に自由餘地を作り自らも亦大に成す所あらんとせるに相違なしと雖も、實際は餘りに目ざましき何事をか成さず、徒らに英佛の後塵を拜するの風あり。自主的外交の、動もすれば嘲笑的外交に墮せんとせり。斯の如きは、本省の命令にして如何ともすべからずと云はば、それ迄なるも、彼れが實蹟を觀れば、當初の意氣込ほどにも無かりしなり。西伯利出兵の不可を唱へ、過激派政府是認の意向は有せば、卒然旗を捲いて歸東することなく、米國大使と共に止まるを得策なりとすべし。之を知らざる程に愚ならざる彼れが、敢て愚策に殉じたるは、其處に何等か情實なしと云ふべからず。

彼れが辭職の決意、夙に露都撤退の當時に非ざるべからず。その外相の本野たると、はた後藤たると、何の遠慮も無かるべきなり。彼れが辭職の決行は、之を發表する時機の問題に過ぎざ

りしと思はる。尤も出兵問題の解決今日の如くならざるに於ては、辭職の決行、尙數日乃至數月の後にありたるやも知るべからず。『最早露國に赴くことを得ずと思へば』と云ふの口吻に徵するも、略想察せられざるに非ず。

三

彼れが辭職後、政友會入黨を傳ふる者あれども、彼れは之を打消せり。病氣療養と政黨加盟とは兩立せず、縱令入黨するとして、面當がましく今日直ちに入黨すべしとは、怜悧なる彼れの行動としては信ずる能はず。瓢簞より馬の躍り出づるの滑稽もあれば、この噂の將來事實たるや測られずと雖も、餘りに彼れの鬱憤を忖度し、報復を想像せるより出來せる、芝居の筋書なり。政界に大飛躍を試みるべき主人公としては、その性格、力量より見るも相應しからず。

彼れが政友會に近しと睨まれたるは、今日に始まれるに非ず。實に彼れが第二次西園寺內閣の外相たりし時にあり。該內閣は政友會總裁たる西園寺の首相たるに由りて、政友會內閣なりと稱するも、閣員の顏觸より觀る時は、九州內閣なり。九州の政治的勢力を代表する者は薩派なるが故に、薩派內閣と云ふべくんば、固よりしか見られざるにも非ず。農相牧野伸顯、法相松田正久、藏相山本達雄、文相長谷場純孝の四人迄も九州出身にして、海相齋藤實は薩派と目せらるゝ人なり。加ふるに外相內田を以てし、誰が九州內閣に非ずと云はんや。內田の薩派及び政友會と左提右携するが如く思はるゝも、決して所緣なきに非ざるなり。（以下數頁略）

▽世界の大勢から割り出す內田君

林田龜太郎

明治十二年か三年のことであつたが、熊本本山の嘉悅先生の廣取塾へ、田舍の爺さんが年頃十七八の色の白い少年を伴れて來た。塾頭の福島綱夫と云ふ人が應接すると、其老爺が曰ふには、此子供は之れまで西京の同志社へ入れてあつたが、生涯を耶蘇坊主にして暮らさせるのが可哀想なので、此方へ御世話を願ひに上つたのである、英學は二三年やつたから相當な級に入れて、日本國民として相應はしい教育を施して頂きたいと云ふのである。そこで福島さんが英語の試驗をやつて、編入されたのが即ち私共の級で、其色白の一少年が當年の內田康哉君である事は言ふまでもない。其時分私共の級には龜井英三郎、增田武城などのチヤキ〳〵が居て幅を利して居た。そんな連中の中にやつて來た內田君は極く柔和しい子で、それに非常に學力が優秀であると云ふ譯でもなかつたので、餘り人の注意を惹かなかつた。尤も幾何學だけには優れた理解力を以てゐて、級中に一頭地を拔いて居た。けれども其他は一般に餘り上手でなかつたの

で、今日のやうに一國の運命を擔つて立つ外交官になつたり、大臣に任ぜられたり、子爵に榮進しやうなど丶は、誰も當時考へ及ぶ者が無かつた。

明治十四年に私共は廣取塾を卒業した。尤も龜井だけは卒業前に退塾して上京したが、内田は増田や私共と一緒に卒業して上京し、大學豫備門二級に入り、明治二十年大學を私と一緒に卒業した。増田は少し遲れ、龜井も確か二十一年佛法を卒業したと思ふ。内田君の在學中は非常に秀れた方ではなかつた。けれども秀れた方でなかつた事は、一生懸命學課に噛り附いて、點取りを主とする勉强をしなかつたと云ふ事で、決して内田君の學才が實際に劣つて居たと云ふのではない。内田君は當時一方に體格を錬える爲めに澁川式の柔道を稽古し、一方盛んにナポレオン傳を愛讀して居た。哲學も喜んで研究して居た。若しも是等の精力を學課にばかり注ぎ込んだら、世間に云ふ秀才には十分なれる資格を有つて居た。それでも卒業する時には一木喜徳郎君が首席で、内田君は二番目であつた。其間の品行については東洋豪傑流で、十分酒も呑んだし、殊に内田の穿いて居る下駄と來ては、何時も一本歯が欠けて居ない事が無いので有名であつた。けれども着眼點は遉に匠々たる點取り者流と違つて、人生の大觀を心懸けて居つた。政治上でも先づ世界と云ふ事を腦中に於て、日本を其世界の一部として眺めるといふ風があつた。社會に出てから後に長く外國に留まつて居た爲め、日本の實狀に疎いといふ欠點はあつたらうが、然し政治舞臺に立つて、種々の觀察や施設をするのにも、世界の一員としての日本と云ふ見地を忘れない。人生の大觀といふ哲學的見地から種事を考へたり行つたりする。最近の内田を目してレーニンの思想に染みたとか、革命感染れがして居るとか云ふ者もあるが、皆此邊から來る事で、畢竟世界の大勢に通じない者の言に過ぎない。露西亞を引上げた事の早きに失したのは臆病だからだと云ふ者もあるが、決してそんな事は無い。それには云ふに云はれぬ種々の理由もあるであらうが、露國の過激派の心理が我國に十分徹底されて居ない爲め、早く日本の朝野に其の眞意義を理解させたいと云ふ譯で、ボログナを引上げたに違ひないと私は信じて居る。

今度出兵反對の主張に殉じて職を辭したと聞くが、大使は辭しても外交官を罷めた譯ではあるまい。私は同君が外交官を罷めるやうな事のないのを希望する。斯く論ずる故は、現在日本で最も缺乏してゐるものに、財政官に外交官であると思ふからである。財政官にはそれでも相當に人が有るが、外交官になると全く人が無いと云つても可い。こんな狀態であるから、内田君のやうに卓見ある外交官が今日其地位を全然捨て去る事は、國家の爲めにも甚だ悲しむべき事である。露國大使は罷めても、外交官としては長く其地位を去らずに、もつと〳〵盡くして貰ひたい事を内田君に切言する。

▽內田康哉子

父　狂

一

◎內田は出兵に反對して罷めたと云ふ噂があるやうだが、ナニ直接出兵に反對したと云ふのではないのサ（中略）事實に於て罷めさせられたも同樣な姿になつて居る。
◎實は近々再び露國に行かうと云ふのでね、外務大臣に相談した所が、外務大臣も夫れが宜からうと云ふことになつたのだ。今度內田に非常な決心があつて、或は彼の地で命を捨てるやうな事があるかも知れんと云ふで、熊本に歸省して展墓をやるなど、心殘りなく準備を整へて、イザ出發しやうと云ふ段になつてから、突然政府から出發を見合はせろと云ふ命令だ。
◉內田がレニン贔負と云ふので、政府は內田を露國に遣るのは危險と思つたらしいよ。何うも官僚の大頭株連と來ては、現代人からは想像にも及ばぬ位の舊い思想を持つて居てからに、支那の革命の時にも、隣國に共和國が出來ては困ると云つて騷いだものだが、今度も亦た露國が極端な民主政治になつたのを心配で心配で堪らんのだ。
◎何故心配するかと云ふと、日本人が共れにカブレる憂ひがあると云ふのだ。（下略）
◉所が米國は過激派と思想上に共通の點がある上に、經濟的に個人でドシ〳〵西比利亞方面に投資して居る。日本政府は彼等と思想上正反對である上に、經濟的に投資する金もないと來てるものだから、西比利亞に於ける米國の勢力は、日々伸張して行くと云ふ形勢だ。
◎やれ〳〵話が橫道に這入つた。扨て內田だがね、あれは流石に世界を廣く見て居るだけあつて、コセ〳〵した考へをしないよ。外交でも何んでも世界の思想に順應しなければならん。現政府は直ぐにも過激派が亡びるやうに思つて居たやうだが、內田は然うは思はなかつた。民主派の內にも種々程度の區別はあるが、帝政派などは既に腐朽し切つた貴族富豪の一部にある許りで、大勢は民主主義であると見て居た。夫れに今日となつて段々事實が證明して居るのだ。
◎斯んな事で、內田は露骨に言へば官僚の一部から危險思想者と見られたのだ。そこが內田の露國行きを差止めた理由だ。其處で內田は內心大に平かならず、何時までもブラ〳〵して居るのは窮屈だから、イツソ奇麗薩張りと辭職して、悠々自適したいと言ひ出し、政府も聊ムツトした形で早速承諾したと云ふ次第だ。

二

◎內田は面白い男だ。ゴム人形のやうな顏をして居るから、翩々たるハイカラ才子かと思つて居る者もあるが、あれでなかなか奇骨に富んで、頗る纎からだよ。共れに非常な天狗で一日に

の外交家では、吾輩と伊集院と二人だ』と臆面もなく放言するさうだ。

◎内田が米國公使館から歸つて、陸奥（時の農相）の秘書官をやつて居た時分に、三菱の娘――加藤の妻君の妹に當るだらう――をやらうと云ふので、某料理屋で彌之助と内田が見合ひをしたまでは可かつたが、内田は彌之助が自分を小僧扱ひにしたと云つて怒り出し、とう／＼毆つたとか毆らうとしたとかで、彌之助も大に面喰ひ、あんな亂暴な奴に三菱の娘はやれぬと言つて破談したさうだ。

◎内田は陸奥が米國公使をやつて居た時に、公使館の書記官だつたが、大變に陸奥の御氣に入りになつて、陸奥と共に歸朝して、陸奥が入閣した時に秘書官になつたものだ。原敬は前任の井上時代から秘書官となつたが、陸奥の下に留任して内田と一緒に遊びもすれば、議論もした仲だ。

◎林董、原敬、内田など皆んな陸奥の乾兒だが、内田は原よりもズット後輩で、原が外務次官の頃に、内田はまだ公使館の一等書記官だつた。原が通商局長になつたのが明治廿五年、加藤高明が大藏省から外務省に轉じて政務局長になつたのが同廿七年だ。加藤も矢張り陸奥から引立てられて外務省に轉じたのサ。

◎そして内田が通商局長になつたのが同三十年、政務局長に轉じたのが同三十一年だ。林權助は内田の後に、三十一年に通商局長になり、本野一郎は三十一年に一等書記官から全權公使になつたのだから、先づ今日の外交官では内田が一番先輩だ。

◎學校の方は加藤が明治十四年の帝大出身で、内田は二十年の卒業だ。同年の政治科卒業者は、一木喜徳郎が一番で内田が二番、早川千吉郎が三番の林權助が四番、林田龜太郎も同時の卒業だ。

◎第二次西園寺内閣で、内田が外務大臣になつた時には、貴族院あたりでは丸で小僧ツ子のやうに言つて居たものだが、其の大臣振りは、何うして／＼石井などよりもズット立派だつたよ。

◎内田の英語と來ては巧妙なものだ。本野の佛語と外交界の二幅對だらうよ。其れに米國に長く居たものだから、萬事が頗る米國流で屈托がない。陰險な點がない。是から先きは日本の官僚主義のやうなものでは、國際場裡に立つて行けんよ。戰後の經綸とか何んとか偉さうな事を言つても、第一思想上に於ける戰後の準備からしてかゝらなければ駄目だ。

◎熊本人は一體に陰險で、官僚的な氣風を持つて居るものが多い。例の國權黨は其の代表者だ。高田露とか宗像政とか幾分異つた風の男だつたけれども、あれで矢張り熊本人たる事を脱し得なかつたからね。其處に行くと内田は廣い世界で育つた丈けに、スツカリ熊本の垢を洗ひ落して居るやうだ。

◎モウ加藤高明も外務大臣でもなからし、石井はヒョロ／＼で駄目だし、見渡した所、全く内田の言ふ通り伊集院と彼れと二人の外交界になりさうだ。何しろ太ツ腹な點が一寸頼母しいよ。

▽其辭職徒爾ならず

川尻東馬

▲往年外務大臣としての内田子は、如何にも貧弱な貫祿の足らぬ霞ヶ關の主人公であつた。殊に支那問題で、犬養君から議會で問ひ詰められた時杯は、卓につかまつた儘、顏色蒼白ガダ慄ひに慄へたので、當時物笑ひの種となつたのだが　併し犬養君としても、實は紳士として、別けて一黨の首領としての遣方ではなかつた。

▲下關か其邊の汽車中で、内田子は支那問題に關する内情話をして聞かしたのだ。併し夫れは權威ある民間の大政治家として、十分の信用と敬意を拂つたからの事で、眞逆之を議會で素破拔かれようとは、夢にだも思はなかつたのである。然るに案外にも此内情話が、公然議場の質問として現はれたから、驚き呆れるのも全く無理がないのさ。自分は確かに云つたに相違ないが、之を議場で肯定したなら、夫れこそ國家の重大事件となるのだ。さればとて現に自分の口から出た爾も事實問題を、全然否認し了る程に、人間が横着に出來て居らんのだから、終ひには思案に餘つて、彼のガダ慄ひの一幕を演じたのである。

▲當時其實情を知る者は、寧ろ内田子に同情を表して、犬養君も餘りに酷い、賣名專門の陣笠なら兎も角として、苟くも天下の木堂ともあらうものが、苛めるに事かいて、赤兒同然な内田外相を、爾も咽元に刄を擬して慘酷に扱ふとは、武士的人情のない位ならまだしも、殆んど無慈悲殘忍な强慾爺のやりそうなことをするものだと、木堂の不人情不德攻擊は、却々玄人筋には相當に多數であつた。併し議會であの態裁であつた内田外相は一般世間から揶揄と冷笑を浴びせかけられ、此一事明かに落第だと衆評殆んど一致の狀態であつた。

▲此事は兎も角として、大體から云へば外相としての内田子は、確かに小膽無能、殆んど爲すなきの大臣であつた。無論軍閥外交が權勢を揮つた爲めに、思ふことは十分の一も行かなかつた内情は之を諒とするも。此軍閥外交に壓迫されることは、歷代の外相比々皆悉く然りで、故小村侯にしろ、又加藤子にしろ、皆同樣に苦い辛らい幾多の經驗を嘗めて來て居るのだ。殊に小村侯、加藤子杯は、俗に所謂喬木に勁風といつた譯で、他の外相等よりは、更らに一層風當りの强かつたことは、疑ひもない事實である。

▲今度露國に大使としての在任中も、隨分軍閥の壓迫は受けた樣だが、子の直話なりとして、傳へらるゝ處によると。今度程痛烈な極端な壓迫を受けたものは、歷代の外務大臣でも、亦支那公使でも、恐らくは其比を見ざる處であらうと云つて居るそうだ。（下略）

▲軍閥外交の壓迫は、勿論多々あつたにしてからが、あの大事の場合に露都を引揚げて來た大使の行動には、全然同意は出來

んのだ。露國に於ける本國の活動、夫れは遥か遠方に居る本國人間にも、十分に夫れと見出さるのに、眼前之を觀過しつゝ、如何に生命は大事であらうと、苟くも大使として外國に本國を代表して居る以上は、自己の生命財産杯、勿論毫毛の輕るきに比すべきが當然である。或ひは露國の内情を親しく本國政府に報告し、依りて以て今後の對露政策の根本義を確定させる、參考の爲めの歸朝といふかも知らんが、否な或る一面には明かに此意味の含まれて居るとも、相當諒とすべき消息は傳へられて居るが、若し果して夫れが全部の歸朝目的とすれば、丸毛參事官を歸朝させる丈けで、用向の傳達は十分である。

▲然るを自ら急行して歸り來り、其後は本國に晏如として絶へて任に歸るの風なく、參事官以下露國に居殘れる大使館員の窮境苦痛には、外間より見て些の同情議論のあるべしとも思はれぬ狀態、即ち所謂恬として顧みざるが如き薄情不信の行爲心底と垢罵せられても、殆んど辯解の辭に苦しむのは、大使歸朝後の態度であつた。況んや其歸朝に際しては、大使館内意見兩派に分れ、歸朝說と非歸朝說と双方相對峙して降らず、結局歸朝說の館員は歸朝し、非歸朝說の館員は露國に止まつたとか云ふ話で。斯く思ひ〳〵に行動を取つて分れる迄には、實に云ふに云はれぬ面白からぬ事が、其間に起つたといふ信憑すべき譯もあるのだ。

▲併し今度の出兵問題に對し、斷然たる處置を取つたのは、如何にも主義主張に終始する男性的行動で、爾も責任を理解する立派な決心と、玆に褒詞を呈するに吝かならぬのである。(下略)

▲此軍閥外交に脅かされ、不安の念を抱く國民は、如何に不幸であるか、又國家として何程強い大きな不祥事であるか、斯様な事は今更ら事新らしく論ずる迄もあるまいが。兎に角軍閥外交の最後の目的に對しては、内田子は本野外相時代から、熱心に反對して居たとは、隱れもない事實である。其爲めに奔走もし又說明もして歩るいた、又長文の意見書も提出した。之れ大使としては、恐らく出來る丈けの、出兵反對意見徹底に努力したのであらう。這般の勞に就ては、多少事情を知るものゝ、皆均しく諒として居る處である。(以下數頁略)

▲兎に角内田子今回の辭表は、實に國家の爲めに有意義であつた。少なくも軍閥外交の近き犧牲者として、國民に記臆さるゝ丈けでも、其處決の徒爾ならなかつた事は明かだ。況んや結論から見て其意見が、殆んど最後の勝利を博した一事に想到すると、子が今度の出兵問題に對する、花形役者の一人たる資格は、當然之を認め又許して遣つて差支ない筈である。

(以下數頁略)

新渡戸博士著

縮刷

隨想錄

菊判半截・三五二頁
定價壹圓廿錢・送料八錢

靜觀すれば宇宙の森羅萬象は、皆、是れ吾人に多大の教訓を暗示す、冲天の一閃星も見る人によりて、悲愁の追憶となり希望の標的となる。本書は宇宙人生に對する博士の靈感を輯む想は高玄、文は清麗、能く人を動かし、人を感ぜしむ、重版幾萬、今また全篇の文字を加朱改修して、縮刷成る、綠蔭の下、敢て江湖の清鑒を待つ

櫻井鷗村著

縮刷

リンコーン物語

菊判半截・九二〇頁
定價壹圓四十錢・送料八錢

邦文偉人傳中の名著として青年渇仰の中心をなせるリンコーン物語は著者努力の結晶なり本書に感化せられ新生涯に入れる一青年が著者に謝せる書狀の一節に『將來多少なりとも人らしき言動をなし得ばそは直に貴著の賜なり』と内觀自省彼をして此言あらしめたり。今や本書縮刷新粧して重ねて江湖の愛讀を待つ。

櫻井鷗村著（第四版）

ナポレオン物語

菊判上製・四六六頁
價壹圓五十錢
郵送料拾貳錢

猛獸視され詐欺漢视されたのあらゆる誤解を蒙れる蓋世の英傑大奈翁は『歷史は吾を義とせん』と確乎たる自信を殘せり。著者犀利なる眼光を以て彼の生涯を洞觀、其功罪を査覈して彼を義とせり。

マーク、トウエン原作　佐々木邦譯（第二版）

ユーモア十篇

四六判・二九六頁
定價壹圓
郵送料八錢

苦鬪を日常の生活とする吾人は讀みつゝ、微笑を禁じ得ざるユーモア本位の讀物を必要とす本書は高尙なる諧謔趣味の文學を以て聞えたるマーク、トウエンの作物中傑作十篇を輯めたる時代的要書也。

新渡戸博士著（第廿二版）

英文武士道

四六判・一九四頁
價壹圓貳拾錢
郵送料八錢

我日本人の精神を海外に紹介せんが爲に著述する所なり本書一度公刊さるゝや好評嘖々各國競つて自國語に飜譯し今や實に英、佛、獨、伊、瑞典、那威、波蘭、ボヘミヤ、印度の九ケ國に及べり。

櫻井鷗村編（第三版）

英詩評釋

四六判・四〇〇頁
價壹圓參拾錢
郵送料八錢

古來英國は世界に於ける唯一の詩の國にして古きは沙翁より新しきはキプリングに至る迄國寶的詩嚢に滿つ本書は英國の名詩を輯め詳細なる評釋を試む特に設けたる脚註は原文との對照に便せり。

發行所　東京市麴町三丁目　振替東京七八四七　丁未出版社

●迷はず
光榮ある人參を
愛用あれ

高貴御料の光榮を拜す

朝鮮
純人參精腦

定價
十日分壹圓
三十日分參圓
六十日分五圓廿錢
九十日分七圓

本劑の特色

●本劑は朝鮮開城産高麗人參の純粹なる朝鮮産人參中より主精分を煎出し之を收縮製劑し絕對に他分を混合せず

●本劑は病後衰弱、生來虛弱、腦力疲勞、産前産後、冷性の人其の他一般精力缺乏の人服用して忽ち元氣旺盛となり疾病に對する抵抗力絕大となる

●風呂用朝鮮人參 一回分二十五錢 十回分貳圓

●三ツカシワ人參水飴 大貳圓、中壹圓 小五拾錢

製劑元 京城府 朝鮮製藥合資會社 振替京城參八壹〇番

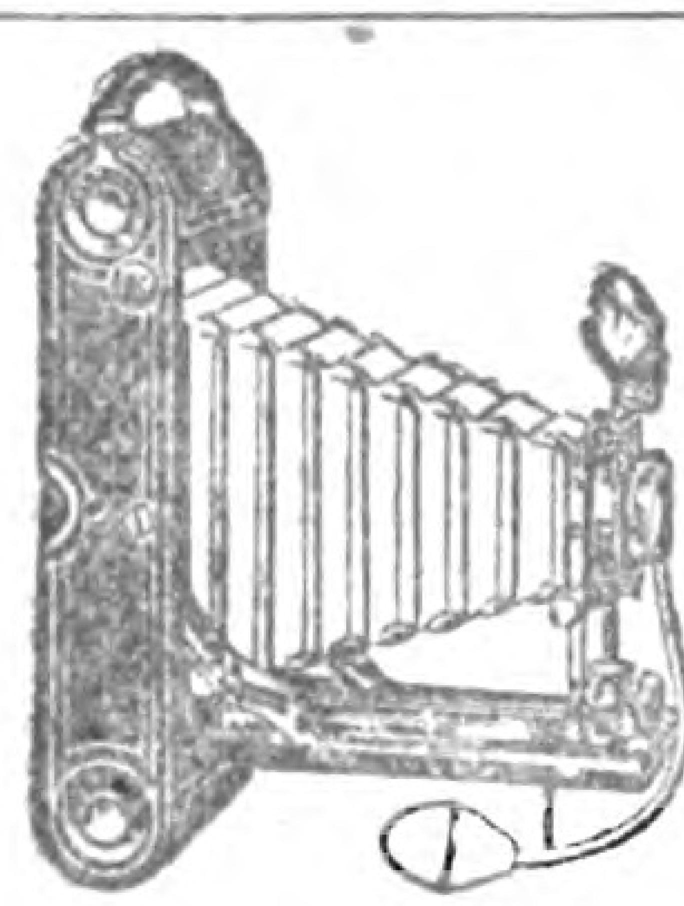
關東直轄 東京支店 東京牛込區白銀町 振替東京貳四五貳五・電話番町五四壹壹

海へ山へ
避暑旅行に寫眞器

最新式でよく寫る器械

チエリー、カメラ 參圓より
ミニアム、カメラ 拾壹圓より
アイデア、カメラ 拾五圓より
ペール、カメラ 卅五圓より
ペリー、カメテ 五十圓より

東京市日本橋區本町二丁目
小西本店
出張所 大阪市長堀橋筋



(目錄進呈)

▼お寫しの種子板は本店で仕上げを致します

評論

參戰以來の米國の努力と實績

大山郁夫

目下佛蘭西で實戰に從事して居る米國增援軍の活躍振りは、多數の人々に取つては、多少の程度に於て意外の出來事であつた樣である。米國建國の歷史や、南北戰爭の始末や、百餘年前のニユーイングランド十三州から今日の合衆國に膨脹した過程や、米西戰爭中に於ける米國人の意氣等を追憶し、現代米國青年の清新なる氣象と剛健なる氣魄に充ちて居ることが、その國民的遊戲なるベースボール・ゲームなどの上にも現はれて居ることなどを考へ、又多くの州立大學で年來行はれて居たミリタリー・ドリルなどが、學生に依つて快活に演ぜられて居た事などを顧み、且つ一般米人間に於て科學的知識及び機械を取扱ふ熟練が恰かもその本能になつて居るかの如く發達して居ることなどを參考にして居た人々に取つては、在佛米軍が現在示して居る活躍の如きは、全然豫期の中に在つたことであるが、邦人間には斯の如き事を豫期して居たものは、極めて寥々たる姿であつた樣であつた。否、米人の軍事的能力を見縊つゝ居つたことは、獨り邦人にのみ限られて居た現象でなく、此事は殆んど世界的のものであつたと謂つても好い位であつた。戰前に於て米國の街頭や郵便局などでよく見掛けた Men Wanted for the Army とか、Men Wanted for the Navy とかの文字を肉太に刷り出して、兵營若しくは軍艦内の生活の愉快な事、殊

に海軍に在つては勤務の副産物として世界の諸地方の見物が無料で出來る事、及び給與せらるゝ賃銀の比較的に良好なる事などを記したビラの如きものは、如何に屡ば諸國民の好謔の材料となつて居た事であらう。賃銀で働く兵隊に何が出來やう、とは諸國民が言はず語らず合意して居た事の樣であつた。米兵の訓練の實況がよそ目には如何にも呑氣さうに見えたことも、壯丁を苛ぢめなければ有效な兵卒になれないものとの確信を持つて居るものどもに取つては、笑話の好材料としか見えなかつたものである。

米國人がその國旗たる星條旗に對しては、他國では見られない程の感激を有して居ることは、誰れでも知つて居ることである――米國の寄席や劇場で星條旗が幻燈若しくは活動寫眞で映寫せられると、滿場暫らく鳴りを鎭めない程の喝采の續くことは、多くの旅客がその旅行記中に記載することを忘れなかつた所である――けれども、それと國民精神とは、不思議にも多くの人々に依つて別物だと考へられて居た。そして弱いといふのが米國軍隊――民兵の群れを何か名づくることが出來れば――の通り相場であつた。

獨逸人は多數の移民を米國に送り來つた關係上からでもあるのか、中々米國の文明をよく理解し、咀嚼する能力を有して居た。獨逸國の各都市で American Dentist と英語をその儘書き附けた齒科醫の看板の到る處に夥しく掛けられてあつたことは、可なり鈍感の旅客の目にも映じない譯には行かなかつたことである。又是も戰前獨逸の各都市で見られたことであるが、土地で相當に賣つて居る百貨店(ヴァーレンハウス)では米國の製品が非常に多く陳列せられたものである。電車の車輛や、自動車のタイアが米國から獨逸に少からず輸入せられたことも、世間周知の事實である。のみならず學術自慢の獨逸の工場でも、その經營方法上の所謂 Scientific management を英語その儘で呼び做し、米國より專門の講師をそのために態々招聘したことも亦、よく聞かされたことであつた。

けれども獨逸人が稱揚した米國人の文明は、自分の

知つて居る範圍内では、主としてその機械的及び商工業的方面であつた。文化的方面に於ては、彼等は植民地文化といつた樣な無限に嘲弄の意を含んだ言葉を用ひて、只女に丁寧なだけが取柄だなど丶述べたトライチユケの蹤を趁うて、頻りに侮蔑の眼を之に向けた。斯の如き傾向は、米國の軍事上の方面に關しては、更に一層顯著に現はれた。彼等は、南北戰爭を兒戯（キンダーシユピール）と呼んで嘲笑したモルトケ將軍の說をその儘信じ續けた。先年米墨間の外交關係の切迫を告げた頃、當時獨逸に留學中の自分は、獨逸の諸新聞紙上で、墨哥西の數萬の兵を巧妙に指揮すれば、米兵を擊破すること位は何でもない事だといふ趣旨を述べたる軍人の寄書を屢ば讀んだ。また自分は何かで、獨逸の某海軍將校の米國征服策といふものを讀んだ。何でも十萬の獨逸の陸兵を輸送して、ハドソン河を溯つて、米國の財政金融の神經中樞ともいふべき紐育市を押へれば好いといふのがその全文の主意であつた樣に記憶する。兎に角、陸軍では日本の師匠である獨逸人は、米國人の軍事的能力を過度に見縊ることに於ても亦、その優れたる弟子と揆を一にして居たこととの證據は、自分の記憶中にも決して少くはない。

右の如き考へを懷いて居た人々に取つては、最近米國增援軍が佛蘭西に於て示して居る活躍は、絕大なる驚異でなければならぬ筈である。七月四日の米國獨立祭が、巴里に於て市民の熱狂裏に非常なる壯觀を以て執行せられ、その首要街がウイルソン街と呼ばれ（爾餘の聯合國の元首の名も御附合に各街に附けられ、我國に關してはその唯一の例外として「東京」の名が或る街衢に與へられたとは當時の外電で報ぜられた通りである）たりしたことは、是等の太西洋を隔てながら、ラフアエットの名で歷史的に結合せらる丶二大姉妹共和國の精神的共鳴が、共同參戰の結果として一入高められたゝめでもあるが、米軍が最近に及んで空中に於て、はた陸上に於て壯烈なる勳功を樹てた事績が新に油を注ぐ效果を齎らし來つたものである。

何等の領土的野心及び物質的報酬を豫期して居ないとの宣言の下に參戰した米國が、爾來鋭意軍隊を急造して、現在に至るまでに佛蘭西に派兵せるもの既に百萬を超え、尙ほ陸軍卿ベーカー氏の宣言に據れば、來春までには二百萬以上を派遣し得る狀態に在ることは世界の驚異である。それに加へて米國が船艦建造力を非常なる勢を以て增加し、殊にベスレヘム鋼鐵會社の重役の一人として、盛名を米國の實業界に馳せたシユワツプ氏を戰時管船局長に擧げてより、益す此方面に實績を擧げんとして居ることは、注意すべきことである。米國が參戰以來、絕大の抱負と鉅額の豫算とを以て着手した航空機製造事業は、豫期の成績を擧げ得ずして、却て浪費と懈怠とに關する責任問題を惹起して居るが、ウイルソン大統領は率直なる態度を以て、一昨年の大統領選擧に際して自己の競爭相手として名乘を揚げたリパブリカン黨の落選候補者たるチヤールス・イー・ヒユーズ氏を擧げて該問題の調査に當らしめて居る傍、一方に於ては益す飛行機製造の事業を進捗せしめて居る。斯ういつた調子で、米國の戰備は今後益す充實せんとして居る。

デモクラシーの政體が戰爭には不向であるとの議論は、米國の實例に依つて破壞せられた。參戰後間もなき昨年の四月六日、米國々會（コングレス）の兩院合同會議で、「對獨戰爭遂行のため」と明示したる目的のために、米の全陸海軍力及び一切の富源を管理使用する權能を大統領に附與する決議をなし、また本年の五月十四日に於て下院が、戰時中行政各部の編制替を任意に行ふ權能を大統領に與ふることを提議したるオヴアーマン案を僅か二名の反對を以て通過した事などは、デモクラシーの國なればこそ出來た業ざである。目的を意識する人民の信任に依つて一定の期間行政首長の地位を占むる米大統領ウイルソン氏の地位が、その期間中は世界各國の一般の爲政者のそれよりも强固なることは、敢て怪むに足らぬ事である。斯の如き事は、將來の政治學說上に有力なる影響を及ぼすことでなければならぬ。

それにしても米國人の大統領に對する信頼の厚きこと丶、その大統領の宣言したる戰爭目的に對する意識の明確なること丶は、その富力の偉大なること丶共に、他國人の驚異に値することである。アングロサクソン系の財產神聖（ヒーレフドネス・オヴ・プロパティー）說の忠實なる繼承者たる米國人が、此國家の危機に際し、その强烈なる國民意識よりして、財產上驚くべき犧牲を拂ふことを甘受して居ることは、注意するに足ることである。米國が本年七月までの國庫支出は無慮百三十八億弗の巨額に上り、その內百二十六億弗は本年六月で終つた一箇年間に對する支出額であつて、而して十二億弗はその前三箇月間に對する支出額である。而して右百二十六億弗の支出額中の三分の一（四十億弗以上）は課稅により、他の三分の二は三回の自由公債及び戰時貯蓄債券で支拂はれたものである。所謂課稅とは、戰時利得稅及び所得稅の如きものである。所が是等の課稅は、極端なる累進率の上に置かれてあるものであるから、一個人若しくは一會社で百萬弗以上の稅を納めて居るものは數へ切れぬ程ある。ニユヨーク・タイムス（三月二十二日）に據れば、ロックフエラーは一人で六千萬弗の一箇年分所得に對し三千八百四十萬弗の戰時稅を納め、フリックは千百萬弗に對し七百十六萬弗を納め、カーネギーは千萬弗に對し六百四十萬弗を納めて居るといふ始末である。一箇人にして既に然りとすれば、大會社の納稅額の如きに至つては更に驚くべきものがある。それより少し後れてのニユーヨーク・タイムスは二十五大會社の表を作り（表は省く）、是等の大會社だけで納むる戰時稅の總額は三億三千百萬弗を超過し、平均一會社で千三百二十萬弗以上を納る勘定になると言つて居る。是等の金額は、米國の富豪や大會社が如何に驚くべき大なる犧牲を拂つて居るかを示すために掲げたのであるから、その委細の記述は之を省くことにする。

併し乍ら米國の參戰は、資本主義の勝利であるから、富豪や大會社が多大の犧牲を忍ぶのは當然の事であるといふ理窟も立つ。けれども事實に於ては、長者

の萬燈貧者の一燈といふ風に、米國の社會の各層が各々その負擔力に相應じたる犠牲を拂つて居るといふことは、自由公債や戰時貯蓄債券の應募者が各種の人々より成立つて居る一事に依つても證明せられる。斯の如き債券や公債は、利子も附くことであり、元金も消滅する譯のものでないから、眞の意味に於ける犠牲とはいはれないとも言へるが、薄資者に取つては、縱令將來の償還を見越すにしても、現在の出資は可なり苦しいものであるといふことは、貧乏の經驗のある人には直に判明するのである。今單に第三自由公債だけに就いて言へば、その應募額は豫期よりも十億弗方超過して四十一億七千萬弗に上り、その應募者は千七百萬人に達して居るのである。

次年度の豫算は三百億弗前後との事であつて、大藏卿マカツー氏は少くとも八十億弗位を課税で徴集すべきであると力味返つて居る、と聞いた。

懷疑論者は正義とか自由といふ樣な觀念には、國民に感激を與へる力などのある筈のものでないと言ひ立て、米國民全體が戰爭に熱狂するのは、資本家の詭計に依るものだといふ。けれども資本家の詭計云々といふことが眞實であるにしても、それは矢張り正義、自由を宣することに依つて遂行したものであるから、それだけの言分では、斯の如き理想を高唱することが或る種類の國民を感激せしむる力となるといふ議論を擊破するには足りないのである。

向上發展の途上に在る國民は、青年時代に於ける個人と同じく、理想に感激する力を持つて居る。斯の如き國民は、或る高尙なる目的を自らのために發見すれば、之を來るべき現實となさんとして努力する。總ての高尙なる目的を一概に實行の彼岸にある空想と見做して仕舞ふ樣な國民は、或は頽廢の境に在るものかも知れないし、或は老實の域に在るものかも知れないが、何れにしても前途發展に對する餘力の程度の知れたものであると思ふ。

「眼に空の星を仰ぎ足に大地を踏む」といふのは米國

の新理想の代表者たるローズヴェルト氏の名言である。理想に向つて猪突しながらも、その實行の手段に配意することを忘らざる所に、米國人の實際的國民たる眞骨頭がある。青年の罪惡に似たるあらゆる缺點を有する米國は、只一つ他愛もなき空想に趨るといふ批難だけには値らない様である。

米國の富力を以て大陸海軍國となり、戰爭を機として大船舶隊の所有者となり、武者振り花々しく東洋方面で活躍する様になれば、我國より見れば、これは大問題であらねばならぬ。日本と米國との將來の關係を推測するのは、本文の目的ではない。けれども日本は米國の競爭相手となることを辭すべきでないといふ壯語にも道理があると同時に、無用に米國の反感を挑發することは非とすべき事であるといふ自重説にも根據がある。兎に角、日本に感情一片の政治論の盛に行はるゝことは、決して國家の慶事ではない。日本國民が國力の充實に於て米國と競爭するがために、眞劍になつて必死的努力をする様になることは、富强なる隣國を控へた地理的好位置を最も賢明に利用する方法であるといふことが出來るが、同時に日本國民は實行の伴ふ理想を所有する點に於ても亦、米國民と競爭しなければならぬものであると思ふ。仕甲斐のある競爭とは、斯の如き種類の競爭を謂ふものであらねばならぬ。

時事慨言四則

法學博士　吉野作造

◎言論の壓迫

今の寺内内閣が思想問題の自由討議に對して滑稽な程神經過敏なる事は隱れもない事實である。社會に現はるゝ思想言論に、往々好ましからぬ不都合のもののあるとは、何時の世にも免れない。併し乍ら、官憲の威力を以て之を壓迫するといふ事が、決して好ましからぬ思想言論の撲滅の目的を達する所以に非ざるとも、亦何時の世にも通用する眞理

である。而して言論の壓迫は、其自身その本來の目的に裏切る性質のものたるのみならず、時として著しく社會の進歩を阻害するの弊を伴ふものであることも亦餘りに知れ渡つた事柄である。蓋し好ましからぬ言論といふ名の許に、その實健全である思想も壓迫することがあり、少くとも爲めに言論の自由なる發表を遠慮せしむる所から、國民をして著しく智能啓發の好機會を失はしむるの結果を來すからである。

言論の壓迫を好意に解して之を言論の取締りとして觀察して見やう。取締りといふことと其自身は、誠に結構な事である。併し誰れが此取締りの任に當るのか。思想上の問題を判別するの能力なき一俗吏に、此大切な仕事を任すから能く間違が起るのではないか。否、今日の政界の先輩の間には、驚くべき程の固陋の考が流行して居る。而して官省の俗吏は、之等固陋の見に迎合せんとして居るから、間違が起るのではないか。

早い話が、内務省では僕（外にも此點に於て同類の先輩知友が少くないが）の説を危險なりとして、地方官廳に講演などに招聘するなと内訓したとの事である。之は新聞の報道であるから、眞僞は分らない。マサカ内務省は僕の名を擧げて斯んな馬鹿な内訓を發するやうな事はあるまいと信ずる。併し僕の説を危險思想なりとする見解を抱くものが、今日の政府の有力なる人の間に尠くないといふ事實は、予の茲に確言し得る所である。名は茲にいはぬが、或る高官は、密に手を廻して大學に於ける僕の講義を檢閲せんとしたといふ事實がある。併し僕の説は大學の講義のノートを檢閲するまでもなく、之れまで屢々本誌に發表した愚論の中にも明白に現れて居る。而して僕は敢て賢明なる讀者に問ひたい。僕の説の何處に、社會を毒し國家を害ふ危險の要素があるか。僕の説を不徹底なりとか、幼稚なりとか淺薄なりとか罵るのなら、僕は敢て之等の批評を甘受する。僕は自ら自身の淺薄不才を識つて居る。過つて職を最高の學府に奉じて居るがため、他の同僚諸氏と等しく並みに買ひ被られて居るので、實は大に恐縮して居るのである。けれども予は淺薄不徹底

なる意見を漫然として發表して居るのではない。皆是れ時勢に慨し、國家の發展を思へばである。尤も斯ういふ動機で立言したものは、凡べて危險の分子がない筈だといふのではない。只僕自らは淺薄の議は甘受するけれども、危險思想との批難には斷じて抗議する。況んや、日本帝國の將來は、僕等の主張するやうな說が、一般に受け容れられるに依つて、始めて富强の大國として世界に不動の地位を占め得ると信ずるに於てをや。

僕の學友の一人で政府に相當の地位を占めて居る人がある。能く僕の書いたものを讀んで吳れる人であるが、此の友人は僕に斯ういふ事をいつた。曰く政府筋で君の說を危險といふのは、恐らく君の主張そのものを直に危險と觀るのではなくて、君の說が偶々民間に澎湃たる危險思想との連想を呼び起し、即ち實際上の結果が面白くないといふのではあるまいかと。

成る程斯ういふ考も當局者にはあると聞いて居る。之は今の政府の話か、又は昔の話か、よく分らないが兎に角當局者は、曾て危險思想家を取締上四つに分類したといふ事である。第一類は思想が危險であるばかりでなく、動もすると之を實行に移すの懸念あるもので、往年の幸德一派の如きものである。之には絕へず探偵をつけておく。第二類は極端な危險思想家で、絕へず警戒を怠る能はざるもの、即ち自ら稱して社會主義者を以て居る類のものである。第三類は所謂普通の危險思想家にして、その著作論文などは成る丈け世上に現れぬ樣に取締るのである。僕の想像では、大杉榮君などは第二類で、堺枯川君などは第三類ではあるまいかと思はる。僕自身も或は第三類に入れられてゐるのかも知れない。併し僕等に取つては、まだ第四類が殘されてある。之は思想其ものは左程危險でなくとも、其說の流行は、事實上不健全なる危險思想の瀰漫を助長するといふ類のものを包含するのである。例へば玆にデモクラシーといふことを唱ふるものがありとする。然るに今度の戰爭の結果、西洋から不健全なる民主思想が著しく我國の民間に這入つて來た。其結果若し

デモクラシーといふ事を唱ふる者があると、其說が頗る健全なるものであつても、民間では兼てから浸み込んで居る不健全なる思想の方を直に連想する。故に此場合、說者のデモクラシーの內容如何は問題でない。只こんな文字を舌端に上ぼすことがよくないといふのである。斯ういふ處から、デモクラシーなどゝいふ事を說くものは、如何に其說が國家を益し社會を利するものでも、均しく皆之を取締るといふのである。恰度之が僕の友人が僕に告げた所とよく吻合するのである。

若し當局者が斯ういふ意味で第四類を設けたとするならば、僕はその神經の餘りに過敏なるを笑ふよりも、寧ろ其考案の愚劣度し難きに驚かざるを得ない。斯んな事を問題として議論するだけが馬鹿げて居る。僕は只斯かる頑迷な考を有つて居る人に、次の二つの點に反省せられん事を要求したい。第一、不健全な危險思想を民間に流行せしめたのは、別言すれば不健全な思想の傳來に接して我國の民間が直に之に共鳴するやうにしたのは、一體誰れの責任か、第二さういふ危險な思想が民間に行はれかけて居る丈け、健全なる思想を說いて聞かすのは必要であるまいか。故らに默殺するは、却つて民間の好奇心を唆り、一層危險思想の横行を促す事となるの恐はないか。

◎現內閣は夫れ程思想の勢力を重んずるか

言論の取締を嚴重にするのは、ツマリ言論の社會に及ぼす影響を恐るゝからである。約言すれば畢竟思想の勢力を重んずるからである。然らば現政府は這の思想の勢力を重んずるといふ點に於て果して徹底して居るか。夫れ程思想言論の社會的勢力を重く認めるなら、好ましからぬ言論の壓迫に腐心するばかりでなく、好ましい思想の勃興流行のためにも大に努力する所なければならぬ。青年團などで如何はしい固陋の見を臆面もなく述べるのは、健全なる思想の養成發達のための積極的努力と見る事は出來ない。何故ならば、彼等は思想上の問題については、全く門外漢であるからである。要するに現政府(に限つた事

ではないか）は所謂不健全なる思想の撲滅の方には、あらゆる努力を惜まない様だが、健全なる思想の養成の方は、殆んど捨て丶之を顧みないやうな有様である。之れでは心の底から思想の社會的勢力の偉大なるを感得して居るものと謂ふことは出來ぬ。

善い思想でも、惡い思想でも、其の社會に及ぼす勢力の偉大なることは疑ない。政治家が此點に着目して所謂對思想政策を立つるのは當然の事である。併し只一方の壓迫のみを能事として、他方の養成を等閑に附してはならない。今の政府は、壓抑の方に於ても菽麥を辨ぜざるの譏を免れないが、養成の方面は頓と顧みないのは、誠に殘念の次第である。何を以て斯くいふかと問ふならば、僕は目前の事實として差し當り次の二點を擧げる。

今の政府は、思想方面に關係して居る者を如何に取扱つて居るか。今の政府は、教育に何れ丈の力を注いで居るか。若し夫れ宗教に至つては、全く放擲して顧みないではないか。今の政治家は、宗教などは迷信だなど丶罵倒するのは普通である。少くとも宗教に關して相當の理解あるものは極めて尠い。近頃予は政府部内の宗教當局者の宗教行政に關する相當に長い論文を、ある學術雜誌で讀んだが、僕は之に依つて、如何に官人の＝而かも宗教の事を自分の本務とする＝宗教に關する無識の甚しきかに驚いた。國民の思想と最も密近の關係あるものを、斯んな風に取扱つてゐるといふ丈けで、今の政府の如何に此方面に無頓着であるかゞ分るだらう。

加之、今の政府當局者などの、思想家の權威を認めざるも亦驚くべきものがある。彼等は思想家に對して餘りに矯漫である。思想家の教を聽くべき場合に於てすら、動もすれば彼等は思想家を訓へんとするの態度に出でる。青年團や教育會などで、教育者を差し措いて地方官が最もらしい態度で訓示するのはまだ可いとして、宗教家などの會合にすら、賴むと知事だの大臣だのといふ連中は、愧ずる所なく訓戒的演說を試みるに至つては、寧ろ滑稽の至りではないか。

要するに、今の政治家は、眞に思想の勢力について、又之と國家社會との交渉について、正しい理解が無い。正しい理解が無いから、取締りをする場合に於ても、其當を得ない處置をする事が多いのである。

◎外來思想に對する積極的準備ありや

言論の自由なる發表に對して神經を過敏ならしめるといふ事は、實は我國歷代の政府に通有の現象である。只現内閣に至て、其烈しさと又其抑壓すべき言論の撰擇の馬鹿らしさとに於て、從前に其比を見なかつたといふまでゝある。然らば何故に現内閣のみが獨り斯かる好ましからぬ批難を受けねばならぬ事になつたのか。首相寺内伯がもと一介の武辨にして思想上の問題などには全然門外漢であるといふことも一の原因であらう。又彼及彼の部下が頑迷固陋の見を抱懷する先輩政治家によりて甚しく左右されて居るといふのも一原因であらう。併し乍らモ一つ玆に見逃してならぬ事は、戰爭開始後所謂西洋思想が猛然として東洋にも横流し來れるが、其精神的勢力の偉大なるに彼等が今更眩惑しつゝあるといふ事である。

玆に所謂西洋思想とは何をいふか、之れが說明は自ら其人があらう。略言すれば、國家社會の問題に關しては卽ち一種の民本主義の思想であり、又國際問題に對しては一種の平和思想である。この以外の方面にも夫れ〳〵特色を有つて現れて居るが、之等の新思想は、孰れも皆我國先輩政治家の從來抱懷し來れる國家思想や國際觀とは、外見上正に相反する所の者である。元來我國の先輩政治家が一家固陋の見に立て籠りて右の如き新思想を如何に嫌惡し如何に之が排斥に力めたかは、過去の歷史に明である。今度の戰爭が始つてからの事ではない。併し乍ら今度の戰爭が始つてからは、其當然の結果として世界の人心を大に内省的に覺醒した。これ丈けの大事件に遭遇して而かも内省的に何い目覺むる所なきは、我國の政治家位のものであらう。而して大に覺醒したものゝ中、最も著しきものが歐米の識者であることは言ふを待たない。玆に於て、

戰爭前から相當に根ざして居つた民本思想や平和思想やは、戰爭を期として一段と醇化された、又一段と鮮明にされた。此醇化され又鮮明にされた思想は、また我が日本にも波及せざるを得ない。況んや日本の民心また戰爭の感化によりて大に覺醒しつゝありしに於てをや。斯くして政府當局者の所謂西洋思想と日本國民との交渉は昨今極めて密切なるものとなつた。是れ頑迷なる政治家の觀て以て由々しき大事と爲し、俄に言論の取締を嚴重にするに至りし所以である。

一體今度の戰爭に連れて、我々が外國の文物から一種の威壓を感ずるのは、獨り精神的の方面ばかりではない、經濟とか軍事とかの物質的方面も亦同樣である。而して物質的方面に就ては、政府は率先して之が對應策の研究を怠らない。所謂戰後準備調査といふやうな計劃が、目今いろ／＼の方面に企てられて居る。然り戰後に處するには、我々に大研究と之に基く大覺悟が入る。今より之に對應する方策を研究準備するのは必須の急務である。併し乍ら之は只物質的方面に限つた事ではない。否、精神的方面は特にも急務中の急務とすべきである。然るに當局者の爲す所を見るに、物質的方面は切りに歐米に於て研究されし所を取りて能く之を調査し更に其上に出でんと苦心しつゝあるに拘らず、精神的方面に至つては、啻に彼に發達しつゝある思想を理解するに力めさるのみならず、强て國民を威壓して而を外國の思想に背けしめ、專ら昔ながらの固陋の見地に籠城せしめんとして居る。是れ豈に戰後に處する最良の準備方策であらうか。

當局者が所謂外來思想の我國に於ける最近の勢力を着目したのは、至當の見識である。只之に何等周密の考察を加へず、漫然之を排斥するを以て國家の安泰を期する所以なりと考ふるのは、其誠意に一片諒とすべきものなきに非ずとはいへ、結局國民を偏狹にし國家の進歩を阻害するものにして、吾人は其愚を嗤ふよりも寧ろ其罪の恐るべきを責めたい。

◎人の批評を恐るゝの陋　當今の政治家の言論壓迫の裏面には、徒らに人の批評を恐るゝと

いふ卑怯な態度が潜んで居る。自信ある者は、外界の自由な批評を苦慮しない。外界の批議を苦にするのは畢竟自信なくして虚位を擁し、又之を永く壟斷せんと欲するからである。斯の如きは吾人の日常生活に於ても絶へず經驗する所であるが、殊に我々學者社會にも、此陋習が頗る多い。世上の期待餘りに高く、而かも實力之に伴はざる者は、動もすれば鳴かず飛ばざるを以て最も安全の道とする。

若し夫れ自信なくして高き地位に居る政治家に至つては、其陋態は一層甚しい。何となれば、彼等は事を秘密にして世上の群議を避けんとするのみならず、徒らに顯要の地位を永く維持せんとして、更に他の競爭者を陰險にも陷るゝを敢てするからである。斯んな事は、諄々しく說明するまでもなく、我國の政界は既に餘りに多くの實例を吾人に提供して居るではないか。

それでも他の批評を氣にする中はまだ可い。何となれば、批評を氣にする丈け、自らの能力の欠陷を多少たりとも自覺して居るからである。然るにモウ一歩進めると、他の批評に耳傾けず、又他をして批評するを得ざらしめた結果、もと〳〵自信なきが爲め斯かる方法を取りしに拘らず、批難するものが無いため自分の考は相當によいものと獨りぎめにきめ、遂に盲人蛇におぢざるの妄擧に出づるに至るものがある。今日の軍閥の政治意見などは、正に此類である。寺内伯なども、多年廣く智識を天下に求むるの修養を怠つたと見へて、隨分此點は著しいと聞いて居る。僕自身も先年朝鮮で伯に御目に掛つたとき、伯が米國宣教師連も、段々言つて聞かしてやつたので、此頃は餘程朝鮮人の扱ひ振りが分つて來たといはれたのを聞いて、思はず失笑するを禁じ得なかつた。朝鮮人の教化に就ては、何と云つても米國宣教師の方は我々の先輩である。寺内伯にしてモ少し雅量のある人ならば、須らく米人に就て鮮人教化策の指導を乞ふべきである。總督の威光に恐れて發を合はして來たからとて、米人が一から十まで寺内伯の意見に心服したものと思ふならば、大なる誤である。

支那には群言傳採を以て政治の要訣として居る。古

書にも千人求多聞と云つて居る。多聞を求むるは、即ち啻に偏見を啓く所以なるのみならず、又時代の新趨勢に通ずる所以である。日進月歩の今日の時勢に當りては、迂ッかりして居ると時勢に取り殘される。龜の甲より年の甲と云つたのは、昔の事、今日は年の甲だけでは駄目である。新しい時代を識らなければならぬ。兎角老人は自分の通つた途、自分が依つて以て成功した經驗のみを貴しとする癖がある。寶丹を呑んで腹痛を癒したものは、腹が痛いと云ふ者さへ見れば寶丹を呑めといふ。焉んぞ知らん、時代の進歩は更に優良なる良藥を發明せることを。而して之等の新時代の新事物は、能く人の言議に耳傾くるものでなければ之を知ることが出來ぬ。老人はとかく新しいものに興味を有たないから、吾々は茲に已むを得ず新陳代謝の必要を叫ばざるを得ない。新陳代謝が必要だからとて、寺内内閣に今すぐ引退せよといふのではない。けれども、彼等が餘りに言論を壓迫して群衆の口を箝するのは、彼等自身の自信なきを語るものたるのみならず、又實に國家に於ける新生命の發展を阻害するものたることを警告して置きたい。



本號の卷頭に折込める

「記者より讀者諸君へ」

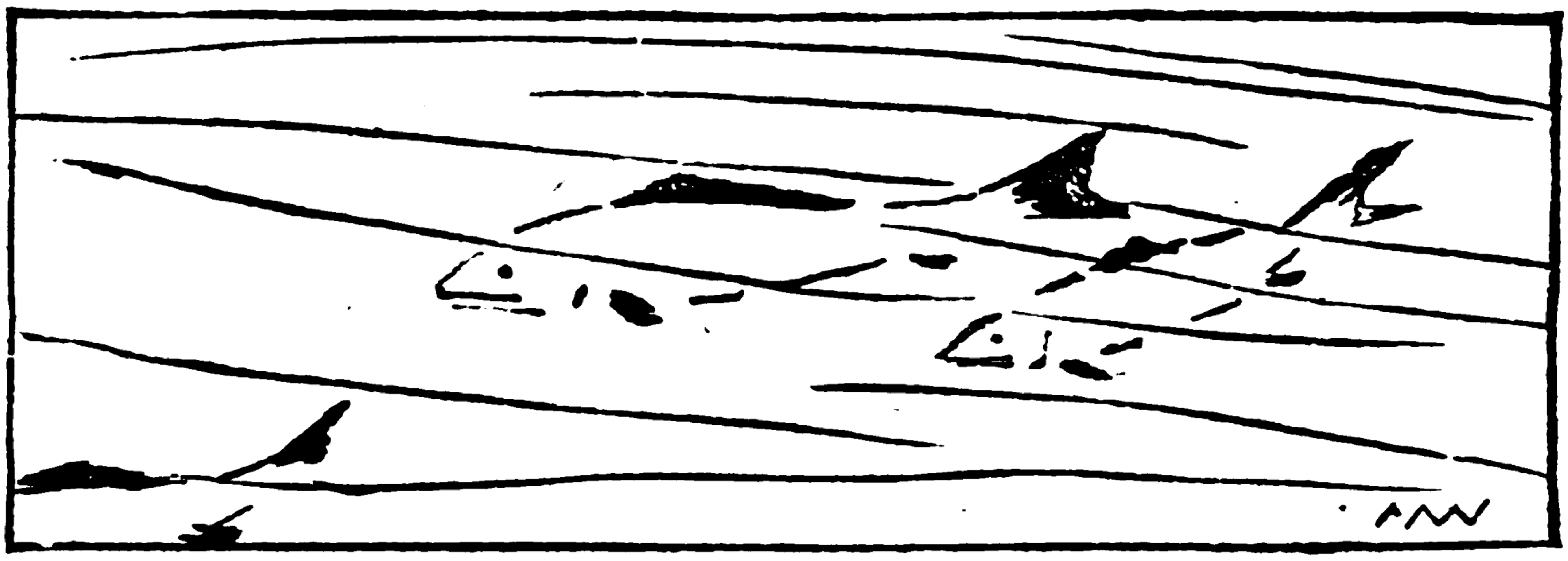
「社告」

の二文と

本號の最終頁にある

「秋期大附錄號創作豫告」

を見落し賜ふこと勿れ



赤熱の地上

小川未明

一

試驗が近づいて來ると弟の顏色はだん／＼惡くなつた。壁の方を向いて、默つていつまでも考へ込んでゐることがあつた。傍の者の眼には、何も見えなかつたけれど、弟の眼には、何か黑い怖しいものが見えたのであらう。だん／＼其れが近づいて來るやうに、彼の顏色は、色が褪めたやうに青白くなつて行つた。

「何をそんなに考へてゐるんだ。考へんで勉强をしたらいゝでないか」と、兄の英吉が言つた。

不意に聲をかけられたので、弟はびつくりした。他が見てゐると知つたなら、自分はこんなに茫然とはしてゐなかつたらう。彼は慌て、答へもせずに其儘、机に向つて、また辭書を引きはじめた。人さし指に唾を付けて、大分汚れた青い色の辭書を忙しさうに繰るのである。

「考へんで勉强をしたらいゝでないか」と、言つた兄の言葉を彼は書物を見ながら、頭の中で考へる。理屈は其れにちがひないけれど、何となく冷淡な、少しも思ひやりのない情ない言葉の如く考へられた。けれど、彼は何も兄に對して言ふことが出來なかつた。既に高等學校の入學試驗には二度落第してゐる。而して、兄の世話になつてゐるか

らであつた。夜も碌々眠ることが出來なかつた。食物も胸に閊えて咽喉に通らなかつた。試驗のことを考へると氣がいら〱した。

其れで、茫然として、いつしか壁の方を向いて眠としてゐると、例の漠然として姿のはつきりとしない黒い怖しいものが昨日より今日は近く、一日、一日と此方に迫つて來るやうに見えたのである。彼の心は慄えた。而して逃げ場を探した。しかし刹那の後に全く逃げ場がないと知ると、彼は、激しく鞭打たれたやうに、氣を取り直して机に向つて、また人さし指に唾を付けて、忙しさうに青い表紙の辭書を繰つたのである。

ある時は、死人のやうに眠としてゐた。ある時は、熱病患者のやうに狂つてゐた。夜と晝とが、かはる〲其の室の窓を覗いたけれど、室の裡に坐つてゐる人には變りがなかつた。晝は、綠色の太陽が空に燃えて、其の光りは、繁つた森を照らし、流れを照らし、街を照らした。街には往來の上を人が無心に歩いてゐた。夜になると、燈火が室の周圍を赤ちやけた、不安な色に彩つた。而して、窓には黑い布を垂れたやうに闇が迫つて、其の底から微かに星が閃いてゐた。斯の如く、世界は廣やかに、而して、自然は暗示に富んでゐた。其れを此男が試驗のために苦しんでゐるといふことは、畢竟神も、自然も、知らないことであつた。室の中の人は、終日頭を抱へて苦しみ、考へ込み、悶えてゐた。其れは、病院にゐる患者より、もつと苦しんでゐた。また、牢獄に禁錮された人間より、もつと樂しみといふものがなかつた。

學校生活をした覺えのある兄は、而して、何か思想でも書いて立たうとする兄は、弟の苦しんでゐることを理解しなかつたのでなかつた。けれど面と向つては、胸に隱れてゐる殘忍な本能は——恐らく彼ばかりでない、かういふ經驗は誰にでもあることだらうが——優しい言葉をかけさせなかつた。

「今度も落第したら、學問の方は思ひ切つてしまへ」と、言つたことがあつた。しかも、其時は、一時の感情の發作や、また何か怒つたので言つたのでない。眞面目に弟に向つて宣告するやうに言つた。弟が、其れがために惱むのである。其の言葉が、いつまでも耳に付いてゐる。而して、勵みとなるよりは、一層神經を怖えさせてゐる。

兄は、其のことをも知らぬのでない。けれど其の言葉を取消さなかつた。心の中で弟を可哀さうに思つてゐる。あれ

程勉強をしても出來ぬものなら仕方がない。落第しても決して自分は叱らないだらう。誰でも平等の智識を持て生れて來たと言へるものでない。しかし、幸福までが其に比例するとは思はれない。自分は、弟の幸福を得るために、はかつてやる考へでゐる。

英吉は、弟が壁を見詰めてゐる姿を見た時に、哀れに思つた。しかし、此處で優しい言葉をかけたなら、折角、張り詰てゐる弟の心持が弛みはしないかと考へた。彼は、人間の精神や、肉體といふものが、どれ程の苦痛と努力に堪えるものか、其れを試みる氣持になつた。而して、自から心に冷酷と思ひながら、

「考へんで勉強したらいゝでないか」と、言つた。

彼は怒つたやうな様子をして、荒々しく弟の室から出た。而して、獨りとなつて、兄弟が何故に相抱いて泣くことの出來ぬかを寂しく感じた。彼は、いつまでも弟の机に向つてゐる、いぢらしい姿を眼に描いた。而して、弟に向つて言つた彼の言葉を思ひ出すと、弟のいぢらしい姿のために、彼の心臓は、鋭く鞭打たれるやうに感じた。

ある日、弟は壁を見詰てゐた。すると其處に四角な黒板が懸つてゐた。而して、幾百人の頭が豆粒を順序よく奇麗に並列したやうに眼の前に見えた。黒板には白い字で何か書いてあつた。其の教室が見覺えのある室のやうでもあれば、其日始めて來た室のやうな氣もした。神經は病的に鋭くなつて、四邊は氣味悪く寂然としてゐる。耳には刻々に、永遠に過ぎて行く時の足音が聞えるやうな氣がした。机の上の紙を見ると、其れは雪のやうに白かつた。何處からか射し込む光線は、紙の面に吸ひ込まれてゐる。而して、其の光線は悲しく語る。「やがて午後には、いつもの街を通つて家に歸るであらう。路を歩く人々は、誰も苦しき胸の中を知る者もなければ、また同情する者がない。歸れば、兄が試験は何うであつたか？聞くにきまつてゐる」……こんなことを思ふ間にも、時は刻々に過ぎて行く。

「何うしたら、此問題が出來るだらう」と、彼は、絶望して叫び、身の置き處がないやうに悶えた。

すると、始めて悪夢から醒めた如く、我が家にゐることが分つた。まだ試験になるまでには、幾日か間があつた。彼は、氣を取り直して机に向つたが、いつか頭は思ひに亂れてゐて、づき／＼と痛み始めた。眼はいつか壁の方に向いて

ゐる。而して、遠くを望んでゐる。今度は、いつもの漠然とした黒い怖しい影が其處に現はれた。其れは昨日より、もつと近くなつた。これがいよ〳〵迫つた時は大變である。けれど逃げる路がない。たゞ睨と其れを見詰てゐるより仕方がない。彼は、黒い影を見詰てゐた。

頭が堪へられぬ程に痛くなつて來た。彼は横になつて見た。轉がつて見た。兩手でしつかりと痛む頭を抱へて見た。けれど、頭がだん〳〵内から外へ開くやうに、だん〳〵重く、大きくなつて、いつかこの儘が支へ切れなくなる時が近かくにあるやうに痛んで、熱くなつて來た。

つひに眼が開けてゐられなかつた。室中のものが本箱でも、机でも、インキ壺でも、形が見分けられなくなつた。自分は何處にゐるのかすら考へられなくなつた。壁も、襖も、障子も暗澹として煙つて、黒雲の中に包まれる。思ふに甚い風が吹いてゐるのだけれど、何うかして耳が聞えなくなつたと見えて、たゞ體までが、其の黒雲に包まれてぐる〳〵と渦を巻いてゐるやうに感じられた。

恐らく、あの黒い影の惡魔が、一時に此方に向つて突進して來たにちがひない。………もう激しい熱のために意識が遠くなつた。

「いつからこんなに惡いのですか?」と、迎ひにやると醫者は來て診察してから言つた。暫らく臥てゐる病人の顔色を見詰て、眉を顰めてゐた。けれど病人は答へる勇氣がなかつた。すべてのことを知らずに、よく眠つてゐるとは思はれなかつたが、眼を閉ぢて仰向いて頭を枕に就けてゐた。傍にゐた英吉は、弟が二三日前から元氣のなかつたこと、また弟は以前からやゝともすると頭痛がして鼻血の出ることなどを話した。かう彼は醫者に語つてゐるうちに不幸な體質をもつて生れて來た弟に對する哀れみと同情が、曾て彼の心にこれ程強く現はれたことがなかつたと思はれる程、萌して來た。

醫者は、もう一度來て様子を見るのでなければ、はつきりとしたことを言はれない。けれど氷で間斷なく頭を冷すことを怠つてはいけない。晩方に、もう一度來て見ると言つて歸つた。歸る時に醫者は、何か深く考へて居るやうに暗

々しい顔をせずに、言葉數少なく家から出て靴音低く歩いて行つた。

二

英吉は、醫者の様子が平常と異つてゐるのが心配でならなかつた。彼は病人の枕許に來て坐つた。氷枕の上に載つた弟の頭は、内部は火のやうに燃えてゐるであらう。而して、物を考へたり、思つたり、すべての思想や、意志を掌る機能は、今どんなに熱の渦巻の中に揉まれ苛なめられてゐるであらう。けれど誰が其れを知ることが出來やう。弟の顔が先刻まで靑かつたのが赤くなつて來た。而して、苦しさうに唸る聲が聞える。時々、無意識に苦しさのあまり體を悶えてゐる。

此時、使の者が藥を持て歸つて來た。而して「腦膜炎の下地かも知れないから注意なさい。悉しいことは、もう一度診察してから話をする」と、醫者の言つことを言傳てた。

英吉は、これを聞くと慄ひ上つた。急に四邊が灰色に變つた。見慣れてゐた道具や、品物までが冷淡に自分の存在だけを守つてゐるに過ぎない如く見えた。彼は見つゞけてゐた夢が破れたやうな氣がした。同時に彼の心に何んでも思ふやうにしやうと結び付けられてゐた、すべてのものが皆なはなればなれになつてしまつて、彼の心だけが、たゞ一つ空間に殘されたやうな氣がした。彼は思つた。其れが眞實なんだ。各々が獨自の運命を持つてゐる。然るに、何の權利があつて、自分の思ふやうに相手を强ひることが出來やう。英吉は、弟を憐れに思つた。其のことは弟が、試驗を怖れたよりも兄を怖れたことを知つたからだ。しかも彼は、曾て弟に對して優しみのある言葉をかけなかつたからだ。若し弟が試驗をうまくやれば、俺が鞭打つたからだと言つて、誇らうとしたことを思つた。而して、其時となつたら、彼は、人間といふものは、氣の持ちやう一つでどんな刺戟にも堪え得るものだといふことを證據立てやうと考へてゐたことを思つた。

彼のかうした自我的の心を幾分でも知つてゐるものは、彼の他に弟よりなかつた。彼はこれがために内心弟を怖れた。

また弟に對して濟まなく感じた。弟が其日まで勉強をしてゐた室に這入つて見た。夕暮方の光りが窓から射込んで、本箱や、机の上を晒らしてゐる。かうして其處に坐つて書を讀み、字を書く人がなかつたら、永久にこの室の光景はこの儘であらう。三日後も、一日後も、恐らく一年の後も、机の上に乘つてゐるものや、本箱の中に立てかけてあるいろ／＼の書物は、この儘であらう。たゞいつとなしに其の上に白い埃がかゝつて、この室の裡は今よりは、もつと寂しく見えるに違ひない。英吉は窓から靜かに暮れて行く景色を眺めた。彼の心には試驗が何んだと考へられた。其處にある辭書や、書物を悉く燒き捨てしまひたかつた。しかし其れをするにしては、もう遲かつた。

故鄕には先祖からの屋敷がある。林がある。地所がある。其れを皆な弟に與へる。たゞ弟が病氣さへ癒つてくれたら、而して、其れが癒る病氣であつたら、弟はもう學問をしなくてもいゝ。弟は善良な性質であるから、而して親切で、從順であるから、田舍に歸つて幸福に暮らした方が適當であると思つた。彼は、この考へを向つて語る人の其處に居らないのを悲しく感じた。

「弟が、少し氣分が癒つたら、このことを打明けて聞かせやう。さうしたら弟はさぞ安心して喜ぶだらう」

英吉はかう考へた。窓の外はだん／＼暗くなつて行つた。故鄕の屋敷にある杉の森だけがはつきりと浮き出て見えた。

●

夜になると醫者は二たび診察にやつて來た。うす暗がりの中に立つて、「どんな樣子であるか」と、聞いた。而して、返答を待たずに病人の枕許へ近寄つて容態を檢めた。其間、英吉は先刻も見た醫者の持て來た鰐皮の鞄が、主人を離れぬ小犬のやうに眠として傍に待つてゐるのに不安な瞳を落してゐた。而して、醫者の口の開かゝるのを氣遣つてゐた。

「たしかに腦膜炎の下地です」と、不意に醫者は言つた。英吉は豫め覺悟はしてゐたので、此時は其の割合に驚かなかつた。而して、彼は醫者に向つて入院させるについての手續などを靜かに落付いた調子で語り合つた。醫者が歸ると、急に心細くなつた。生死に惱み苦しむ人々を常に見たり、扱つたりしてゐる醫者の頭は比較的冷靜であつて、こんな場合にも惑はなかつた。醫者と共に居る間は、彼は科學を信じて、たゞ其の力に賴らうとする念が起つたけれど、獨りに

なると急に頭の中は後悔やら、思ひ出しやらで混亂した。殊に弟が二たび昔のやうに活々とした顏付で笑つたり、話したり、智識の上の疑ひやらについて質すことは、いつであらうかと考へると彼は、居ても、起つても堪らない程殘念であり、苦痛であつた。

明る日、弟を病院に入れた。彼は弟に付いて行つた。途すがら、彼は前夜眠らなかつたために、瞼に痛みと眩しさとを感じながら、首垂れ勝に歩いて思ひつゞけた。——あの地所も、林も、家も、みんな弟にやつてしまはう——俺は何うせ國へは歸らないから、而して、あの先祖からの家、屋敷は賣ることが出來ないから、弟は、其處に歸つて氣樂に生活すれば學士になるより、また虚名や地位を得るために働くより幸福であるにちがひない。

さう彼は思つたけれど、今は直に、このことを弟に告げることが出來ない。彼は、獨りで思つたばかりであつた。病院に行つたら、二人ぎりとなることがあらう。彼は、弟が氣が鎮まつて、熱も下つて、眼を開けて彼の顏を見得る場合を想像に描いた。而して、其の時、弟に知らせやうと思つた。

病院の一室に弟は收容された。白い床の上に仰向けにされて、氷枕の上に頭を乘せてゐる姿には、家にゐた時と變りがなかつた。たゞ此處は病院であつて、其れに關したすべての設備が行き屆いてゐるのと、他に病人を扱ふに手慣れた看護婦がゐるのと、何時でも多くの醫者を其處に集められることが異つてゐた。けれど、其のことが決して弟の苦しみを減じはしなかつた。たゞ、弟に從いてゐる英吉の心だけを安心させたまでゝあつた。

其の日もやがて暮れかゝつた。弟の樣子は少しもよくなかつた。既にたしかに腦膜炎になつてゐるのでないかと英吉には考へられた程である。醫者に聞くと、何のためかはつきりしたことを教へなかつた。或は醫者にも全く分らなかつたのかも知れない。

彼は窓に凭りかゝつた。精神が疲れ、眠りの足りなかつたゝめに體の知覺が鈍つて、やゝともすると自から瞼が重なり合つた。しかし此間に眠つたのでない。彼は、現と夢の界を辿つたのだ。子供の時分のことが、あまりにはつきりと記憶に浮いて來るのが、驚かれる程であつた。西に落る夕日を浴びて、森は默禱を捧げる如く鎭つてゐた。森の下はう

す暗かつた。蚊が澤山ゐた。茗荷畑には、きりぎりすやうまおひがゐて、足を踏み込むたびに其等の蟲は飛び立つた。ある風の強い日に母は笊を抱へて、地面に落ちた栗の實を拾ひに行つた。其の後に私達はついて行つた。

「この家と屋敷をお前に殘して置く。其れに少しばかりの地所と林がある。何處に行つても、病氣をするとか、困つた時は故郷へ歸つて來い。先祖からのものだから、賣らないやうにして置けよ」

から母の言つたことを英吉は忘れない。

黒い洋服を着た異つて醫者が入つて來た。三方の窓口には病人のために布が下げられて、うす暗く曇つた日が一層光りをこの室に送らなかつた。電燈が點る頃、醫者は弟に注射を試みた。

其夜も病狀には差したる變りがなく、弟は苦しみつゞけた。其れは意識があるのか、全く無いものか英吉には分らなかつた。もし、意識があるなら、どんなに苦しいか知れない。而して、自分が其の苦しみを幾分でも分けられるなら、弟のために盡したいものだ。現に自分は、たゞ疲れて、頭が重いといふだけで心臟は正しく健かに打つてゐる。この疲れと頭の痛むのとは、ゆつくりと眠りさへすれば癒るのだ。

もし、弟が全く無意識であるなら、もう其れは長いことがないだらう。さうであつたら何うしたらいゝかと惑つた。誰を呼び寄せるものもない。たゞ故郷に親戚がある。叔父が尙ほ生きてゐる。けれど、大分年を老つてゐるので、長い旅をすることは多分出來まい。けれど、この叔父にだけは知らさなければならない。弟の病氣はどんなによくないのだらうと思つた。

醫者が、病室へ入つて來た時に、英吉は弟の樣子について、委しく聞かうとした。

「まだ、今日、明日とは迫らないけれど、かうなつては到底十中八九は駄目とお思ひなさつたがいゝです。腦漿の檢査をしてゞなければ斷言はし兼ねますが、たとへ癒つても痴呆になるのが通例です」と、醫者の答へは、死を確認してゐて、却つてこれを問ふ兄の言葉を――お前には、見ても分らないのか――と內心で疑ふものゝ如く思はれた。

英吉は、また醫者がこんな一大事に際して、問はなければ言はない、しかも慌てもしない心をば信じられなかつた。

この醫者とは曾て一面の識がない。しかし生命に關しては私情の如きが抑も何んであらう。死は何人の死でも其の人の生活の終りを意味する絶對の事件でないか。なんで今迄、其のことを自分に注意してくれなかつたのか。英吉は終に醫者の言ふことを心の中で眞實とは信じなかつた。明日になれば、弟の熱が退く、弟の元氣は回復する。而して、あの晴々とした眼付で自分を見る。すべての憂へと悲しみが雲の散るやうに何處にか去つてしまふ。

「兄さん、もうすつかり回復しました。そんなに一時は惡かつたのですか？ ほんたうに心配をかけてすみませんでした」と、彼は言ふであらう。

「お前がそんなに急によくなるとは思はなかつた。さあ、家へ歸らう」と、自分は喜ばしげに答へる。而して、急激に惡くなつたものは、また急激によくなるものだと心の中で思ふ。而して、其れを眞理であると疑はない。けれど考へるばかりで、其時は、こんなことを口に出して言ふ氣がしない。

二人は、また空に輝いてゐる、而して吾等に愉快と幸福を恵む明るい太陽の光りを、二たび路の上に立つて仰ぎ見ることが出來る。

「何んで醫者にそんなことが分るものか。明日の朝になれば、皆な今夜のことが夢と思はれるにちがひない。而して、霧の消え行くやうに跡をも留めないであらう。」

英吉は、かう思つて、弟の枕許に立盡してゐた。夏の夜は更けてからも、窓の外が明るかつた。窓近く咲いた紫陽花が水色の空の下に、ほの白く乳房のやうにふつくらと浮き上つて柔かな感じを漂はしてゐた。

二日間の頭の疲勞は體の疲勞と共に、やゝもすると、現在の弟の苦しみを英吉に忘れさせて、健康の肉體が自然に求めんとする眠りの底知れぬ穴に引込まふとした。彼の眠らざる意志だけは烈しく抵抗を試みたけれど、強い誘惑に屢々破られて、全身を其れに委ねやうとした。

彼は、頭を曲げて膝頭を見詰るやうに姿勢を造ると、幾分かこの睡魔から脱れることが出來るやうな氣がしたので、彼は、しばらくさうやつてゐた。

「ひどい風だから遠くへ行つてはいけんぞ」と、母が呼いた。ほんたうに酷い風であつた。林の頂きが轟々と鳴つてゐる。鼠色の雲が畑の上を低く飛んで行く。母の聲は、半分風のために消されてしまふ。母の髮が風に吹かれてなびく、裾がちぎれさうである。母の姿はだん〴〵遠ざかる。弟は、自分から離れて反對の方向に驅けて行く。大風の吹くのが面白いからであらう。けれど彼は、弟を呼ばずにはゐられない。さう思つても聲が出せない。風の音はいよ〳〵高くなる。母の姿は霞んで小さくなる。弟だけが自分から離れた處で、面白さうに狂ひ廻つてゐる。

彼は、氣が焦立つて、徒らに急ると刹那に眼が醒めた。

三

居眠りしたことが、彼には氣恥かしかつた。看護婦は起きてゐて、電燈の下で看護につとめてゐた。氷枕の氷を取り換へたり、またある時は額際の氷嚢をよく當るやうに直してゐた。彼女と弟とは全く知らない人間である。また自分とも同じである。然るによく働いてゐる。これが單に職業だからといふことで出來やうか。英吉は、看護婦に顏を見らるゝのが苦しかつた。つゞいて彼の耳を襲つた弟の苦しさうなうめき聲は、彼の意識を全く醒さずには置なかつた。

「弟が死にかゝつてゐるのに、お前は居眠りしてゐるのか」と、肉體の制約を受けぬ心は、肉に囚へられてゐる彼の耳許で囁く。

けれど、眠むいといふ意識が容易に頭から去らない。しかし全部の意志は、この叛逆者に對して今度は征服せられなかつた。怖しい叛逆の意志はこんなことを叫ぶ。

「弟が、いつそ死んでくれたら、ぐつすりと眠ることが出來やう。一刻、早く死んでくれゝば、さうすれば一刻、早く眠ることが出來るのだが」

この叫びは、此時まで元氣なく隱れてゐた良心を喚び起した。而して、異常な刺戟によつて勇氣づいた良心は、「もう一度言つて見れ」と囁き咎めずにはゐなかつた。

「そんな怖しいことを何うして思つたらう。人間の胸には、誰でもこんな惡魔が住んでゐるだらうか。たとへ自分が死んでもそんなことは思つてはならない」と、英吉はこの怖しい思想を頭から振り放すやうに眼を堅く閉じて、烈しく頭を振つたのである。

思ひ出すとはなしに、略ぼこれに似た事件を國にゐる時に、村の中で見たことがあつた。——其の家族は、富んではゐなかつたけれど格別貧しくはなかつた。夫婦は働いてゐた。いづれも健康であつて、まだ老年といふ程ではなかつたから。三人の小供があつた。末は女で、まだ小さかつた。長男は性質が善良で孝心深かつた。小供の時分から都會に奉公に出て、大きくなつてから親の顔に親しまなかつたけれど、給金を取るやうになつてからは、毎月少しの金を兩親の許に送つて來た。弟は性質が兄に似なかつた。十八九の頃から既に遊びを覺えて、親の金を使ひ、幾度か親を泣かした。

兩親は、眞實に弟のことを考へるたびに、自づと眼に涙が浮ぶのを禁じ得なかつた。而して、

「何うして、兄があんなにやさしく親切であるのに、弟はあゝした不孝者だらうか」と、二人は顔を見合つて言つたばかりでなく、彼等に同情する親しい人に對しては打開けて歎息を洩したのである。

しかし、人生には思ひがけぬことが生ずるものである。この長男が、都會で病氣をしてゐる知らせが來た。兩親は驚いた。一日も早く癒ることを蔭ながら神や佛に祈つた。母親は一年間茶を斷つて、息子の病氣が快くなるやうにと願をかけた。けれど長男の病氣は、はか／＼しくない樣子であつた。

其のうちに、病氣が肺病であることが知れた。而して、青い痩せ衰へた顔をして兄は家に歸つて來た。三月經ち、半年經つた。

「この家には、誰もそんな病氣にかゝつた者がない。血統でもないのに、どうして此兒だけが、こんな厭な病氣にかゝつたのだらう」と、母親は、顔を顰めながら、病める子供の前も構はず言つたことがあつた。

長い間藥を飲んでも癒りさうもないばかりか、親や、弟妹にまで迷惑をかけるのを見て長男は早く死んで祖母の許へ行きたかつた。而して、誰も傍にゐない時に彼は泣いてゐたこともある。

兩親は、加持もしたし、青蛇の膽も飲ましたし、ある時は草の根を煎じても飲ましたし、人が病氣にいゝといふことは何んでもやつて見たことを思つた。しかし其等がきゝ目なく絶望された時に、「本人にとつても苦しい思ひをして、血を吐くよりか、早く極樂へ行つた方がどれ程いゝか知れない。また他(ほか)の者もあゝして癒る望みがなく、いつまでも青い顔をしてゐるのを見るのが辛いことだ」と、兩親は時に低い聲で語り合つた。其れをば聞いてゐる筈がないと思つた長男が、戸の陰で耳を傾けてゐたこともあつた。

長男は、ついに死んだ。家族の者は重荷を下したやうな氣がしたが、流石に其の當座は言ひ出してゐた。しかし、其れもだん〳〵疎んぜられて行く頃、弟が兵役に採られた。つゞいて戰爭が始つて、弟は出征することゝなつた。このことは、やがてある時の攻撃に弟の軍隊が參加して、不幸にも戰死を遂げさせるに至つた。其の知らせは故郷に達した。兩親はどんなに悲しんだであらう。父親だけは胸のうちの苦しみを堪へて「國のために死んだのだから、悔むことがない」と、言つたけれど、母親は、女だけに泣いて氣を失うばかりであつた。而して、可哀さうなことをしたと言つて、喜び悲しむにつけて弟のことを思ひ出した。これに反して、兄のことは思ひ出しても口にすることが稀れであつた。

英吉は、これによつて親子の間柄でも、眞に厭な思ひをかけられると、其のことを終生忘れ得ぬものだと考へた。誰もこの利己的な、殘忍な心と戰はずに、容易に愛を他に施し得る者があらうか?、やゝもすると自身が獸物のまゝの心で立つてゐることを見出すものである。

まさしく其の心で彼はゐたことに氣付いて戰慄した。

夜は窓から離れかけた。長い間其處から覗いてゐたが、今や退屈を感じて、別れる時刻が來たので、始めてやつて來た時のやうに足音を立てずに、いつとなく姿を見せず消えて行つた。其の後には青白い曉が、まだこの廣い世界を掌るには若過ぎたけれど、希望に豐かな未來を感じさせる冴え〴〵しい顔付で雲の間から笑つてゐた。

夜の束縛から放たれた木立や、鳥や、草は歡迎の叫びを擧げてゐる如く、心地よい朝の風に頂きを振つてゐた。雀は、もはや軒端から離れた。紫陽花は夜露にしつとりと濕れて、露を含んで重さうに窓の外に首垂れてゐる。

開け放たれた窓からは、新鮮な空氣が流れ込んだ。けれど弟には其れを存分に吸ひ入れるだけの力がなかつた。この晩は彼の顔の上をも見舞つたけれど、「もうこの者は、今日の人でない。昨日のものだ」と、うなづいて、默つて其處を過ぎて他のものゝ上を見舞つた。

「夜が明けました」と、看護婦は、此時、英吉に言つた。

「お疲れでご座いませう」と、英吉は心から感謝の意を現はすつもりで言つた。

「いゝえ」と、彼女は輕く答へた。

そんな筈はないが？　彼は考へる。別に彼女は頭を使はないからだらう。弟のうなり聲は昨夜から見るとずつと力なく弱つて、きれ／＼になつた。頬骨は高く突き出て、眼は黒い穴の明いたやうに落ち窪んだ。彼はこの形相の物凄く變つた中から、昔のなつかしい弟の面影を探したけれど、何處も變つてしまつて、始めて見る知らぬ人の顔の如く思はれた。彼は、寂しかつた。而して、心は頻りに昔の日を探ねて、其の時分の弟とめぐり遇つて、現在の顔を見較べてゐる。

これが果して、弟であらうか？　自分は夢を見てゐるのでなからうか？　彼は病室の中を見廻して腑に落ちなかつた。

午前の中に二三回の食鹽注射とカンフル注射をした。醫者は殆んど知覺の失せた、弟の手足を撫てゝ、注射の反應を見てゐた。其の手足は誰にも想像が付かない程の苦痛と戰つたゝめに、肉がげつそりと減つて、皮ばかりに細くなつてゐた。しかるに、體の一部分が毬のやうに腫れ上つて、不自然な狀態を呈してゐた。英吉は、この注射の跡を見て、皆な死ぬ時分には、こんなことをされるのだらうかと、自身の死ぬ場合などを思つたりした。しかし、そのことばかりは考へるだに怖しかつたので、彼は氣を紛らはすために室の中を靜かに歩き始めた。

突然、弟は叫びを上げた。

英吉は驚いて、傍に驅け寄つた。けれど、何んでもなかつた。弟が自分を呼んだやうに思つたのは、たゞ、弟が無意識に發した聲に過ぎなかつた。彼は、この弟の淺間しい姿を見ると熱い涕が止めどなく落ちて來た。

「もう、弟は助かりませんでせうか」と、彼は其時室に立つてゐる醫者に聞いた。すると、醫者は苦しさうな顏付をした。而して、答へるかはりにせつなさうな苦笑を洩らした。しばらく手は空間をさ迷つた。皆なの眼は驚きと、ある怖れの念を抱いて手の行衛を凝視してゐた。左手はたゞ僅かに動いたばかりで、力なく胸のあたりで止つたが、右手は唇の邊まで行つて、更に二三度忙しさうに指頭で虚空を切るやうな眞似をした。

吁と英吉は叫んで倒れさうになつた。弟があの青い表紙の辭書を繰つてゐるのだ。而して、家にゐて勉強してゐた時の姿が眼に映つたからだ。彼は、もう其の有様を見てゐることが出來なかつた。しかしやはり眼は其れを見ずにはゐられなかつた。

やがて、弟の手はぐつたりと下に落ちた。

「まだ意識があつて、するのでせうか？」と、英吉は震へる聲で醫者にたづねた。

其の醫者は、陰鬱な顏付をして頭を振つたのである。

「死ぬ刹那まで、試驗のことを思つてゐるのだ」と、彼は、幾たびか口の中で繰り返して言つた。どうしたら、弟をこんなにまで强迫する觀念を頭の中から除き去つて、せめて死ぬ瞬間だけでも樂にさせることが出來ないものかと、胸の中が沸え返へるやうであつた。

其のことがあつてから、一時間と經たぬうちに弟は全く息絶れてしまつた。もはや、いかなる惡魔も、苦痛も弟を何うすることも出來なかつた。彼は、斯くして、ついに地上のすべての惱みから脫れたのである。

今は苦痛の跡が、次第に其の死顏から永劫に消えて行つた。而して、美しいうす紅みを帶んだ薔薇色に變つた。其れが、またいつしか靑白い淸らかな蠟の色に變つたのであつた。どんな樂しい夢を見てゐるのか、やがて柔和な微笑みが、顏全體に漂つて見えた。

人間が死んだ時に、何處へ行くのか？　きつとこの世界より、もつといゝ處にちがひないと思つたけれど、弟のこの

世に於ける間の短かつたこと、不幸であつたこと、もう決して、泣いても、叫んでも二たび相見ることが能はないことなどを思ふと、悲しみが一時に胸を衝いて、英吉は、聲を立て泣かずにはゐられなかつた。誰が傍にゐるといふことも忘れて思ふ存分に泣いた。

四

彼は不幸を知らずに、またかゝる不幸に出遇はずに幸福に生活する人々を見ると私かに呪はずにはゐられなかつた。眠りの最中にふと眼が醒めることがあつた。彼は起き上つて坐つた。四邊を見廻すと、夜半であつて寂然としてゐる。何處か家の中に弟がゐるやうな氣がして、呼んで見る。返事がないので、弟のゐた室に行つて見る。其の室は暗く、而して、机や、本箱がもはや其處に置いてない。自分が片附けたことなどが思ひ出される。弟の死んだ前後のことが、今更に二たび眼に見る如く心に浮んで來る。死んだのだ。弟は死んだのだ。

何故、運命は、多くの人の中から、あの若い、まだ人生の樂しみといふものを生れて來てから經驗しない、親に早く別れて、苦しみの多かつた善良の弟を特に選んで、もう二たびこの世へは歸つて來ることの出來ない暗黑の世界へ連れて行つたのだらう。運命には、果して何等かの考へがあつて、さうするのだらうか。其れとも、全く無目的で、盲目であるのだらうか。考へがあるのなら、きつと正しい考へであらう。それならすべて善良な者の死は何等かによつて救はれるのだ。もし、運命に考へがないとしたら、而して、生と死が偶然であるとしたら、かう玆に思ひ至ると氣が狂はしくなる程、不安が感ぜられた。

俺は、しかしまだ生きてゐる。死んだ弟は何うなるか？　この不公平を何うして、弟はもはや訴へることが出來やう。しかも、誰も、弟のために悲しむ者もない。たゞ、自分ばかりなのだ。英吉は、かう考へると、自分がたゞ生きてゐることが、弟よりも長く生きて、愉快に幸福に、恣まに欲望を滿し得るとしても、其のことが、眞に弟に對して愛があつたなら、出來ないことだと思つた。而して、死よりも苦しい經驗を生きてゐるためになさなければならない。たゞ

其れによつて弟の靈が始めて救はれるであらうと感じた。

彼は壁に向つて、しばらくの間考へ込んでゐた。電流の發送が減じて、燈火は、既に力が盡きたらしかつた。灰色の壁の上は漠然として煙つてゐた。さながら霧が深い曠野に立つて、今迄來た道も、これから行く先きも、分らずにたゞ現在其處にかうしてゐる自分だけを見る心地がした。

この儘、机に向つて、仕事をしやうとしたが、頭は疲れてゐた。彼は、眠むくもないのにまた床の中に入つた。

弟の死は、彼の心を鞭打つた。彼は、毎日後悔と、悲哀の裡に空しく時を過した。來る日も、來る日も、この心の苦痛はつゞいた。彼は、急に涙脆くなつた。安價なセンチメンタリストになつたのと異ふ。其れは彼自身が知つてゐる。人間本來の心が悲しみの泉によつて洗はれて、よく自然の姿を映し得るやうになつたゝめだ。

弟の死を考へる時、彼は眼前の物や、色や、形などに動かされなくなつた。而して、耳に近く觸れる聲が、果して眞實の聲であるが、さうでないかを直ちに聞き分けることが出來た。眞實のものばかりが、ぴたりと心に觸れた。而して、僞りに迷はされなくなつた。

英吉は、弟の死によつて、人間の命といふものがほんたうに分つたやうな氣がした。ちやうど長い夢から醒めたやうに、其の日からほんたうの生活が始まるやうな氣がした。この一日を興味ある夢を見てゐるやうな氣持でゐたら、たとへ、いつまで生きてゐることが出來ても、其の命はほんたうの生活といふものを知らずにしまふだらう。

生活とは何か？　生活とは何か？　英吉は其場に坐つて、幾たびもくりかへして言つた。而して、頭の中には、一種の感激となつて、この時彼には分つてゐたのであるが、言葉に現はして、自分にだけなりとはつきりと言つて見たかつた。——眞面目に、意識して、何かのために命を捨てることだ——

其れにちがひない！　と彼は自分に言つてうなづいた。

しかし寂寥は、彼を苦しめたのである。惻々として冷かな水が脊筋を流れるやうに襲つて來る悲しみは、處を問はず、時にかゝはらず、彼を囚へて自失せしめずには置かなかつた。

一日、彼は頰を撫で廻して、髭が大分延びてゐたのに氣付いた。次に頭に手をやると髮が同じやうに延びてゐたので、其時から氣にかゝつてならなかつた。こんなに長く剃らなかつたり、また刈らなかつたりしたことはなかつたのが弟が死んで以來、常に自分のことなどを考へずにゐたゝめであつた。早速、英吉は街へ出て床屋に行つた。

夏の日の午後である。床屋の職人は白い上着を被たまゝだらけてゐた。ちやうど空いてゐて直に彼は頭を刈ることが出來た。刈つてゐる時に商人風の男が入つて來た。この男は店の者と兼てからの馴染であつたと見えて、彼等は直に打ち解けて世間話をはじめた。商人風の男は框に腰をかけながら、其處にあつた煙草を喫した。

「今年の暑さは格別だ。早く涼しくならんと困る。體がだるくつて仕方がない」と、商人風の男は言つた。頰の長い頭髮を分けた姿が鏡に映つてゐた。

「涼しくなると、今度は直に寒くなるし、ほんたうにいゝ季節といふものは少なうご座います」と、英吉の頭髮を刈つてゐる職人は答へた。

英吉は眼を閉ぢながら、去年の夏はどんなであつたらう？　一昨年の夏はどんなであつたらう？　などゝ記憶を呼び起したけれど、何となくはつきりと頭に浮ばなかつた。而して、寧ろ子供の時分の遠い夏の日の有様が眞に昨日のことのやうに活々として眼に描かれたのであつた。

成程、一年の間に於て好い季節といふものは、僅かしかない。大半は雨と風と暑さと寒さに苦しめられる。而して、其の殘りの日も人々は思はぬ生活のことに煩はされて、慌しく日を送ることが多いだらう。而して、眞に其の日を靜かに樂しむことが少ないだらうと考へた。だからといつて何も生を呪ふには當らないが、死を人生の安息でないとは誰が言ひ得やう。子供の死は、其の子供がこの世に於て受けたなやみの安息である。少年の死は、其の少年がこの現實界に生きるにはあまりに力が弱かつたのだ。而して、安息を早くも欲したにちがひない。

此時、異常の車の響きによつてびつくりして眼を開くと、街の中を幾臺もの大砲を載せた車がつゞいた。其の後から兵隊の列がしばらく續いて行つた。黄色な埃は、赤く熱した地上から揚つた。而して、閃々とした虛空の光線を掠め

た。街の中が煙つたやうに、すべての光景が濁された空氣の底に戰いて見えた。

英吉は、一瞥をして、また鏡に向き直つた。けれど其れが行き過ぎるまで、鏡の中に是等の光景が映つて見えた。全く、鏡の中から列が消え失せると、たゞ路の上に立迷つた埃だけが映つた。次に其の後を子供が驅け、犬が走る影などが映つた。其時まで手を止めて、外の光景に見とれてゐた職人は、やつと手を動かし始めて、英吉の頭を刈りかけた。

「この頃は、毎日、今時分からあゝして兵隊さんが通るが、何處へ行くんだか？」と、職人は仕事をしながら言つた。

「夜襲の稽古だといふこつてさあ。この後また何處かと戰爭があるんでせう」と、商人風の男は答へて煙管を叩く音がした。

「よく、戰爭のあるこつた」と、職人は獨言のやうに言つた。

やがて、英吉は理髪店から外に出た。しばらく彼は、街の中を散歩しやうと考へた。いつしか日は西に傾いてゐた。街の中は撒水によつて涼氣を増した。漸く男や女が出始めた頃である。而して何となく華かな、享樂的な氣分が漲つてゐるやうに感じられた。

此時、また砲車の軋る響きがして、赤い旗を竿に卷いたのを持つた兵士が先に立つて、兵隊の一列がつゞいた。彼等の顏は何れを見ても日に燒けて黑かつた。而して被てゐる服は大抵埃がかゝつて汚れてゐた。中には下から汗の染み出てゐるのがあつた。しかし、これから夜にかけて活動するので、まだ疲れてゐる風は見えなかつた。いかにも强さうで、足音荒く過ぎて行つた後から騎兵が少しばかり行つた。

英吉は、これを見て、現在日本が外國を怖れしめるものは、この命を惜まない勇敢な軍隊だけであることを思つた。而して、もしこの强い幾百萬の大軍を擁しなかつたら、どんなに異人種の彼等から侮蔑されるか知れない。彼等が口にする程の眞實と正義が心にない間は、いつ何時でも吾等は劍を執つて起つだけの用意を怠つてはならないと感じた。

同じ時刻に、是等の一列とは、殆んど無關係の如く、着飾つた若い女や、男が道の上を歩いてゐた。恐らく、ちやうど今頃からこの都會の何處の寄席も、劇場も繁榮する頃である。かうして快樂を追ふ者の眼には、兵隊の路上に揚げる

黄塵を見て、いかなる感想を抱くだらうか？　西に沈まんとする夕日は、斜に街頭を照して、さながら血のやうな光線で、建物をも、彼方に連る路をも、また生活が至つて不平等で矛盾に富んだ人間をも赤く彩つた。ちやうど、最近の印象派の繪畫のやうに、すべてが地上に存在する權利を等しく自然から與へられたものゝ如く、赤い世界の中に點在した。

五

英吉は、陸軍の豫備少尉であつた。學校生活を終ると同時に一年志願をしたのである。其の軍隊生活の間に知つた人々の中でYといふ男があつたが、ある時、其男に偶然途上で出遇つた。Yは當時、外人の通譯を職業としてゐると告げた。而して、其後二三度英吉を訪ねたことがあつた。

Yは女と勝負事が好きであつた。しかしてまた一方には、强熱的で、規律を重んずる不思議な男であつた。どちらかといへば軍人氣質に造られてゐた。其れで時間の約束をやかましくいふ外國人には、この點だけでも氣に入られたにちがひない。脊が高くて、體付が頑丈で、顏の形が四角で、髭が濃くて、よく聲高にしやべつて快活に笑つた。

ある時、Yは獨逸の士官を案內して、日本アルプスを跋涉したことがある。其れが、ちやうど歐洲戰爭の始まる前の年の夏であつた。約一ケ月、彼は、この獨逸の軍人と山中に暮らした。而して、程なく其の軍人は支那に向つて去つた。其時から二三ケ月經つと、獨逸からYに宛て手紙が來た。手紙は英文で書いてあつた。いふまでもなく士官が認めて寄來したものである。

「こんな手紙が來ました。どうぞご覽下さい」と、Yは話のついでに、其の手紙を洋服の隱しから取出した。二三日前にYの手にとゞいたものらしい。英吉は受取つて開いて見た。——其れには、日本滯在中の世話になつたことを謝して、いづれこの旅行記は伯林で出版されるだらうと洩らし、次に、こんなことが書かれてあつた。Yがこの手紙を英吉に見せやうとしたのは、このためであることが直に感付かれる。

「見よ、千九百十五年に於て、全世界は將に火と炎の中に包まるべしと余は斯く斷言す、遙かに君の健康ならんことを祈る」

二人は、顏を見合つて默つた。しばらくしてから、英吉が、

「其の士官といふ男は、どんな人間だつたかね」と、Yに聞いた。

「眼の鋭い、怒つぽい、小柄なちやうど隼のやうな奴でしたよ」と、Yは答へた。而して、快活にいつもの如く笑つた。もう其時は、互の胸に不安は消えて、普通話をする時の調子となつてゐた。「なんで、未來のことなどが分るものか」といふ心持が英吉の心にあつたのも事實であつた。

今、英吉は、其時のことを思ひ出さずにはゐられなかつた。「皆な眞夜中の如く眠つてゐる時分に、計畫ある奴だけは決して眠らなかつたのだ」と、彼は考へた。

散歩から家に歸ると、偶然にも、三週間演習に參加すべき召集令が、國許の役場を經て留守の間に達してゐた。彼は、今年あたり、其の命令に接しはしないかと、兼て心に期してゐたのであつたから驚きはしなかつたが、たゞ、戰爭や、軍隊生活を、つい今しがたまで路を歩きながら空想してゐた矢先に、この召集令に接したことが、何となく意味深いやうに考へられたのである。

弟を失つてから、この方仕事に身を入れて机に向ふことが出來ず、どうしたら、この寂寥が慰められるだらうと思つてゐた際であるから、英吉は、却つて召集令を受けたことを喜んだ。而して、野山を驅け廻ることによつて、少しは、この苦しみから脱れられるだらうと考へた。

出發までには、尙ほ一週間の餘裕があつた。しばらくこの東京を去る前に、彼は一度芝居を見やうかと思つた。一日、彼は芝居を見に行つた。けれど、其時は少しも面白くなかつた。彼は、單に技巧の上や、觀客の氣受に腐心する役者等の藝を見たゞけで、命がけでやつてゐるものを見出さなかつたからである。畢竟、芝居は、單純に文字通りに芝居にしか過ぎなかつたのを知つた。而して、深刻なる人生の相剋を二たび如實に舞臺に於て活現するのでなかつたからだ。

今の彼は、すべてに於て命がけを求めてゐる。であるから、其れが遊びか、眞劍かを直に見分けることが出來る。これまで見た芝居だつて恐らく面白くなかつたのだらう。けれど、其時見る心にたるみがあつたから、而して、何んでも面白いものに强いてしてしまつて、易く享樂の氣分に浸らうとしてゐたから、面白くないものまで、面白く思つたのだらう。

英吉は、さういふ安易な心持でゐた過去の自身に對して苦笑した。熱火にくゞつて始めて鐵質が冴えるやうに、彼の心は苦痛によつて更に反省が深くされた。

芝居の歸り路に、彼は、ある賑かな街頭にあつたカフエーに入つた。此處には、常に藝術家の群が出入してゐる。其夜も二三人の知つた顏があつた。偶然の機會が、其等の者と一つのテーブルを圍んで語り合ふことになつた。彼等はきまつていろ／＼の作家等について批評を下した。また、新しく起りかけてゐる主義について、而して、其の主唱者について意見を交した。いつしか話が戰爭に及び、或は露西亞の現狀に及んだ。英吉は、虛心で其の話に耳を傾けてゐると、此處に集つた人々が、不思議にも最も進んだ人々であつて、而して、誰よりも一歩超越した考へを有してゐる人々の如く思はれた。

けれど、翻つて考へて見るのに、いつの時代にあつても、其處には、默つて一生懸命に仕事をするものと、斯うして其れに對して善惡の聲を放つ、所謂傍觀的批評家の多かつたのは事實である。しかして、是等の怜悧な輩が畢竟何をなし得たであらうか。やはり、彼等から笑はれた、命がけで仕事をやり、また新しく氣運を呼び起した者のみが終りに幾分かの足跡を後に來る人生のために殘して行くのであるまいか。

彼は、カフエーから出た。其の後でも煽風器の下のテーブルの上では皿が鳴り、笑聲が起つてゐた。路を歩きながら、ふと彼女のことが頭の中に浮んだ。暫らく彼女にも遇はなかつた。もとより住所を知らしてゐるのでなかつたから、女から手紙を出しやうもない。もはや、其の姿を眼に描かうとしても何んだかぼんやりとして霞がかゝる程に、既に忘れかけてゐたのであつた。

急に今夜、彼女に遇つて見たくなつた。いつしか英吉は、其の街の方に向つて歩いてゐたのである。女は、もう其處にゐないかも知れない。この前遇つた時に、長くは此家にゐないからと言つてゐたことを思ひ出した。若し、行つて見て、女が既にゐなければ、其れまでの緣であつたと英吉は思つた。

彼女に始めて遇つてから、三年ばかりになる。其の間には思ひ出して見てもいろ〳〵のことがあつた。怒つたことも、笑つたこともある。氣紛れや、戯ればかりからでなく、ある時は、夢にも女のことが思はれた。而して、十日も彼女を見づにはゐられなかつた。行くと、彼女は顏を赤くして眼を輝かしながら、さも嬉しさうに迎へたことなどが思ひ出された。

其れが、また何うしていつとなしに疎遠くなつたのだらう。互ひに感情が結び、また解けて行く秘密を何者がよく解し得やう。英吉は、路すがらいろ〳〵と空想した。而して、是から、何十分間の後には、彼女を見ることが出來るのだと考へた。

狹い路次を入ると、見慣れた其家の軒燈が點つてゐた。これが眼に映つた刹那、彼の心は微かな不安と焦燥の念に戰いて、注意深く胸の鼓動を聞いて、吉凶をトつたのである。

彼女は久しぶりで英吉の顏を見たにかゝはらず、餘り喜んだやうにも見えなかつた。何となく浮かぬ顏付をして、ちよつと笑つて、さながら初めての客に對する時のやうに、先に立つて、彼を二階に導いた。

英吉は、たとへどんなに冷淡にされても、何んでもないといふ氣がした。どうせこれが最後であらうから。女は二階に上つて、チヤブ臺を前にして座ると、急に怨めしさうな眼付をして、何うして、こんなに長らくの間來てくれなかつたのかと言つた。いつまで待つても來てくれないから、もう顏を見ずに別れることゝ思つてゐた。其れだのに今夜來てくれたのは全く思ひがけなかつたから、顏を見た時は、人違ひであらうと疑つたと言つた。而して、彼女は、いよ〳〵五六日の中に此家から出て、姉の家に一旦歸つて、其れからまた何うにか身の振方をきめるのだといふことを英吉に話した。

「東京から、遠くへなどは離れたくありませんから、どうせ暮すなら、妾は、賑かな處が好きなんですもの、きつと東京にゐますよ。さうしたらまた遇へますわ。お手紙位上げたつていゝでせう。今度ばかりはお處を聞かして行つて頂戴ね」と、女は甘へるやうな言葉付で言つて英吉の傍に身を摺り寄せた。彼は、女の顔色が大變に青白かつたやうに思つた。

「僕は君に暇乞に來たんだ。あれからいろ〳〵の事件が起つたのを君は知るまいが、今度しばらく旅行に出かけるので、また長らく遇はんと思つて、やつて來たんだ。今夜だつて君はもう此處にゐないか知らんと思つたのが、かうして遇へたので、嬉しかつたよ」と、英吉は答へた。

「いゝぢやないの、お處位聞かして下すつたつて、さう、めつたにお伺ひして、ご迷惑などかけはしませんわ」と、女は怨みがましく言つた。而して、英吉から身を離して正しく座つて、自分の膝のあたりを見詰た。

「ともしたら、僕は、この東京へ歸つて來ないかも知れないのだ」と、英吉は眞面目に答へて燈火に照されてゐる薄倖の女の姿をしみ〴〵と眺めた。

「ほんたうなんですの、そんなら今夜はゆつくりと遊んで行つて下さるんでせう」と、彼女はきらめく眼で、ぢつと此方を見詰ながら、淋しく笑つた。

やがて女は、いそ〳〵として英吉獨りを室に殘して置いて、下に降りて行つた。

六

女は何用があるのか、しばらく上つて來なかつた。英吉は室の窓を開けて、欄干に其の身を凭せて夜の景色を眺めた。時は既に大分遲かつたと見えて、四邊は靜まりかへり、巷の複雜した建物の影が濃く、黑く、魔物のやうに起伏してゐた。其の上を青黑い夜の空がさながら圓天井の如く懸つてゐる。星は燦爛として、一つ一つ異つた光りを無言に地上に投つてゐた。地は冷いて、夏の夜とは感じられない程の爽かな風が虚空を過ぎた。

彼は變らぬ空の景色を仰いで、人間の生活に思ひ至ると、締め付けられるやうな悲哀を心に感じた。幾人昔からかうして別れを惜んだであらう。また、別れたことであらう、而して、彼等は決して、二たび永久に相見ることが出來なかつた。互ひに忘れることはなかつたといへ、其の居る處すらも知らなかつたらう。かう考へると、彼の眼は涙のために濕れた。

かうして星を見てゐるうちに、遠い過去となつた子供の時分の日が、ふとして彼の眼の中に蘇生へる。――大きな樫の木の葉風が颯々として、よく晴れ渡つた紺碧の空に鳴り響く木の下で、叔父から、面白いお伽噺を従兄と共に一枚の筵の上に座つて聞いたことがある。其の村は森が多く、夜になると寂しい位に靜かであつた。たゞ、空には、無數に星が閃いてゐた。――彼は、其の時の星もこれと同じであつたと考へた。而して、このたび若し其の村を過ぎたなら、古い樫の木を二たび見ることが出來るであらうと思つた。

其の明る日であつた。英吉は友達にも告げず、師團地に向つて出發した。

――一九一一、八、七作――



童話劇

雪女

一、雪女
二、吹雪の夜

秋田雨雀

この二つの小さな童話は作者の幼年期、十一歳から十三四歳までの雪の印象を描いて見たまでです。むづかしいことは考へずに、遠い北國の雪の景色を想像してくださるだけで作者は充分に滿足です――作者

雪女

行雄　　少年
園子　　母、三十歳位
雪女　　北國特有の妖精
其他行雄の友人

舞臺は冬の夜の郊外。土地も家も樹もすべてのものが眞白な雪に蔽はれてゐる。空は青く澄んでゐる。星が輝いてゐる。古城が白い衣を着けた妖怪のやうに立つて、其上に大熊星が靜かに呼吸してゐる。遠く礁の音。

母。（丈の高い瘠せ形の女。初めは一人雪道の上に立つて遠いところを眺めてゐる。氷を辷る子供等の話聲がする。やがて彼女は叫ぶ）行雄！　行雄！

少年。（氷を辷りながら、母に近づいて來る。）お母さん？

母。行雄！　お前は何うしたんです、お母さんが先刻から呼んでるぢやありませんか？
少年。だつて聞えないんだもの。お母さん何んです？
母。何んです、ぢやないよ。今何時だと思ひます？
少年。だつて明日は日曜だからいゝんですよ。
母。まあ、こんなに裾が凍つてるぢやないか。さあ、早くお家へお歸りなさい！
少年。でも、お母さん、常ちやんも良ちやんも、それから實さんも……
母。まあ、この手！（荒々しく少年の手を取りながら、自分の兩手で溫めてやる。）誰がゐてもいゝから早くお歸りなさい。
少年。あゝ、お母さん僕もう一返乘つて來ますから。そしたら直ぐ歸る。
（この時、遠い所で口笛の音がする。）
ほんとうにたつた一返！　ね、ね、いゝでせう？
母。（呆れたやうに子供の後を見送りながら、）まあ、あの子は何うしたといふんだらう！　行雄、ほんとうにもう一返でお歸り。でないと雪女にさらはれるよ。
少年。（遠く、）お母さん、大丈夫だよ。

（便座――スケートを Benza 或は Benzai といふ――の氷を打つ音が響く。）
母。とうと行つてしまつた！
（彼女は靜かに歸る。）
（長い間の後、少年の群がスケートを乘りながら元の場所に來る。）
年年。お母さんはもうゐない。いゝ鹽梅だ。もう少し乘つてゐやうよ。
第一の友達。あゝ、またお城の方まで行つて來やう。
第二の友達。あんまり遲いから、よさうよ。
第一の友達。何んだ、弱蟲！
第二の友達。だけれども、あんまり遲くまでゐると雪女が來るつて僕ん家のお母さんがいつたよ。
第一の友。（冷笑しながら、）そんなものが來るもんか！　僕ん家のお母さんも、雪女が出るつていつたけれども、僕はそんなこと僞だと思ふよ。ね、僞だね。
第三の友達。（臆病さうに、）だけれども、僕ん家の姉さんが、ほんとうに雪女に逢つたんだつて。
少年。何處で？
第三。あの半鐘の下で逢つたんだつて。半鐘の下の石橋の上

のところで。

（少年達は同時に首を曲げて町の方を見る。）

少年。然うかい？　そして雪女が何んな風をしてゐたんだらうね？

第三。何んでもね、雪女は丈の高い女で、顏が青いんだつて、そして脛が一本しかないで、その脛がガラスのやうに透き通つてゐるんだつてさ。

第二。そして、君ん家の姉さんは何うしたらうね？

第三。僕ん家の姉さんは逃げたんだよ。一生懸命に逃げたんだつて。

第二。もし捕まつたら大變だつたらうな！　雪女は子供を食べるかね？

第三。子供を食べやしないだらう。僕ん家のお母さんの話では、雪女といふものは子供があんまり遲くまで外で遊んでゐると、其子供をさらつて連れて行くんだつて。

少年。（雪の上にしやがみながら、）たゞ連れて行くだけ、連れて行つて何うするんだらうね？

第三。連れて行つて其子供に乳を飲ませるんだつて――氷みたいに冷いんだつてさ。ほんとだよ、僕のお母さんがいつたんだよ。

第二。それから何うするの？　其乳を飲むと、何うなるの？

第三。其乳を飲むと、子供が見てゐる内にだん／＼大きくなるんだつて、

（皆な一緒に其方を見る。）

そして子供は家へ歸つても、あんまり身體が大きくなつて戸口から家へ入れなくなつてしまうんだつて……

少年。そんな雪女の乳なんか飲まなければいゝんだ。

第二。でも飲まなければ殺されるかも知れないよ。

少年。然うだね。だけれども雪女は一體何處から來るんだらうね。

第一。雪女なんてものあるもんか！　君達はつまらないことばかりいつてるんだね。僕寒くなつた。もう一返乘つて來やう。さあ、みんな行かうよ。行かうよ。

第二。（少年に、）君行く？

少年。乘つたら温かになるかも知れないよ。たつた一返坂の下まで乘つて來ようか？

第二。そんなら、僕も行かうかな？

第一。さあ！　みんな一緒に行かう。明日は日曜だからいつまで乘つてゝもいゝんだよ。

（第一の子供は三四度駈け出して辷り込む。他の三人も

續いて辷り出す。)

少年。(辷りながら、)坂の上にまだ他の町の子供が遊んでゐるよ。まだ早いんだね。

第一。あゝ、まだ早いとも。町の人達はみんな起きてるよ。こんなに早く寢る家なんかありやしないからね。君の家だつてみんな起きてるよ。

少年。然うだね。よく凍つてるね。君の便座は素敵に早いね。君のはいつ買つたの?

第一。僕のは去年。君の金は幅が廣すぎるんだらう。僕のが二分しかないんだよ。便座の金はなるだけ狹い方が早いよ。

少年。君はもう然んなに遠いところへ行たの? 何うして君はそんなに早いんだらう。待つて呉れ賜ひな。

(他の子供等は廣い野の方へ辷つて行く。やがて少年の姿も見えなくなる。)

(間)

雪女。(青味を帶びた白い衣を纏つてゐる。丈が普通の女の二倍ほどあるけれども見たところ別に大きいといふ感じを與へない。顏が非常に整つてゐて、皮膚は惡病の系統者にあるやうに白く透き通つてゐる。美しいといふ感じが他の感じのために打消されてゐる。遠くから見ると全體がガラスのやうに透明な感じを與へる。彼女は北日本に特有な妖精で、現存人種の移住と同時に來たものらしく思はれるが、或は先住人種の頃にもこの邊にうろついてゐたかも知れない。)おゝ澄んでいゝ氣持だこと! もうそろ〳〵私の世界が來たのだね。橇の音ももう聽えなくなつた、大方町の主婦さん達や娘達は寢る仕度をしてゐる頃だらう。私の子供達がまだ大勢遊んでゐる。今晩は大變獲物がありさうだこと! お城の窓から私の友達がみんな顏を出して私を見てゐるよ。今晩はお祭の晩のやうに賑やかだこと! 主婦達も今晩は安心してゐるらしいね。こんな晩には二人や三人は何うしても連れて行かなければならない。

冷たくていゝ氣持だこと! こんな晩に子供を懷いて、私のこの冷い乳を飲ましたら何んなにいゝ氣持だらうね? 初めの内は私の乳房の下でぶる〳〵慄えてゐても、だんだん咽喉が乾いて來て私の乳が飲みたくなつて來るんだ。乳を飲みさへすればしめたものさ。だん〳〵其子は大きくなつて、肥つていつてお終ひには私の背丈けほどの大きさになるんだ。

(この時、少年の母が再び現はれて少年を呼ぶ。)

母。行雄や！　行雄や！

雪女。あの人には私のこゝに立つてゐるのが見えないのだね。人間といふものは何うしてあんなに自分の子供が可愛んだらうね？　そして皆なあんな小ぽけな箱のやうなものの中に入つてゐて、親だの子供だの夫婦だの兄弟だのといつて騒いで何にが面白いんだらうね？

母。（身慄ひして、）おゝ、寒い！　膚が裂れてしまひさうだ。呼吸が塞るやうだ。行雄は何うしたんだらう？　行雄や！　行雄や！

雪女。子供等はみんな大河の橋の上で辷つてゐるので、こんなところで幾ら呼んだつて聴えるもんかね。

母。行雄や！　行雄や！おゝ寒いこと！私は病氣になりさうだ。早く歸つて來れやいゝのに。さあ、あの子の寝衣でも温めて置いてやりませう。

（母はためらひながら、去る。）

雪女。さあ、今晩は幾ら少く見積つても三人は捕りさうだ。私の乳が張つて痛んで仕方がない！　おや、坂を登つて來た子供があるよ。淋しさうな顔をしてゐる。洗足で氷の上を歩いて來た。いゝ子だことで　おや、泣いてゐるやうだ。

（この時、最初の少年は、便座の緒をきらして泣きながら歩いて來る。裏返へしになつた便座の底金がきらきら光つてゐる。）

雪女。あの女の子供なのだよ。私はあのお母さんの口眞似をして許してやらうよ。もう少し氣をつけてあの女の言葉を聴いて置けばよかつた。私はもう少し小さな身體にならなければならない。さあ、小さくおなり、小さくおなり、ほんの一寸の間なのだから。

（雪女は白い衣を二三度自分の頭の上に振つて見る。其内に其身體がほゞ半分ほどの大きさになる。雪女は自分で自分の身體を見ながら満足さうに微笑する。）

少年。（雪女を眼敏く見つける。最初は疑はしげに女の身體を見つめてゐたが、次第に安心したやうに女の傍に近寄る。）

雪女。あゝ。お前は何うしたの？　何を泣いてるの？

少年。（急に聲をたてゝ泣く。）僕、緒を切らしてしまつたの。それだのに誰れも僕を待つて與れなかつた。常ちやんも良ちやんも、實さんもみんな僕一人を置き去りにして行つてしまつたの。お母さん足が冷い！

雪女。おゝ、冷めたいだらう。今温めてあげるよ。お母さんがあんなに早く歸つて來いつていつたのに歸つて來ない

もんだからそんなことになるんだよ。

少年。お母さん、足が痛い！

雪女。然うだらう。お母さんは今抱いてあげるよ。さあ、此方へおいで。

少年。あゝ、冷い！ お母さんの手は何うしてから冷いの。

雪女。私の手が冷いんでなく、お前の手が冷いんだよ。さあ、確乎私につかまつてご覽。今にだん／＼溫かになるから。そらこれが私の手だよ。

少年。やつぱり冷い。お母さんの手はまるで氷のやうだ！

雪女。今に暖かになるよ。ぢつとしておいで……

少年。お母さん、寒い！ 寒い！

雪女。今に暖かになるよ。ぢつとしておいで……

少年。お母さん、苦しい！ 誰か私の首をしめつけてゐるやうだ。其手を離してお呉れ！ 呼吸が塞る、苦しい、暑い！ お母さん、僕を抱いてお呉れ！ 暑い、暑い！

雪女。（獨語）とうと、この子が私のものになりかけて來た。暑いだらう、暑いだらう？

少年。お母さん、僕の身體が火のやうに暑くなつて來た。胸がはち切れさうだ。水を！ 水を！

雪女。（微笑する。）とうと、私のものになつたね。さあ、確乎私に抱かつておいで。お母さんは今乳をあげるから……

……

少年。（もがきながら雪女に抱きつく。）お母さん、水を、水を！

雪女。あゝ、今あげるよ。さあ、これをお飲み！

少年。（雪女の胸を探る。）おゝ冷い！ いゝ氣持だ！ これはお母さんの乳なの？

雪女。あゝ。この乳を飲むと、ぢきにいゝ心持になるよ。（少年を胸に抱きかゝへる。）さあ！ この乳をお飲み！

少年。お母さんの乳はガラスのやうだ。これはお母さんの乳ぢやない。おゝ冷い。僕のお母さんぢやない。お母さんの乳はもつと柔かで溫かい筈だもの！

雪女。（少年の身體を人形のやうに兩手でかゝへて、自分の顏に向ける。）私の顏をご覽！ お前は私の顏を知つてる筈だ。

少年。（雪女の顏を覗く。非常な驚をもつて、）あゝ、しまつた！ お前は雪女だ！

雪女。（この言葉を聞くと殆んど同時に、女の身體が元のやうな高さになる。）然うだ。私は雪女だよ。私はお前のやうな子供を毎晩探してゐるんだ。私はお前を長い間待つてゐたんだ。よく來て呉れたね。私はお前を何うもしやし

ないのだから、怖るには當らない。お前はたゞ私の冷い乳を飲んで呉れさへすればいゝんだよ。そして私のやうに大きな身體になつて自由自在に空をかけ廻つてゐさへすればいゝんだよ。さあ、私の乳をお飲み！

少年。（兩手を雪女の胸に突張りながら、）お母さん、助けてください！　雪女が來た！　お母さん、お母さん！

（少年は無理に雪女の胸から飛び跳ねる、そして非常な迅速さで逃げやうとする。逃げやうとして焦せれば焦せるほど身體の自由を失ふ。）

雪女。（青白い細い左手を非常にゆるやかに伸べて、少年の身體を抱きかゝへやうとする。）

少年。（雪の上に倒れながら聲を限りに叫ぶ。）お母さん、お母さん！

（この瞬間に舞臺が全く暗くなる。）

母。（暗の中で、）行雄、行雄！　何うしたの？　夢を見たの？　何うもこの子は少し熱があるやうですね。

（少年の深い嘆息の聲。）

——をはり——

吹雪の夜

行雄　少年
良三郎　養兄
園子　其母
哲哉　其父
旅行者　五十歳位

冬の夜。國道に添ふた小城下の一藥店の納戸。圍爐裡には大きな木の根が丸まゝで突込まれて盛んに燃へてゐる。天井のない煤けた屋根裏が爐の火を受けて時々赤く照り返へされる。建物はすべてこの古い町の創立當時を思ひ出させるやうな質朴さを保存してゐる。もう遲い。町には人通りも絶えてゐる。風の音が遠くから押し寄せて來てはまた遠くに吹いて行く。

母。（ラムプの下で裁縫をしてゐる。）良さん、もう店をしめてもいゝだらう。行雄、兄さんに手傳つて店をおしまひ。

少年。あゝ。（少年は立上つて店の方へ行く。）兄さん、店をしめてもいゝつて。

母。風が大分出て來ましたね。また吹雪にならなければいゝが。

父。(ランプに橫顔を照されて、赤い盆の上に丸藥の粒を一粒つゝ落してゐる。彼は十年前に眼を病ひ、今は全く失明しかけてゐる。三十七八歲。意思の强さうな男。絕えず瞑想に耽る性癖がある。)うむ。

母。私が先刻お湯へ行つた時は星が降るやうでしたけれどもね。荒れなければようござんすがね。

父。(同じ動作をつゞける。)うむ。

母。先刻お湯で聽いて來た話ですけれど、あの玄莊も死にさうだといふ話ですね。あなたはそんなこと聽きはしませんか?

父。いや、私は聽かないね。それはいつの事だ?

母。何んでもこの二三日大分惡いさうですよ。あゝいふ人が不仕合はせでゐると、何んだか此方の肩身も狹いやうな氣がして仕方がないんですよ。

父。玄莊は今何處にゐるんだらうね?

母。大野の小屋に寢てゐるんですつて。可愛相に誰も見てやらないんでせう。何しろ、仕事もしないで二年も三年もごろ〳〵してゐられちや大抵のものがいやになつてしまひますよ。例へ親類の者だつて……

父。(無言のまゝ丸藥を盃の上に落す。時々水鼻をすゝり、丁寧に四角に折つた手拭で口の周圍を拭き、また仕事を初める。)

母。あゝいふ人は、不仕合せなら不仕合せのやうに仕事でもしたらよささうなものぢやありませんかね。私なら然う思ひますよ。

父。それやお前不仕合はせになつたことのない者のいふことさ。不仕合はせなものには不仕合はせになつたのが、まあ仕事のやうなものだからね。それに片輪なものはみんな心持まで片輪者になつてゐるんだ。片輪者に仕事をさせるのは、させる方が間違つてゐるんだ。

母。でもあなた、然んなことをいつてゐられないぢやありませんか。あの人だつて食べてだけは行かなければならないんですから。

父。然し私はあゝいふ男が羨しいと思ふよ。生きても死んでも自分一人だものな。(一寸言葉をとぎらせる。)私なぞかうして每日座つてゐるのが何のためだか、自分ながら自分が解らなくなる時があるよ。

母。(輕い驚きをもつて、)まあ、そんなことを！　子供等のゐる前でそんなことをいはないでくださよ。あなたはいつまでたつてもそんなことばかりいつてゐるんです

ね。

父。（無言のまゝ丸藥を落す。）

母。何うでせう、あの人のところへ明日何か屆けてやりませうか？　何か腰巻のやうなものでも。

父。死に際になつてから物を屆けたりするのは何んにもなるもんぢやないけれども、お前がやりたいならやつてもいゝさ。私も逢ひたいから、明日お天氣になつたら行つて見やうか。

母。（非常に喜んで、）あゝ、そしたら、あの人も何んなに喜ぶでせうね！

父。もう何時だらう？

母。店の時計は十一時を打つところです。行雄は何をしてゐるんでせう？　行雄、行雄！

少年。（店の方から、）何あに？

母。何をしてゐるの？もう寢る仕度をおし。良さんは何うした？

少年。兄さん帳面をつけてゐるの。

母。寒いから明日にしてもいゝだらう。みんな此方へ來てあたり。餅でもやいて食べやう。良さんも早くおいで。あなたもあがるでせう。

父。（まだ丸藥の手をやめずに、）うむ。私も食べる。

母。（父の仕事を見ながら、）あなたも、もうおやめなさいな。こんなに寒いんですもの。

父。（仕事の手をやめずに、）まだもう少し殘つてゐる。これが終へたら私も休むよ。雪も降つてゐるやうだね。

少年。あゝ、大雪降つてゐますよ。明日は道がついてゐないかも知れませんよ、お父さん。

父。然うか。この風は大分強くなりさうだね。「吹雪倒」でもなければいゝがな！

母。然うですね。宵になつてから吹き出したのですから、ひよつとしたら「吹雪倒」でもあるかも知れませんよ。

少年。お母さん、何うして大人が「吹雪倒」なんかになるんでせうね！　僕には何うしても解らないんですよ。

母。それや、大吹雪の時は大人だつて何んだつて死んでしまふはね。一寸先きが見えなくなるつていふからね。私達の子供の頃夫婦で「吹雪倒」になつたのがありましたつけね、お父さん。

父。うん。

母。二人が一緒になつてゐれば死なゝいんだつて話しでしたね。その癖二人が二三間しか離れてゐなかつたんですね。

少年。(興味をもつて、)何うして一緒にゐると死なないのお母さん?

母。あれは何ういふ譯でしたつけね、お父さん?

父。まあ二人でぢつとしてゐると溫かいからさ。雪を堀つて雪の中に二人でぢつとしてゐるとだん〳〵溫かになるんだ。それを知らないで、あわてゝ駈け廻はつてゐる內にお互に相手が判らなくなる、身體が疲れて來る、寒くなつて來る、其內に死んでしまふのさ。

少年。雪の中で凍えて死ぬのは苦しいもんでせうね、お父さん?

父。それやお前苦しいさ。然しお父さんが若い時聽いた話だけれども、吹雪の中で死ぬのはたゞ無暗と眠くなるだけで、苦しいも何にも解らないんださうだよ。

母。行雄。根つ子のところへ炭を入れて置いてお呉れ。お母さんは餅を持つて來るから。

(行雄は炭取りを持ちあげ、それを傾けて爐の中に入れる。木の根は一時燻り初める。母は障子を明けて臺所に出る。冷い風が烈しく室の中を襲ふ。)

母。お〻寒い!

父。行雄、兄さんをお呼び。

少年。兄さん。早くいらつしやい。

(養兄の良三郎は商人風の着物を着てゐる。顔が寒さのために紫色になつてゐる。)

養兄。(無言のまゝ、爐邊に座り顔をしかめて兩手を爐の上に、殆んど火焰の中に投げ入れるやうにして、時々それを引込める。暫くあつてから思ひ出したやうにいふ。)寒いね!

少年。あゝ。寒いね。

父。良は商用をすましたのか?

養兄。あゝ、

父。寒かつたらう? よく當れ。店の方は寒いだらう?

養兄。あゝ、寒いですよ。今晩は九時頃からぱつたり人通りがなくなりましたね。こんな晩には松尾節も附札でせうね。

父。うむ。松尾節を聽く段ぢやないね。仙臺坊も今頃は寢てしまつたらう。——(松尾節とは浪花節に類した語物)

養兄。仙臺坊のゐる內にもう一度聽きたいもんですね。

少年。あゝ、僕も行きたいな!

(この時母は十ばかりの餅を手摑みにして持つて來る。)

父。うむ、つれて行かう。だがお前達には文句が解らないから[illegible]ね。仙臺坊もいゝ[illegible]りにな

つたね。

母。 良さん寒かつたらう？

養兄。 え。お父さん、仙臺功幾歲でせうね？

父。 然うさな。もう四十五六だらうね。松尾節語もあの年配が一番いゝんだよ。年を老ると節廻はしは上手になるが、聲が立たなくなるんでね。

（母は敏捷に餅を爐の中に並べて立てる。二人の少年は暫く言葉をとぎらせて爐の中に入れられる餅を眺めてゐる。父はやはり丸藥を丸めてゐる。家の外は非常な音。）

養兄。 これは大變な吹雪になつた！『吹雪倒』がありさうな晩ですね、お父さん。

父。 うむ。

養兄。 この間も大釋迦在で二人死んださうですね。何んでも一人の方は自分の家の一丁ばかり手前で死んでゐたんですつてね。可愛相なもんぢやありませんか？

父。 『吹倒雪』は大抵然んなものらしいね。氣がゆるむんだね。

養兄。 然うかも知れませんね。

母。 こんな晩に自分の家の者でも旅をしてゐたら何んな氣がするだらうね。家ではみんなかうして揃つてゐていゝね！

少年。 お母さん、こんな晩でも仕事に出る人がある？

母。 あゝ、それやあるかも知れないよ。仕事に出ないまでも何んな用事で外へ出るか知れないからね。

少年。 お母さん、何うしてこんなに雪ばつかり降つてゐるんでせうね？ 僕いつでもお天氣だといゝと思ふね。お母さんいつでもお天氣でゐるところがある？

養兄。 （笑ひながら、）然んなところありやしないよ。雪が降らなくつても雨が降るから。

少年。 僕もつと暖い國に生れゝばよかつたね。

母。 この子は馬鹿だね。暖い國だつていゝことばかりあるもんぢやないよ。第一行雄なんか氷辷りが出來なくなつたら、それこそ困つてしまうぢやないか？

少年。 氷だけ張つて雪が降らないところがあるといゝんだけれどもね。

養兄。 行ちやん馬鹿だね！

母。 （養兄に、）良さんは砂糖の方がいゝのかへ？

養兄。 私は醬油の方がいゝ。

少年。 僕は兩方混ぜて食べる。

母。（父に、）あなたは？

父。私は何もつけないで食べる。天戸を閉めたのかへ？ 大變音がするやうだね。

養兄。（立つて、庭に向いた天戸を開けて見る。吹雪が非常な勢で突進する。彼はあはてゝ戸を閉めてしんばりをかふ。ひどい吹雪だ！ これぢや、お父さん今晩の内に三尺は積りますね。

父。そんなに降つてるかい？

養兄。まるで向うが見えないほどだ。便所へも行けない位なですよ。

母。さあ、焼けたよ。みんなお食べ。

（二人の少年は嬉しげに爐の中に眼を投げる。今まで扁平であつた餅が肥れて、白い肉が薄い膜に蔽はれて中からはみ出して來る。）

父。（丸薬の手をやめて、爐の方へ向く。髪を奇麗に分けてゐる。兩の眼を殆んど閉ぢてゐて、少し落ち窪んでゐる。角張つた顎骨は少し伸びて青い隈取りのやうな感じを與へる。彼は自分の座つてゐた座布團の下から太い銀の煙管を出してゆるやかに煙草を喫ふ。）

母。さあ、おたべ。みんな餅を食べて、今夜は早く寝ようよ。（父に）あなたのはこゝへ置きますよ。

（少年等は無言のまゝ餅を食べる。やがて父も取つて食べる。やゝ長い間誰も何もいはずに餅を食べる。外では吹雪が益々烈しく荒狂つてゐる。水を撒くやうな音や、布を裂くやうな音、人の叫ぶやうな音が絶えず聴えて來る。）

父。（耳を澄して、）誰か來たやうだね。

母。誰も來やしましませんよ。

父。そら戸を叩いてるぢやないか。

養兄。風の音でせう。

父。いや、確かに人間だ。

（一同耳を澄す。少年は眞白な顔をして養兄の方ににじり寄る。）

養兄。（立上り。）行つて見ませうか？

父。行つてご覧。騒がないで、靜かにして。

（養兄は店の方へ行く。）

旅人の聲。今晩は………今晩は………

（少年は半ば無意識に父の方に寄る。）

少年。お父さん、何んでせう？

父。ちつとしておいで。何にも怖いことがない。

旅人の聲。（同じやうな聲の高さで、）今晩は……今晩は…
……

養兄。誰れです？　誰れです？

旅人の聲。私です……通りすがりの者です……こゝを一寸開けていたゞけませんか………

養兄。（臆病さうに、）何うしたんです？　何うかしたんですか？

旅人の聲。（疲勞し切つたやうな聲で）何んにも怪しいものぢやありません……疲れて死にさうになつたんです…
……ほんの一寸でいゝから、こゝを開けてください！

養兄。（勇氣づいて、）お父さん疲れて死にさうになつたんですつて。入れてやりませうか？

父。（非常に明瞭な聲で、）入れておやり、早く！

（養兄は急いで土間に下り、戸を開ける。一人の大きな男がよろけながら家に入る。）

養兄。（高い聲で、）しつかりなさい！　私に握るんですよ。

旅人。（全身粉雪に包まれて、前額にひどく發汗しながら、ぶるぶる慄えてゐる。）もう、大丈夫です……難有うございます……こゝで大丈夫……

養兄。（驚いて、）何うしたんです？　そこは土間ですよ。寢てゐちやいけませんよ。爐邊へいらつしやい。

旅人。何うかうつちやつて置いてください……うつちやつて置いてください、……

養兄。お父さん、寢て動かないんですよ。何うしたらいゝでせう？

父。寢かしちやいけない。寢たら死んでしまふよ。こゝへつれておいで。

養兄。お母さん、雪を拂つてやつてください。

（母は箒を持つて旅人の雪を拂つてやる。）

養兄。さあ、こつちへ來ませう。（抱きかゝへて、無理に爐邊へ連れて來る。）しつかりなさい、しつかりなさい？

旅人。（睡言のやうに、）何うぞ、うつちやつて置いてください……

父。（旅人に觸る、胸に手を當て、烈しく摩擦をする。兩手を靜かに動かしてやる。）大分溫かになつたやうだ。その分ぢや大丈夫だ。毛布をかけておやり。

（母は毛布をかけてやる）

母。（心配さうに、）大丈夫でせうか？

父。大丈夫だ。火をどんどん燃しておやり。よくこれまで歩いて來たね。足かまるで氷のやうだ。お湯があるなら燗

に取つてお與れ。

（母は臺所から盥を持つて來て沸騰した湯を注ぐ。父は手拭に湯を濕して旅人の足を何度も溫めて、其上を毛布で包んでやる。）

養兄。お父さん、大丈夫でせうか？

父。（自信あるものゝやうに、）大丈夫だ！

母。この人は何處から來たんでせうね？

養兄。何しろ餘程長い間歩いて來たと見へて、鞋も何も磨りきれてしまつてゐるんですよ。

父。普通の人間だと、もう既に死んでゐたんだね。いゝ身體をしてるぢやないか！

養兄。家の戸を叩いた時はよく／＼だつたんですね。

少年。お父さん、少し動いてるやうですよ。

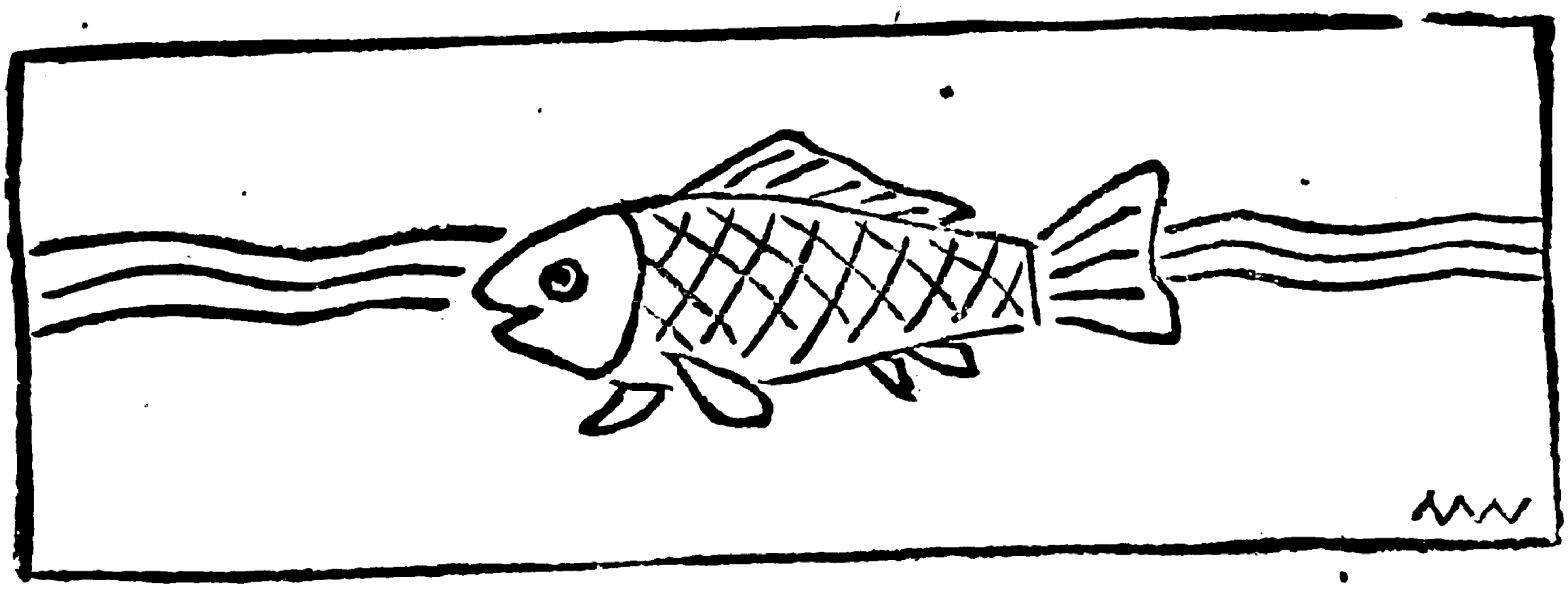
父。（嬉しさうに、）だん／＼溫かになつて來たからだよ。溫かになりさへすればいゝんだ。何處の誰だか知らないけれども、かうして來られて見ると何んだか心配なもんだね。これだけ一人の人間の生命といふものは大切なものなのだね！ お前達は然う思はないか？

養兄。ほんとうですね。

（この時、旅人は充分に深い呼吸をする。四人は喜ばしげに其方に注意する。旅人の顔は次第に赤味を帶びて來て發汗してゐる。）

おはり

——La 18an de Junio '18——



潮の匂

徳田秋聲

其日は山野は朝から氣分が緊張してゐた。神經衰弱がひどくなると、その時々に適當と思はれる藥を用ふるのが、彼の習慣になつてゐたが、その二三日も彼はボオスフオラス性の藥の力で、辛うじて蘇生した頭腦が光線が顫えてゐるやうにちか〳〵してゐた。而して其の神經衰弱を誘引した胃腸は容易に恢復しなかつたにも拘らず、四五日前には迚ももう駄目だと思つてゐた萎えた感覺が、いくらか生々して來た。梅雨期の陰鬱な低氣壓が去つて、空が夏らしい爽しさに晴れわたつてゐた。ちよつとした天候の變化にも、抵抗力のない彼の神經は甚しく影響された。

山野は何だか自分の仕事に倦れさうな幸福を感じながら、柘榴の花の落散つた庭を眺めてゐたが、目の先にある硝子製の蠅取器のなかに舞つてゐる蠅の羽音が、時々彼の耳についた。そして其に目が移ると、その中には囚はれた五六羽の蠅が舞つたり這つたりしてゐた。昨夜も絶えずぶん〳〵羽を鳴らして、部屋中を縦横に飛廻つてゐた大きな蠅のために、ひどく仕事の感興を殺がれた彼は、今朝妻によつてそこにおかれた蠅取器に暴君のやうないら〳〵しい目を注いでゐたが、するうち蠅の數がいつか三羽に減つてゐるのに氣がついた。そしてよく視ると、上の口の方に、蠅の辛うじて這

出せるほどの隙間が、凸凹になつた硝子に在ることを發見した。中の蠅が減ると同時に、三四疋の蠅が彼の身のまはりを自由に唸つたり飛んだりしてゐた。

「おい、この蠅取は駄目だ。みんな逃げて行く。」

「おや、然うですか。」先刻商人から受取つて、それを山野の部屋と茶の室とにすえた妻は、縁先で下梳に髪をすかせてゐながら應へたが、先刻から來てゐた、藝者あがりの近所の女の噂か何かを續けてゐた。新領土から後を追つて來て、長くこの近所で一緒に暮してゐた男に棄てられたと云ふ其女は、色々の名士の手蹟などをもつてゐて、それをこの頃縁結の手を經て山野に見てもらつた。その中には前の總督や有名な漢詩人や、山野の懇意な俳人で小說家のK氏の書いたものなど、その男に注込んだために棄てたと云ふお茶屋の女將時代の名殘の書幅や額が澤山あつた。それに其女は山野と同郷でもあつた。

それは左に右、山野は一つ〱蠅の逃げだして行く蠅取器がひどく氣にかゝつて來た。そして其の商人の妹が、ふとしたことから彼女の近い縁者つゞきになつてゐる[illegible]町の或[illegible]家に片着いてゐる關係から、さう無闇と返しても惡いといふ考へから、晩方にでも取替へに行きませうと云つて渡してゐるのが、一層性急な彼の氣を惡くさせた。それには、又此二三日感じてゐた、これといつて說明のしやうもないような彼女の厭な氣質の現はれの重なりが、一ト凝りとなつて、彼の胸に痞へた。長いあひだ自分の生活の大きな障碍物として横はつてゞもゐたかのやうに思はるゝ妻に對する憤りが、希しく彼の頭腦を支配して來た。そして自分が進まうと思ふやうな場合、方向を轉換しやうとするやうな場合などに、二人の間に繋がれた不思議な鎖が、總て彼の行動を阻止し、凝滞せしめて來たことを思返すと、長いあひだ寛容であつた山野の心が、急に發作的な興奮をもつて來た。そんな心持は、山野が一刻な態度で、蠅取器を子供に返させてから、一層募らせられて來た。彼の頭腦は何時のそんな場合のやうには、ひどくも萎れてゐなかつたが、それでも彼女の姿が目についたり、聲が耳に入つたりするあひだは、彼は何をする氣にもなれなかつた。

山野が畫帖や何かを入れた鞄を提げて、ぶらりと家を出たのはそれから大分經つてからであつた。

破壊された氣分を收拾するために、彼に久しく企てゝゐた山か海かへの旅を思立つたのであつた。

「お醫者さまへの贈物を如何しますかつて……。」

子供が母親の吩咐どほり、出かけやうとしてゐる山野の傍へ來て、泣面をかきさうな顏をして言つた。家のなかは閙寂してゐた。箪笥から取出された襦袢や着物が、そこらに散らかつてゐた。思ひがけなく山野は家を出る機會を得たやうに思つたが、もう三月も病院にゐて、何彼につけて彼を力にしてゐるS——のことを思ふと、そのまゝに立つのが不安であつた。K——夫婦は、東京へ出てから、思ひのほかの親切を山野から受けてゐた。彼は山野の異腹の姉の子であつたが、心持は從兄弟のやうなものであつた。年も同じであつた。そして其の妻は山野の第二番目の異腹の姉の娘であつた。それにK——の妻の母たる、山野のためには第二番目の異腹の姉も、もう長いあひだ病院に詰め切つてゐて、何彼の用を足しに時々山野夫婦の家へやつて來た。これまで彼等は、こんな近接した交渉で、山野の妻に接したことはなかつたと同時に、山野の妻も初めて山野の姉と生活の交渉ができて來たやうに思つてゐた。山野の妻は、K——の妻や、その母たる山野の姉が、涙ぐんだ樣子で三月以來病苦に惱んでゐるK——のことを話す度に、自分も引込まれたやうに、又は體の弱い山野がさういふ風の運命に囚はれる時のことを想像し得るやうに、一緒に涙ぐむのであつたが、しかし根蒂からの生活氣分には、全然交渉はなかつた。姉がK——若しくは其の子供たちのことを思ふやうには、山野夫婦の子供たちのことを考へることが不可能であるとほりに、山野の妻も、山野の身内の人から惡く思はれまいと云ふ考へから、若しくは東京育ちの、比較的物解りのした綺麗な態度で交際つてゐるほか、深厚な同情の拂へさうな道理もなかつた。これを機會に、彼等はいくらか親密の度を加へて來たに過ぎないのであつた。

山野は患者や姉の希望で、主治醫に會つて、少し訊いておかなければならぬことがあつて、明朝宿を尋ねることになつてゐた。多分受けないであらうとは思ひながら、少許の贈物をも用意しておいた。子供にさう言はれて、山野はそれを果さなければ、何處へも旅立することのできないのに氣がついたが、躊躇する譯には行かなかつた。で、商品切手の入つた其の包をも、袋のなかへ捻込んで外へ出た。

外は想像してゐたほどの暑さでもなかつた代りに、頭を引撥すやうな荒い風が吹いてゐた。通りへ出ると、照つける日光が、捲揚がる白い砂塵に烟つて、その間を驅ける電車の響きが、神經にさら〳〵觸れた。山野はK――の主治醫のI氏に逢ふ義務があつた上に、今日の日課の一回を朝からまた筆を着けてゐなかつたので、今日のうちに其も果しておかなければならなかつた。してそれを書くやうな心安い場所と、多分伊香保の涼しい山が撰ばれることになるであらうと云ふその時の氣分から、上野に近いところに落着場所を見つけなければならなかつたが、それを決定する前に、ついと途中に近頃骨董店を出した友人のJ氏のあることを思出して、そこへ立寄ることにした。

砂を浴びつゝ彼は切通しの方へ俥を急がせた。そして曇つた硝子戸の外から、J――の禿げかゝつた頭顱を見つけたところで、いくらか極惡さうに、然しそんなことには拘る必要のないやうな平氣らしさで入つて行つた。

「暑くなつたね」などゝ彼は俥をおりて、店先へ上つて行つた。

「如何です御病氣は。」J――は細い目を窄めて、にこ〳〵しながら訊いた。

「腸の方は近頃見もしないが、胃腸が何うしても恢復しない。で、暫らく何處かへ轉地をしやうと思つて出たけれど、方向もまだ決まらないし。立つ前にちつと用事もあるので……。」山野は砂でさらつく唇を手巾で拭きながら、店を見廻してゐた。

「お暑うございます。」J――の細君もそこへ出て、手をついた。

暫く話してから、山野は車夫に名刺を渡して、ついこの近所に住んでゐるといふI氏の宿所に彼の在否を聞かせることにした。

「これあ南京の染附ですが、好いものですぜ」などゝJは棚から一つの香爐をおろして來て、山野に見せた。

山野はちよつと其を取上げると、其れ處ぢやないと云つた風に默つて下においた。

「何か買つて下さいな。」Jは剽輕な表情をして、何時ものやうなお愛相を言つた。山野は擽つたいやうな氣がして、横を向いてゐたが、でも長くそこにあつた呂宋の壺のないのが、多少氣にかゝらないでもなかつた。

大分たつてから、車夫が歸つて來た。そしてT氏が果して不在である旨を報告した。
「ではね、病院の方へ行つて、明朝ちよつとお宿の方でお目にかゝりたいんですが、時間の御都合は如何ですかといつて、この名刺を出して訊いて來てくれないか。」
車夫は汗を拭きながら、再び出て行つた。
「旅行つて何方へ行くんです。」
「山にしようか、それとも海にしようかと、考へ中なんです。」山野は子供が何時からか望んでゐた海水浴に適當な場所を搜したいやうな氣もしてゐた。大きい方の正夫は、海に便宜がないところから、今年は母方の田舍の方へ單獨で行くことに決めてゐたが、次の昌次はこの一夏を家で過すことを希つてゐた。
「餘り出つけると可けませんから、其の方がようございます。」妻はより多く愛してゐる昌次が、總てに消極的なのを心易く思つた。それに昌次は乘りものに弱かつた。
「正夫は海へ行きたくて爲樣がないやうですよ。」妻はさうも言つてゐた。
彼は小學校時代から、自然にそんな風に慣されてゐた。彼の小學校では、暑中休暇の終りに、先生が旅行をしたか爲ないかを、各々に訊ねるやうな風であつた。彼はいつも其を相惡かつてゐた。
「山だと何の方面です。」Tはまた訊いた。
「伊香保は涼しいから。しばらく彼處で暑かうと思ふ。」
「伊香保なら、私の親類に二軒も旅館がございますの。」上州産れの細君が言出した。
山野は細君の話に、耳を傾けた。そして其の家の名を訊きなどした。彼女の叔母さんの家の名が、彼の記憶にあつた。
「何ならおいでになつては如何です。おいでになるやうでしたら、私から手紙を出しておきます。」
「は、若し行くやうでしたら……。」山野はまだ心が決しなかつた。何によらず、彼は物を一つに決めてしまふことが、容易に出來ない性質であつた。氣分が刻々に動いて行くと云ふ風であつた。それに子供本位と、自分本位とでは[illegible]の日

的が全然違つてゐた。

「ちよつと此處を假ります、三十分ばかり……。」山野は大分たつてから、さう言つて店の机の前に坐つた。

「二階の方が廣くて涼しうございますよ。」細君はお愛相を言つた。

山野がペンを持ちはじめた處で、Jは店を見まはして、こて／＼並んだ品物のうちからお茶の道具を二三種撰んで、それを骨董屋らしい更紗形の縞の風呂敷に、無雜作に包んだ。

「金がいる、何か飛つきさうなものはないかな。」Jは落着のない目色で、また一つ小さい物を見つけて來た。そして其をも慌忙しく風呂敷に包んだ。

「どこへ行くんだ。」山野は不思議さうに訊いた。

「麹町の方へ」と、Jはにやりと笑つた。

車夫が歸つて來て、明朝八時から九時までなら逢へるといふ返辭を齎した。そして山野の命ずるまゝに歸つて行つた。

Jが奥の室に並べてあつた中元の配りもの、配り方を、若い人に吩咐けて、氣忙しさうに出て行つてから、山野も落着なくペンを動かせた。今朝から緊張してゐた氣分が、すつかり萎えてしまつて、それほどの物を書くのに可也疲勞を覺えた。

彼はそれを出しに行くと同時に、相應な距離にあるレストオランへ飯を食ひに行つた。そしてがらんとした下の店頭で、三四品の皿を平げると、またJの店へ立復つて來た。

Jがいくらか小さくなつた包を提げて、歸つて來たのはそれから間もなくであつた。暑い日が大分傾きかけて、舞ひあがる砂埃が黄ろく濁つてゐた。

「賣れましたか。」山野は訊いた。

「茶碗を一つ賣つた。」Jは舌を出して、額を顰めながら、「もつと好い物をもつて來いと來た、それに己のお得意はみんな貧ですから。お茶の稽古友達ばかりさ。」

そして包を隅の方におくと、急いで帶をといて裸になつた。

「金持の家は涼しいな。綺麗な座敷で上等のお茶菓子で、好いお茶をいれて……腹が立つ。」――Jは手拭地の浴衣を着せかける細君と山野の顏を見比べて笑つた。

若い人が店へはたきをかけるやうな時刻になつた。Jも腕まくりをして、奥に並んでゐる棚の骨董をはたきはじめた。細君は臺所で、ガスの火で何か煮てゐた。その間山野は夕涼の頃を待わびながら新聞をもつて隅の方に引込んでゐた。彼は東京のうちの何處かで、一夜を過さなければならなかつた。そして其の一夜の泊り場所の選擇にさへ、彼は甚だしい煩瑣と苦痛とを感じた。

町に明がつく時分に、彼は小さい荷物をさげて、上野の方へ歩いて行つた。

山野は明朝の用を達すのに、最も便宜の多い上野附近に宿を取るつもりで、しばらく其の邊の旅館を物色して歩いた。そして以前田舍の客を訪ねたことのある、停車場の側面にある旅館の方へと、のろ〳〵歩いて行くうちに、宿引の男がひよつこり傍から出て來て、彼に近づいて來た。

「もし〳〵、お泊りでいらつしやいやすか。」彼は聲をかけた。見すぼらしげな、凋びた小男であつた。

「あ……。だが……。」山野は躊躇したが、しかし若し其が然るべき旅館の男衆であるならばと思つた。

「手前共へ如何です。」

「何處だい。」

「つい此の先ですが、どうぞ。」彼は先に立つた。

「汚いところは困る。それに近くなくては……。」山野は如何かして安靜な一夜を過すに適した宿に有つきたいと思つた。

「え、もう……とにかく入してごらん下さいんして……。」

山野は上野へ今ついた田舎もの丶やうに、彼に引張られて行つた。

「綺麗でもごたごたするやうでは駄目だぜ。」

「えゝ、大丈夫でございんす。」

男はずんずん先に立つた。そして「この方が近うございます」と言つて、横丁へ入つた。そして其の横丁から、裏店じみた小汚い路次の中へ入つた。貧民窟の一部のやうな光景が、山野の目に現れた。湯もじ一つの女の姿や、ちやんちやん子を着た女の子や、暑苦しい處で行水をしてゐるものや、子供の泣聲や、薄暗いランプの下で、赭い胸や臍を露出して酒を飲んでゐるものやが、窮屈に向ひ合つて立並んだ家のなかに見られた。

「おい……」と山野は男に聲をかけた「餘り遠くては翌朝困るぢやないか。」

「直き其處です。停車場から來れば直きなんですから。」彼は言ひながら、通りへ出て行つた。

「あすこに其の、洋館が見えませう。あのちよつと手前の奥の方にございんすのが、手前共の店なんで……。」彼は此の旅客に最も適當した宿を案内するに、充分の自信をもつてゐるかのやうな調子で路傍樹の眞蒼にみえる彼方を指しながら言つた。

山野はもう惑はなかつた。寧ろそれが汚ない木賃宿でもあるなら、時に取つての興味だと云ふやうな氣がしてゐた。たゞ此の上の神經の疲れを怕れるだけであつた。

宿引男が「此處です」といつて、往來からちよつと引込んだ其の旅人宿の入口へ案内した時、山野は金庫の据つた帳場の見える玄關先に立つて躊躇したが、その男が「お客さま」と云つて聲をかけると同時に、東北の山や野から出て來る多くの旅客に扱ひなれてゐるらしい、體の頑丈な卅四五の男が出て來て、「入らつしやい」と聲をかけた。すると帳場の蔭から、若い色白の女が「此方へ」と云つて、山野を案内した。

旅客の寢轉んでゐる薄暗い部屋の前を幾間も通つて二階へ上ると、丁字形に廊下がついてゐて、都合七八つの薄汚い部屋が並んでゐた。山野の入れられたのは梯子から二つ目の、兵隊服などが衣桁にかゝつてゐる部屋の隣の一室であつ

たが、入るとむつとした西日の温氣が顔に觸れて、目の先の庭木は劇しく揺れてゐながら、そこには一掬の風もなかつた。

「お〻暑い。」山野は袋をそこにおくと、急いで羽織をぬぎ、帶を釋いた。

「お暑うございますね」と、女はぼちや／＼肉づいた顔から、ぼた／＼玉の汗を流して、蒲團や團扇を出してくれた。

「もうちよつとすると涼しくなりますよ。此處を開けませうか。」女はさうも云つて、高い明取の障子を二枚取はづしてしまつた。兎に角そこに寢ることにして、山野は襦袢一つになつて餉臺の前に坐つたが、何か甘味のない飲料に有つかなければならなかつたので、平野水を命じた。

「平野水つて何ですか。」先刻の女中が入口に跪坐みながら目に困惑の色を浮べた。そして山野に說明されて降りて行くと、大分たつてから上つて來た。

「こゝいらの酒屋には、どこにも有りませんの。池の畔まで行けば有るさうですけれども」

「ぢや爲方がない。」山野は應へた。そして「風呂は」と云つて訊いた。

「え、ございますよ。まだ綺麗ですよ。」

總てが惡くどく出來た、薄暗い湯殿へ入つて、山野は汗ばんだ體を、氣味わるさうに灰色に溷濁した其の湯に浸した。

「如何です、そんなに汚れちやゐないでせう。」先刻の女がそこへ來て、水道の口で何かじやぶ／＼洗ひながら言つた。着物の裾などを下ろしてはゐられないほど、一人で切廻はしてゐる彼女の肥つた體は忙しかつた。

山野は翌朝東京を立つ前に、用達しをしなければならないので、明日の課業を爰で片着けておかうと思つて、ペンや紙を取出したが、インキのないのに氣がついた。彼は又汗みづくになつた彼女を煩はさなければならなかつた。隣の部屋では若い軍人が他の女中に揶揄つてゐた。少しは醉つてゐるらしかつた。

「インキがあつたら、ちよつと貸してくれないか。」女が來たところで山野は訊いた。

女は間もなく下からゴム製用の紫のインキを持つて上つて來た。

「これぢや駄目だ。」山野は首を傾げた。

二つ目の部屋に、先刻から十八九の青年が腹這ひになつて、萬年筆で手帳に何か書きつけてゐるのを、山野も見て知つてゐたが、女が立つて行つたと思ふと、間もなく其青年から借りたらしい萬年筆をもつて來て見せた。

インキを貰はしたり、筆を取らせたりしてゐるうちに、いつか時がたつて、客がまた二組も三組も上つて來た。山野はそこに敷かれた蒲團を見ると、この一夜をそこに過せさうには思へなかつた。彼はペンをもちながら、敷布や枕に鋭い横目を注いでゐたが、同時にやゝ空腹を感じて來た。

「お蕎麥は如何ですか」などゝ女が言つた。

山野は家の名を指定して、洋食を一皿にパンを命じたが、やがて運んで來たものを見ると、それは近所の一品料理から取つたらしい不味つぽらしい皿であつた。山野は不思議な色をしてゐるバタの、可恐しく發附くさいのに胸を惡くさせられた。

「だから已があれ程言つたぢやないか」

「え、でも此處が自家の取つけなんですの」女は不思議さうに彼の顔を凝視めながら赤い顔をしてゐた。

「ぢやね、爲方がないから會計をもつておいで」山野はどこか外に、宿を見つけるつもりで、ペンに帽子をはめて、インキと一緒に袋のなかへ入れた。

書附がちやんと女の帶の間に用意されてあつた。女は氣の毒さうに其を前においた。

玄關口へ出ると、戸はもう閉つてゐて、そこに愛らしい女の子と肥つた婆さんとが坐つてゐた。

「お出ましでございますか」婆さんは急いで下駄を出してくれた。

外はもう閑寂してゐた。四角に白い巡査の影が見えるほかには、縱横に交叉してゐる電車の線路の光つてゐるのが目につくだけであつた。

十分もたゝないうちに、彼は可也な旅館の二階の一室で、初めて疲れた體を休めることができた。

朝目をさました時分には、立つものは立ち、止宿してゐるものはもう朝飯がすんで、風の吹く一日を部屋に寝轉んでゐると云ふ風であつた。昨夜見た隣の部屋の禿頭の二人づれも、廊下を隔てた後ろの室の東北辯の男もゐなかつた。山野は昨夜床について間もなく、可也劇しい地震に脅かされたが、今朝は暴風雨だと豫報されてゐるだけに、町を隔てた向ふの旅館の洋室の外に張出された勁い日覆が、はげしく風に嬲られてゐた。

山野は不美い朝飯に箸をつけると、そのまゝ俥を僦つてJの店頭へ再び姿を現はした。彼は擬呆な昨夜の經過については何事も語らなかつた。そうして車夫を走らせて、I氏の在否を確めさせた。

「昨夜からお歸りがないさうで……。」車夫はさう云つて歸つて來た。

大分たつてから、山野は時刻を見計つて、自身出かけて行つたが、I氏はまだ歸つてゐなかつた。爲方なし彼は俥を病院の方へ向はせた。

醫局でI氏に逢ふことができるまでに、彼は二三度彼方行き此方行きした。そしてK——の病室へ入つて 姉や病人夫婦と話をしてゐるうちに、看護婦がI氏の來たことを知らせてくれた。

職務に忠實な、純朴なI氏は患者のことについて、口數の少ない、然し要領を得た答を與へてくれたが、贈りものは拒絕した。

看護に疲れた二人と、衰弱した患者とは、山野の歸つて來るのを待つてゐた。

「癌の方は幾んどすつかり除れてゐるんだから、もう二三度も百ミリグラムのラヂュームをかけたら、此の月末に一先づ退院したら可からうといふ話だぜ。」山野はいきなり患者の枕頭へ寄つて行つた。

「月末に？」患者は疑惑に充ちた目をあげた。「そら如何云ふ譯で……迚も一月ぐらゐで歸れるものとは、私は思つてゐらん。」

その表情が、「これ以上快くならんと云ふ意味か」とでも言ひさうに見えたので、山野は狼狽氣味で、重ねてその理由を說明しなければならなかつたが、眞の意味を患者に理解させることは、彼に取つても一つの恐怖であつた。

山野はとにかくラヂユーム療法の成功してゐることを述べて、そこ〳〵に病室を出た。同じ癌腫の患者が、隣の一室にも向ふの二室にもあつた。彼等はいづれもラヂユームに縋つて、生きやうとする人々であつた。或は頬にある腫物が目にまで擴がつて、物を視ることができなかつた。或は長いあひだ忌避してゐた膀胱の手術を餘儀なくされて、「欺された」と云つて悔してゐた。

「僕ちよつと旅行しやうと思ふ。」山野は歸りがけに廊下で姉に話した。

「何時……何處へ」と姉はいつも山野を入口まで送出して、しばらく話すことにしてゐる廊下の端で彼に尋ねた。

山野はそれに分明した答を與へることができなかつた。そして何時頃になつたら……どんな狀態で彼等が病院を出ることが出來るかを想像しながら、春以來馴染になつた其處を出た。K――が旅宿から此處へ移つたのは、櫻の蕾のまだ堅い時分であつた。赤門内に植はつた並木の銀杏や槻の枝にも、淺い綠の芽が漸く萌しはじめたばかりであつた。それ等の並木や櫻の下を通つて、山野は毎日のやうに病室を見舞つた。患者の容體にも時々の變化があつたが、病室の窓の外には慌忙しい季節の推移が夢のやうに色を替へて行つた。

「あゝ」と、患者は病苦の薄らいだをり〳〵には、病牀に横はつてゐることの餘りにも長いのに飽き〳〵したやうに、心からの溜息を洩した。

山野が通ひなれた道を、直ぐ取斉の門から外へ出た時分には、風は大分吹募つてゐた。彼は宿へ還ると、漸と自分の體になつたやうな氣持で、机に向ふことができた。

一回を書き了つて、彼が晝飯を命じたのは、もう一時過であつたが、昨夜と同じバタが又彼を驚かした。

「だから△△△から取れるかと訊いたぢやないか。」山野は極めつけた。

「あ、然いでございますか」と女は山野から直接註文を受けた女をよこすために、出て行つた。

食後山野が、後二回ばかりで、すつかり其の稿を完結したのは、もう三時に近い頃であつた。彼は疲れた體を、そこ横へながら、愈よ何處へ行からうかと考へたが、差當つての問題を遁すためには、山よりも寧ろ海氣の方が望ましく思

へた。そして其の海を擇ぶには、子供に適當したやうな場所が好ましかつた。彼が兩國行の俥を命じたのは、それから又三十分ほど經つてからであつた。

「どうもお粗末さまで……。」口髭を蓄へた主人が、玄關口へ出て來た山野にお辭儀をした。そして彼が俥に乘つたところで、「あなた樣は東京でいらつしやいますので」と訊いた。

「は。昨夜汽車に乘りおくれて……今日は急に方向が變つて、房州の方へ行かうかと思つて……。」

「さいで入つしやいますか。」

風が可恐しく吹荒れてゐた。山野は始終目口を顰めつゝ、帽子の庇から手を放すことができなかつたが、既橋を渡る頃には、一層風威が加はつて來た。水が赭く濁つて、河岸は砂埃や煤煙で、濛々してゐた。橋を渡ると、俥は水に添ふて進んで行つた。車夫は劇しい迎風と砂に抵抗しかねて、時々立竦んだ。黄色い日が蕩漾する波のうへに物凄い光を投げて、生温かい風が濕つぽく肌に觸れた。低い人家や人間や車が、よろけさうな風をして、地上に這ひ聯つてゐた。山野の俥は、薄汚い或富豪の邸宅の前を通ると、やがて左へ折れて停車場の左側へと出て行つた。

「どうも大變な風でございます。」車夫は荷を山野の傍におろして、賃銀を掌に受けると、二三度お辭儀をして歸つて行つた。

車夫の調べたところによると、外海の方へ行くには、まだ一時間も待たなければならなかつたが、彼が志してゐる内海の方は、それよりも尚一時間半も餘計に、怠屈な時を過さなければならなかつた。彼は待合室を出て、そつち此方ぶらついて見た。地圖も見た。驛員に訊糺しても見た。そして内海の方へ行くべく決定して、日一杯に着くやうな土地までの切符を買つた。

外はいつか可恐しい暴風雨になつてゐた。飛沫が構内の奧にまで吹込んで、今着いた汽車をおりた人々も、汽車に乘るべく停車場へ駈着ける人も、皆なびしよ濡れになつてゐた。外海方面行の汽車が劇しい風雨を冒して出て行つてから、一時小遏んでゐた雨が間をおいて又凄じい勢ひで降注いで來た。そして其の雨が降つたり、遏んだりする間々に、

人が待合室に殖えたり減つたりした。

「お前、春かい。」

ふと山野の休んでゐるクションの後ろの驛員室で、電話をかけてゐる聲がした。窓の硝戸ごしに目をあげてみると、それは今まで山野のつい傍にゐた大學生の一人であつた。

「お前春だらう。あゝ。でね、己は兩國にゐるんだがね、隨分弱つてゐるんだよ。お前一つ濡れる覺悟で、レーンコオトと、丈夫さうな傘を一本持つて來てくれないか。」彼は終にそんなことを言つて、長いあひだ電話口に立つてゐた。

「今大塚の郵便局まで行つて、びしよ濡れになつて歸つて來たところだつさ。」彼は餘程たつてから、待合室の方から様子を覗つてゐる同伴者に話しかけた。

「來るのか來ないのか。」

「訊いてみませうと言つて、引込んだきり出て來ないんだよ。」

彼は幾度となく相手を呼出さうとしたが、手應がなかつた。するうちに驛へ電話がかゝつて來た。

雨も風も大分漫緩になつてゐた。山野は洋装のこの青年たちが、この位の雨に如何して遠方からわざ／＼外套を、忙しい盛りの時分の下宿の女中に持つてよこさせなければならないかを訝りながら、傍に聞いてゐた。青年は可也辛抱づよく／＼と謂ふよりは寧ろ未錬氣に電話口に喰着いてゐた。

汽車の出る時間が來た。山野は預けておいた荷物を受取ると、急いでプラットホームへ出て行つた。

錦糸町や龜井戸の、ごちや／＼した町を目の下に俯瞰しつゝ、汽車が段々東京を離れて行く時分には、雨は一時霽れあがつて、白く洗はれた人家や往來の人のうへに、微かな薄日の影がさしてゐたが、二つ三つ停車場を過ぎるうちに、客車の窓硝子に、雨がまた劇しく吹きつけて來た。山野はクションの一端に胡坐を組んで、樹木のゆら／＼風に動いてゐる野山の姿を眺めながら、この二三日無駄に潰えた氣分を收拾すべく、靜に思ひに耽つてゐた。久しぶりで彼は病院や家から離れた。

懐しい湖の匂ひが鼻に通つて來る頃には、もう日が暮れかゝつてゐたが、志した木更津の停車場へおりたのは、もう八時に近い頃であつた。風は相變らず吹荒んでゐた。雨も可也降つてゐた。

俥の幌の隙間から、海岸の町らしい往來の兩側に點されたお祭の提灯の火が、風にゆれながら、所々偶に目についた。六七町も行つたところで、山野の俥は旋て多勢の若い女の姿のみえる、一軒の宿屋の軒に引込まれた。ちやうど電燈が消えたところで、山野の上つて行つた店頭には、提灯や洋燈の薄暗い光のなかに、祭の人らしく裝つた女の姿が媚めかしく見られた。

山野は幾箇かの部屋を通つて、暗い廊下づたひに、女中に導かれて漸と〳〵二階へ上つて行つたが、其と同時に、絶えてゐた電燈がぱつと明るくなつて、古風な廣い部屋が目の前にあつた。

山野がこの海岸の町の地理や、土地の氣分を略知つたところで、海を追ふて南の方へ汽車で下つて行つたときには、昨夜一夜吹荒んでゐた風もやゝ和いで、蒸暑い夏の日が、風雨に洗い洒された町や田畑のうへに、劇しく照りかゞやいてゐた。

（をはり）

興國文學の絶調――銷夏避暑の伴侶
日印貿易の警鐘――印度研究の資料

新刊

日印貿易之犠牲者 青年松倉乾二

◆男爵 澁澤榮一閣下題字
◆帝國教育會長 文學博士 澤柳政太郎先生序
◆立教大學總理 ライフスナイダー先生序
◆入竺沙門 日置默仙禪師題詩
◆皇子傅育官長 三好愛吉先生序
◆法學博士 花岡敏夫先生編

洋裝總クロース 菊判約三百五十頁 定價金壹圓五十錢 送費金拾錢

青年身を挺して遠く蠻烟瘴雨の地に入り、功を海外に立てゝ邦家の隆盛を計らむとす、不幸中途僅かに一篇の『最近印度經濟事情』の著を遺して殪る。年齒尙少と雖も遭逢頗る奇、其壯志は以て永く後世に傳ふべきなり。殊に況むや、その計畫するところ詳密にして、然も平素自から行ふところは之を苟もせず、觀察の犀利、着眼の高邁なること青年松倉の如きに於てをや。本書は編を分つゝの三、**上篇**には故松倉青年の人物性行を叙し**中篇**には印度の貿易、人情、風俗、言語、宗教、政治等の各方面に亘る故人日々實地の觀察を輯め**下篇**には當代名士の故人に關する追懷、批評並に其寄送に係る記念論文を錄す、蓋し『**青年松倉乾二**』は**華**にして『**最近印度經濟事情**』は卽ち**實**なり、前者は卓拔奇警なる觀察と輕妙流麗なる詞藻を以て優り、後者は精確周密なる系統的調査を以て特長とす。淸風凉を趁ひ淨几心を潛るのところ、敢へて大方諸君の一粲を博す。

近刊豫告

最近印度經濟事情

◆法科大學教授 法學博士 河津暹先生閲
◆正金銀行頭取 井上準之助先生序
◆農商務前水產局長 鶴見左吉雄先生序
◆農商務省海外實業練習生 松倉乾二遺著

洋裝箱入美本 菊判約三百五十頁 定價金貳圓 送費金拾貳錢

發賣元 東京神田表神保町三番地 株式會社 東京堂
振替口座東京二七〇番
電話本局 一二三番 二五五二番 長二四八番 四五六一番

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町	東京堂
同　神田區裏神保町	上田屋
同　京橋區銀座三丁目	東海堂
同　京橋區元數寄屋町	北隆館
同　京橋區西紺屋町	良明堂
同　日本橋區本石町	至誠堂
大阪市北區梅田町	盛文館
同　北區東梅田町	立盛堂
京都市七條停車場前	共盛社
同　四條西洞院	前田大盛社
朝鮮京城本町二丁目	日韓書房

○定價　金參拾錢郵税金貳錢（海外郵税拾貳錢但支那を除く）

冊數／國別	內國	外國
六冊	金壹圓八拾錢	金貳圓四拾錢
十二冊	金參圓六拾錢	金四圓八拾錢
以上郵税共		

▲但し新年號春秋二期附錄號臨時號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、卽ち一ヶ年通計十七册分の割合なれば一ヶ年分御注文の方は內國は金五圓拾錢外國は金六圓八拾錢の割となれども頁數の都合にて臨時變更することあるべし

送金注意

一誌代郵税は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし
一郵便爲替にて御送金の場合は指定を**本郷區西片町十番地中央公論社**とし、拂渡局を**東片町局**と指定あれば途中盜取さるる虞なし
一振替貯金口座は**東京三十四番**なり
一郵券代用は謝絕す但し郵便局に不便の地に限り一割增にて代用せらるるを拒まず
一集金郵便の便法を利用せらるゝ方は、**坐ながらにして誌代の拂込**をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし
　一金一圓迄　金六錢（集金委託料及送料共）
　一金五圓迄　金七錢
一受領證請求は必ず返信料を要す

大正七年七月卅一日印刷納本
大正七年八月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　菅谷憲治
印刷人　高木西三

發行所　東京市本郷區駒込西片町十番地　中央公論社
電話長小石川一四四　振替東京三十四番　電信略號コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)
By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: annual subscription yen 6,80; Single copy 40 sen including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter

明治三十年一月廿九日第三種郵便物認可
大正七年七月三十日印刷納本

中央公論八月號
（第三十三年第九號）



信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す